
サーヴァントin麻帆良

龍真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サーヴァントin麻帆良

【Nコード】

N29100

【作者名】

龍真

【あらすじ】

約束された4日間が終わり、平和に暮らしていたサーヴァントたち。だが、ある日目が覚めるとそこは麻帆良学園だった!?

英雄の息子と英雄たちが交差するとき運命は廻りだす

時々シリウス・基本ギャグでお送りするFateとネギまのクロスです。なお、この作品にはキャラ崩壊などが含まれます。

駄文&亀更新　そして作者は厨二ですが温かい目で見守ってくださいと嬉しいです。

麻帆良での目覚め（前書き）

というわけで初投稿です。

文章的におかしいところなどあるかと思いますが、読んでいただくと嬉しいです

麻帆良での目覚め

―目が覚めた。

約束された4日間も終わり、現界し続けている私は遠坂邸で目覚めるはずだった。

だが自分の目の前には木々が生い茂る森が広がっていた・・・

「・・・なんでさ。」

もう今はあまり使わない口癖が口について出た。
とりあえず気持ちをおちつけ状況確認をしよう

トレース・オン
「同調開始」

魔術回路・・・27本正常

肉体年齢・・・22歳 完全に受肉

強化・解析・・・使用可能

アヴァロン・・・正常起動

投影・・・異常なし 干涉猥邪及び他宝具投影可能

固有結界・・・正常封印

身体能力・・・正常

ライン・・・無し

・・・なんだこれは。完全に受肉し若返っているだと

「まさか・・・そんな事が」

確かにこの身は滅びサーヴァントとして召喚された。

サーヴァントである以上体は霊体であるはずなのだ
それがなぜか某金ぴか王様のように受肉しているだど・・・

「・・・おい贗作者、貴様金ぴかとはいったい誰のことを言っているのだ？」

「ギルガメッシュに決まっているだろう。他に誰がいる。」

というかあいつ以上の金ぴかがいるだろうか？ いや、あいつにかなう金ぴかなど

この世に存在するはずがない。てか、いてほしくない

「そうか。贗作者。我に対する貴様の認識はよくわかった。」

やっとわかったか。あいつ以上の金ぴかなどこの世には・・・

「・・・ん？ 我？」

冷や汗がすこし垂れるが気にせずに後ろを振り向く。するとそこには・・・

一エアを持ち青筋をたててこちらを向いている英雄王様がいた

「なっ・・・！？ 英雄王！？」

「貴様ああ！！もう許さぬ！！この我の手で滅ぼしてくれるわあああ！！！」

そしてエアに魔力が溜まっていく

・・・っ!!このままではまずい!!

「我のこの手が真っ赤に燃えるううう!!」

「っ!!トレース・オン同調開始!!」

魔術回路に魔力を流し投影するは某毒舌シスターの使用宝具―

「我に触れぬ（ノリメ・タンゲレ）」

「貴様を倒せと轟きさk・・・むぐうつ!?!」

手から離れたマグダラの聖骸布はギルガメッシュを拘束し
その隙にカレンから受け取っていた薬を無理やり飲ませる!!

「っ・・・ひどいですよ贗作者!!もう少し穏やかにできない
んですか!?!」

「あいにくとギリギリでね。余裕がなかった。しかし、それより
気づいてるか?」

子供の姿に戻ったギルガメッシュはこちらをジト目で見ているが・
・
それにかまわず、受肉した理由を知っているかもしれないと思い尋
ねてみる。
すると子ギルは少し考え口を開いた・・・

「わかっています。受肉したことですよね。」

「・・・!!何か知っているのか!?!」

もしかしたら何故こうなったかを知っているのかもしれない。
子ギルの肩を両手でつかみ真相を聞きだそうとする

「受肉した件についてはみなさん同じみたいでしたから。

残念ですが原因はわかりません・・・」

「そうか・・・。」

原因はやはり不明らしい。仕方ない一から情報を集め・・・??

「・・・すまん。今なんと言った??」

「残念ですが原因がわかります」「いや、その前だ。」・・・

受肉した件についてはみなさん（・・・）同じみたいでしたから・・・」

「さて、ということには私の他にも受肉した英霊がいるのか??」

疑問を口に出してみる

「ええ。ほら後ろ。」

その言葉に後ろを振り向くとそこには

完全に受肉した第五次聖杯戦争のサーヴァントが集まっていた。

「目覚めましたか？アーチャー早速ですが食事の用意をお願いします
ます」

・・・邂逅一番にそれですか？セイバー。

「ちっ、そのまま寝てりゃあいいのに。」

・・・頼むから少し黙っててくれ。ランサー。

「いいではないか。こやつが目覚めるまで森の雅を堪能できたのだ。」

・・・雅を堪能する前に状況確認をしておけ、アサシン。

「では、アーチャーが目覚めたところで状況確認をしますか？」
・・・ああ、ライダー。君はちゃんと今おかれている状況を考えているんだな。

「そんなことはどうでもいいわ！！それより宗一郎様は！？宗一郎様はどこ！？」

・・・うん、キャスター。君も少し黙っていようか

「・・・・・・・・」

・・・無言はやめてくれ。バーサーカー

「まあ、こういう訳でして何故か全員が受肉してるんですよ。」

・・・H A ☆ H A ☆ H A サークヴァント全員が受肉？ありえないだろ。

「・・・・・・・・。」

「なんでさーーーーー！！？」

また口癖がでてしまった・・・。

状況把握する運命（前書き）

二話目投稿です

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

更新はなるべく早くするよう頑張って生きたいので応援よろしくお願ひします。

状況把握する運命

— SIDE アーチャー —

「落ち着きましたか？アーチャー。」

「ああ、もう大丈夫だセイバー」

奇声を上げ、混乱していた私は何とか正気を取り戻していた隣ではセイバーが心配そうにこちらを見ている

予想外の事態に少々取り乱してしまったが、まずは状況を確認せねば・・・

「・・・さて、まずは何故我々が受肉しこんな場所にいるのか。誰か分かるものはいるか？」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

現在の状況を確認するため、他の連中に問いかけるが帰ってきたのは無言

やはり、誰も現在の状況が分かっていないらしい

・・・仕方ない、まずはここがどこなのか調べねばな

「ではこの場所についてだが私が寝ている間に何か分かった事はあるのか？」

このぐらいならば、誰かが調べているだろう
すると私の質問にキャスターが答えた

「・・・今、分かっていることはここが一等の霊地ということ」

キャスターの言葉に自分の周りにある魔力の量などを確認する
・・・なるほど、大気にマナが大量に含まれているな
しかもこの量か。ここは冬木より上の霊地という可能性が高い

「あとはここが平行世界の可能性が高いということぐらいね。」

「・・・は？」

キャスターが言った予想外の言葉に思わず呆けてしまった
・・・さて、平行世界だと！？そんなもの第二魔法の領域じゃない
か！！

「1つ聞こうキャスター。何を根拠にそんなことを言っているのかね？」

混乱する思考を必死に制御し、疲れたようにキャスターに問いかける
するとキャスターは私の後ろを指差しながらこう言った

「あら、アーチャー。あなたはあの木を見ても何とも思わないのかしら？」

キャスターが指差した方向を見てみるとそこには
標高200m以上はあろうかという巨大な木が堂々と聳え立っていた
すごく・・・大きいです

まてまてまてまてまてまて！！

「何だあの巨大な木は！？世界樹か！？ドラ●エの世界樹なのか！？」

「ア、アーチャー！？落ち着いてください！！
そもそもドラ●エとは何なんですか！？」

セイバーはドラ●エの意味を理解していないようだが
あいにく私は混乱していてセイバーにドラ●エの説明をする余裕は
ない

・・・くつ、あんなものが普通に存在しているだ！？？
確かにキャスターの言うとおり私たちの世界ではない可能性が高い
！！だが・・・

「まさか・・・そんな・・・」

そんな第二魔法のような奇跡が・・・
私たちは知らず知らずのうちに魔法の体現者となっていた訳か
・・・凜が聞いたら卒倒するかガンドの嵐だなこれは

「アーチャー、信じられないのは分かりますが今は
これからどうするかを考えなければ。」

む・・・。確かにライダーの言うとおりだ。
まずはこれからどうするかを決めねばならない
どうするか考えていると隣にいるギルガメッシュからある提案があ
がった

「贋作者、まずはこの場所の管理者に接触したほうがいいんじゃないですか？」

ここがどういった世界なのか知らなきゃ駄目ですし。」

「ふむ・・・だがどうやって接触する？」

ギルガメッシュの提案は正しい。が、最大の問題は管理者にどうやって接触するのかだ。

「あ、それなら多分大丈夫ですよ・」

「何？」

私がどうやって管理者に接触するか考えていると

ギルガメッシュが笑いながら私に心配は無いと言い放った

「さっき僕がエアを出したときに魔力を放出したじゃないですか？
もし管理者がいるなら気がついてすぐにここに来ると思いますよ」

・・・今なんと言いやがりましたか。このくそガキは？

エアの魔力は膨大だ。あんなものがいきなり現れたら相手側はものすごく

警戒するだろう。最悪戦闘になった場合、このメンバーだ。

おそらく負けることは無いが被害が甚大になる事は確実。

万が一、真名がばれてしまった場合騒ぎになることもありえる

そんな事を考えているとこちらに近づいてくる気配を感じた。

・・・この世界の魔術師か？

「おっ、来たみたいだぜ。数はざっと60人程度か・・・。」

ランサーよ、君は何故そんなにも楽しそうなのだ？

「平行世界の猛者と仕合えるかもしれんのだ。

心が躍るのは当然のことではないか。」

心を読むなアサシン。

「・・・まずは交渉だ。戦うのはその後にしてくれ。」

ため息をつきながら注意を促し、姿を現した相手を見据える

「貴様らいったい何者だ？何が目的でここに侵入した？」

現れた魔術師たちの中の一人、金髪の少女に声をかけられる。

こんな子供まで出てくるのか・・・

ため息をつき周りを見わたすが、他にも中学生程の子供が何人かいる。

それにやはり相当警戒されているな・・・さっきから視線がいたい。

とりあえずは交渉しなければ始まらんか・・・

「ふむ・・・何者かと言われれば、迷子の英雄といったところか？」

私は皮肉げに笑いながら一番前にいる金髪の少女に返答した

こうして交わることのなかった英霊と魔法使いが交差し新たな運命が廻りだした・・・

状況把握する運命（後書き）

龍真「やつとネギまキャラが出せたああああ」

アーチャー「良かったではないか、それに初投稿で不安だったのに5件もお気に入り登録がありテンションが高いようだな。」

龍真「その通り！！見た瞬間もう狂喜乱舞してたからね」

アーチャー「まあ、そうだろうな

それよりこの小説なのだが一体誰が主人公なのだ？」

龍真「うーん。話によっていろいろ視点が変わるけど一番多いのはアーチャー視点かな？」

アーチャー「ふっ、当たり前だ。あの中では私が一番相應しいのは一目瞭然だろう？

映画でも完全に主役だったからな」

龍真「自分的には他のサーヴァント視点もいいと思うんだけど・・・」

アーチャー「ナンセンスだな。

君は映画での私の勇姿を見ていなかったのか？
セイバーなどは途中完全に空気扱いだったではないか？」

セイバー「……………」

龍真「……ダラダラダラ（汗）」

アーチャー「しかも活躍したのはアサシン戦のみ

バーサーカー戦では簡単に吹き飛ばされてたしな。」

セイバー「……ゴゴゴゴゴゴ（怒）」

龍真「……（泣）」

アーチャー「食う気が人一倍あるだけ

人一倍空気扱いか。ハハハハハこれは笑えるな」

セイバー「……ブチッ」

龍真「……ダッ！！（逃）」

アーチャー「む、どうした？後ろに何k……」

セイバー「……チャキッ」

アーチャー「ま……待てセイb「エクスカリバアアア（怒）」ギャアアア！！」

龍真「え……えっと……とりあえず

次回「邂逅する運命と魔法」よろしく願いします」

アーチャー「……よ、よろしく頼む……ガクッ」

邂逅する運命と魔法（前書き）

皆さんの応援もありもう3話目となりました。

なるべく2日に1回を目処に投稿していきたいと思っています

とうとう邂逅する英霊と魔法使いたち。これからいっただいどうなるのか？

第三話 「邂逅する運命と魔法」 始まります

邂逅する運命と魔法

↓ SIDE エヴァンジェリン ↓

「ふむ・・・何者かと言われれば迷子の英雄といったところか？」

長身白髪の方が皮肉げに笑いながら私の問いに答えた。
。

だが何だこの余裕は？今ここには異変に気づいた麻帆良の魔法先生及び魔法生徒が集まっている。

ざっと5、60人ほどはいるだろう。それに対し相手はたったの8人。

こちらが雑魚ばかりならともかくこの場には爺にタカミチ・龍宮に刹那そしてこの私もいるのだ。

だが目の前の奴らは怯む様子もなく逆に奴らから妙な威圧を感じる。
・
・

ちっ！何か嫌な予感しかない！！

↓ SIDE アーチャー ↓

・・・ふむ。流石にやりすぎたか？視線に乗っている敵意が1割程度増した気がする。

私としては穏便に済ませたいのだg「少しいいかの？」

「む？」

金髪の少女の後ろから老人が声をかけてくる。・・・のだが何だあの後頭部は？

「ア、アーチャー？あれが日本に伝わるという妖怪というものですか？」

「いかにも、セイバー。あれはぬらりひょんと呼ばれるものだな私も始めて見たぞ。まさか本当に実在したとは・・・」

私の代わりにアサシンが答える。その言葉に何人か笑いを堪えてる者もいた。

「あの・・・わし、人間なんじゃが」

「まあ、その事は置いておいてだ「置いとくのかの!？」
ご老人、貴方がここの管理者かね？」

その言葉に周囲からの警戒が強まるが、まあいいだろう。
この程度の相手だけならば問題なく切り抜けられる。

「いかにも。わしが関東魔法協会の長、近衛近衛門じゃ」

「・・・さて、魔法だと？魔術ではないのか？」

「魔法と魔術は同じ意味ではないのかの？」

「・・・そうか。」

「次はこちらからの質問に答えてはくれんか？」

「何だね？」

「先ほど君は自分たちのことを英雄と言った。それはどういう事かの？」

「ふむ、その理由については私たちは先の戦争に参加した者たちでね。」

「まあ、そこで英雄と呼ばれていたと言う訳だ」

魔術師なら聖杯戦争の事を知っているはず。

さらに英雄とまで言ったのだ。

これで聖杯戦争ではない事を答えたらここは平行世界の可能性が高い。

「何じゃと？じゃが先の大戦ではお主たちのような者がいたという情報はないぞい

タカミチ君は何かしっておるかの？」

「いえ、学園長。僕は彼らのような者など見たことはありません
それに「紅い翼」のメンバーからもそのような話は聞いた事
がありません。」

「・・・という事じゃが、どういうことかの？」

「・・・なるほど。これはキャスターの予測が当たったか」

「何？」

「なに、私たちはこの世界の住人ではない。違う世界から来た者
ということだ」

私の発言に向こうの魔術師は驚愕の表情を浮かべていた

まあ、いきなりこんな事を言われたのだ。無理もないだろう

「何を馬鹿なことを！！貴様らいったい何が目的なのだ！！」

眼鏡をかけている褐色の肌の男性がこちらに銃を向ける
やれやれ、この程度の事でここまで感情的になるとはな・・・

「私たちに敵意はない。だから武器を下げてはもらえないかね？」

「敵意がないと言うのならまずは名乗るべきではないのかの？」

・む・・・それもそうだな。だが、真名を言うわけにもいかないし・・・
仕方ない、あまり気は進まないが・・・

「ふむ、ならば名乗るとしよう。私の名はアーチャー。
そして後ろにいるのがセイバー・ランサー・ギル・ライダー
それにキャスター・バーサーカー・アサシンだ」

「剣士に槍兵、弓兵に狂戦士じゃと・・・それらは本当に本名な
のかね？」

「無論だ。それとも人の名前に文句でもあるのかね？」

「違います。貴方たちは本当の名前を名乗ってません」

「な・・・!？」

「どういうことじゃ？ネギ君」

「本当の名前ならのどかさんのアーティファクトの効果が使え
はずです。」

「それが使えないということはその人たちのさっき言った名前
は嘘という事です!!」

「これはどういう事か・・・説明してもらえんかの？」

「ちっ!このまま誤魔化せると思ったが・・・あの赤毛の少年いった
い何者だ!？」

「しかも今の言葉で向こうが完全に戦闘態勢に入ってしまった
くっ・・・だがまだ「もういい、アーチャー」・・・何？」

「別にいいだろ？先に武器を抜いたのは向こうだ。戦闘になっ
ても文句は言えねえ」

「それにここは平行世界だろ？なら堂々と真名を名乗ってやりや
いいじゃねえか」

「何を言っているランサー!! 真名を名乗るなど正気か!？」

「相手が名乗って自分も名乗らないのは誓約^{ゲッシュ}を破ることになるからな

それに騎士の誇りにかけて売られたケンカは全力で買う。」

「な・・・!？」

「それに他の奴らもやる気満々みたいだぜ」

振り向くとサーヴァント全員が構えていた。アサシンは分かるが、セイバー、お前らもか!!

それに反応して向こうも全員戦闘準備に入ってるし・・・

「・・・もう勝手にしてくれ」

「よっしゃ♪これで思いっきり暴れられるな」

「さて平行世界にはどんな術を使う者がいるのか・・・楽しみだ」

「騎士の誇りにかけて勝利を誓いましょう」

「みなさん張り切ってますね」

「……………」

「まあ、あのまま交渉しても上手いくとは限らなかったし別にいいんじゃない？」

「気を取り直してください。戦闘になりますよアーチャー」

私の先ほどまでの交渉の意味はいたい・・・？

「一番手は俺がもらうぜ。おい、お前ら！誰でもいいからかかって来い！！」

「相当な自信があるようじゃが、本気でここにいる全員を相手にするつもりかの？」

「たりめえだ。てか、俺の後ろの奴らも戦うんだ。どう考えてもぜんぜん足りねえだろ」

「どうやら本気のようにやな……。では本当の名を聞こうかの、
槍兵殿？」

「ああ、いいぜ。名乗ってやるよ」

手に真紅の魔槍を出現させ相手を見据える。

「赤枝の騎士団、クーフーリン」

そう名乗った瞬間、場を静寂が支配した

邂逅する運命と魔法（後書き）

アーチャー「うううああああああ！！！！！！」

カラドボルグ！カラドボルグ！！カラドボルグ
！！！！！！」

龍真「うおおおおお！！？」

アーチャー「私の交渉の意思を返せえええええっ！！」（怒）

セイバー「お、落ち着いてくださいアーチャー！！」

ランサー「荒れてんなあ、おい」

龍真「いや、とどめさしたの間違いなくランサーでしょ」

ランサー「だってよお、普通売られたケンカは買うだろ」

龍真「それ以前に真名言って大丈夫なの？」

ランサー「まあ、俺らの名前が本物かどうか分かる以上どうせ名乗ることにはなるだろうしな」

龍真「そう思うとのどかのアーティファクトって結構チートな気がするな」

アーチャー「うああああ！！カラド「いい加減にしろおおお！！」（怒）ぐっ！？」

ランサー「……向こうも終わったみたいだしそろそろ予告とい
か」

龍真「そうだね……」

ランサー・龍真「では次回「激突する英霊と魔法使い」お楽しみ
に!!」

アーチャー「……………(死)」

ランサー「……生きてるのかこいつ? (汗)」

龍真「……………。」

激突する英霊と魔法使い ? (前書き)

お気に入り小説登録件数50件突破!!

龍真「もう何とお礼を言っていやら・・・」

アーチャー「まさか50件突破とは思いませんでしたな。」

龍真「初投稿なので15件いけばいい方かな〜とか思ってたからね
(汗)」

アーチャー「この小説を応援してくださる人たちもいるのだ

これからも気合を入れて更新し続けなければな」

龍真「当たり前だよ。

これからも面白くなるよう精一杯努力しなきゃ。」

アーチャー・龍真「では」「激突する英霊と魔法使い ?」「お
楽しみに!!」

激突する英霊と魔法使い ？

― S I D E ネギ ―

「赤枝の騎士団、クーフーリン」

前に出てきた青い鎧の人が確かにそう名乗ったのと同時に場を静寂が支配した

無理もない。赤枝の騎士団、それにクーフーリンと言えばケルト神話に登場するアイルランドの光の御子の名だ。

また偽名なんだろうか？ いや、ここまできてまた偽名を名乗るのは考えにくい

だけど、そんな・・・。

「のどかさん！今あの人が言った名前は本当なんですか！？」

「・・・は、はい。アーティファクトも使えますし、今の名が本当の名みたいです」

「「「「「なっ!？」「「「「「」

「バカな!! アイルランドの光の御子だと!?!」

のどかさんの言葉に反応した師匠^{マスター}が驚愕の声をあげる

「へえ、この世界でも一応伝説には残ってるみたいだな? 安心してぜ。」

「ね、ねえネギ。みんなあの人のこと知ってるの?」

それにアイルランドの光の御子って?」

不意にアスナさんがそんなことを聞いてくる

「アイルランドの光の御子っていうのはクーフリーンの異名でクーフリーンとはケルト神話に登場する英雄の名前なんです」

「はあ!?! 何でそんな人がここにいるのよっ!?!」

「だから驚いてるんじゃないですか!?!」

本当にあの人がクーフリーンだとすると、あの手に持っている槍はまさか・・・?

「まさか・・・その槍はゲイ・ボルグですか？」

「博識だな坊主、そんなことまで知ってんのか？」

「ちっ・・・ゲイ・ボルグだと!？」

下がれボウヤ!! 私と茶々丸ぐらいしかあいつの相手はできん!!」

そうだ、ゲイ・ボルグといえ**ば**必ず心臓を貫くと云われる魔槍
不死の能力を持つ**マスター**師匠とロボットの茶々丸さん以外が相手にする
のは危険すぎる

・・・でもせめて相手の目的を知らなきゃ!!

「頼みます。のどかさん!!」

「ハ・・・ハイ!!」

クーフリーンさんっ!! あなたはどうしてこんなところにいる
んですかっ!?

できたら詳細まで詳しくっ!!」

よし! これでのどかさんのアーティファクト

「いどのえにつき」で相手の目的がわかるぞ!!

「クーフリーンさんっ!! あなたはどうしてこんなところにいるんですかっ!？」

できたら詳細まで詳しくっ!!」

本を持った嬢ちゃん

・・・のどかとか呼ばれてたか? がいきなりこちらにこんな事を言っ
てきやがった

あの本、何か妙な魔力を感じるな・・・何かの魔道具か?
しゃあねえ、頼むのは癪だが・・・

「アーチャー!!」

「言われなくてもわかっている!!」
トレース・オン
投影開始 ルールブレイカー!!」

アーチャーから投合された短剣が持つてゐる本を貫く

「きゃあっ!?!」

「のどかさん!!」

「残念だったな。」

得体のしれないもんをみすみす使わせるほど、慢心しちゃいな
いんでね」

坊主たちがアーチャーに貫かれた本を拾って驚いてるな
どうかしたのか?

「何をしようとしていたのかは知らんが・・・」

これでその魔導書との契約は解除された。それでどうする?こ
のまま戦うのか?」

なるほど・・・いきなり契約が切れたから驚いてやがったのか

「そんな・・・アーティファクトの契約を無効化するなんて・・・
」。

「どうした、かかって来ないのか?

来ないのなら・・・こっちから行くぜえっ!!」

・
・
・さあ、戦闘の始まりだ！！

激突する英霊と魔法使い ? (後書き)

ランサー「今回は俺視点が多かったな」

アーチャー「……くっ、まあ一回ぐらいいは譲ってやっても損はあるまい」

ランサー「勝手に言ってる。そういや龍真はどうしたんだ？」

アーチャー「……スツ（無言で指をさす）」

セイバー「またですか？ また私は空気扱いですか？ 私は一応メインヒロインなんですよ？

それなのにこの扱い……なんとも思わないのですか？」

龍真「ちょ、セイバー落ち着いて！！ 話せばわk……」

セイバー「問答無用！！」

龍真「イヤアアアアアアア！！」

アーチャー「……………」

ランサー「……見なかったことにするか」

ランサー・アーチャー「では次回」
「お楽しみに!!」
「激突する英霊と魔法使い」

激突する英霊と魔法使い ? (前書き)

龍真「えー、今回はセイバー結構出ます」

セイバー「ふむ、ようやく私の出番ですか・・・」

龍真「やっぱり、戦闘描写は難しいね。」

セイバー「修行が足りないからです。ちゃんと勉強しなさい」

龍真「うっ・・・」

セイバー「では・・・」「激突する英霊と魔法使い ?」「どうぞ」

激突する英霊と魔法使い ？

↓ SIDE ネギ ↓

「・・・ッ！！来るぞ、構えろっ！！」

「よそ見してる暇はねえぞ？嬢ちゃん」

「な・・・ガアッ！？」

「^{マスター}師匠（エヴァ）！？」

そんな！マスターを簡単に吹き飛ばすなんて・・・

「くっ、ラステル・マスキル・マギステル

光の精霊11柱 集い来たりて敵を討て！魔法の射手・連弾光
の11矢！！」

「無駄だ」

「えっ！？」

クーフリーンさんに当たる前に魔法がかってにそれた!?

「なかなか筋はいいみたいだが・・・残念だったな?」

「ぐ・・・でもこれならどうだ!!」

来たれ雷精 風の精 雷を纏いて吹き荒べ 南洋の風!!」

「おっ?」

「雷の暴風!!」

「甘いですね・・・風王 結界!!」
インビンジブル・エア

「なっ!?!」

そんな・・・雷の暴風がかき消された!?

「どうした魔術師、この程度か?」
メイガス

「おいおいセイバー。人の獲物をとるんじゃないよ」

「何を言っているのです、ランサー。」

あなたに任せていては私たちが戦えぬではありませんか
それに先ほどあなたが吹き飛ばした子供も戻ってきたようです
よ」

「ハア・・・しゃあねえ、その坊主はお前に譲るが他の奴らはど
うすんだ？」

「見たところ60人程度ですから均等に分ければ
一人あたり7〜8人といったところですね。
アーチャーやライダーたちも参加すればですが・・・」

セイバーと呼ばれた女の人はいきなりそんなことを言い出した

「・・・セイバーといったか
クーフーリンを従えているとはいえ、たいした自身じゃのう？」

「何を勘違いしている。ランサーは私たちにしたがってなどいない
そちらこそいいのか？英雄が一人だけとは言った覚えはないぞ、
メイガス
魔術師」

「何じゃと!？」

なっ!?! まだクーフリーンのような人がいるっていいのか!?

「さて、アーチャー別に倒してしまってもかまわないのでしょうか?」

「・・・セイバー、それは私の台詞なのだが」

「さあ、覚悟はできたか魔術師!!」^{メイガス}「人の話を聞け!!」

「あまりいい気になるな!!」

ガンドルフィーニさんが銃を撃つが全て弾かれてしまった

不可視の武器!?! いったい何なんだあの人は!?

「この身はかつてブリテンを率い、円卓の騎士らと共に戦った身
そのような攻撃が通じると思うな!!」

ブリテン、それに円卓の騎士って・・・まさか!?

「騎士王・・・アーサー・ペンドラゴン!？」

「さあ、いくぞ魔術師^{メイガス}。魔法の詠唱は万全か？」

「ちよっ!？また私のセリフを・・・」

・・・ッ!! 来る!!

「ラステル・マスク「遅い!!」ぐっ!？」

「ネギ（先生）!!」

「くそっ!! 神鳴流奥「悪いがそなたの相手は私だ」なっ!？」

「ぐっ・・・貴様、何者だ!!」

「人に名を聞くのならまず、自分が名乗るのが礼儀ではないのか？
まあよい。アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎・・・参る

!!」

バカな!! クーフリーンだけでなくアーサー王さらに佐々木小次郎だと!?

だが、驚いてる暇はない!! 速く先生たちの援護をしなければ・・・
相手に狙いを定め引き金をひく

Ⅰ キインツ ガツ ガキツ

「何っ!?!」

なんだあれは!?! 剣が飛んできて弾が全部打ち落とされただど!?!
慌てて剣が飛んできた方向を見る。
するとそこにはアーチャーと呼ばれた男が漆黒の弓を持って立っていた

「・・・こうなってしまった以上手は抜けんのでね

悪いが狙撃手、君の相手はわたしがするでしょう」

・・・なるほど、^{アーチャー}弓兵とはよく言ったものだ。
これは援護は無理だな。まずあの男に勝てる気がしない

だがこちらもプロだ。せめて一矢ぐらいは報いてみせる

「いくぞ・・・弓兵」

英霊と魔法使いの戦いは加速する・・・

激突する英霊と魔法使い ? (後書き)

龍真「もう次から完全に戦闘に入るね。これは」

ランサー「よっしゃ、腕になるぜ!!」

アーチャー「ところでこの戦闘から書くのだ？」

龍真「うーん、いろいろ考えてるけどエヴァとランサーかな」

ランサー「おっ!! まずは俺からか」

アーチャー「というか周りの魔術師、いや魔法使いか？」

完全に空気だがどうするのだ？」

龍真「まだタカミチたちも残ってるからね

今は誰が相手をするのか考え中なのです」

ランサー「じゃあ予告するぞ!!」

次回「激突する英霊と魔法使い ?」楽しんでみてくれ!!」

アーチャー・龍真「予告とられた!？」

槍兵と吸血姫（前書き）

龍真「感想によると戦闘描写が分かり難いということだったので・

・

できるかぎり詳しく書いてみました」

アーチャー「全くだ。しっかり反省しろ」

ランサー「もう少ししっかり書けよな」

セイバー「次にこんな事があれば・・・わかりますね？」

龍真「・・・うう。読者の皆様に迷惑をかけてすいません

また何か指摘すべき点があれば、これから直していきますので指摘してください。」

槍兵と吸血姫

Ⅰ SIDE エヴァンジェリン —

今私は獣のような目をした青い鎧を着た男・・・クーパーリンと相対している

この男の獰猛な獣のような目、猛獣の前にいるような威圧感ただ向かい合っているだけなのに体が震えそうになる

「流石は克蘭の猛犬と呼ばれし英雄だ

この闇の福音をここまで威圧するか・・・」

「その闇の福音ってのは嬢ちゃんの二つ名か？

見たとこまだガキなのにたいそうなもん持ってんじゃねえか」

む・・・まさかこの男、私が外見どおりの年齢だと思ってるのか？
ただのガキが貴様のような奴の前に立てるわけもあるまいに

「あいにくだが、この身は不死の身でな・・・もう600年は生きています」

わたしの言葉が以外だったのか、奴は目を見開き驚愕の表情を浮かべたが

それも束の間、すぐさま槍を私に向かって構え威圧しながら口を開く

「嬢ちゃん・・・まさか死徒か？」

「死徒だと？なんだそれは？」

この身は誇り高き吸血鬼の真祖、いくら貴様が英雄といえど遅れはとらんぞ」

「なっ！！真祖の吸血鬼だとっ！？・・・おもしれえ！！
ここの連中が弱かったらどうしようかと思ったが・・・
ようやく本気で闘えそうだ！！！」

歓喜に口元を歪めた奴から凄まじいほどの殺気があふれ出す
そのあまりの殺気に冷や汗が頬を伝う

「いくぞ吸血鬼！その心臓・・・もらい受ける！！！」

「やってみろ・・・英雄！！！」

その言葉を合図に奴と私は駆け出した

目前に槍が迫る、がそれを右に受け流し相手の腕をからめようと
するが避けられてしまう

だが槍は止まらず第二、第三の攻撃が迫ってくる

「どうした、嬢ちゃん？その程度か！！」

「あまりなめるなよ・・・茶々丸！！」

「了解しました。マスター」

「むっ！」

奴の死角から茶々丸が攻撃を繰り出したが槍で防がれてしまう
だが・・・これで隙はできた！！

魔法薬を取り出し、それを奴に向かって投げつけ魔法を使う

「氷結・武装解除！！」

「ぐっ！！・・・何いっ！？」

私が放った「氷結・武装解除」によって奴の槍は弾き飛ばされ
右肩から先の鎧が氷となって砕け散った

「流石にゲイ・ボルグは破壊できんか・・・
だが油断したな。ここからは攻守を逆転させてもらおう!!」

私は右から茶々丸は左から挟み撃ちをするように仕掛ける
封印されていても600年を生き抜いた身だ。

いくら奴が英雄とはいえ、武器が無い状態なら五分五分といったところか

茶々丸が蹴りをだし、奴がそれを受け止める

その間に接近戦に持ち込もうとするが、奴が蹴りをだしこちらの進行を止められた

さすがかつて英雄と謳われた者だ・・・一筋縄ではいかんか

I SIDE ランサー —

油断した!!まさかゲイ・ボルグを弾き飛ばされるとは・・・

自分の恥に思わず歯を噛み締めるが、今は目の前の相手に集中する

背の高い嬢ちゃんは時々ありえない方向に関節をまげて攻撃してくる
この嬢ちゃんも人間じゃねえな・・・

だがそれより問題なのはちっこい方の嬢ちゃんだ

もう一人の嬢ちゃんの攻撃を防ぐために攻撃するところらの力を利用し、関節を極めようとしてたり投げ飛ばそうとしてきやがる

流石に600年を生きたといってるだけはあるな・・・

ゲイ・ボルグまでの距離は・・・だいたい20Mってところか
どうやってゲイ・ボルグを取りに行こうか考えているとちっこい嬢
ちゃんが視界から消えた
いったいどこへいった!?

「魔法の射手・連弾氷の27矢!」

「な!？」

その声と共に頭の上から氷の矢が降り注いでくる
くっ・・・死角からの攻撃だから矢避けの加護が発動しない!!

「ちっ!!」

横に転がることでその攻撃を回避する
なんとか避けたが、今のは坊主がさっき使った魔法か。系統は違う
ようだが
前を見るときもう一人の嬢ちゃんが目の前に接近してきていた・・・
そして

「今だ、茶々丸!!」

「YES, マスター」

凄まじい速度の蹴りが放たれた

「ガッ!!」

その蹴りはきれいに俺の顔面をとらえ、そして蹴り飛ばしたぐ、結構きいたな。口の中に血の味が充満する

俺はその威力に10M程吹き飛ばされてしまった

・・・だが蹴り飛ばす方向が失敗だったな

空中で体勢をたてなおし着地する、ここからなら俺のほうが速い!!

「ッ!!!しまった、茶々丸速く追撃しろ!!」

「え・・・?」

ちっこい嬢ちゃんが気づいたようだがもう遅い。足に魔力をこめ、地面を蹴って飛び出す

背の高い嬢ちゃんが追いかけてくるが間に合わん
再び手に取るのは幾たびの死線を共にくぐりぬけた魔槍・・・

「またせたな・・・ゲイ・ボルグ

さあ、仕切りなおしといこうか!」

ゲイ・ボルグを構え、嬢ちゃんたちに向かって再び飛び出す

槍兵と吸血鬼の戦いは激しさをまし

その戦いに呼応するように他の戦いも加速していく・・・

槍兵と吸血姫（後書き）

ランサー「今回はずっと俺の戦闘だったな」

龍真「戦闘描写が上手くてきてるか不安なだけだね・・・」

ランサー「おいおい、しっかりしろよな、せっかく俺の見せ場なんだぜ」

「そーいや気になったんだが・・・なんで予告とタイトル違うんだ？」

龍真「それは・・・」

ランサー「それは？」

龍真「このままのタイトルでいくと変わり映えが全然ないと思って・・・」

ランサー「・・・確かにな」

龍真・ランサー「では次回」「剣士二人」 お楽しみに!!」

剣士二人（前書き）

アサシン「今回は私が主役の話だな」

龍真「順番的にはセイバーだったんだけどアサシンからの方にしたからね」

セイバー「・・・ほう、それはいったいどういうことですか？」

龍真「・・・話をつくる上で仕方なかったんだよ

ですからエクスカリバーをしまってください。お願いします」

ライダー「で？私たちの出番はいつたい何時なんですか」

龍真「それは戦闘がひとしきり終わったらって考えてるんだけど・

・
って、足からどんどん石化してる!？」

ギル「遅すぎですね・・・もう少し速くできないんですか？」

龍真「だからプロットではそのぐら・・・ってギャー!!
なんか石化がもう胸まで進行してるし!!」

アサシン「では「剣士二人」楽しんで見てくれ」

龍真「なんか無理やりしめた!?! ちょ、もう無r・・・(完全石化)」

剣士二人

Ⅰ SIDE 刹那 Ⅰ

今、私は紫色の陣羽織を着た男と相對している
そしてこの男が名乗った名が・・・

「佐々木小次郎・・・だと？」

「さよう、我が名は佐々木小次郎。アサシンのサーヴァントだ
そして異界の剣士よ、貴殿の名は何と言うのだ？」

まさか・・・本当に佐々木小次郎なのか
神話の人物が実在している事も驚いたが、まさかこんな奴までいる
とは・・・

「・・・京都神鳴流、桜咲刹那」

「ほう、都の生まれであったか
それにその神鳴流とやらはこちらの流派か？ いやはや興味深い
な」

僅かに口元を歪めその男はこう言った

「貴様ら・・・いったい何が目的だ？
お嬢様に危害を加えるようなら容赦はしない」

「ふむ、そのお嬢様というのが誰かは知らんが・・・
私の目的は強者との手合わせだけだ
さあ異界の剣士よ、いざ尋常に勝負といこうではないか」

この男・・・月詠と同じような戦闘狂か
だが感じる威圧は月詠とはケタが違う

「尋常に勝負か・・・
暗殺者を名乗っておいでよく言うな」

「それについては弁解の仕様がなないな。
まあそんなことはどうでもよい
我らは剣士。語りたいことがあるば・・・刀で語れ」

男はそういうと刀を抜刀する
あの刀・・・夕凧と同じような野太刀か
こちらも夕凧を鞘から引き抜き構える

対して男は抜刀した刀を右手で持っているだけ
無行の構えか・・・だが全く隙が無い

夕風を持つ手に力が入る。あの男・・・やはりかなりの手練だ
はたして今の私で勝てるのか？

・・・否、この身はお嬢様を守ると誓った身。ならば答えは一つし
かない

「京都神鳴流、桜咲刹那。・・・参る！！」

瞬動で接近し、回転するように相手の胴を薙ぐ
だがその一撃は相手の刀によって防がれる

「む・・・なかなか速いな」

流石に強い・・・ならば！！

一度後ろに飛び、再び刀を振り上げて斬りかかる

「斬岩剣！！」

斬岩剣を相手の頭に向かって打ち出す

「甘っ！！」

「くっ！」

男がそれを刀で右に逸らすのと同時に斬りかかってきた刀が私の首に迫るが、なんとか刀を振り上げ防御する
だが男の攻撃はこれだけでは止まらない

目前に流れるような斬撃が迫ってくる

しかもそれら全てが首を狙った必殺の剣

このままではいずれ私の首は撥ね飛ばされるだろう
だが私はお嬢様を・・・守らねばならないんだ！！

「な・・・めるなあっ！！！」

夕風を持っている手に力を込め、奴の剣を弾き距離をとる

「ハアッ・・・ハアッ」

「たいしたものだ、その歳でここまでの動きができるとは」

男がこちらに賞賛の言葉をかけてくるがそんなことはどうでもいい
このままでは勝ち目が無い、いっただうすれば・・・

ふと私はあることに気がついた
確かに奴の剣技は凄い、だが奴からは気が感じられない
まさか・・・気が使えないのか？

「なにか思案しているようだが・・・そんな余裕は無いぞ」

再び奴がこちらに向かってくる・・・考えてる暇は無い！！
私は背中から翼を出し空に飛び上がる

「なっ!?!」

男は驚愕し、目を見開いている・・・今が好機だ！

「斬空閃!?!」

「むっ!?!」

男に向かって斬空閃を放つが簡単に回避されてしまう
やはりこの程度の攻撃は通用しないか・・・

「まさか妖の類であったとはな。しかも斬撃をとばすか・・・

だが空中に逃げてしまわれてはこちらの攻撃が届かん。さて、
どうしたものか」

思ったとおりだ。奴は遠距離の攻撃手段を持っていない

ならば空中から奴を攪乱し、攻撃すればあるいは勝てるかもしれない

今まで忌み嫌っていたこの力が役にたつとは・・・皮肉だな

私は刀を構えなおすと再び奴に空中から斬りかかる

「斬岩剣!!」

距離をとり避けられるが・・・逃しはしない!!

「斬空閃!」

「ちいっ!!」

奴はその攻撃を弾きこちらに接近しようとするが再び飛び上がって
距離をとる

よし、このままいけば・・・

「速いな・・・まるで燕だ

ならばこちらにも相応の技を見せねばなるまい」

奴はそういうと刀を右肩の上に構えた
何をする気かは知らんが・・・逃げるわけにはいかない

私は再び奴に空中から接近する

「秘剣・・・燕返し!!」

斬りかかる前に奴から神速の斬撃が放たれる
だが・・・こんなもの防いでしまえばどうという事は無い!!

私は夕風で奴の斬撃を防ぐ・・・が

― ザシュツ

それと同時に私の体は二つの斬撃に斬り裂かれた

「え・・・？」

何が起こったのか理解できなかった。確かに私は奴の攻撃を防いだはずなのに・・・

「1つは防いだようだが、残りの2つは防げなかったようだな異

界の剣士よ

いやはや、なかなか楽しめたぞ」

そうか・・・それも同時に放たれた斬撃の1つにすぎなかったのか
体を起こそうとしても体に力が入らない
私はまた・・・守れなかったのか・・・

「せっちゃん!!」

遠くでお嬢様の・・・親友の声が響く
約束・・・ずっと・・・守るって・・・誓ったのに・・・

「ごめん・・・ごめんな・・・このちゃ・・・」

そういうと共に私の意識は闇に落ちた

「せっちゃん・・・? いや・・・イヤアアアアアッ!!」

麻帆良の空に少女の悲鳴が響き渡った

剣士二人（後書き）

ランサー「おいおい剣士の嬢ちゃん大丈夫なのか？」

アサシン「まあ、あの少女がどうなったかは次の話でわかるだろう」

ランサー「確かにそうだが龍真はまだ石化中なのか？」

アサシン「いや、もう石化は解けセイバーとバーサーカーから逃げているようだが」

ランサー「・・・悲惨な状況だな」

アーチャー「おい、そろそろ予告したいのだからいいかね？」

ランサー「ああ、いつでもいいぜ」

アーチャー「ならば今回の予告は私がさせてもらおう

次回 「親友と侍と」 楽しみにしててほしい」

セイバー「エクスカリバアアア!!」

バーサーカー「■■■■ー！ー！」

龍真「誰かたすけてえええええ!!」

親友と侍と（前書き）

龍真「祝・お気に入り登録件数150件突破!!」

アーチャー「もう言葉も出んな」

龍真「・・・うううう。本当にありがとうございます」

ランサー「よかったじゃねえか龍真!」

セイバー「まさかここまで読んでくださる人がいるとは・・・」

龍真「もう本当に嬉しい限りです」

これから頑張って更新するので応援よろしくお願いします」

親友と侍と

Ⅰ SIDE アサシン Ⅰ

「刹那（さん）（君）！！」

「なかなか楽しめたぞ。異界の剣士よ

その歳でここまでの剣技を習得するとは・・・殺すには惜しい才能よ」

そんなことをつぶやいていると向こうから娘が一人走ってくるのが見えた

「せっちゃん！せっちゃん！！」

娘はすぐに異界の剣士の傍に行き必死にその名を呼んでいる
なるほど・・・この娘先ほどの剣士の友か

「いや・・・い・・・やや・・・な・・・で・・・？せっちゃん・・・」

剣士からの返事が無いからか娘は大粒の涙を流し必死に剣士に縋りつく

やれやれ・・・娘子を泣かせるのは趣味ではないのだがな
刀を下げゆつくりと異界の剣士に近づく

「!!」

娘が剣士を庇うように前に立つ

「何のつもりだ・・・娘」

「せつちゃんを・・・うちの友達を・・・これ以上傷つけんで！
」

娘が目には涙をため叫ぶ

ほう・・・自らの命より友を守ろうとするとは

その事に感心しつつもう一步踏み出した瞬間、空中から苦無が飛んできた

刀を振り上げ苦無をはじく・・・新手か

「無事でござるか！？木乃香殿!!」

そう言いながら娘の前に飛び降りてきたのは緑の髪をした娘だった

苦無・・・忍の者か

「楓!! うちよりもせつちゃんが・・・」

「・・・木乃香殿!! ここは拙者にまかせてはやく治療を!!」

「う・・・うん!!」

「ほう・・・次は忍か

まことにここはおもしろい世界よ」

その言葉に目の前の忍が構える

「それにそちらの娘も治療師であったか。ここは才がある娘が多いな」

「拙者の命に代えても木乃香殿の邪魔はさせん!!」

「何をいつている。邪魔するつもりなど盲等ない、はやく治療させるのだな」

忍と娘はその言葉に驚いたのか目を見開いている

「・・・何を企んでいるのでござるか？」

「企むとは人聞きの悪い。

その娘の才が死なせるには惜しいのでな
助けるというのなら邪魔はせんよ」

その言葉に忍は困惑し、しばらく考えたそぶりを見せてから口を開いた

「木乃香殿・・・治療を」

「わかった！出でよ（アデアット）・・・コチノヒオウギ・ハエ
ノスエヒロ」

娘が扇を出し呪文を紡ぐと剣士の傷が見る見る治癒していき傷は完全に塞がった

ほう・・・まさかここまでとは

「・・・お・・・嬢様・・・？」

「せっちゃん・・・よかった・・・グス・・・せっちゃん・・・ヒッ

ク」

剣士が目覚めたことに安堵したのか
娘は涙を流しながら剣士の体を抱きしめた

「まさか完全に回復するとは・・・その歳で信じられぬ魔術の腕
よ」

「!?!? お嬢様、お下がりにください!!」

完全に目が覚めたのか、剣士は娘を下がらせ再び剣を構える
それに応じて忍もこちらを警戒し娘の前で構えた

「今度は2人か・・・仕合いたいのはやまやまだが・・・」

鞘を拾い、物干し竿を鞘にしまう

「・・・何のつもりだ?」

「なに、他の戦いもそろそろ終わりそうなので・・・
他の強者の实力を見ておこうと思ったのだ
仕合うのはその後からでも遅くはあるまい?」

その言葉と共に視線を横に向ける

その先ではセイバーが赤毛の童と戦っていた・・・

親友と侍と（後書き）

セイバー「いよいよ私の出番ですか・・・腕がなります」

アーチャー「ふむ・・・では私の出番はその次ぐらいか」

ランサー「おい、アーチャー。セイバーの次は俺の出番かも知れねえぞ？」

アーチャー「その可能性も無くはないな・・・ところで龍真はどうしたのだ？」

セイバー「龍真なら先ほど出番が無い者たちにどこかに連れていかれましたが」

ランサー「・・・せめて助けてやってくれ、セイバー」

セイバー「そんなことより予告です」

次回 「騎士王の力」 楽しみに待っていてください
「い」

ランサー「龍真でも探しにいつてやるか・・・」

アーチャー「・・・そうだな」

騎士王の力（前書き）

龍真「この度サーヴァントが弱すぎるという指摘が多く寄せられました」

サーヴァント陣「・・・・・・・・・・」

ランサー「おいこら・・・」

それは貴様の駄文のせいだろうが。心臓貫き受けるぞこの野郎」

アーチャー「まったくだ。・・・苦情を抱いて溺死しろ」

セイバー「覚悟はできているのですか？」

バーサーカー「■ ■ ■ — — — ！！」

キャスター「もういいわ・・・死になさい」

ライダー「さて・・・」（魔眼殺しに手をかける）

ギル「我のこの手が真っ赤に燃えるううううう！！！」

龍真「またそれ！？」

アサシン「我が秘剣・・・受けてみるか」

龍真「すいませんでしたああああっ！！（逃」

キャスター「……^{アトラス}圧迫」

龍真「へぶしっ!!」

ライダー「逃すと思いますか？ 自己封印・暗黒神殿」

アーチャー「……オマケだ、我に触れぬ（ノリメ・タンゲレ）」

龍真「ちょ……待つ……動けな……」

サーヴァント陣「くたばれええええ（怒）」

龍真「ぎゃあああああああああああ!!」

騎士王の力

Ⅰ SIDE ネギ ー

セイバーと呼ばれた女の人に一瞬で接近され蹴り飛ばされた呪文を唱える隙が無い・・・それどころか全く攻撃が見えなかった口から血を吐きふらふらになりながらもなんとか立ち上がる

「む？まだ立てるとは・・・少々手加減しすぎましたか」

「ネギ！！くっそおおおお！！」

アスナさんがセイバーさんに攻撃するがいとも簡単に剣で防がれてしまう

「そんな・・・」

「筋はいいようですが・・・まだ甘い！！」

そういうと剣をはじき返しアスナさんを吹き飛ばすと今度は古老師のほうに向かう

「アスナ!!くっ!!」

「古老師!!ラステル・マスキル・マギステル……」

老師も反撃しようとしたが一瞬で吹き飛ばされてしまったぐ……もうこれ以上僕の仲間を傷つけさせるもんか!!
自分にある魔力を全て込め、全力で打ち出す

「ああああああ!!雷の暴風!!!!」

雷の暴風が相手に向かう

……よし!これなら当たる!!
放たれた一撃はまっすぐに相手に向かう
この一撃で相手を倒せるはずだった……だが

ー シュン

音をたてて雷の暴風は消え去ってしまった

「え……?」

何で……なんで雷の暴風が!?!
いったい何が起こったんだ!!

頭に思考をめぐらす
いったいどうすればあんな事ができる
魔法をかき消すなんてそんな事が・・・

ふと脳裏に自分の従者の一人、頼りになる姉のような人が持っている
力のがよぎる
まさか・・・アスナさんと同じ・・・

「魔法無効化能力者・・・？」

そうつぶやいた次の瞬間

接近してきた相手の一撃により僕の意識は闇に沈んだ

↓ SIDE セイバー ↓

「ふむ・・・こちらはだいたい片付きましたか」

赤毛の少年の腹に打ち込んだ拳を引き、少年を地面に寝かせる
3人は少なすぎましたか・・・少しはやく終わってしまいました

「そちらも終わったようだな、セイバー」

ふりむくとアサシンがゆっくりとこちらに近づいてくる

「もうそちらは終わっていたのですか・・・
そういえば他の戦いはどうなったのd<ドガアアアアア>
・・・あちらも終わったようですね」

音のした方を確認するとアーチャーが矢を打ち終えた状態でたっている

「アーチャー・・・もう少し静かにできないのですか」

「む・・・しょうがないだろう」

もう他の戦いが全ておわりそうだったからな」

「ということは・・・ランサーの方も？」

「ああ、もう少しで勝負がつくと思うぞ」

確認すると背の高い少女は吹き飛ばされていて
ランサーと金髪の少女の一騎打ちになっていた

「ぐっ・・・なんだこの速さは!?!」

「ほらほら! どんどん行くぜ!!」

ランサーが速度を上げ少女はその速度に反応できなくなってきた
る

だがランサーのスピードはその程度ではとまらない
だんだんとスピードがあがり、少女が完全に反応できなくなった瞬間

ランサーがゲイ・ボルグを少女につきたてた

「悪いな、嬢ちゃん俺の勝ちだ」

「ぐ・・・」

戦いは終わり物語はあらたな展開を迎える

騎士王の力（後書き）

龍真「強さはこのぐらいでいいのかな・・・」

セイバー「私は対魔力Aですしこのぐらいじゃないですか？」

ライダー「結局私たちの出番は無かったですね・・・（怒）」

龍真「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

セイバー「では次回」「魔法使いと英雄たち」 お楽しみに！
「！」

魔法使いと英雄たち

Ⅰ SIDE アーチャー Ⅰ

「悪いな嬢ちゃん、俺の勝ちだ」

「ぐ．．．」

ランサーの方も決着がついたか．．．

魔術師たちの方を確認すると全員が信じられないといった顔をしていた

先ほどこの長を名乗った翁も同じだ。顔は青ざめ冷や汗をかいている

まあこれですぐに戦闘にはならないとは思うが、問題はどうかやって交渉を再開するかだ

ここが平行世界なら衣食住のこともあるし、この世界についての最低限の情報はほしい

今はこちらが優勢のようだしな．．．まだ交渉はできるかもしれない

「さて．．．翁よ、ここからどうするのだ？」

まさか、まだ戦うというのではあるまいな」

その言葉に何か思うことがあったのか

翁は冷静さをとりもどしすこし威圧をこめてこちらに問う

「もしここで戦うといったら・・・

君たちはそこにいる子たちを殺すのかの」

「殺す」 翁の口からでたその単語に向こうからの視線が強まる

私たちがこの子たちを人質にするということか・・・
なるほど。今の状況ではそう疑っても仕方あるまい

「人質という事かね？ そんな必要はなからう

そんなものがいなくとも君たちの相手をするのはたやすい」

「ほう・・・まだ何かあるような言い方じゃのう」

「先ほどの反応を見る限り

今向かってきた者たちはそちらの中でもそれなりに上位の部類
だろう

その者たちと戦ったにもかかわらずこちらはほぼ無傷

なおかつまだ英雄が4人控えているのだ。それでも勝てると思
ってるのか？」

そういうと魔術師たちの顔色が一気に悪くなる

私たち4人に全くかなわないのにとあと4人の英雄・・・

単純に計算しても倍の戦力が控えていると知れば当然の反応だ

翁も顔にはださないが流石にあせったのだろう

冷や汗をかき手が軽く震えている

「だが・・・私たちには君たちと争う理由が無いのでね

もし、こちらの望みを聞いてくれるのならば

これ以上の戦闘行為はしないと約束しよう」

「貴様等！！ここまでやっておいて今更何をいつている！！」

86

褐色の肌の男性が再び銃をこちらに向け激昂する

先ほども自分の行為によって戦闘が始まったと理解していないのか？

「やめるんじゃない！！ガンドルフィーニ君！！」

「ですが学園長！！

奴らをこのままn「やめろといったのが聞こえんのか！！」ぐ・

・・・」

銃を構えた男性を翁が諫める

流石に組織の長をしている人物だ。このあたりの状況判断はしっかりしている

「賢明な判断だな。」

あのままいけばまた戦闘になってしまふところだった

こちらとしてはできれば話し合いで解決したいところなのでね」

「本当に話し合いで解決したいのなら武器を下げてもらえんかね？
武器を持った状態で話し合いするのは物騒じゃろう」

その言葉にうなずき、サーヴァント陣のほうに眼で合図を送り武器をしまってもらう

なんかランサーがもう終わりかよと愚痴っていたが気にしない

「さて、こちらの武装は解いたぞ

次はそちらの武装を解いてもらおうか」

翁が合図をすると魔術師たち全員が杖や武器を下ろす
まずはこれで第一段階終了か・・・

「これでいいじゃろう。」

では、あらためて君たちの目的について聞きたいのじゃが？」

ふむ、いきなりそれか・・・

「私たちは気づいたらここにいた。故に目的などありはしない」

「その言葉・・・信じてもいいのじゃな」

「無論だ。この期に及んでまで嘘などつかんさ

そして先ほども言った要求のことだが・・・これは2つある
まず第一に私たちはこの世界のことをまったく知らない
故にこの世界についての情報を教えてもらいたい

第二に衣食住についてだ

異世界から来た私たちにはこの世界での住む場所などがない
衣と住については最低限の提供をしてもらいたい

まあ、食は別n「提供してもらうに決まってるでしょう。殺さ
れたいのですか？」

・・・できれば食についても提供してください、お願いします」

「む・・・それぐらいは構わんが、まさか本当にそれだけかね？」

「そちらからすれば我らは侵入者の身で要求してるようなものだ
からな

これを叶えてくれるかも危ういのにその上、無理な要求などす
るはずがなろう」

「君たちが魔帆良にすむ者たちを

危険なめに会わせぬと誓うのならばその要求を吞もう

だがそれが誓えぬのなら君たちをここにおらせる訳にはいかん」

「ああ、それで構わない。

もとからそんなつもりは全く無いからな。」

そんなことでこちらの要求をのんでくれるのならばありがたい限りだ

「なら、改めて自己紹介といこうかの

関東魔法協会・麻帆良学園 学園長、近衛近衛門じゃ

もう一度聞くがそちらの名は？もちろん本当のじゃぞ」

その言葉にしまったと思いつつサーヴァント陣の方をむく

「真名がばれてしまうが・・・構わないかね？」

自ら名乗った馬鹿共もいるが一応聞いておかねばなるまい

「私は構いませんよ。もうあちらにはバレてしまってるようですし」

「俺はもう名乗ってるしな」

「同じく」

「僕も構いません。大人になったらどうせ名乗っちゃうでしょうし」

「・・・・・・・・」

・・・肯定の意味としてうけとるぞ、バーサーカー

「私も構わないわ。もしかしたら宗一郎様を探す手がかりになるかもしれないし」

「もうここまで来て隠す意味も無いですし、私も構いません」

ここにいる全員の真名か・・・
名乗ったときの相手の反応が楽しみだな

「どうやら許可が下りたようだ。」

私の名はエミヤシロウという、これからよろしくたのむぞ翁よ」

「エミヤシロウか・・・聞いたことがない名じやのう」

「まあ、有名ではないからな」

その言葉に皮肉げに笑いながら答える

「して、二人ほどは聞いたような気もするのじゃが後ろの7人の名は？」

「ああ、翁からみて右からクーフリーン、アーサー・ペンドラゴン、佐々木小次郎

それにメドゥーサ、メディア、ヘラクレス、最後にギルガメッシュだ」

「ふお!？」

「「「「「はiiiiiiiiiiiiiii?」」」」」」

そう答えた瞬間、麻帆良の空に魔術師たちの絶叫が響き渡った

魔法使いと英雄たち（後書き）

ランサー「これでようやく一区切りか」

龍真「そうだね、これからは麻帆良での日々を書きつつ

オリジナルの話を入れながら学園祭偏まで持っていくつもりだ
けど」

アーチャー「オリジナルで面白い話を書けるかが問題だな」

龍真「う・・・そこは頑張ります」

龍真「では次回」「仕事決定!! 波乱の幕開け」お楽しみに

仕事決定!! 波乱の幕開け（前書き）

龍真「このたびネギま陣とサーヴァント陣の強さバランスについて多数の感想をいただいたのですが、それを基にしてこれからのバランスを

考えていこうと思っています

また強さに関しておかしいところがあれば指摘してくださいでは 「仕事決定!! 波乱の幕開け」 お楽しみください」

仕事決定!! 波乱の幕開け

Ⅰ SIDE ネギ Ⅰ

あの夜の騒動の翌日、僕は学園長に呼ばれて学園長室にむかっていたけど昨日の事はやはり夢ではないのかと思ってしまふ
まさか自分の目の前に神話の人物が登場するなんて思ってもみないだろう

しかもクーフーリンやアーサー王などの有名な人物たちだ

「エミヤシロウか・・・聞いたことがないけどあの人も英雄なのかな」

その中でただ一人聞いたことの無い名を名乗った長身の赤い弓兵
肌と髪の色は違うがエミヤシロウという名前からすれば日本人だろう

「あの人たちは異世界から来たって言ってたし・・・
もしかしたら向こうの世界だけで存在する英雄ってことかも」

あの人たちは過去に英雄と呼ばれた人たちだ
もしかしたら「立派な魔法使い」になるためのアドバイスとかもらえるかな・・・

そんな期待を胸に抱きつつ学園長室の扉を開いた

「失礼します。学園長・・・？」

扉を開け学園長室に入った瞬間、僕は思わず固まってしまった

・・・いや、この光景を見れば誰でも固まると思う

学園長室には昨日の英雄のみなさんが全員揃っていた

揃っているだけならばまだリーズしたりはしないだろう

英雄のみなさんは必死に笑いを堪えていて

紫の髪の女性、メディアさんだっけ？は制服姿のアーサー王を見ながらうっとりしている

そのアーサー王は凄まじい殺気を出し部屋の中央にたたずんでいる
そしてそのすぐ前には床に頭を擦り付け土下座している赤い弓兵と
学園長がいた

・・・え、なにこのカオス？

そのころ学園長室にはサーヴァント陣が集まっていた

「それで話とは何かね？学園長」

「ふむ、君たちの要求・・・衣食住についてじゃが
住まいについては麻帆良の郊外に大きめのログハウスを用意さ
せてもらった

部屋はちゃんと人数分あるし、食料もある程度用意しておいた
から安心していいぞい

次に衣・・・服についてじゃがこれは適当に2・3着見繕って
おいたからの」

「それなら十分すぎるほどだ。感謝する」

とは言ったが・・・セイバーのことを考えると食料が心配だな
これははやく仕事をさがさねば・・・アルバイトでもやるか

「と、忘れるところじゃった

収入を得たいのなら仕事を提供するがどうかね？」

「仕事だと？そんなことまでしてもらっていいのか？」

「うむ・・・魔帆良には時々、侵入者がくるのでな

英雄と呼ばれた貴殿たちにその者たちを追いつ返す役目をやって
もらいたいのじゃ

もちろん報酬ははずむぞい」

思ってもみない提案だ、これを呑まないわけにはいかないだろう

「ふむ・・・私はかまわないのだが、どうかね？」

翁の質問に答え、あとのサーヴァント陣にも答えを問う

「ようするに用心棒ってこつたろ。別にかまわねえよ
それに強い奴と戦えるかもしれねえしな」

ランサーの言葉に全員が頷く

「ほっほっほっ、では契約成立という事でいいかの
ではセイバー君、向こうでこの服に着替えてきてはくれんか」

学園長はそういうと、おそらく服が入っているであろう包みをセイ
バーに手渡す

「どういふことですコノエ、何故私が着替えねばならないのですか？」

「それは君の職業に関する服でな。一応サイズがあつてるか確認してはくれんか？」

「なるほど・・・戦闘装束というわけですか
わかりました。向こうの部屋で着替えてきましょう」

そういうとセイバーは包みを抱え、隣の部屋に行った

「どういふことだ？学園長」

「さっき言ったのは夜の仕事でな。夜の仕事は交代制じゃから
君たちには昼にも仕事をやってもらいたいのじゃよ」

そういうことか、妥当な判断だな
このメンバーは良くも悪くも目立つ
あまり昼に出歩いていたら不審に思われるかもしれぬ

「今あるのは広域指導員・・・麻帆良でのいざこざを収める仕事

があるのじゃが

なにか希望の職業があれば聞くが、何かあるかね？」

やりたい仕事か・・・

自分のやれることを考えると飲食店系が妥当だな

「私としてはできれば飲食店を営みたいのだが、可能かね？」

「ふむ・・・できるのならかまわんのじゃが

こちらとしてもあまりひどい物を出されると困る

あとでテストをしてからでもかまわんかね」

「くっ、ああいいだろう。その言葉必ず後悔させてみよう」

で、いろいろ話した結果

ランサー・バーサーカー・アサシンは広域指導員

ライダーとキャスターは図書館島とやらで働くことが決まった

ギルは私が飲食店を経営したときにウェイターをやるらしい

「ところで学園長、セイバーの仕事は何なのだね？」

衣装を用意したところをみるともう決まっているようだが」

「ああそれはn「コノエエエエエエエ！」」

轟音と共にドアが蹴り飛ばされ、その先に現れた者を視界にとらえる
するとその先には学校の制服姿に身を包んだセイバーがいた

・・・・・・は？

いや待て、何で制服？まさかセイバーの職業って「きやあああああ
あっ／／／／／／」

その姿を見た瞬間奇声をあげながらキャスターがセイバーにとびか
かった

「ちよっ！？／／／／ 何をするのですキャスター！！離れなさ
い！！！」

セイバーがキャスターを引き離そうとするがキャスターは離れない
うっとりとした表情をうかべながらセイバーに抱きついている

「学園長・・・まさかとは思うがセイバーの職業って・・・」

「麻帆良学園中等部に入学することじゃな」

その質問に凄く笑顔でサムズアップしながら答える学園長

「ふざけるな！！何故私が中学校になど通わねばならないのです
！！」

「セイバー君の歳だと昼に出歩くわけにもいかんじやろう」

・・・なるほど、それなら一応納得できるな

昼間からセイバーが出歩いていれば確実に警察に補導されるだろう

「なっ！！これでも私は大人です！！」

セイバーは否定するが制服姿では全く説得力が無い

「まあ、こればかりはしょうがないだろう。」

「な、ならばギルガメッシュはどうなのです！！
今の外見では私よりギルガメッシュの方が年下のはずだ！！」

「ああ、それなら大丈夫ですよ。学園長と今朝早くに交渉して僕は飛び級で外国の大学を卒業したってことになってますから」

「んなっ……」

いつの間に……手際がいいな、こいつ

「諦めろセイバー。もうどうにもならん」

「う……ですが……」

「君の外見では中学生が一番妥当だ。学園長の判断は正しい」

その言葉を言った瞬間、部屋の温度が下がった気がした

「ふふ……うふふ……ふはははははははははは」

いきなりセイバーが狂ったように笑い出す

それに体から黒いオーラが立ち上っているように見えるのは気のせいだろうか

その姿に先ほどまで抱きついてたキャスターも離れる

「あ……あの……セイバー……さん？」

「ああ……そうですね。私はどうせ幼児体型です
胸ありませんし中学生が妥当なんですよね。アーチャー？」

顔は笑っているが眼が笑っていない

あれは簡単に人を殺すことができる眼だ

そしてようやく先ほどの自分の失言に気づく

「ま、待てセイバー!! さっきのは言葉のあやで……」

「なんのことですか？ 私は全く気にしてませんよ

それよりエクスカリバーで後ろの者もろとも綺麗に消し去って
あげましょう」

「ふお!？」

……ダメだ、完全に本気だ

もうこうなってしまうとやることは一つしかないわけで

学園長の方を見ると同じ考えに至ったようだ

仕事決定!! 波乱の幕開け（後書き）

ランサー「おいおい途中で終わってんじゃないか」

龍真「少し長くなりそうだったので2話にきったんだけど変だったかな」

アサシン「そういえばアーチャーの姿が見えぬな」

龍真「この話での発言について話すとかで

セイバー含めた女性陣に先ほど連行されました」

アサシン・ランサー「……死んだな」

龍真「では次回」「仕事決定!! 波乱の幕開け？」 お楽しみに」

仕事決定!! 波乱の幕開け ?

Ⅰ SIDE ネギ ー

「・・・・・・・・・・はっ！」

あまりの状況に完全に固まってしまった
だけど自分が固まっていたとしても目の前の状況は進んでいくわけで

もうアーサー王が断罪の剣を振り下ろそうとしていた

ちょ!?! なんかもずいほど魔力が集中してる!?
止めなきゃ絶対巻き添えで自分も死ぬ!!

「へ、陛下!! 落ち着いてください!!」

剣を振り下ろす前になんとか飛びついて止めようとする
僕に気がついたのか少し殺気が少なくなったような気がした

「む、昨日の魔術師メイガスの子ではありませんか
邪魔をしないでください。私は目の前の悪を滅ぼさねばならぬ
のです」

「悪っていったい何やったんですか！学園長たちは！？」

「・・・何を？ああ、そうでしたね。とても許せることではない
もはやこの世全ての悪よりアンリマユも醜悪な存在だ」

その言葉と共に再び殺気があふれ出す

・・・あ、しまった地雷踏んだ

「ま、待てセイバー！！」

頼むから許してくれ！許してほしい！許してください！！」

「だが断る」

「ちょっ！？」

エミヤさんの謝罪もむなしく剣に魔力が集約されていく

その魔力はすさまじくこの部屋など簡単に吹き飛ぶだろう

ー 父さん、マスター、みなさんごめんなさい。僕はどうやらここ
までのようです

「少し落ち着いてください。セイバー」

「む、ライダー・・・」

人生を諦めかけたその時、綺麗な女の人の声がセイバーさんを止めた

「この場で宝具をつかえばどうなるかわかるでしょう
あそこまで謝っているのです。学園長さんをゆるしてやってください」

「う・・・」

女神だ・・・ここに女神がいる・・・

「ら、ライダー殿・・・」

「ライダー・・・」

学園長とエミヤさんも涙を流しながらライダーさんを見つめている
それに気づいたライダーさんはエミヤさんに微笑みー

「それにエクスカリバーだと一瞬だけしか苦しめないじゃないですか」

・・・・・・は？

「ライ・・・・ダー・・・・？」

「学園長にはいろいろお世話になっているので手出しできませんが、アーチャーは別です」

「えっ！？ちょ！？」

エミヤさんは顔が青ざめ、冷や汗をだらだら流している

「せっかく家を用意してくださっているのですから
そうですね・・・・とりあえず縛って動けなくしてから
気絶する直前まで殴り、水をかけて意識を覚醒させ
また気絶する直前まで殴って・・・・（以下無限ループ）
それぐらいしないと駄目でしょう？」

「ほう、それはいい考えですね。ライダー」

・・・悪魔だ、今まで女神だと思っていたのは悪魔だったんだ

「待て！！ライダー！！君は私に何か恨みでもあるのかね！？」

「いえ、女性の身体的特徴にたいして暴言を吐く輩を殺したいだけですよ？」

主に身長についてとか、身長についてとか。ああ、あと身長についてとか」

その女神のような微笑のまま悪魔は死刑宣告を下した

エミヤさんは床に手を突き、何か言葉をつぶやき続けている

「セ、セイバー君・・・ちょっといいかの？」

「なんですかコノエ、入学を取りやめる気になったのですか？」

「いや、君にはそのまま入学してもらいたい。

実はネギ君のクラスに転入してもらう予定なのじゃが

君には郊外学習などで麻帆良の外に出たときクラスの子達の護衛を頼みたいのじゃ

あのクラスにはいろいろ魔法関係者が多いからのう

いつ危険に巻き込まれるかも分からん。

それに護衛なら同じ生徒のほうが一緒におられる時間も長いか

らもう」

・・・そうか。

もう親書を渡した今、西からの刺客はないとしても
まだ木乃香さんを狙ってる人たちがいるかもしれない

刹那さんも護衛についてるのにそんなに心配してるなんて

やっぱり学園長、すぐ木乃香さんを大切におもっているんだな・
・

ちなみにネギがこんなことを思ってる間、学園長は頭の中で

「エミヤ君だけでもし、怒りが収まらんかったら次はワシかもしれん!!」

セイバー君の外見で入学させることを選んだと思われんように
ここは適当に理由をつけて誤魔化さねば・・・

こんなことを思ってたりました

「そういうことなら早く理由をいってください、コノエ。
それなら私には断る理由が無い。この仕事受けさせてもらいま
しょう」

「すまんかったな、ではネギ君。セイバー君を教室に案内してはくれぬかの」

「は、はい！では陛下、こちらに来ていただけますか？」

「ネギ・・・といいましたか？なぜ私を陛下と呼ぶのです」

「イギリス・・・ブリテンの人間にとって貴方は偉大な王ですから」

「そうですか・・・あなたはブリテンの出身なのですか
ですが、陛下というのはやめてもらいたい

もう私は貴方の国の王では無いのだ。私を呼ぶときはセイバー
でかまいませんよ」

「わかりました。ではセイバーさん教室に案内するのでついてきてください」

教室に向かうため、セイバーさんと共に学園長室を後にする
学園長室を出て扉を閉める瞬間、セイバーさんが気づいたように呟
いた

「ああ、アーチャー。夜になるまでに死ぬ覚悟をしておいてくださいね」

その言葉を言ったとき、セイバーさんは本当にいい笑顔をしていた

・・・エミヤさんご愁傷様です

そして扉を閉めたとき、部屋の向こうで赤い弓兵が倒れたような気がした

仕事決定!! 波乱の幕開け ? (後書き)

龍真「セイバーたちの名前どうしよう・・・」

ランサー「そのまま自己紹介したら大問題だしな」

アサシン「まあ、次の話をする前によく考えておくのだな」

龍真「では次回、「入学する騎士王」お楽しみに」

アーチャー「逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ」

ランサー「大丈夫か? あいつ」

龍真・アサシン「・・・」

入学する騎士王

― SIDE セイバー ―

「あ、ここですよ。セイバーさん」

学園長室から歩くこと数分、ようやく3-Aの教室にたどり着いた
・・・しかし、この学園は広いですね。士郎が通っていた学校の何
倍でしょう？

「じゃあ、僕が先に入って説明しますのでここで待っていてくだ
さい」

その言葉に頷きネギが入った後、教室から聞こえる声に耳を傾ける

「あ、あの皆さん。突然ですが今日は転校生を紹介します」

「え、転校生！？ちょっと朝倉、聞いてないよ！！」

「あー！！私としたことがこんなスクープ見逃すなんてー！！」

「ネギ君、その人男の子？それとも女の子？」

「女子中なんだから女にきまつてるでしょ」

ネギの言葉から一気に教室内が騒がしくなる
なるほど、なかなか元気がいい者たちが揃っているようですね

「じゃ、じゃあセイバーさん。入ってきてください」

では、呼ばれたことですし行きますか
扉を開け、教室の中に入る

「」「」「おおお」

「」「」「なっ!？」

そのまま歩き、教壇の前で止まり生徒たちのほうをむく

「え、えっとイギリスからの留学生で、今日からこの学校に通う・
・」

「アルトリア・P・セイバーです。これから1年間よろしく願います」

自分の名前を言った後、教室を見渡し一礼する

ちなみにアルトリア・P・セイバーというのは

一般人に名乗る時用に昨日サーヴァント陣で決めた名前だ

たとえばアーチャーだと「エミヤ・S・アーチャー」となっている

しかし、先ほどから妙に敵意の視線を送ってくる者が数名。

・・・昨日、私たちと戦った者たちですか。

特にアサシンと戦っていた剣士は排除するといわんばかりにこちらを睨んでくる

やれやれ、これは協力関係になるには苦勞しそうですね

「ではセイバーさん。

セイバーさんの席は一番後ろになります。授業が始まるので席についてください」

「わかりました」

・・・そういえば他のサーヴァントたちは上手くやっているのでしょうか

ふと、そんなことが気になったりした

Ⅰ SIDE 刹那 Ⅰ

転校生の紹介、そう言ってネギ先生の後に入ってきた女性を見て私は驚愕した

・・・あいつは昨日の！！

あのメンバーの中で佐々木小次郎とは違うもう一人の剣士
アーサー王・・・セイバーとよばれた女性が教室に入ってきた

竹刀袋に入っている夕風に手をかけ、いつでも出られるようにする
周りを見るとエヴァンジェリンさんや龍宮、楓たちも警戒していた

まずい。あの者とは直接戦っていないが・・・
ネギ先生たちとの戦いを見れば自分との実力差は歴然

あの佐々木小次郎と同等の力を持っていると考えていいだろう

自己紹介が終わり、奴は教室の中を進んでいき一番後ろの席に座る
お嬢様は絶対に私が守らねば・・・

そう決意を新たにし、最大限の警戒をしつつ授業を受けることにした

入学する騎士王（後書き）

龍真「えー、では今回はサーヴァント陣の名前を紹介します」

セイバー「私とアーチャーは本編で出ましたね」

龍真「基本 名前＋名前のイニシャル＋クラス名にしてるけどね
ヘラクレスとかメディアとか名前が区切れない場合は途中で
区切ってます」

セイバー「無理やりきってましたね。そういえば」

龍真「では名前一覧&次回予告

ランサーは 「クー・H・ランサー」

ライダーは 「メドゥー・S・ライダー」

ギルは 「ギル・G・アーチャー」

キャスターは 「メディ・A・キャスター」

バーサーカーは 「ヘラク・R・バーサーカー」

アサシンは 「小次郎・S・アサシン」

となっていますが、全員（小次郎・ギル以外）クラス名を呼
ばせているようです

では次回 「新しき広域指導員・恐怖の指導」 お楽しみに」

新しき広域指導員・恐怖の指導

Ⅰ SIDE タカミチ ー

「ではランサーさん達、今から広域指導員の仕事の説明&体験学習を行います」

「おう、さっさと始めてくれや」

今、僕の目の前にはアロハシャツとジーパンを着た男性・・・ランサーさんと

剣道の道着姿の小次郎さん、特注のシャツとジーンズを着たバーサーカーさんが立っている

その全員が新しい仕事に対してやる気を出していてぶっちゃけ威圧感が半端ない。

できることならばここから離れていたいぐらいだ
しかし学園長命令だしな・・・

「では広域指導員についての説明ですが・・・

ご覧の通りこの魔帆良はとても広い。おかげで人のいざこざも多いわけです

そしてその事態を解決する役割・・・

喧嘩の仲裁や犯罪行為をするものの取締りなどをする役割が広域指導員です」

ランサーさん達の方を確認すると納得したのか先に配っておいた見回りのルートを確認していた

「ようは自衛団・・・早い話暴れてる奴をとっちめりゃいいんだろ?」

「ああ・・・つまりはそういうことになりますね」

まあ、簡単な解釈だがあながち間違っではないだろう

「暴れる奴らを抑えんのは得意だからな。まかしとけ」

ものすごくいい笑顔でこちらに返事を送るランサーさん
見れば小次郎さん達も新しい仕事に興味があるのか少し上機嫌だ

これなら事件が起きればすぐに駆けつけるだろう
神話の英雄が犯罪の現場などにすぐ駆けつけてくれるなど
いや、全く頼もしい限りなのだが

「・・・魔帆良大の生徒たち大丈夫かな」

いつも喧嘩騒ぎになる生徒たちの無事を心の中で祈る

・・・いつものように喧嘩などしてたらあの三人にすぐさま取り押さえられるだろう

しかもクー・フリーン、佐々木小次郎、ヘラクレスといった超豪華メンバーだ

なんか麻帆良の魔法生徒の大半が争っていても普通に止められる気がしてきた

「頼むからみんな大人しくしていてくれよ・・・」

心の底からそんなことを願いつつ、見回りを開始した

― 十分後 ―

「なんだ！？やんのか、コラァ！！」

「先に喧嘩売ってきたのはそっちだろうが!!」

・・・まさか見回り開始十分後にこんなことになるとは

今現在、魔帆良大の格闘団体2つが大通りで一触即発の状況になっている

原因は・・・いつもの言い争いか

よりによってこの見回りルートのこの時間に問題を起こすなんて・
・

「おい、タカミチ。あいつら止めるのが俺らの仕事だよな」

「あ・・・ああ、確かにそうなんだが「よし、いくぞデメエラ」
ちよっ!?!」

止めようとしたがもう遅い。3人はいつのまにかこちらから
格闘団体たちの方へと一瞬の内に移動していた

「おう、にいちゃんたち。

勝負に水を差すようで悪いんだが・・・。ここはいつちよ引い
ちやくれないか?」

「ああ？なんだてめえ！！」

「なに生温いこと言ってやがんだ。こいつ？」

「ああ、まだ自己紹介がまだだったな。俺の名は クー・H・ラ
ンサー。」

今日からこの学校で広域指導員をやることになった。まあ、よ
ろしく頼むわ」

「そして私は小次郎・S・アサシンという。ちなみに後ろの奴は
バーサーカーだ」

「……………」

おおお、なんか生徒たちが引いてる。

まあ、いきなりバーサーカーさんを見たらね……

「ちっ！！広域指導員だど？それがどうした

てめえみたいな学園長の犬の言うことなんざ聞くk「ヒュオツ」

……」

「おい、今貴様……何と言った？」

ランサーさんが槍の代用で持っている長めの棒が相手の顔面近くを通る

その獰猛な獣のような目で殺気をこめ生徒を睨んでいた

「俺に対してその言葉はこういう意味か分かって言っているのか？」

「へ……あ……」

ランサーさんからでる殺気にもう生徒たちは腰が抜けて立てないでいた

そろそろ止めないとまずいかな……

「ランサーさん、まあその辺で……彼らも反省してるみたいですよ」

「ちっ……わあったよ。テメエらもうくだらねえことで喧嘩するんじゃないぞ」

「は……はひ……」

よし……これで大丈夫か。

生徒は先ほどの恐怖にまだ全員が立てないでいる

そういえば小次郎さん達は・・・

視線で小次郎さんを探す。

小次郎さんはバーサーカーさんと一緒に倒れた生徒たちの近くにいた

・・・一体何をしてるんだろう

「いいか。お主ら

今回は見逃すが・・・次は無いと思うがいい

もし次にこのような無駄な騒動を起こすというのなら・・・こ
うだ」

その言葉にバーサーカーさんが拳を地面に振り下ろす

その後、轟音と共に殴ったその地面に亀裂がはしった

それを見た生徒たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった

「・・・何してるんですか？小次郎さん」

「いやまた同じ事を繰り返すといかんでな、少々説教を・・・」

「あれは説教ではなく脅迫です!!」

目の前のぶっ飛んだ思考の持ち主にツツコミをいれる
はたしてこれから上手くやっていけるのだろうか・・・
その事だけが心配で頭に残った

新しき広域指導員・恐怖の指導（後書き）

龍真「今回はランサーたちの回、そして次回はアーチャー陣です」

アーチャー「ふっ、まっていたぞ」

龍真「では次回」「喫茶店の弓兵たち」 お楽しみに!!」

喫茶店の弓兵たち

↓ SIDE アーチャー ↓

体は剣で出来ている。

I am the bone of my
sword.

血潮は鉄で 心は硝子

Steel is my body, and fire
is my blood.

幾たびの戦場を越えて不敗。

I have created over a
thousand blades.

ただの一度も敗走はなく、

Unknown to Death.

ただの一度も理解されない。

Not known to Life.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

I have withstood pain to
create many weapons.

故に、生涯に意味はなく。

Yet, those hands will
never hold anything.

その体は、きっと剣で出来ていた。

So as I pray, unlimited
blade works.

「そうこの体は剣。ならば・・・目の前の敵、そのことごとくを
打倒しよう」

「いくぞ魔術師。我が料理に舌をうならせる準備は万端か？」

「・・・自信満々じゃのう」

そして弓兵の試食会^{たたかい}が始まった

今、アーチャーたちは喫茶店を開くためのテストを家庭科室で受けている

ちなみに審査員は学園長、しずな先生の2人だ

「・・・さて、始めるとするか」

メニューはもう決まっている。ならば後はそれを作ることに全力をそそぐのみ

先ほどスーパーで買った食材のなかから使うものを取り出す

まずは鍋に火をかけ、パスタをゆでる

その間にニンニク、タマネギをフライパンで炒めていく

「よし、次は・・・」

タマネギを炒め終えたらそこに海老やシメジなどを入れ炒めていく
それを白ワインと胡椒で味付けをして・・・と

ゆで終わったパスタをバターで炒め、先ほど作ったものを上に乗せる

これでシーフードパスタの完成だ

仕込みをする時間が無かったので簡単なものだが・・・まあ、問題はないだろう

「さあ、完成したぞ・・・どうしたのかね？」

「いや・・・アーチャー君よく意外性あるとか言われんかね？」

「なぜそれを!？」

確かに召喚された最初のころには凜にそんなことを言われまくって
いた気もするが・・・

学園長になぜそんな事が分かるのかひたすらに疑問だ

「そんなことより、早く食べないと折角の料理が冷めてしまうぞ」

「そうですね。いただきましょう学園長」

「ではそうするとしようかのう」

学園長とタカミチは Pasta をフォークで巻き取り口へと運んだ

そして口に入った瞬間 2 人は固まって目の前でにやついている赤い
弓兵を見た

「結果がどうなのか聞こうと思ったのだが・・・その必要は無い
ようだな」

「これなら文句は言えませんか、ですよ。学園長」

「・・・うむ、合格じゃ」

その言葉にアーチャーは当然だといわんばかりの表情をしている
目の前の弓兵が本当は英雄ではなく料理人ではないかと疑ってしま
う学園長たちであった

Ⅰ その頃 図書館島 ー

「しかしこんなに本があるとは・・・退屈しなくてすみそうです
」
♪

ライダーは目の前にある大量の本にすっかり上機嫌だ

「いや・・・いくらなんでもありすぎでしょう？」

それとは対称に目の前の本の量に困惑するキャスター

「ここも結構面白そうな所ですね・・・僕こっちの仕事に就けば

よかったかな？」

アーチャーの所にいたが、やること無かったのでこちらに來たギルガメッシュ

一見、ほのぼのと話しながら歩いている彼らだが・・・
彼らの歩いた後には図書館島の罫の残骸が転がっていた

・・・英雄三人仲良く図書館島地下を爆進中

喫茶店の弓兵たち（後書き）

龍真「さて・・・次の話はどうするかな」

アーチャー「まあ、これからの日々を描いていけばいいだろう」

龍真「でもアーチャー。このままこの一日が終わったらやばくない？
セイバー怒らせたまんまだよね。何か対策あるの？」

アーチャー「・・・・・・・・ダラダラ汗」

龍真「・・・何もないんかい。

では次回 「騎士王と少女たち」 お楽しみに」

騎士王と少女たち

― SIDE セイバー ―

「これで本日の授業は終了です」

『いよつしやあああああああ』

ネギが授業終了の合図をするとところどころから歓声があがる

授業というものには興味深い内容が色々ありましたね・・・
この世界での歴史についての話には特に惹かれました

そういえば図書館島という場所があると聞きましたが・・・
そこに行けばこの世界での私の話とかもいろいろ調べられそうですね
ライダーたちもそこで働くと聞いていましたし、今度行ってみるの
もいいでしょう

「ねえっ！セイバーさん」

「む？」

声をかけられ反応すると昨日の剣士とは違う黒髪をサイドテールにした少女がいた

「私に何か用ですか？ ええと・・・」

「裕奈だよ。明石裕奈」

「ではユウナと。それでどうかしたのですか？」

「うん。ちょっと相談なんだけどさ

セイバーさんってこの後なんか用事あったりする？」

この後ですか・・・

確か夜にコノエのところに集まるとは聞きましたが、他には特に予定はありませんでしたね

「いえ、夜までは特にありませんが」

「よかった。」

この後バイキングでセイバーさんの歓迎会やろうってなってるさ
セイバーさんよかったら参加してくれない？」

バイキング！？まさかシロウが前に言っていた

どれだけ料理を食べても値段は一定という遥か遠き理想郷^{アウアロン}

・・・ッ！！だがしかし今の私には軍資金が一銭も無い

このまま諦めるしかないのか！！！！

「・・・申し訳ありません

大変嬉しい申し出なのですが今私にはお金が・・・」

「ああ。それなら大丈夫だよ

セイバーさんは主役なんだしそのぐらいなら私たちがワリカン
して出すから」

「・・・！！！」

「ちょ！？セイバーさん何故に号泣してるの！？？」

このクラスの人たちはいい者たちばかりだ・・・

あまりの感動に涙を流してしまったが気にしない

だってシロウは何故かバイキングには一度も連れてってくれなかったし・・・

ー 当たり前だ・・・店が潰れるだろ) ボソ

なにか今シロウの声が聞こえた気がしましたが・・・気のせいでしょうか

「じ・・・じゃあOKってことでいいんだよね？
みんなー！セイバーさんOKだって」

「じゃあ、どこ行く？」

「こないだ行ったあそこでいいんじゃない？結構安いし」

「よし決まり。じゃあ、今から向かうぞ」

『おおー！！』

そうして荷物を持って、目的のバイキングへと向かう

街中を歩いている時もクラスの者たちから質問攻めにされるが・・・

こういう空気も悪くは無いものですね

・・・む？何やら後ろの方が騒がしい気が

「だからさっきからイヤやっていってるやないですか！！」

「いや、そんなこと言わないでさ。いいじゃんちよつと付き合ってくれたって」

「だから・・・」

なにやら男の集団ともめているようですね・・・
とりあえずユウナに状況を聞いてみる

「ユウナ。いったいどうしたのですか？」

「あ！セイバーさん実はカクカクシカジカで・・・」

「なるほど。アコがその男たちの一人にぶつかってしまい
その男たちがしつこく自分たちと遊びに行かないかと誘って
くると」

「ちょっと私クーちゃん呼んでくる」

ユウナは先に行った者を呼び戻そうかとしているようですが・・・

「その必要はありません。ユウナ

この程度の輩、私だけで十分です」

それを腕で制止し、アコと男たちの間に立つ

「アコは先ほどからイヤだと言っているでしょう

いいかげん諦めたらどうなのですか？」

「ん？なんだ君、この子の知り合い？

君もなかなか可愛いじゃん。よかったら君も一緒に来ない？」

・・・下衆が。

思わずエクスカリバーで斬りたくなってしまったが他にも被害があるので我慢する

※セイバーさんはただ今バイキングに行くのを邪魔されてものすごく不機嫌です

「お断りします。私たちはこれから約束があるので、
ですから誰かと遊びに行きたいのなら他をあたってください」

「ええ？ いいじゃん約束なんか
それより俺らともっと楽しいことしようよ」

・・・ビキビキビキ）怒

※せいばーさんはただ今（ry

「断るといったのが聞こえなかったのですか？
私たちはあなた方についていく気など全く無い。早々に立ち去
るがいい」

「ああ？ こっちが下手にでてりや偉そうに・・・
お前らはさっさと黙って俺らについてこりゃいいんだよ！！」

・・・うつとうしいですね。本当に消し去ってしまいましたようか

※セイバーs（ry

我慢も限界に達し、エクスカリバーを開放しかけたとき
何か遠くから地響きのようなものが聞こえた

「お、おい。なんだこの音？」

「しらねえよ。いったい何が起きてんだ!？」

地響きはだんだんとこちらに近づいてくる

「ちょ、ちょっといったい何がおきてんの!？」

困惑するユウナと男たち。そうしている間にも音はこちらに近づいてくる

やがて向こうの路地から音の元凶である3つの影が飛び出してきた

「うし、獲物発見!! 逃すんじゃないぞデメェら!!」

「委細承知!!」

「■■■■————!!」

ランサーのその声と共に
ランサー、バーサーカー、アサシンが殺気を振りまきながらこちら

に突撃してくる

・・・道ゆく人々が全員その場から立ち退いていますね

しかし三人はそんなことお構い無しで一直線にこちらに向かってくる

「ちょ!?! 何だよあれええええっ!?!」

「俺が知るかあああああっ!?!」

「とにかく逃げろおおおおおお!?!」

「「イヤアアアアアッ!?!」」

先ほども目の前にいた男たちは一目散に逃げ出そうとし
アコやユウナにいたってはその場に座り込んで悲鳴をあげていた

「逃すかあああああっ!?! 刺し穿つ死翔の槍!?!ゲイボルグ!?!! ※ただの棒で
す」

ランサーが高く飛び上がり、持っていた棒を投げる

あまり手ごたえが無い奴ばっかだな。そこで面白くするために問題ごとを起こしてる奴をどれだけ捕まえられるか三人で勝負してんだよ」

「では貴方たちは先ほどのようなことを他にも？」

「おう、今は全員16人ずつで同点ってとこだな

また向こうで騒ぎがあったみたいだからまた後でなセイバー」

そしてランサーたちは男たちを近くに縛り付け、騒ぎがあったという場所に飛んでいった

16人×3＝48人ですか・・・もうそんなに犠牲が

歴史に名の知れた英雄3人が全力で捕らえにくるなど、どんな罰ゲームだそれは

「セ、セイバーさんさっきの人たちと知り合いなん？」

「ええ、まあ・・・

それより今はバイキングです。はやく向かいましょうユウナ、アコ」

「あ・・・うん」

セイバーは上機嫌で裕奈たちとバイキングへ向かっていった

騎士王と少女たち（後書き）

龍真「・・・ランサーたち何やってんの？」

ランサー「いや、やり始めたら結構白熱してな？」

アサシン「何事も勝負事は感情が昂ぶるというものよ」

龍真「ところでタカミチは？一緒にいたんじゃないの？」

ランサー「ああ、タカミチは俺らについて来れなくてな

しかたねえから置いてきた」

・・・なんかランサーたちの後始末をしているタカミチが見えた気が

タカミチ「・・・ぐすん」

龍真「気を取り直して次回 「騎士王 I N バイキング」
お楽しみに」

騎士王 IN バイキング

I SIDE セイバー I

「・・・・・・・・・・。」

今、私はものすごく感動している

目の前に並ぶのはシチューやハンバーグなどの洋食に加え
右を見れば春巻きなどの中華、そして左には味噌汁やご飯といった
和食も見られる

・・・ああ、これこそが私の求めていたも理想郷か
アウアロン

その思いにひたすら涙を流す

「ちょ!?! また号泣!?!」

だって嬉しいんですよ・・・

なぜシロウは私を一度もバイキングに連れてきてくれなかったのか
しょうか

そう思うとシロウに対して怒りと恨みがこみ上げてきた

この感情はどうでしょうか・・・
ああ、そういえばアーチャーはシロウの未来ですしシロウの罪を償
わせましょうか・・・

「セイバーさんも早く」

「主役なんだからこっちこっち」

まあ、その断罪（という名のリンチ）は後にして・・・
今は目の前の理想郷^{アツアロン}に身を投じるとしましょう

「わかりました。すぐに行きます」

まずは何から食べましょうか・・・迷いますね

↓ SIDE アーチャー ↓

「・・・・・・・・ツ!？」

「む、どうしたのじゃ？アーチャー君」

「いや、今とてつもない悪寒がしたのだが・・・」

ある意味バーサーカーを相手にするより上の恐怖を感じたぞだが別段おかしいところは無い・・・いったい何だったのだろうか

「あ、学園長。それにエミヤさんもこんにちは」

「む、君は今朝の・・・」

「おお、ネギ君、どうしたのじゃいたい？」

確かセイバーの担任をしている子か
この歳で教師とは・・・労働基準法は大丈夫なのか

「いえ、歩いていたら学園長たちの姿が見えたので挨拶をと思ってそれよりお二人で何をしてらっしゃったんですか？」

「なに、エミヤ君が喫茶店を開くための簡単なテストをのう」

「エミヤさん喫茶店を開くんですか？」

「ああ、テストにも合格したし準備ができたしだい営業しようと思うその時はサービスするからぜひ来てくれたまえ、ネギ君」

「あ、はい！絶対に行きます」

では僕これから用事があるので失礼しますね」

「まだ仕事があるのか？その歳で大変だな」

私に何か手伝えることはあるかね？ 及ばずながら協力しよう」

「いえ、もう今日の仕事は終わってるんです」

セイバーさんの歓迎会をバイキングでやっているの

今からそこに向かってクラスの人々と合流するとこなんです

「よ」

•
•
•
•
•
•
○

「……すまないがネギ君。今、何と言ったのかね？」

「今からそこに向かってクラスのみんなと……」

「すまない。その前だ」

「もう今日の仕事は・・・」

「その後」

「セイバーさんの歓迎会をバイキングで・・・」

「バイキングだとおおおおおお！？」

「ひっ!？」

「いったい誰だ!!」

「セイバーをバイキングになんて連れて行ったのは!!!!」

「まずい!!このままではその店は確実に潰される!!」

「せっかくバイキングには絶対に行かせないようにしてたのに・・・」

「あ、あのエミヤさん・・・？」

「あ、アーチャー君そんな大声をだしていったいどうしたのかね？」

「そんな事を言っている場合ではない!!」

セイバーをバイキングになど連れて行ったら

どういうことになるのか理解していないのかあああっ!!」

「ど、どうしたのじゃ!! セイバー君がバイキングに行くと言っただけじゃろう?」

「黙れ!! 貴様たちは何も理解していない!!」

セイバーがバイキングなどに行ったら・・・

食料を全て食われて店が潰されるのが確定するんだぞ!!!!」

「な、何と・・・」

学園長やネギ君は困惑しているが今はそんなことにかまっている場合ではない

急がねばそこで働いている人たちの職が無くなってしまう!!

「ネギ君!! そのバイキングの場所はどこだ!？」

「え、この先の大通りを右に行って・・・」

「悪いが案内を頼む!!」

「へ? うわあああああああつ!？」

ネギ君を持ち上げ脇に抱えて全速力で疾走する
ドップラー効果をその場に残し、赤い弓兵と赤毛の少年は離れていった

「・・・わし、どうしたらいいんじやろ」

この場に残り残されてしまった学園長はそう呟いた

↓ SIDE セイバー ↓

「・・・」

「・・・セイバーさん、よくそんなに食べれるね」

もうこの場所は本当に天国のようだ・・・

セイバーたちが来ているこの店は結構大きく、

人がよく来るので料理の作ってある量も多大なのだが
その料理たちも騎士王の前に次々とたいらげられていく

そして目の前に取ってきた料理を全て食べ終わるとまた新たな料理
を取りに向かう

その光景を前にクラスメイトたちは絶句し、店の料理人たちは悲鳴
をあげていた

・・・このままではこの店は荒ぶる獅子の前に潰されてしまうだろう

そう、この場に正義の味方がこなければ

ー ヒュオッ

料理をとっているセイバーに石が迫る

「ッ!!」

セイバーはそれを避けると石を投げてきた人物を睨む

「・・・何のつもりだ。アーチャー」

「知れたことを・・・この店を君が食いつぶすのを防ぐつもりだ」

バイキング店の入り口に立たずむ赤い弓兵は

その店の料理人たちにとって間違いなく正義の味方だった

「貴様・・・この理想郷にまで押し込んできて私の食事を邪魔するのか」

「無論だ。君を野放しにはしておけない

正義の味方・・・その仕事を再開させてもらおうでしょう」

「私に勝てるのか？弓兵」

「それはこちらのセリフだぞ？騎士王」

両者は互いににらみ合ったまま動かない

一触即発の空気が流れる中、時だけが無常に過ぎていく

・・・しばらくしてその場の均衡は崩された。ある少女の一言によ

って

「あ、あのーセイバー・・・さん？」

「・・・何ですユウナ。

食事続けるため、私は今からあそこの弓兵を倒さねば」

「もうバイキングの時間終わっちゃったよ？」

「へ？」

思わず間の抜けた声がでてしまう

「だから・・・時間切れでもうバイキングは終了なんですけど」

目の前の言葉の意味が理解できない
バイキングが・・・理想郷が終わった？

まだ私は満足するほど食べていないのに・・・
まだあそこには食べていない料理があるというのに・・・

絶望がこの身を支配する中

視界の端で小さくガッツポーズをしている赤い弓兵の姿が見えた

・・・アア ソウカ・・・スベテハ アイツノ・・・

その事を頭が理解した瞬間、憎悪、嫌悪、怒り、悲しみ、絶望・・・
さまざまな感情が私の心を黒く染め上げた

「・・・チャ・・・」

もういい・・・

「・・・チャー・・・」

もう何もかもどうでもいい・・・

「ア・・・チャー・・・」

今この身がするべきことは唯一つ

「アーチャーツー!!」

目の前の弓兵を・・・

「アアアアアアアチャアアアアアッ!!!!!!!!!!」

確実に・・・殺す!!!!!!!!!!

↓ SIDE アーチャー ↓

セイバーから放出した凄まじい殺気に周りの一般人はほとんど気絶してしまった

ネギ君のクラスで立っていられる者は昨日戦っていた者たちだけか・
・
セイバーの殺気に当てられて全員震えながら武器を構えているが

そのおかげで一般人にセイバーが鎧を装着するところを見られていないのが僥倖か

だが何だこの殺気は・・・まさか食事を邪魔したぐらいでここまで怒るとは

若干セイバーが黒化してるような気が・・・

「セイバー……いったい君はこれから何をするつもりかね？」

「貴方を殺します」

即答か……やばいな

隣にいるネギ君はものすごく震えていて今にも崩れ落ちそうだった

「大丈夫だネギ君。セイバーの狙いはこの俺だ

だから俺がここから離ればセイバーは俺を追撃してくるはずだ
俺が離れた後……ここにいる人たちのこと……頼んだぞ」

「で、でも……それじゃエミヤさんはどうなるんですか……」

「答えは得た。大丈夫だよネギ君

俺もこれから頑張っていくから……」

さあ、間違えてもここで暴れないように目の前の騎士王にとどめを
刺すでしょう……

絶対に俺だけを追いかけてくるように

この身に死の運命しか待っていないなくてもせめてここにいる人たちが
助かるように

「セイバー・・・私は君に言いたいことがある」

足に魔力をためる

「どうしました、今更命乞いですか？」

充填完了。いつでも全速でこの場から逃げ出せる
さぁ・・・最後の仕事だ。目の前の人たちを救うため、自らに絶望
を与える言葉を紡ぐ

「セイバーの・・・」

「あ？」

「ツルペタ！幼児体型！！チビ！！！！貧乳！！！！！！」

その言葉にセイバーの動きが一瞬停止する

ー 今だ！！

「・・・・・・・・」ブチィッ！！

「ぬうおおおおお！！！！！」

・・・つかまったら確実に死ぬ！！

そう感じた私は恥じも外聞も脱ぎ捨てて必死に逃げつづけた

ーそして数十分後ー

「くっそ、どこ行きやがったあの野郎」

「逃げられたか・・・」

「・・・・・・・・。。。」

ランサーたちはあたりを見回し、やがて引き返していった

・・・何とか逃げられたか

傍にあった木に背中を預け、安堵の息を吐き眼を閉じる

もう動けないな・・・魔力も空っぽだ・・・

「頑張りましたねアーチャー・・・よくここまで」

「ああ・・・俺は頑張ったよな・・・」

「ええ・・・今はゆっくりと眠っていてください・・・永遠に」

「ああ・・・ゆっくり眠らせてもらおうでしょう・・・永遠に・・・
って永遠？」

その言葉に疑問を持ちゆっくりと瞼を開ける
するとエクスカリバーを持ったセイバーさんがものすごい笑顔をして
目の前にいた

「待・・・待て!! セイb・・・」

「ではアーチャー、おやすみなさい。永遠に」

その日、麻帆良の森に赤い弓兵の断末魔が響き渡ったという・・・

騎士王 IN バイキング（後書き）

龍真「アーチャーが・・・」

ランサー「・・・」合掌

龍真「・・・ハッ！で、では次回 「英雄たちの夜」 お楽しみに！！」

英雄たちの夜

今、サーヴァントたちは学園長に連れられ麻帆良郊外にあるログハウスの前に集まっていた

一応、学園長の護衛という事でエヴァやタカミチついでにネギも同伴している

「ここが今日から君たちの暮らす家じゃが・・・

今朝も説明したとおり、大きなログハウスでな。
部屋も人数分用意したから安心していいぞい」

「へえ、結構上等な家じゃねえか」

サーヴァント陣はログハウスを見ていろいろと感想を述べ合っていたが、ここでネギがあることに気がつく

「そういえばエミヤさんは・・・どうなったんですか？」

『・・・・・・・・・・。』

無言を貫くサーヴァント陣

学園長はその対応で全てを察し、心の中でアーチャーに黙祷をささ

げた

・・・ネギもどうしたでは無くどうなったと言った時点で薄々は感づいているのだろうか

「セイバー君もいないみたいだけどいったいどうs」

「言うなタカミチ君。それ以上言っではいかん」

タカミチがセイバーとアーチャーがいないことに疑問を抱きそれを口にしようとした瞬間

学園長が涙を流しながらその言葉を遮り沈黙が場を支配する

「・・・ごほん。では本題じゃが」

この沈黙に耐えられなかったのか、学園長がわざとらしく咳払いをし話題を変える

「夜の仕事・・・つまり麻帆良の警備員についてなのじゃが」

「それは今朝に言っていた仕事のことですか？学園長」

ライダーが学園長に対して質問をする

「うむ。その仕事なのじゃが・・・

麻帆良の警備員の仕事はある程度の人数でチームを組んで仕事を
するのじゃが

まだ君たちの事を完璧に信用している者はほとんどいないのでな
故に君たちだけに警備員を任せるといふわけにはいかんのじゃ
よ」

「とすると・・・麻帆良の者たちとチームを組めということですか？」

「聡明で助かるぞライダー君。

そのとおり、君たちには麻帆良の者たちとの信頼関係を築くため
こちらの者たちとチームを組んでもらいたいのじゃ」

「なるほど。ではこちらからは何人ほど仕事に向かわせればいい
のでしょうか」

「そうじゃな・・・一日につき1〜2人といったところかの
こちらからは2〜3人だして、4、5人ほどで仕事をしてもら
いたい

できれば今日から参加してもらいたいのじゃがいいかの？」

「ええ、では・・・誰が行きますか？」

「僕が行きますよ。今日一日暇でしたし」

ライダーの言葉に子ギルが手を上げて立候補する

「そうですか・・・ではギルガメッシュと・・・
家の整理とかの細かい仕事は無理そうですね
行ってきてくれますか？バーサーカー」

その言葉に狂戦士は静かに頷いた

「ではこちらからはエヴァと・・・タカミチ君もいいかね」

「ちっ、まあいいだろう」

「わかりました。」

かくして子ギルたちは警備をするために森へと向かっていった

Ⅰ 麻帆良郊外の森 Ⅰ

「あゝギルガメッシュ・・・君？」

「何ですか？タカミチさん」

「ギルガメッシュ君てもしかして昔、古代ウルクの王だったりしたかい？」

「ええ、そのギルガメッシュは確かに僕ですが・・・どうかしたんですか？」

その言葉にタカミチは苦笑いしながら答える

「いや・・・君は見たところまだネギ君とそう変わらないのに
古代ウルクの王だったって言うのがなかなか信じられなくてね」

「ああ・・・」

まあ、今のギルガメッシュの姿は子供なので誰もが抱く感想だろう
かと言って大人になどなってしまえば麻帆良とのいざこざが起きる
ことは眼に見えている

・・・大人版のことはできるだけ隠し通そうと誓うギルガメッシュ
であった

「おい、おしゃべりはそこまでだ。・・・来たぞ」

エヴァがそう告げると森の奥から鬼や悪魔といった
おそらく敵の術師が召喚したであろう異形がこちらに向かってきて
いた

「・・・・・・・・。」

無言で剣を構え、殺気を出すバーサーカー

ギルガメッシュも殺気をだしながらその真紅の瞳で異形を捕らえる

「鬼に悪魔ですか・・・ウォーミングアップには丁度いいですね

・・・開け王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）」

ギルガメッシュの背後の空間が歪み、数多の宝具がその姿をあらわすその光景にエヴァとタカミチは絶句し、敵の異形も身動きが出来ないでいた

「さて・・・死ぬ覚悟はできましたか？」

「■■■■■■——！！」

バーサーカーが咆哮をあげて突撃をすると共に戦いという名の蹂躪が始まった

・・・その後、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）とバーサーカーが暴れたせいで

麻帆良の森の一部が平地になってしまったということを付け足しておこう

一
オマケ
一

警備の仕事が終わった帰り道での出来事

「ちよっ!？フエイカー何でこんなところで血塗れに!？」

「エミヤ君!! しっ
かりするんだ!!!!」

「ええい、落ち着かんか貴様ら！！」

とにかく爺だ！！コノエコノ力をここに呼べえええええええ！

!

森で血塗れになって倒れているところを発見されたアーチャーは木の香たちの必死の治癒術で一命を取り留めたという・・・

英雄たちの夜（後書き）

龍真「今度からオリジナルの話に入っと思っています」

アーチャー「・・・また突然だな」

龍真「いきなり一週間ぐらい飛ぶけど気にしない!!」

アーチャー「おいこら!!!!!!」

龍真「では次回」「出張!! 予期せぬ出会い」「お楽しみに」

龍真「あ、ちなみにFateキャラが出演する予定です」

出張！！予期せぬ出会い

Ⅰ SIDE アーチャー Ⅰ

「出張？」

「ああ、ちよつと学園外に出かけなきゃいけないんだけど・・・
そこで何か厄介なことが起きてるらしくてね。君たちの誰かに
協力を頼みたいんだ」

サーヴァントたちが麻帆良に来てから1週間がたったある日
タカミチがサーヴァント家を訪れ、そんなことを頼んできた

「ふむ・・・別に構わないのだが。何人ほど必要なのだね？」

「もしもの時の事を考えてとりあえず2人かな？」

それ以上だと問題になるかもしれないし、1人だと万が一とい
う事もある」

2人か・・・ランサーたちは広域指導員と夜の警備、セイバーは学校
そしてライダーやキャスターは図書館島か

まだ喫茶店は店の準備が出来てないし・・・
私とギルガメッシュあたりが妥当か

「ギルガメッシュいるか？」

私がそう呼ぶとギルガメッシュが自分の部屋から出てきた

「何ですか、フェイカー？」

「実はカクカクシカジカでな」

ギルガメッシュに事情を説明し、一緒に行かないか聞いてみる

「なるほど。大体の事情は分かりましたけど・・・」

僕は図書館島を見て渡る約束をライダーたちとしてるんですよ
だれか他の人に頼んでくれませんか？」

速攻で断られた。だがもう1人を誰にするか・・・

ライダーとキャスターはギルガメッシュと行くそうなのでパス
セイバーは学校があるので論外

・・・とすると広域指導員組みの中から1人選ぶか

確かランサーとアサシンは今日と明日の警備メンバーに入っていたな・・・

とすると残りは自動的に1人

「バーサーカーか・・・まあ、大丈夫だろう」

バーサーカーを連れて行くと目立ってしまうのだが・・・
隠密行動というわけでは無さそうだしな

というわけで出張に行くメンバーが決まりその翌日・・・

北海道の空港に三人の男が降り立った

「やっと着いたね。じゃあ、行こうか。」

「ああ」

「・・・・・・・・」

タカミチはいつものスーツ、アーチャーは黒のポロシャツにジーンズ
バーサーカも特製の黒の革ジャンとジーンズに身を包んでいる

※バーサーカーの格好については

「史上最強の弟子ケンイチ」の逆鬼をイメージしてください

アーチャーだけでも目立つのにそこにバーサーカーもいる
となると周りの反応は決まってくるわけで・・・

「まー、あの人もすっごく大きいよ」

「しっ、指をさしちゃいけません。早く来なさい！」

「なんだあれ・・・」

「すげえ、隣の白髪の身長が普通に見える・・・」

などなどアーチャーたちは格好の注目の的となっていた

「飛行機から降りた瞬間にこれか・・・」

「ははは・・・まあ、しょうがないよ」

ちなみに、飛行機内でバーサーカーが1人で座るのに2座席を占領し

それでも足が通路にはみ出してしまったので
アーチャーたちが周りの人たちに謝罪をしていたのは余談である

「それでタカミチ、これからどうするのかね？」

「うーん。約束した相手方の関係者が迎えに来るそうなんだけどね
まだ時間が大分あるから・・・結構待たなくちゃいけないのかな
何か飲み物でも買ってくるよ。2人ともコーヒーでいいかい？」

「ああ、構わないよ。バーサーカーもそれでいいだろう？」

「・・・・・・・・。」コクッ

「了解したよ。じゃあここで待っていてくれ
なるべくすぐに戻るようにするから」

そう言うとタカミチはコーヒーをかうために再び空港の中に入って
いく

そしてここに残された弓兵と狂戦士はというと・・・

「・・・・・・・・。」

一言も発せずにただその場で立ち続けていた
気のせいかな？ 人がアーチャーたちの周りを避けているような気がする

だが、その空気に耐えられなくなったアーチャーが言葉を発した

「暇だな。バーサーカー」

「……………」コクッ

「……………」

・・・会話終了 記録5秒（笑）

アーチャーがその現状にため息をついていると
人ごみの中から人影が飛び出しアーチャーと衝突してしまった

「きゃっ!？」

「む?」

アーチャーは自分とぶつかり倒れてしまった女性に向かって手をさしのべる

「すまない。大丈夫かね？」

少々呆けてしまっていたようだ」

「あ！いえ、大丈夫です！！」

それに余所見をしていてぶつかったのはこっちですし・・・」

少女がアーチャーの手を掴んで立とうとすると、頭にかぶっていた帽子が落ちてしまった

アーチャーはその帽子を拾い、目の前の少女に手渡す

「ほら、帽子だ。落ちた・・・ぞ・・・！？」

帽子を拾いそれを少女に渡そうとしてその顔を見た瞬間
アーチャーは固まってしまい、驚愕に眼を見開いた

「・・・・・・・・！！！！！！」

横に立つ狂戦士も信じられないといった顔で眼を見開き固まっている

「あ・・・あの・・・どうかしたんですか？」

少女はアーチャーたちが固まったのを見て困惑している

その姿は雪原のような銀髪、透き通るような真紅の瞳

かつて赤き弓兵の家族だった、そして狂戦士が必ず守り抜くと誓った・・・

「イ、リヤ・・・？」

「え？ どうして私の名前を・・・」

雪の少女がそこにいた

出張!! 予期せぬ出会い（後書き）

龍真「というわけでイリヤさん登場です。

やっぱバーサーカーとエミヤのタッグといたらイリヤさんでしょう」

※結構、作者の主観ですが

龍真「ここからオリジナルの話に入っていくので

他サーヴァント陣の登場はしばらく無いですが」

サーヴァント陣（弓・狂以外）『待てコラ!!!!!!』

龍真「ここからアーチャーたちはどうなっていくのか

次回「平行世界の者たちとの出会い」お楽しみに！

」

平行世界の者たちとの出会い

「イ、リヤ……?」

「え? どうして私の名前を……まさか!？」

目の前のイリヤ? は私が名前を読んだことに驚いたのか
いきなり後ろに飛んで距離をとった……何もそこまで驚かなく
ても

まあ、見知らぬ人物が自分の名前を知っていたら驚くしな……い
ろんな意味で

「あなたたち……まさか刺客?」

「刺客? 刺客とは何のことだ

私たちはたった今、ここに到着したばかりなのだが……」

「あら、嘘が上手なのね。たった今、ここに到着したばかりの人が
なんで会ったばかりの私の名前を知っているのかしら?」

……何か完全に警戒されているな

いかんいかん、ひとまず相手側の状況を整理してみよう

空港で見知らぬ人にぶつかる

←

そして出会った事も無いそいつが自分の名前を知っている

←

ストーカー・もしくは変質者と考えられる

OK。完全に怪しい奴らだ

ていうかこのままでは警察を呼ばれるんじゃないだろうか

くっ!! 何かこの状況を打開する策は無いのか!?

そんなことを考えていると向こうからタカミチが戻ってきた

「ごめんごめん。自動販売機が思ったより遠くにあってさ・・・」

「タカミチ・・・／タカミチ?」

目の前の少女と声が重なる

「ん?」

眼をあわせて互いの顔を見る

「「知り合いなの？／＼か？」」

「話し合いながら移動すること数分

聞いた話を整理すると・・・

この北海道にはアインツベルンという魔術師（この世界では魔法使いか？）の名門の家が

存在していた。・・・この世界でもアインツベルンは有名なのか

そして目の前の少女はその家系の後継者で名前は
イリヤスフィール・V・A・エミヤというらしい

ちなみに何故イリヤの名前を知っていたのかは

タカミチに聞いていたということで納得してもらった

そしてここからが仕事内容なのだが

現在、アインツベルンは衰えていて生き残っているのはイリヤとその家族のみという

だが家系に代々受け継がれてきた魔術などを狙った魔術師たちにより近頃

自分たちの身の回りで不審な動きがみられる

イリヤの父親がその事について調べる間、イリヤたちの護衛を私たちに頼むらしい

護衛の対象はイリヤとその母と弟ということだが・・・弟・・・？

イリヤの父 ↓ 衛宮切嗣？の息子 ↓ アツルエ？何か嫌な予感しかない

「あゝ、イリヤスフィール？」

「イリヤでいいよ。これから護衛してもらうんだし

それにいちいちイリヤスフィールって言うのめんどくさいですよ？」

「・・・ではイリヤと

つかぬことをお聞きするが・・・君の弟の名前はなんと言うのかね？」

「士郎だよ。衛宮士郎！！

今10歳んだけどこれが可愛くてね・・・ってどうしたの？」

「なんでもない・・・なんでもないんだ・・・」

もうなんか嫌だ・・・

何で平行世界に来て一週間で自分と遭遇するんだよ
もはや幸運ランクEじゃすまないぞこれ

「でねでね。その士郎の事なんだけど・・・

こないだね、私が1人で疲れたって呟いてたのを聞いてたらし
くて

「じゃあ、俺がマッサージしてあげるよ」って言うてくれてね
その小さい手で一生懸命肩たたきとかしてくれて!!それから・

・・・」

イリヤは何かスイッチが入ってしまったらしく衛宮士郎の自慢を始
めている

・・・イリヤってこんな性格だっけか？

なんかものすごくブラコンになっている気が・・・

「それでね。それでね。去年の私の誕生日のことなんだけど・・・

」

「あゝ、すみませんがイリヤさんもうその辺で・・・」

タカミチが苦笑いしながらイリヤの話を止めようとする

正直助かった。自分の事ではないが正直恥ずかしくて死にそうだった

「えゝ、まだまだ話してない事たくさんあるのにゝ」

・・・もう勘弁してください

「んゝ、まあいっか。ちょうど迎えも来たみたいだし」

イリヤが見ている方を確認すると

イリヤが成長したような女性（おそらくアイリスフィールだろう）と二人のメイド

・・・やはり名前はセラとリズというらしい

そして10歳ほどの赤毛の少年・・・

この世界の衛宮士郎がこちらにむけて手を振っていた

なんだろう・・・軽く殺意が・・・

どうやらこの世界でも・・・たとえ年齢が違おうとも衛宮士郎は衛宮士郎らしい

「士郎ゝ!!!!!!」

イリヤが衛宮士郎に向かって走りだし、いきなり抱きしめた

「ちょ!?! 姉さん、恥ずかしいからやめてくれって!!」

「私がない間いい子にしてた? どこも怪我しなかった?」

「セラさんやリズさんがいるんだから大丈夫だって

それより後ろのでかい人たち何? 姉さんの知り合い?」

「初対面の相手にいきなりでかい人などと・・・

口の聞き方に気をつけろ。小僧」

「なんだと!?!」

そのままにらみ合う二人

イリヤとタカミチはアーチャーの態度の違いに啞然としている
セラとリズはアーチャーを睨みつけアイリスフィールはおろおろしている

「小僧って言うな!! 俺はもう10歳になったんだ!!」

「は！10歳だと？私から見たらまだまだ小僧だな
そんな事もわからなかったのか？
どうやらただの小僧ではなく馬鹿の小僧だったようだ」

「なっ！？馬鹿って言いやがったな！！
知ってるか？馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ！！！！」

「ほう、それはいい
その言葉を言った回数は私が一回、貴様が三回だ
どうやら私より貴様の方が馬鹿なようだな」

「なっ！？馬鹿っていった回数なんて関係な・・・」

「そら、これで私が2回、貴様が4回だ
いやいやどんどん下に落ちていくな。小僧」

「うう・・・お前この事覚えてろよ！！絶対後で仕返ししてやる
からな」

衛宮士郎が目じりに涙を浮かべこちらに向かって叫ぶがそんなことは関係ない

「断る。貴様のような小僧とのやり取りなど記憶に残しておきた

くも無い」

「・・・ッ」

衛宮士郎はアイリスフィールの元へと走って行き

そのスカートの端を掴みながら必死にこちらを睨むが・・・

「私の・・・勝ちだな」

それを見下し、笑いながら勝利宣言をした瞬間とうとう泣き出してしまった

タカミチは啞然としてるし・・・これはちょっと失敗したか・・・

セラとリズには何か文句言われそうだな

そう考えていると何かの殺気のようなものを感じた

急いでセラたちの方を確認するがその場で眼を閉じて立っているだけ
アイリスフィールもこちらを睨みはするが衛宮士郎をあやしている
周りにも別段、怪しいところは無い

とするとこの殺気は・・・

目線を下に移すとイリヤがいつの間にか私の正面に立っていた

「ねえ・・・あなた今何をしたの？」

その白銀の前髪に隠れて眼は見えない

「士郎に馬鹿って言った？私の可愛い士郎に・・・

私の士郎に・・・私の士郎に士郎に私の私の私の私の私の私の私の

私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の

私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の私の

その言葉と共に顔が上がり、前髪に隠れていた眼があらわになるが・

・・・完全に眼から光が消えてる

そうだ、この目は一週間前にセイバーガシテイタ・・・

その事を思い出した瞬間、魔力を纏った拳が自分の腹に突き刺さる

「が・・・は・・・」

思わず悶絶

「痛い？でも私の士郎が受けた痛みはもっと痛いんだよ？」

その言葉と共に連続で拳が突き出される

「これも士郎の分、これも士郎の分、これもこれもこれもこれもこれもこれも」

その拳を受けて私が倒れるが、イリヤはそれだけでは止まらない
仰向けに倒れた私の胸の上にまたがり、さらに拳を突き出してくる

「たえっ！あなたが！！泣いても！！殴ることをやめないっ
！！！！！！」

・・・もう何回殴られただろうか。

数え切れないぐらいの拳をこの身に受け、私の意識は闇へと沈んだ

余談なのだがこの件についてはアイリスフィールが認識阻害魔法を
発動したおかげで
この惨劇は一般人に見られていなかったらしい

平行世界の者たちとの出会い（後書き）

龍真「最初に言っておきますが

この小説のイリヤさんはブラコンです」

キャスター「性格変わりすぎじゃない？」

ランサー「アーチャーの奴、こないだからこんなんばっかしだな・・」

龍真「このイリヤの性格はもしイリヤがブラコンのヤンデレになったら

面白いかな」と思って書いてみました

ランサーへの答えについてはアーチャーだから仕方ありません」

アーチャー「キサマアアアアッ!!!!!!」怒

龍真「では次回」「闇に紛れし新たな敵」お楽しみに」

闇に紛れし新たな敵

「う．．．ここは．．．？」

「気がついたかい？ エミヤ」

私は気がつくともベッドの上に横になっていた
おそらくイリヤの攻撃によって気絶したところをタカミチたちに運
ばれたのだろう

「あら、目が覚めたの？」

「イ、イリヤ!？」

イリヤの姿が視界に入った瞬間、思わずベッドから飛び起きてその
場に正座する

「．．．もう怒ってないから大丈夫だよ？」

「あ、ああ．．．」

良かった・・・まだ怒ってたらどうしようかと・・・
私の態度に呆れながらしゃべるイリヤを見て横にいるタカミチは苦笑いしている

「それでここはどこなんだ？」

「私たちの使ってる家よ

森にあるから街まで少しかかるのが難点だけど・・・
結界も張ってあるから侵入者が来たりしたらすぐにわかるわ」

こちらの世界でのアインツベルン城みたいなものか
結界を張ったのは切嗣か・・・衛宮邸にも張ってあったしな

「ところでバーサーカーはどうしたんだ？」

「ああ、あの人なら士郎と母様についてもらってるわ
士郎も肩の上に乗せてもらったりするの気に入ってるみたいだし」

「ではエミヤも起きたところですし・・・
少しお話を伺いたいのですがよろしいですか？イリヤさん」

「ええ。別にいいわよ

あ、流石にアインツベルンの魔法について話せとかはダメだ
ど」

「いえ、聞きたいのは魔法に関してではなく護衛をするにあたっ
ての話です

ここ最近に不審な動きをするものからの襲撃があったと聞いた
のですが・・・」

「ああ、その話？確かに襲撃されたわよ

その時は父様が撃退したのだけれど・・・」

切嗣が撃退したのか・・・こちらでも魔術師殺しのようなことをや
っているんだろうか

「イリヤ、一つ聞きたいことがあるのだが」

「どうしたの？」

「その敵の特徴などはなにかわかっているのか？」

どのような手段で襲ってきたりなどがわかればこちらでも対策を
立てやすい」

私の言葉にイリヤはしばらく考えるようなそぶりを見せる
そして数秒ほどしてから私の質問に答えた

「・・・うゝん。とりあえず人間ではなかったわね
なんかこう・・・蛸とか烏賊みたいなのでなんか気持ち悪いの」

・・・蛸と烏賊か、おそらくは海洋系の魔物だろう
とすると何人かの召喚術師がいると考えるのが無難か

「その他には何か情報は無いのか？」

「そういえばその変な奴なんだけど・・・
なんか倒してもきりがなくて無限に地面からでてくる感じだっ
た」

「蘇生するのではなく、地面から新たに出て来るのか？」

「うん。あれは蘇生って感じじゃなかった
・・・と思う。父様もそう言ってたし」

「そうか・・・」

しばらくその魔物について考えていると
ふいに家の周りにある結界が揺らいだ気がした

「・・・イリヤ」

「ええ、わかってる」

「どうやら向こうから来てくれたみたいだね」

部屋のドアが開き衛宮士郎とアイリスフィール、それにバーサーカーが入ってくる

「私とバーサーカーで表の敵を迎え撃つ
タカミチはイリヤたちの護衛を頼んだぞ」

「まかせてくれ。指一本触れさせはしないさ」

「それは頼もしいな。・・・行くぞ、バーサーカー」

「・・・・・・・・。」コクッ

タカミチにイリヤたちの護衛をまかせ、迎撃のために玄関へと向かう
玄関の扉を開くと門の前に30体ほどの異形が並んでいるのが確認
できた

まるで蛸のような触手を持ちさらに口には鋭い牙があるグロテスク
な魔物だ

干将莫耶を投影してその異形に投げつける

凄まじいスピードで迫る剣に異形の体が打ち砕かれた

「・・・案外もろかったな・・・む!？」

打ち砕いたその異形の残骸から新たな異形が這い出してくる

・・・血を媒介にして召喚しているのか。だとしたら厄介だな。
血を触媒にして召喚することとは無限に召喚できるのと同じだ

これは術師を狙うしかないか・・・

「・・・バーサーカー、援護を頼む

術師の位置が特定するまで時間をかせいでくれ」

「■■■■————!!!!!!」

バーサーカーが異形の軍団に突撃し蹂躪する
いまのうちに……

周囲を見渡して召喚術師を探す

……いた!!

南西の方角、1 km先の森の中に本を持った男を発見した
周りを警戒して見渡すがそいつの他には誰もいない
おそらくその男1人でこの異形を召喚しているのだろう

「解せんな……」

ただの人間にしては異形を召喚する量が多すぎる

それにあの男が持っている本……異形が蘇生するとあの本が淡く
発光している

おそらくあの本の力でこの異形たちを召喚・制御しているのだろう

だがこれ以上……好きにはさせん!!

左手に漆黒の弓を投影し、捻れた歪な剣を右手に投影する

「――我が骨子は捻れ狂う」

剣に魔力が集中されていく

「……カラド偽・ボルグ螺旋剣!!!!!!」

弓から放たれた剣は男をめがけて飛んでいき、男の左腕を抉り取った

男がその場に倒れこむのと同時に周りにいた異形が消える

おそらくは男が本を手放したためだろう

足に強化をかけ、その男がいる場所に向かって走る

だが男はこちらに気がついたのか本を持ってどこかへと転移してしまった

「逃げられたか……」

しかしあの男……いったい何者だ

おそらくあの本は宝具である可能性が高い

バゼットのようには宝具を持つ人間かあるいは……私たちの知らないサーヴァントか……

「ひとまず戻るか……」

考えるのをひとまず中断し、ひとまずイリヤたちの所に戻ることにした

アーチャーが去った後、漆黒の森の中を一つの影が移動していた

「・・・なんだあいつらは・・・サーヴァントだと・・・
神め・・・そこまでして私の願いを拒みたいのか!!!!!!」

その影は吐き捨てるようにして言葉を呟きつづける

「もう少しです・・・もう少しであなたを・・・
忌々しいあの神の手からようやくあなたを解放することができ
る」

男が顔をあげる・・・その眼はどこまでも暗く染まっていた

「待っていてください・・・ジャンヌ」

最後にそう呟くとその影は漆黒の森の中へと消えていった

闇に紛れし新たな敵（後書き）

龍真「戦闘描写がやっぱり難しいな・・・」

アーチャー「次回からはシリアスだからな・・・（たぶん）
しっかり練習しておいた方がいいだろう」

龍真「そうだね・・・」

あ、それと相手の正体については
勘のいい人はもうお分かりになると思います」

龍真・アーチャー「「では次回」「帰還する正義の味方」」 お
楽しみに！！」

帰還する正義の味方

異形の撃退を終えた私とバーサーカーはイリヤたちの下に帰還する
その途中、タカミチと三人の他に中年の男が1人増えているのを確
認した

中肉中背でボサボサに伸ばされた髪
無精ひげを生やしたその男の顔は昔見たそれと同じで
あまりにも懐かしい顔がそこにあった

「やっぱりか・・・」

イリヤと士郎が抱きついていることからやはりこの世界でも彼女ら
の父親らしい
そこには爺さん・・・いや、平行世界の衛宮切嗣が立っていた

ある程度接近するとタカミチと切嗣がこちらに気づいた

― SIDE 切嗣 ―

「お、戻ってきたみたいですね。」

「そのようですね。彼らがタカミチさんが言っていた護衛の方ですか？」

「ええ、2人ともすごく腕の立つ・・・頼もしい仲間ですよ」

その言葉をタカミチさんが発したと同時に森の中から2人の人物が戻ってきた

1人目は巨人・・・といった言葉があう非常に背の高い人物だ
その肌は鉛色をしていて本当に人間なのかと疑ってしまう

そして2人目だが、こちらは騎士といった感じがする人物だった
白髪に褐色の肌・・・顔が東洋系などところを見ると東南アジア系の人物か？

その2人ともが凄まじい威圧感を持ってかなりの実力者という
事がうかがえる

「どうもはじめまして

僕はそこにいる子供たちの父であなただ方に護衛を依頼した衛宮切嗣といいます」

「はじめまして・・・になるのかな

私はエミヤ・S・アーチャー。後ろのはヘラク・R・バーサーカーという

これからよろしく頼むぞ・・・衛宮切嗣」

アーチャーにバーサーカー・・・弓兵に狂戦士か

その言葉から察するに赤い騎士が後衛、巨人が前衛のオーソドックスなチームだろう

「ええ、こちらこそよろしく

・・・しかし貴方もエミヤなんですね。なんだか親近感が沸きました」

その言葉に目の前の騎士は苦虫を踏み潰したような顔をしてそれを聞いたイリヤがこちらに近寄り話に参加してきた

「へー、やっぱり貴方の名前もエミヤって言うんだ

タカミチがエミヤって呼んでたから気になってただけけど・・・それにしてもエミヤ・S・アーチャーなんて変わった名前ね」

「別にいいだろう・・・

ああ、それと私を呼ぶときはアーチャー、もしくはエミヤとでも呼んでくれ

バーサーカーを呼ぶときもそのままバーサーカーと呼んでくれてかまわないよ」

「じゃあ、アーチャーって呼ぶね

エミヤだと私たちの名字とかぶっててややこしいし・・・
貴方の事もバーサーカーって呼んでいい？」

「・・・・・・・・。」コクッ

バーサーカーと呼ばれた巨人はイリヤの問いに静かに頷く

「じゃあこれからよろしくね。アーチャー、バーサーカー」

「では僕たちもそう呼ばせてもらってかまわないかな？」

「私たちはそれで別にかまわないぞ

さて、ひとまず家の中に入るとしよう。

北海道の夜は冷えるから・・・風邪でもひかれてしまったら
かなわん」

「そうだね・・・そういえば晩御飯もまだだったっけ？」

「そうね、今から準備するわ」

アイリたちと晩御飯の相談をしながら家の中に入っていく
とりあえずリビングに全員を集め、これからの対策と行動方針を決

めることにした

しばらくタカミチさんとこれからについて話していたのだが
隣の台所からは料理を作る音とすごくいい匂いがしてくる

イリヤと士郎はバーサーカーの肩や膝の上に乗ったりして遊んでいる
襲われる危険性を抜けばどこにでもある幸せな家庭といったところ
だろうか

・・・ただ一つの違和感を除いては

現在、台所にはイリヤが買ったフリフリのついたピンクのエプロン
をした人物が立っている

それが妻であるアイリや娘のイリヤならば違和感はない
だがアイリは僕の横に座っている。そしてイリヤもバーサーカーと
一緒にいる

では誰なのか？と聞かれれば士郎と僕、それにタカミチを抜けば残
るは自動的に1人・・・

「アイリスフィール、すまないがこの料理をそちらの机に運んで
くれないか？」

「わかりました。」

「・・・・・・・・・・。」

「なんだ切嗣。どうかしたのか？」

「・・・いや、何でもない」

「？」

何故だろう・・・
白髪マツチヨがピンクのフリフリエプロンを着ているのに違和感が
恐ろしいほどに無い

そもそも何でアーチャーが晩御飯をつくっているんだ？

その疑問の答えを得るには10分ほど前に戻らねばならない

1 10分前 1

「じゃあ、私は晩御飯作ってきますね」

その言葉と共にアイリが台所へ向かおうとするがそれをアーチャーが呼び止める

「ああ、アイリスフィール。何か手伝うことはあるかね？」

私が手伝えることならば出来る限り手伝おう。遠慮なく言ってくれ」

「何だ？アーチャーも料理できるのか？」

アーチャーの言った手伝うといった言葉。それに士郎が質問したのだが・・・

「口の利き方に気をつけろ・・・と言わなかったか小僧？」

「誰が小僧だ！俺は小僧なんかじゃないって言っただろ！！」

アーチャーの雰囲気がいきなり変わった事に僕は驚いた

とりあえず近くにいたイリヤに士郎と何か会ったのか聞いてみる事

にしたが・・・

事情を聞くと昼にも同じようなことで喧嘩になっていたようだ
イリヤに原因を聞いたのだが全くわからないらしい

その間にも2人の口論は激しさを増す

「俺だって料理ぐらい出来るんだぞ!! お前になんか絶対負けな
い!!!」

「ほう・・・よく言ったな小僧。

貴様ごときの腕で私の料理に勝てるのも思っているのか?」

「俺は毎日母さんと姉さんの手伝いをしてるんだ!

それにお前こそちゃんと料理が作れるのか? 全然作れそうに見
えないぞ!!!」

「その言葉・・・よく覚えておけ

アイリスフィール、台所を借りるぞ!!」

この小僧に身の程をわきまえさせてやる!!!!!!」

「え? あの・・・」

「やってみやがれ!!!」

・・・という訳で今に至る

アーチャーは何であんなに士郎と相性が悪いのだろう

・・・士郎の護衛はバーサーカーかタカミチさんに任せた方がいいかな

そんなことを考えているとアーチャーから声をかけられた

どうやら晩御飯が完成したらしい

イリヤ達にも声をかけ、台所に向かうと机の上にはとてもおいしそうな料理が並んでいた

「え、これ全部アーチャーが作ったの!？」

「ぐ・・・」

イリヤは驚き、士郎は悔しそうな顔をしている

「喫茶店を開くとは聞いていたけどまさかここまでとは・・・」

タカミチさんも驚いているようだ

しばらくして全員が席に着き、料理を食べ始める

「わ、この味噌汁おいしー!!」

「ま、負けた……」

「ほんと、すごくおいしい……」

試しに卵焼きを一つ箸で口に運ぶが……本当に美味しいけどなんだろう……何かどこかで食べたような……

イリヤ達も同じ疑問を持ったのか首を傾けて考え込んでいる

「ねえ……これ、士郎の味付けと似てるんじゃないかしら？」

「それだっ! さすが母様!!」

そうなのか? 試しにもう一つ卵焼きを食べてみるが

そう言われると士郎の味付けになんとなくだが似ている気がする

……何でアーチャーはあんなに冷や汗を流してるんだろう

「どうかしたのか？アーチャー」

「いや・・・何でもない・・・」

何でもないようには見えないのだが・・・

「・・・そういえばさ、士郎とアーチャーってどこか似てない？」

ふいにイリヤがしたその発言に士郎とアーチャーは固まった

「「どこがだ!!」」

そのすぐ後、見事に2人の声が同時に発せられた

「あはははは!! やっぱりそっくりだ」

「「そっくりじゃない!!」」

再び同時に発せられるその声にイリヤは大爆笑している
僕とアイリ、それにタカミチさんも必死で笑いを堪えている状態な

のだが
アーチャーと士郎は必死にイリヤに講義していた・・・そこまで嫌なのか

晩御飯も終わり、夜も遅いので各自部屋に向かって就寝することにした

見張りは僕とアーチャーたち三人との交代で行う予定だ

部屋に戻ってから寝るまでの間ずっと今日の晩御飯の時の事を考えていた

この襲撃が終わったらあんな時間がいつまでも続くのだと考えると頬が緩む

みんなが笑って暮らせるのだと・・・穏やかな日々が訪れるのだと

そうならばもう裏の仕事に関わる事は無くなっていくのだろう

それでいいんだ・・・魔法使い殺しは・・・もういないのだから

この襲撃を無事に切り抜けられることを願いながら僕は眠りについた

帰還する正義の味方（後書き）

龍真「今回は切嗣視点ですね

しかし切嗣・・・最後のは死亡フラグっぽい気が・・・」

アーチャー「確かに・・・」

龍真「次回はちょっとほのぼのした話を書くと思います

では次回「白銀の少女と赤い弓兵」お楽しみに!!」

白銀の少女と赤い弓兵

「買い物？」

「そ、ちょっと買いたい物があって
だけど護衛無しじゃ行っちゃダメって父様が」

・・・ふむ、あの襲撃の夜から2日たっても敵からの襲撃は無い
もし再び敵が襲撃してきたとしたら買い物というわけにもいくまい

「わかった。では私が君の買い物のエスコートすればいいのかな
？お嬢さん」

「フフツ、よろしく願うわね。騎士^{ナイト}さん？」

私とイリヤは切嗣に街へ行くと告げ、家を出た

― 街の商店街 ―

「さて・・・無事街にたどり着いた訳だが
これからどうするのかね？イリヤ」

「そんなにあせらないでよ

久々にゆっくり買い物できるんだから

あ！あのアクセサリーかわいいー！！」

自分の気に入った装飾品を見つけたのかイリヤはショーケースの中身を見ている

やれやれ・・・こうしていると本当に歳相応の少女だな
その微笑ましい姿に思わず頬が緩む

その後もイリヤと共に商店街をまわり、晩御飯の材料を買いながら
いろいろな店へ行った

その間も敵襲があるかもしれないので周りを警戒していたのだが
特にこれといって怪しいところは無かったためイリヤと共に買い物
を楽しんだ

「あゝ、楽しかったー！！」

もう日が暮れてきた頃に立ち寄った

街外れにある公園のベンチでイリヤは背中を伸ばしていた

「それはよかった。ところで目的の物は買えたのか？」

「ああ、いいのよ。別にそれは街に来た本当の目的とは違うしね」

「本当の目的？」

「うん。ちょっとアーチャーと話したいことがあって」

「私と話したいことがあるなら家で話せばいいだろう」

その言葉にイリヤは首を横に振って静かに口を開いた

「ちょっと家じゃ話にくいだよ

実は士郎についての事なんだけど・・・」

「小僧がどうした？」

私がそう聞き返すとイリヤはハァ〜とため息をつきながらこちらを
睨む

・・・何でため息？

「ため息などついて・・・どうかしたのか、イリヤ？」

「あのさ・・・なんでアーチャーって士郎の事ずっと小僧って呼ぶ訳？」

「別にいいだろう。第一あんなガキは小僧で十分だ」

「それよ!! どうしてそんなに士郎を毛嫌いしてるの？」

士郎だってアーチャーがそんな事言わなければ喧嘩にはならないわよ」

「む・・・」

自分でもそれはわかっているつもりなのだが・・・

どうも衛宮士郎を見るとなんかこう、すぐムカつくのだ

その事をイリヤに伝えるとすごくいい笑顔をしながらその場に正座させられた

さらにその後20分ほどの説教をくらった

・・・道ゆく人の視線が痛い

「これから士郎を呼ぶときは私みたいに名前前で呼ぶことそれからいちいち喧嘩腰にならない。いいわね？」

「だがことわりは？」・・・ハイ、ワカリマシタ・・・」

「ん♪よろしい！」

「・・・はあ、何故こんなこと・・・ッ!？」

「どうしたの？アーチャー」

どこからか視線を感じる・・・

周囲を見渡すと先ほどまでいた通行人達もどこかへ消えてしまっている

これはまさか・・・

トレース・オン

「解析開始」

地面に手を当てて魔術回路を起動させる

認識障害と防音の結界が公園全体とその周りの地域を覆うようにして張られている

「やられたな・・・」

おそらくは先日の奴だろう

・・・戦力が分散したところを狙ってきたか

「どうやら敵襲のようだ

イリヤ、絶対に私から離れるなよ」

「ッ！！・・・わかった」

干将莫耶を投影しイリヤを庇うように前に立つ

すると目の前に魔方阵が展開し、先日襲撃してきたものと同じ異形が地面から這い出てきた

「囲まれたか・・・」

異形は私とイリヤを取り囲むようにして召喚された

私1人でなら突破することは容易いのだが・・・ここにはイリヤもいる

さて・・・どうしたものか・・・

私はどうやってこの場を脱出するかを考えるが

敵はそんなことおかまいなしと言わんばかりに襲い掛かってくる

「ちいっ！！」

・・・これならもう血を媒介にして召喚はされまい

その代償に公園の地形が変わってしまったが・・・
とりあえずは一段落といったところか

「無事か、イリヤ」

「あ、うん・・・。／／／／／／／」

とりあえずイリヤを下に降ろすがやはり怖かったのだろうか
イリヤは顔を真っ赤に染め、私から目を逸らした

・・・おそらくは泣いてしまったのを見られたくないのだろう ※
鈍感スキル発動中

「ひとまず帰ろう。襲撃があったことを切嗣たちに報告せねば」

「そうだね・・・」

ベンチに置きっぱなしにしてあった買い物袋を手に取り切嗣たちが
待っている家へと向かう
そしてその帰路・・・

「ねえ、アーチャー」

「何かね？」

「・・・今日は・・・助けてくれてありがとうね」

なんだそんな事か・・・

「礼など言わなくていい

私は君の護衛だぞ？当然のことをしたまでだ」

「それでもいいの。私がお礼を言いたかったんだから

あ・・・それと今日のアーチャーまるで父様みたいでかつこよ
かったよ」

「私が・・・切嗣に？」

「うん。まるで正義の味方ヒーローみたいだった」

「正義の味方・・・か・・・」

俺はその夢を追いかけて一度はそれを諦めた
全ての人は救えないと知って・・・それでもできるかぎりの人を救
おうと戦ってきた

正義の味方・・・俺はその理想に近づけているんだろうか

その思考はイリヤがふいに俺の手を掴んできたことにより止められた

「ほら、アーチャー

はやく父様たちのところへ戻りましょ」

「ああ、そうだな・・・」

理想に近づけたかはまた後で考えよう・・・

今はこの温もりを守り抜く、それだけを誓えばそれでいい

「・・・イリヤ」

「何？」

いきなり呼び止めたのでイリヤは不思議そうにこちらを見ている

イリヤが完全にこちらを振り向くと

その手を握ったまま膝を地面につき誓いの言葉を紡ぐ

「誓いをここに、我が弓は汝と共にあり、我が運命は汝のために
イリヤ・・・我がアーチャーの名において必ず君を守ると誓お
う」

「アー・・・チャー・・・」

赤い弓兵は異なる世界で白銀の少女に誓いを立てた

そして新たな運命の歯車が回りだしていく・・・

ー その後のオマケ ー

「~~~~ッ!!!!!!」
／／／／／／／／

「どうしたイリヤへブッ!？」

誓いを立てたそのすぐ後

私は顔を真っ赤にしたイリヤになぜかいきなりビンタをくらった

「いきなり何をする!!」

「うるさい!! アーチャー少しは周りのことも考えてよね／＼／＼／＼!!!!」

「周り？」

その言葉にあたりを見回してみると商店街の人たちの注目の的となっていた

え？いつのまに商店街まで来てたんだ！？ひょっとして今の全部見られてたのか！？

「え？今のってプロポーズ？」

「あっちの背の高い人かっこいい、それに女の子の方もかわいし」

「にいちちゃんやるな。こんな商店街のど真ん中で」

「やあねえ、近頃の若い人は・・・」

なんか周りの人に好き放題言われているような・・・

だがそのすぐ後、道に行く女子高生から恐るべき一言が発せられた

「でもあの女の子まだ中学生くらいでしょ？」

ひょっとしてあの男の人ロリコンじゃあ・・・」

その言葉に子供連れで来ている人たちが自分から凄まじい速度ではなれ

周りからの視線が一気にきつくなったような気がした

「ち、ちがう・・・私は断じてロリコンじゃない!!」

私はなんとか自分の無実を証明しようと必死に説明する

だが説明のいかいもむなしく周りからは

あんなに必死になるなんて・・・やっぱり・・・などの声がものすごく聞こえる

「ままゝ、ロリコンってなあに？」

「しっ！マコちゃんあの男の人に近づいちゃダメ！！」

しかも子連れの方は小さい女の子を私の視界から必死に隠そうとする始末

・・・・・・・・・・・・・・・・もうなんか泣きたい　o r z

・・・その後イリヤは完全に落ち込んでいるアーチャーを何とか無事に家へと連れ帰った

その時のイリヤの顔はとても嬉しそうな表情をしていたのは余談である

白銀の少女と赤い弓兵（後書き）

龍真「なんかアーチャーがイリヤにフラグを立ててる気が・・・」

ランサー「あいつ絶対馬鹿だろ・・・」

龍真「さて・・・敵にいる「アイツ」一体いつ出そうかな・・・」

あ、ランサー予告お願い」

ランサー「おう、まかせろ

じゃあ次回「押し寄せる敵と目覚める狂戦士」お楽しみに！！」

押し寄せる敵と目覚める狂戦士

今、衛宮家のリビングには衛宮家全員と私達護衛メンバー全員が揃っている

理由は今日、異形の軍勢に襲われたことを切嗣たちに報告するためだ

「まさか昼にまでしかけてくるとはね・・・」

切嗣が苦虫を踏み潰したような顔をしながら静かに呟く

今日の襲撃と先日の襲撃には決定的に違う部分がある。それは一般人の存在だ

この家のように周りに人家がないのならばまだいい
だが今日襲われたのは街のすぐ近くにある公園だ。
いかに認識阻害などの結界が張ってあるとしても一般人に目撃される可能性は高い

この事から考えられることは2つ。

自分の発動した結界によほどの自信を持っているのか
またはもし一般人に目撃されようが関係ないと判断したのかのどちらかだろう

前者ならまだいい。だがもし後者、それもし一般人に見られたのならば

その一般人を排除するという考えを持っていたとしたら・・・

それは私達の近くにいる一般人にまで危害が及ぶことを意味する

「だがこれからどうする？」

昼の・・・しかもあんな場所で仕掛けてくるということは

敵は一般人も巻き込む事すらお構い無しといったところだぞ」

「そうだね・・・僕もまさかここまで躊躇しないような敵だとは思わなかった」

タカミチが私の言葉に苦い顔をしながら答える

「今のところ作戦を立てるとすれば

どうにかして敵を誘き出して全滅させる・・・ぐらいかな」

まあ、今のところはそれが妥当な作戦か・・・

敵の術師の本拠地がわからないのでは手の打ちようがあるまい

問題はどうやって敵を誘き出すかだが・・・！！

今、魔力の流れが一瞬歪んだ

結界がゆらいでないところを見るとまだ結界の外か・・・

「どうしたんだい？アーチャー」

いきなり立ち上がった私を変に思ったのか切嗣が聞いてくる

「切嗣・・・どうやら敵を誘き出す必要はなくなったようだ」

「・・・・・・・・！！どうやらそうみたいだね・・・」

どうやらこの家に徐々に近寄りとうとう結界の中に異形が入り込んできた

切嗣も結界が歪んだことによってようやく気づいたらしい

「アイリたちは僕とタカミチさんの傍に！！」

アーチャーたち！！異形の撃破を任せていいかい？」

「任せろ！行くぞバーサーカー」

「・・・・・・・・。」コクッ

タカミチと切嗣にイリヤたちの護衛をまかせて、バーサーカーと共に駆け出す

玄関から外に出ると、おびただしい数の異形の姿が目に入った

先日や昼に襲撃してきた数とは大違いだ
どうやら敵はここいらで勝負をつけたらしい

・・・まずいな、この数が相手では守りきれんぞ

たとえサーヴァントといえどもこの数の敵を相手に
いつまでも守りに徹することは危ういだろう。ならば・・・

「切嗣！イリヤ達を連れて外に来い！！」

敵の数が多すぎる、ここからひとまず逃げるぞ！！」

私の声に反応し、切嗣たちが家の中からでてきた
タカミチと切嗣は自らの視界に移る異形の数に冷や汗を流している

「気を引き締めろ！！来るぞ！！！！」

その瞬間、すさまじい数の異形がこちらに向かってくる

干将獊耶を投影してその異形と相対するが数が多すぎる
私が殺し損ねた異形は真っ直ぐにイリヤたちの方へと向かっていく

「ちっ！！」

切嗣は懷から銃を取り出し、異形に向けて打ち込み
タカミチも居合い拳で応戦するが砕かれた異形はその場で再度召喚
される

「くそ……きりが無いなこれは……」

タカミチと切嗣は徐々に異形にその距離を縮められていく
このままではまずいか・・・

「バーサーカー！切嗣たちの援護を頼む！」

バーサーカーが突撃しその咆哮と共に
繰り出された一撃は切嗣たちの目の前にいた異形を蹂躪し一瞬で殲滅した

だがそれだけでは狂戦士は止まらない
すぐ他の異形のほうを見るとその異形を再び蹂躪する

一方的に蹂躪を続けるその姿に切嗣たちは言葉を失っていた

周りの異形を片付けると狂戦士は顔をこちらに向け少女と視線を合

わせる

狂戦士が何を思っているのかは少女にはわからない
だが少女にはその瞳が「無事か？」と伝えているような気がした

「うん・・・大丈夫。・・・強いんだねバーサーカー」

少女が発したその言葉に狂戦士は動きを止めた

狂戦士の思考にノイズが走り、様々な映像が流れ込んでくる

自らの揺り籠の中にいた2匹の蛇を殺したこと

・・・なんだこれは

成長し、自分の血の分けた息子を殺して妻を自殺に追いやったこと

・・・そうか・・・これは・・・

刃物の通らない獅子や人喰い馬、それにケルベロスとの死闘・・・
そしてヒュドラの毒による死

そうだ・・・これは・・・英雄ヘラクレスの生涯

場面が切り替わり目の前には雪原と血に染まる少女

・・・この少女は誰だ

「*****は***強***だ***」

いったい何を言っているのだろう。雑音がひどくて聞き取れない

次に出た映像は隣で戦っていた赤い弓兵と青い騎士との戦い

「やっちゃえ・・・バーサーカー」

そうだ・・・私は聖杯戦争にサーヴァントと呼ばれバーサーカーとして現界していた

再び場面が切り替わり、無限の剣が荒野に乱立する世界で赤き弓兵と対峙する

「貴様が挑むは無限の剣、剣戟の極致・・・恐れずしてかかってこい」

赤い弓兵・・・アーチャーと戦って6度、命を散らせたこと

「その幻想もあなどれぬ・・・」

よもやただの一撃でこの身を7回も滅ぼされようとは・・・」

その後の青き騎士とそのマスターとの戦いで消滅したこと

そして何故か再び現界して今度こそ主を守り抜くと誓ったこと

・・・主とは・・・一体誰だ・・・

思い出すのは白銀の少女の姿

「バーサー＊＊は・・・強い＊だね・・・」

頭が鮮明になり、徐々に雑音が消えていく
そうだ・・・私は・・・主を必ず守ると誓った

雑音が完全に消え、頭の中に響くのは少女の声

「バーサーカーは・・・強いんだね・・・」

視界が切り替わり目の前に映し出されるのは異形の軍勢
今のはいったい・・・

「きゃあああああっ!!」

気がつくとも異形が少女のすぐ近くに迫っていた

『イリヤ（さん）！！／姉さん！！』

アーチャーたちが叫ぶ

あの位置からではアーチャーは間に合わない

残りの2人は自分達の近くににいる者を守ることです精一杯だ

異形は少女を襲い、その命を散らせようとしている

ならば自分が今すべきことは何なのか

自分は白銀の少女に誓いを立てた

故に今やるべきは目の前の少女を・・・ただ守り抜くだけだ

誓いを心に抱いて放つのは自らの宝具　—

「<sup>ナイン
ライブス</sup>射殺す百頭！！！！」

無骨な斧剣から繰り出されたその一撃は

少女に近づいた異形を粉碎し、その近くにいた異形もまとめて消し去った

「バーサーカー・・・狂化が解けたのか・・・？」

アーチャーは狂戦士を信じられないといった顔で見ていた
タカミチや切嗣達も同じ様な顔で、バーサーカーの事を見ている

そんな中、狂戦士は周りの異形を見つめ呟く

「名も知らぬ異形よ

たとえここが平行世界といえど

我が主を傷つけるのならば・・・容赦はしない」

その目には先ほどのような狂気ではなく、主を守るといった信念が映し出されていた

狂戦士は平行世界の地で大英雄へと戻り誓いを立てた

ギリシャの英雄が目覚め、戦いはさらに加速していく —

押し寄せる敵と目覚める狂戦士（後書き）

龍真「祝・バーサーカー覚醒！！」

サーヴァント陣「ワーーーーー！！」）パチパチパチ

アーチャー「しかし、なぜバーサーカーを覚醒させようと思ったのだ？」

龍真「ふっふっふっ。

これからの話のため・・・というのもあるけどね
バーサーカーを覚醒させた一番の理由は・・・」

アーチャー「・・・その理由は？」

龍真「ぶっちゃけ、全然しゃべらないので空気になりすぎになるからです」

サーヴァント陣『・・・・・・・・・・。』）苦笑

龍真「では次回 「黒幕出現！狂気の魔術師と人質」 お楽しみに！！」

黒幕出現！狂気の魔術師と人質

「名も知らぬ異形よ

たとえばここが平行世界といえど

我が主を傷つけるのならば・・・容赦はしない」

理性を取り戻した大英雄は異形の群れを前に剣を構える
その体からは凄まじい程の殺気が解き放たれていた

切嗣やタカミチたちはその姿に言葉を失ってしまっている

「バーサーカー！！狂化が解けたのか！？」

アーチャーがバーサーカーに問いかける

その問いにバーサーカーは静かにうなづいた

「・・・ああ、私は正気だ。アーチャーよ

だが、狂化から解けたことを喜んでいる場合ではないぞ」

その言葉にアーチャーも冷静さを取り戻し、目の前の異形を見据える

「・・・そうだったな。今はここを切り抜けることが先決だ」

赤き弓兵と大英雄は再び異形に突撃し、蹂躪する
そんな中、タカミチはあることを考えていた

あの異形は碎けばその場で血を媒介にして再生するといっていた
・・・ならその血もろとも吹き飛ばしてしまえば

「右手に魔力、左手に気・・・感卦法！・・・豪殺居合拳！！！！」

タカミチは感卦法を発動し、豪殺居合拳で異形を吹き飛ばす

・・・よし、思ったとおりだ！！

吹き飛ばされた異形はその吹き飛ばされていった場所で再生している
やはり血を媒介にして召喚しているため、異形の残骸がある場所で
復活している

ということは残骸ごと吹き飛ばせば、召喚する場所を遠ざけるわけだ

タカミチは豪殺居合拳を連続で繰り出し、次々と周りの異形を遠ざけている

切嗣も自分の銃で異形を打ち抜き、タカミチのための時間稼ぎをしていた

それにより異形はタカミチ達からどんどん遠ざかっていき
アーチャーとバーサーカーもそれを見て安心していた

そんな時、空中で爆発音が起きた

故にだろうか、全員がそれに気を取られて
足元に発動した魔方阵への対処が一瞬遅れてしまった

一番最初に気づいたのはアーチャーだった
アーチャーは出来る限りの声でタカミチたちに向かって叫ぶ

「タカミチ！！切嗣！！そこから今すぐ離れろおおおっ！！！！
」

「え・・・これは！？」

「ちいっ！！」

切嗣はイリヤ達をそこからすぐに離そうとする

「・・・遅いですねええええ！！」

だが、気づくのが遅かった
そこに現れた影は手を伸ばし士郎の頭を掴む

「がっ!?!」

『士郎!?!?!』

切嗣が銃をその影に構える

「おおっとお、この子供がどうなってもいいんですか? 早くその銃をおろしなさい。

さもなくば・・・この子の頭はどうなっても知りませんよ?」

「あああああ!?!」

その影は士郎の頭を持つ手に力をいれ、士郎は苦しみだし

それを見た切嗣は怒りを込めた目で相手を睨みながら銃を地面に捨てる

「ぐっ・・・」

「賢明な判断ですね。もう少しで頭を砕いてしまふところでしたよ。そちらのサーヴァントたちですよ。武器をしまいなさい」

「ちっ・・・」

アーチャーは舌打ちをして干将莫耶を消し、バーサーカーもその斧剣を地面に突き刺す
そんな中、アーチャーはその影に対して口を開いた

「サーヴァントを知っているということは貴様もサーヴァントか・
・・・」

「いかにも。私はキャスターのサーヴァントです
そういう貴方達は先ほどの言動を聞く限りアーチャーとバーサーカーですか」

目の前の影の正体・・・キャスターはアーチャーたちの方を見て答えた

「もう一つ聞こう、何故この者たちを襲う？」

もしこの世界で聖杯戦争が起きているとしてもこの者達は関係ないだろう」

「何を勘違いしているのかは知りませんが・・・
この世界では聖杯戦争などは起こっていません
そしてそんなことはどうでもいいのです
私の目的はただ一つ・・・その男、貴方ただ1人です」

そう言い終わるとキャスターは切嗣の方を睨みつける

「・・・僕が魔法使い殺しだった頃の恨みか？」

切嗣もその視線を睨み返し答える
だがキャスターは切嗣のその答えに狂ったような笑い声を上げる

「ククク・・・クハハハハハハハハハ！」

「何がおかしい!!」

「魔法使い殺し? そんなものは関係ない!!
貴様は我が愛しのジャンヌを忌まわしき神の呪縛に縛り付ける
存在!!」

故に!! 貴様をこの世から消し、我が手に愛しきジャンヌを取り戻すのだ!!」

「貴様・・・何を言っている！！ジャンヌとは誰のことだ！！」

切嗣はキャスターの言っている意味がわからず、キャスターを睨んでいる

だが、アーチャーは今のキャスターの言葉の意味を理解していた

数多く語り継がれる英雄の中で

ジャンヌを狂信し、神を恨み、異形を召喚する英雄といえば唯1人

「キャスター・・・貴様、もしやジルド・レエ元帥か」

「ほう・・・よくわかりましたね。アーチャー」

「な！？ジルド・レエ元帥だと！？」

「嘘・・・！？」

切嗣たちは私の言った名に驚愕していた

・・・だが解せん。切嗣はサーヴァントの召喚をしていない

それに向こうの世界でも召喚したサーヴァントはセイバーのはずだ
思考をめぐらしているとキャスターが切嗣に向かって怒りながら叫んでいた

「貴様、我がジャンヌをどこに隠した!？」

「ジャンヌの居場所など僕が知るわけが無いだろう!!」

「戯言を!!この子供がどうなってもいいのか!？」

キャスターは再び手に力を入れ、それに士郎が苦しみだす

「待ってくれ!本当に知らないんだ!!」

切嗣は慌ててキャスターに自分が本当に知らないことを証明しようとする

アーチャーはその間、ずっとあることを考えていた

このままではキャスターの思惑どおりになり全滅を待つだけだ
・・・ならば今ここでキャスターを殺してしまえばいいのではない
だろうか

そうした場合、人質に取られている士郎は確実に死ぬだろう

だがそれがどうした。1を捨てて9を救う、そんな事は今まで何回も繰り返してきた

しかも今人質になっているのは衛宮士郎だ。何を戸惑うことがある
もとはといえば衛宮士郎を殺すことがエミヤシロウの目的だったはず……

アーチャーの心の中ではそんな思考が黒く渦巻いていた

黒幕出現！狂気の魔術師と人質（後書き）

龍真「このごろネギま陣の出番がなくなってしまっただけに申し訳
ございません

はやめにこの話を終結してネギま陣をどんどん出していきたく
と思います

では次回 「仲間を穿つ黒き弓と白銀の少女の涙」 お
楽しみに」

閑話 槍兵と子供先生

「あゝ、暇だ」

つまらなそうな顔をしてそんな事を呟きながら

青き槍兵、クーフリーンは早朝から麻帆良の町を歩いていた

昨日の警備は小次郎とライダーの順番で自分は休みだった

さらに今日の広域指導員も学園長から交代制を命じられていて休みなのだ

無論、広域指導員が休みになったのはには訳がある

先日のアサシン、バーサーカーとの勝負が原因となり

3人で同時に仕事をする被害が大きくなるという学園長の判断によるものだ

そのおかげでランサーたちにはタカミチの「デスメガネ」のような二つ名までついている

内容はランサーが「青き猛犬」「俊足の星狼」

そしてアサシンが「神速の剣士」「ラスト・サムライ」

最後にバーサーカーが

「死の狂戦士」「あのおっさん人間じゃないだろ！いやマジで！！」
といったものである。・・・最後のは二つ名とは違うのかもしれないが

ちなみにランサーの「俊足の星狼」は

投げた棒が流星のようにターゲットに飛んでいくことからついている

ランサーはいつものアロハシャツにジーパンといったラフな服装で肩には釣り竿、右手にはバケツとその中にえさ箱を入れて持っている
どうやら麻帆良湖で釣りをするつもりらしい

湖で何が釣れるか・・・と考えながら歩いていると前方に赤毛の子供の姿が見えた

「あの坊主・・・セイバーとやりあった奴か？」

どうやらその子供は修行をしているようだ。何かの武術と思われる型を必死に練習している
ランサーは少しでも自分の暇を潰すため、その子供の方に向かっていった

「よう。早朝から修行たあ気合はいつてんなあ坊主」

「あ・・・ランサーさん。おはようございます」

ネギもランサーに気づき、挨拶を返す

「にしても・・・今の動きからすると中国拳法か。流派は何だ？」

「今のは八極拳ですね。あと他に八卦掌もならってるんです」

「そうか・・・」

ランサーはそれを聞くと少々考えるようなそぶりを見せる

「坊主、さっきの動きもう一度やってもらっていいか？」

「あ、はい。わかりました」

ネギはランサーに言われたとおり先程練習していた型をもう一度行う
それを見て、また考えるようなそぶりを見せるランサー

「あの・・・この型がどうかしたんですか？」

「いや、知り合いの使っている拳法に似てたもんでな
それよりその3発目に放ったけりだが・・・
もう少し重心を意識しろ。重心がずれて力が半減しちまってる」

「は、はい！」

ネギはランサーにアドバイスをもらえるなどとは思ってなかったのが驚いていたが
ランサーに言われたとおり今度は重心を意識しながら再び同じ型を行う

「ど、どうですか？」

「さっきよりはマシになったな

だが、他にも少しだが重心がずれているところがいくつかあった
次からは常に重心を意識しろ。

さっきも言ったが重心がずれると力が半減するからな」

「はい!!！」

ランサーの言葉にネギは嬉しそうに返事をする

やはり英雄とまで言われた者からアドバイスをもらえるのは嬉しい
のだろう

そんな中、ネギはランサーにある事を提案する

「組み手？俺とか？」

「はい！ランサーさんに・・・

克蘭の猛犬と呼ばれた英雄に今の僕の力がどこまで通用する
のか知りたいんです」

ネギの目にはしっかりとした信念が映し出されている

それを見たランサーは何も言わずに釣り竿を槍の代わりに構えた
そのランサーの姿に応えるようにネギも構えをとる

「行きます！！」

1 5分後 1

ランサーは余裕といった表情でバケツを手にとって釣りに行く準備
をしている

たいするネギはその場で仰向けになって転がっていた

「や・・・やっぱり・・・全然かなわないや・・・」

「たりめえだ。お前みたいな坊主にてこずったら
むしろこっちのプライドがズタズタになっちまうだろうが」

ネギはランサーに一撃も当てることが出来なかったものの
その表情は清々しく、何かが吹っ切れたような顔をしていた

そんなネギを見てランサーは微かに笑い、この場から立ち去ろうとする

「あ・・・あの、ランサーさん!!」

「何だ？坊主」

「今度また・・・組み手、してもらえますか？」

ネギの言葉にランサーは後ろを振り向きながら答える

「ああ、暇だったら・・・また組み手してやるよ」

ランサーは手を振りながらその場を去り、その後ネギは修行を再開した

この約束が後のネギの運命を大きく変えることとなるのだがその事はまだ誰も知らない

閑話 槍兵と子供先生（後書き）

龍真「えー、ネギま陣の出番を作るために急遽作ったこの話ですが時間が無くて短い話になってしまいました」

龍真「本編の続きもなるべく早く投稿したいと思っています
まだ文面的に至らないところが多くありますが
これからこの小説をよろしくお願いします」

仲間を穿つ黒き弓と白銀の少女の涙

・・・そうだ、10が救えぬならば1を切り捨てて9を救えばいい

その言葉が赤い弓兵の中で何度も繰り返される

衛宮士郎を殺す・・・もともとそれが俺の・・・英霊エミヤの目的ではないか

1を切り捨てて9を救え

もう何度この言葉が自分の中で繰り返されたのだろうか

そうだ・・・何を迷うことがある

心が黒く染まっていき、思考はキャスターを殺すただけに集中する
もしその過程で衛宮士郎が死んだとしても問題は無い

衛宮士郎が死ぬ代わりにここにいる他の全員の命が助かるのだから

頭の中に投影の設計図を組み立て、心が完全に黒く染まる直前

ー今日は助けてくれてありがとうだね

白銀の少女の声が頭の中に響き渡る

・・・そうだ・・・私は・・・

思考が澄み渡り、徐々に黒く染まった心が元に戻っていく

イリヤを守ると・・・誓ったではないか

思い起こすのは白銀の少女の姿

確かにここでキャスターを衛宮士郎ごと殺してしまえば他の人間は守れる

だがそれはイリヤの笑顔を消してしまう結果となる

それではイリヤを守ることはならない

切嗣とアイリスフィールも同様だ。家族を失って笑えるわけが無い

だがどうする。このままでは全滅は必至

どうにかしてキャスターから衛宮士郎を取り戻さねばならない

その頃キャスターはまだ切嗣にジャンヌの居場所はどこだと問い続けていた

「貴様ああああ！！この期に及んでまだ嘘をつくか！！」

「だから何度も知らないと言っているだろう！！」

キャスターが切嗣に問いかけ、その答えを知るべくも無い切嗣は知らないと答える

先程からこの状態で堂々巡りになってしまっているため

キャスターも埒があかないと判断したのか、質問の標的を切嗣から変更した

「もういい！貴様と話しても無意味だ！！」

・・・その銀髪の少女・・・ええ、そうあなたです」

「わ、わたし？」

キャスターは切嗣に怒鳴っていたその顔色をいきなり変え
穏やかな口調でイリヤに話しかける

「監視していた限り、貴方がその2人のマスターのようですね」

「え、マスターって・・・？」

キャスターの質問にイリヤは呆然としている

「とぼけなくてもいいでしょう。

この者たちの言動と行動・・・どこから見ても貴方をマスター
としている」

「「・・・・・・・・。」」

その言葉にアーチャーとバーサーカーは無言でキャスターを睨みつける

「話がそれましたが・・・貴方に一つお願いがあるのです
嫌と言うならばこちらもそれ相応の処置を取らせていただきますが・・・?」

「あああああああああ!!!!!」

キャスターは手に再び力を込め、士郎が苦しみだす様をイリヤに見せ付ける

「待って、やめて!! わたしに出来ることなら何でもするから! !!!!」

その光景に涙を流しながら叫ぶイリヤ

切嗣たちは打つ手の無い状況に必至に耐えようとしてその口元からは血が流れている

「ではお願いの内容を話します

そこにいる2人のサーヴァント・・・確かアーチャーとバーサーカーですか

令呪を使ってその2人に殺し合いをさせなさい」

「え・・・今なんて・・・？」

「聞こえなかったのですか？そこにいる2人に殺し合いをさせろと言ったのです」

『なっ・・・！？』

イリヤはその言葉に目を見開き

切嗣たちも言葉を失ってキャスターを見ている

「ふざけるな！！そんなこと・・・」

「今は貴方には質問をしていないのですが？」

キャスターの士郎を持っている手に徐々に力が入っていく

切嗣はキャスターに向かって反論しようとするが
士郎が苦しむのを見て最後まで反論することが出来なかった

そんな中、静かにアーチャーが口を開く

「・・・バーサーカー」

「・・・どうした」

バーサーカーがアーチャーの方を向き、視線を合わせる
そのアーチャーの目を見て、バーサーカーは全てを察したように静かに頷いた

それを見たアーチャーも無言で弓を投影する

「キヤスター・・・ようは私とバーサーカーどちらかが死ねばいいのだろう」

「ええ・・・まあ、そういうことになりますかね」

こちらを見て不気味に笑いながら答えるキヤスター
アーチャーはその答えを聞くと静かに眼を閉じて、弓をバーサーカーに向けながら呟く

「バーサーカー・・・悪いが私は死ぬわけにはいかない
小僧を助けるためというのは不本意だが・・・ここで死んでく

れ」

「何を言っているんだ!!!アーチャー!!!!!!」

アーチャーの言葉に一番に反応したのは切嗣だ
タカミチやアイリスフィールも切嗣の言葉に頷きながらアーチャー
に向かって叫ぶ

「そうだ!!何を考えているんだエミヤ!!」

「やめてください!!!アーチャーさん!!!!!!」

「外野は黙っていてもえませんかねえ」

そう言いながらキャスターは

腕の中の士郎をこれ見よがしに見せつけることで切嗣たちを黙らせる

そんな中、アーチャーは無言で弓に剣をつがえ、バースーカーに向
ける

バースーカーはそんなアーチャーを見ても無言でその場にたたずん
でいた

剣に魔力が集約されていき、その剣に込められた魔力に切嗣たちも
言葉を失っている

誰もが動けずその場に立っている中

1人だけバーサーカーを庇うように前に立ちふさがる者がいた

「・・・なにをしている、イリヤスフィール」

「なんで・・・なんでバーサーカーを殺そうとするの」

「私が依頼された護衛対象には小僧は入ってるが
バーサーカーは入っていないのでね」

「でも、バーサーカーは仲間なんですよ？
どうしてそんな簡単に殺すって言えるの!？」

イリヤが目じりに涙を溜めて必至に叫ぶ

「バーサーカーを殺さねば、その小僧が死ぬぞ？それでもいい
のか？」

「よくないよ!!!!!!」

でも・・・誰かを救うために誰かを殺すなんて間違ってる!!!」

白銀の少女は叫んだ。その頬を涙で濡らしながら
だが目の前の弓兵はその言葉を聞いても弓を構えたまま少女を睨む

「……そこをどけ、イリヤスフィール!!!!!!」

「知らない……絶対に知らない!!!!!!」

アーチャーは殺気を出しながら少女に怒鳴った
だが白銀の少女はそれでもどかず弓兵の前に立ちふさがる

「……すまない。主」

少女の後ろから低い声が響き、少女の体突き飛ばされた

イリヤは突然の衝撃に驚き、混乱したが
その衝撃がバーサーカーが自分を突き飛ばした事によるものだと知
るとすぐに正気に戻る

そしてその瞬間、アーチャーから膨大な魔力が流れ出す

「待って!!!アーチャー!!!!!!」

「カラド偽・螺旋剣!!!!!!」

アーチャーから放たれた剣はバーサーカーの上半身を消し飛ばした
その光景は少女達にどう見えていたのだろうか
アイリスフィールは目を逸らし、切嗣たちは怒り、その拳からは血
が滴り落ちている

アーチャーは投影した弓を消し、イリヤのほうを見る
呆然としていたイリヤはアーチャーの視線に気がつくと思ひに
戻り
アーチャーに詰め寄る

「・・・なんで？なんでバーサーカーを殺したの？」

「・・・・・・・・。」

少女は弓兵の服を掴み、泣きながら問いかける
だがアーチャーは無言のまま、少女の質問に答えようとはしない

「・・・なんで黙ってるの？」

ねえ、答えてよ・・・答えてよお！！！！！！」

弓兵の体を揺すりながら少女は叫んだ、なぜバーサーカーを殺した
のかと
その問いに弓兵は答えない。無言のまま・・・悲しそうな目で少女

「そうですねえ・・・アーチャー
今度は貴方に自害でもしてもらいましょうか」

「断る」

イリヤたちがキャスターに反論する前にアーチャーが答えた

「・・・なに？」

「断るといったのだ。聞こえなかったのかね？キャスター」

「貴様・・・この子供がどうなってもいいのか」

「無論だ。そんな小僧どうなるうか知ったことか」

アーチャーの言葉に切嗣たち、それにイリヤも怒りと驚愕の表情で
アーチャーを見る

「フフフフフ、いいでしょう」

ならばお望みどおりにこの子供の命を散らせてあげましょうか
あ！！！」

キャスターは素晴らしいながら士郎の頭を掴んでいる手を高く持ち上げる

「いや、散るのは貴様の命だ。キャスター」

アーチャーがそういった瞬間、士郎を持っているキャスターの腕が2つに分かれる
いや、正確には2つに分かれたのではない。斬撃によって真つ二つに切り裂かれたのだ

「ギヤアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

キャスターは腕を切られた痛みでその場でのた打ち回りながら
自らの腕を切り落とした人物を視界に捕らえるがその人物を見ると
驚愕して叫ぶ

「なっ・・・何故・・・貴様が！？」

そこにはキャスターから解放された士郎を抱きかかえる鉛色の巨人
がいた

『バーサーカー!?!』

「ありえぬ! ありえぬありえぬありえぬ!!
確かに貴様は先ほど死んだはず!! 何故まだ生きているのだ!」
「?」

キャスターは狂ったように叫び続け、バーサーカーを睨み続ける
その姿にアーチャーは口元を歪めながらキャスターの質問に答えた

「残念だったな。その者は十二の試練を乗り越えたのだ
故に・・・その試練を乗り越えた分は復活するのだよ。キャス
ター」

「じ・・・十二の試練だと・・・まさか・・・」

狼狽するキャスターにバーサーカーは剣を構え、アーチャーも弓を
向ける

「我が名・・・ヘラクレス
主を仇なす敵をことごとく排除する者なり」

「キャスターよ・・・死ぬ覚悟の準備は万端か?」

「あ、あああああ………」

武器を構える2人に魔力が集約されていく

「ナイン ライブズ射殺す百頭!!!!!!」

「カラド ボルグ偽・螺旋剣!!!!!!」

「ギャアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

そして断罪の一撃は放たれ、キャスターはこの世界から消滅して戦いは終わりを告げた

仲間を穿つ黒き弓と白銀の少女の涙（後書き）

龍真「やっと戦いを書き終わった・・・」

では次回「家族と弓兵と狂戦士」 お楽しみに」

閑話 キャラ設定 麻帆良のサーヴァント陣

アーチャー

我らが主役？でこの小説では主人公的立場にいるサーヴァント
基本皮肉屋でフラグ乱立スキル持ち

女性人からの攻撃率がダントツで一番高いかわいそうな人

ランサー

我らが兄貴。麻帆良の不良の間で恐れられている広域指導員四天王
の1人

面倒見が良く、あれからちよくちよくネギの組み手の相手をしていて
ネギパーティーとは二番目の顔見知り

思考が似ているためか、特に小太郎と仲がいいようだ

セイバー

腹ペコ騎士王。刹那などにはまだ少し警戒されているものの大分ク
ラスに馴染んできたようだ

よってネギパーティーとは1番の顔見知り。アスナや木乃香とは結構
仲良くなっている

アーチャーの手回しにより麻帆良各地にあるバイキング店から店に
来るのを禁止されている人

バーサーカー

誇り高き大英雄で広域指導員四天王の1人

狂化が解け、喋れるようになったので出番が増えるかもしれない人

キャスター

図書館島の職員の中で男子生徒に絶大な人気を誇っている

耳を隠すために普段は帽子を深くかぶっている。図書館島探検部メンバーと仲がいい

かわいいものに目がなく、実は結構人にコスプレとかさせるの好きだったりする

ライダー

キャスターと同様、男子生徒に絶大な人気を誇っている

図書館島探検部メンバーと仲が良く、図書館島を探検する際に付き添ったりしている

アサシン

侍。そして広域指導員四天王の1人

外見が完璧に侍なので麻帆良のラストサムライとして親しまれている
ちなみに茶道部に顔を出すことも多く、よくお茶をご馳走になっているらしい

ギル

今は子供姿でいる金ぴか王様。喫茶店が開くまで暇なので家で留守番をしていることが多い

ネギや小太郎と同じ歳ぐらいの外見なので結構仲がよかったりする
大人バージョンに少し戻ってみたいなとも思いつつ、自重している
健気な子

家族と弓兵と狂戦士

ー SIDE アーチャー ー

キャスターは消滅した後、周りにいた異形も全て消えて戦いは終結した

その後、皆で衛宮家に戻り今は全員リビングに集合していた

衛宮家は全員でソファーに座り、タカミチはその横の椅子に座っている

そして私とバーサーカーは今、リビングで正座し、手と頭を床にくく・・・

いわゆる土下座の形を取って拗ねた顔をしているイリヤの前に座っている

何で私達がこんな事をしているのかというと私がバーサーカーを射殺したことで

どうやら相当イリヤの機嫌を損ねてしまったらしい。全く許してくれる気配が無い

切嗣やタカミチも自業自得だといわんばかりにこちらを見てくるし・・・

「・・・いい加減機嫌を直してくれないかね？イリヤ」

「・・・やだ」

イリヤは一瞬だけ目を合わせ、そう答えるとすぐに顔を逸らしてしまった

どうやって機嫌を直そうか考えていると思わぬところから助け舟が出てきた

「ねえ、イリヤ。もうアーチャーさん達を許してあげたら？」

「でも母様・・・」

アイリスフィールはやさしい口調でイリヤを諭すように話しかける

「2人とも士郎を助けるためにやってくれた事なんだから・・・ね？」

「・・・はい」

どうやら説得できたようだ。イリヤはまだ拗ねているのだが

「切嗣さんたちもそれでいいかしら？」

その言葉に切嗣たちもやれやれといった感じで頷く
私とバーサーカーがその事に小さくガッツポーズをとっていると切
嗣の表情が変わる

「ところで・・・一つ質問があるのだが
サーヴァントとは何だ？そしてアーチャー・・・君達はいった
い何者なんだい？」

その口から出た言葉は予想通りのものだった
戦いの中であれだけサーヴァントという単語が出ていれば疑問に思
うのも当然か

・・・しょうがない、聖杯戦争にあまり触れないようにして説明す
るとしよう

「ある魔術的儀式により神話の英雄などを呼び出すことが出来る
この儀式で呼び出した英雄達の事を英霊・・・もしくはサーヴ
アントとよぶのだ

そしてサーヴァントには7つのクラス、つまり種類が存在する
まず三つ・・・セイバー、ランサー、アーチャーが三騎士と呼
ばれ

残りの四つにバーサーカー、ライダー、キャスター、アサシン
が存在している」

この程度ならば特に説明しても問題は無いだろう

サーヴァントが英雄という事実はバーサーカーの正体がバレてて隠しようが無いし……

「なるほど……さっきのジルド・レエ元帥がキャスター

そして君達はそのアーチャーとバーサーカーで

バーサーカーの正体はあのギリシャの英雄であるヘラクレスという訳か

だが解せないことがある。バーサーカーはどうしてイリヤを主と呼んだんだ？」

「そ、それは……」

言葉につまり、ふと視線をバーサーカーのほうに向けると

バーサーカーは冷や汗を滝のように流しながらガクガクと震えていた

「そしてもう一つ。バーサーカーの正体はわかった

だが、アーチャー。君が僕達に名乗った名前は偽名だけだ

そして君は英雄だろう……君の本名はいつたいなんていうんだ？」

……マズイ、非常にマズイ

どうする！？まさか衛宮士郎ですと言うわけにもいかないし！！

そもそもそんな事を言ったら正体がバレる可能性がめちゃくちゃ高いだろう！！

どうする！？どうするよ、俺！！

「ううん。別に何でもないよ？ シ・ロ・ウ」

空気が凍った。そして次の瞬間に切嗣とアイリスフィールはいきなり笑いだした

それを見た衛宮士郎はイリヤに向かって怒りながら叫び、私も同時にイリヤに質問する

「姉さん！！なんでそいつもシロウって呼ぶんだよ！！」

「小僧の言うとおりだ！！なぜ私をシロウと呼ぶのだ！！」

私と小僧の質問にイリヤは小悪魔のような笑みを浮かべながら答える

「えー、だって2人とも名前がシロウなんだもん。

いいじゃない、仲良しなんだからおんなじ名前で呼んでも」

「「よくない！！そして仲良しなんかじゃない！！！！」」

そして全く同じ言葉が完全に同時に発せられる

「やっぱり仲良しだ」

「「違う!!!!!!」」

その光景に切嗣たちは完全に爆笑し、バーサーカーまでもが必死に笑いを堪えている

― そして数分後 ―

切嗣たちはあれから笑い続けてやっと笑いが収まり

私と衛宮士郎は必死に反論し続けて息を切らしていた

「ごめんね」

だって2人の名前がたまたま同じだったからつい出来心で」

私達の前で舌を出しながら謝るイリヤ

どうやら衛宮士郎と私が同一人物という事はばれていないようだ

「・・・もういい

ところでタカミチ。切嗣たちの護衛はどうする？まだ続けるのか？」

その言葉にイリヤは下を俯きながら寂しそうに呟く

「そっか、シロウたちもう帰っちゃうんだ・・・」

イリヤの悲しそうな声に罪悪感を感じるがこればかりはしょうがない
・・・そしてその呼び方を変える気は無いのだな。イリヤ

キャスターが消滅してもその他にも切嗣たちを狙っている者たちが
いるかもしれない

故に私達が麻帆良に帰れば、またサーヴァントにという事は無いだ
ろうが

アインツベルンの魔術・・・いや魔法を狙う者たちに襲撃される可
能性がある

私はその事を切嗣たちに話しながらこれからの予定を決めようと提
案した

「ああ、エミヤ。その事なら心配ないよ」

「なぜだ？タカミチ」

「君達がイリヤさんに謝っていた間に切嗣さんと話し合っていた
んだけど

このまま北海道にいても襲撃が続くかもしれないからね

その事を学園長に連絡したら麻帆良で保護するという事にな

ったんだ」

「は？」

「だから、切嗣さんたちはこのまま僕らと一緒に麻帆良に向かうんだが・・・」

言葉の意味がいまいち理解できていない私の横からイリヤが嬉しそうに叫ぶ

「父様、それ本当!？」

「ああ、だからイリヤたちにも転校してもらうことになるんだが・・・
いいかい？」

「うん!だってそうすればアーチャーたちと一緒にいられるんですよ?」

「ああ、そうなるかな」

「やったー!!!!!!」

その後も転校のことでいろいろ話した後、イリヤは就寝のため士郎と一緒に2階へと向かう

切嗣たちと私たちもこれからの事を少し話してから各部屋に向かい就寝した

ー　そしてその日の三日後

「イリヤ、士郎、準備は出来たかい？」

「もう準備万端だよ。父さん」

麻帆良に向かう準備も整い、出発する日

切嗣たちは本当に微笑ましい家族の団欒といった感じで過ごしていた

そして空港に向かう途中、イリヤにこんな事を聞かれたのだ

「ねえ、シロウ。麻帆良ってどんなところなの？」

結局イリヤはいまだに私の事をシロウと呼んでいる

何故かと理由を聞いたところ、私のことは名前で呼びたいらしい・・・

・なんでさ？

「なんか・・・いろいろとすごいところだな」

イリヤの問いに私は苦笑いをしながら答える

ドラ●エの世界樹みたいなでかい木があるしな

・・・本当に名前が世界樹だったのには驚いたが

だが、そんなことより切嗣たちのことセイバーになんて話そう・・・

北の地での戦いを終え、弓兵たちは麻帆良へと帰還する
そこで出あった新たな運命を巻き込みながら

家族と弓兵と狂戦士（後書き）

龍真「次回からは物語の舞台が麻帆良に戻ります」

ランサー「よっしゃ、やっと本編での出番が回ってくるぜ」

セイバー「そうですね、そして次回予告は私が努めさせていただきます

次回「麻帆良への帰還 新たな出会い」 お楽しみに」

麻帆良への帰還 新たな出会い

Ⅰ SIDE アーチャー Ⅰ

今、私はイリヤと麻帆良の街を歩いてまわっている

「ねえねえ、シロウ！」

あっちに見える大きな木がシロウの言ってた世界樹？」

「ああ、そうだな。

向こうに見えるのが図書館島。そしてあれがイリヤの通う学校だ」

麻帆良の学園長室では今、切嗣と学園長がイリヤたちの入学について話している間に
私とイリヤ組、士郎とバーサーカー組に別れて麻帆良の探索をすることになったのだ

「へー、結構大きいんだ

それに気になるお店もいっぱいあるし・・・」

イリヤは目を輝かせながらいろいろな店の商品をチェックしていた
こういうところは女の子らしいな。だが気になるのは・・・

「なあ、イリヤ」

「なに？シロウ」

「何故君はさっきからずっと私の腕に抱きついているのだね？」

そう、さっきからイリヤは私の腕に抱きつきながら歩いているのだ別にイヤではないのだが・・・北海道でのトラウマが・・・

※アーチャーは北海道で商店街の皆様にロリコン疑惑をかけられました

「別にいいじゃない、それとも・・・イヤ・・・なの？」

ぐうつ！？上目遣い＋涙目でなんかものすごく罪悪感が！！

「い、いや別にイヤではないのだが・・・」

「よかった。私と腕組んで歩くのなんてイヤだって言われたらどうしようかと思ったもん」

「は・・・はは・・・」

その言葉に苦笑いを浮かべていると前を歩いている人物が目に入っ
た。あれは・・・

「ネギ君？」

「あ、エミヤさん

出張から帰ってきてたんですか？

えっと・・・そちらの方はいったい・・・？」

ネギ君も私たちに気づいてこちらに近づいてきた。

そういえば多分イリヤもネギ君のクラスに入るんだったよな・・・
一応紹介しておいた方がいいか

「ああ、今日の朝に麻帆良に着いてな

そしてネギ君。こっちの少女はイリヤといってな

多分ネギ君のクラスに転校することになると思うからよろしく
頼むぞ」

「あ、そうなんですか？

初めましてイリヤさん。僕は麻帆良中学校で3－A組の担任を
している

ネギ・スプリングフィールドっています」

「へえ、貴方がシロウが言ってた子供先生なんだ
こちらこそ初めまして。私はイリヤスフィール・V・A・エミ
ヤっていうの

長いからイリヤって呼んで。これからよろしくね先生♪」

ネギ君の言葉にイリヤも人懐っこい笑みで返す

「さて、ネギ君ところでセイバーを見なかったかね？」

まずはセイバーに切嗣たちの事を説明しないとな・・・

状況を教えてない状態で切嗣たちと会ったらいろいろとめんどくさい
事になりそうだし

「セイバーさんですか？」

今の時間帯ならマスターの別荘にいますけど・・・
僕もこれから行くのでエミヤさんも一緒に行きますか？」

「マスターってのは確かエヴァンジェリンのことだったな
別荘というのはいったいどこにあるのだね？セイバーもそこに
いるのか？」

その後、ネギ君と別荘のこと、何故セイバーがそこにいるのかなども含めて話し合った

ネギ君はランサーに修行で組み手の相手になってもらっているらしいそしてそこにセイバーも自分の特訓のついでに参加している・・・ということだ

でも1時間が1日とは・・・

あちらの世界だったら魔法扱いにでもなるんじゃないか？

その後も話しながら歩いているとバーサーカーたちと合流しバーサーカーたちも一緒に別荘へと向かうことになった

歳が近いのが幸いしたのかネギ君は衛宮士郎と話し込んでいる

「ふふっ、士郎ったらすごく楽しそう」

どうやらイリヤはそんな2人の姿を見てすごくご機嫌のようだそして、そのままイリヤは私のほうを振り向く

「あ、それでね。シロウ・・・

さっき言ってたセイバーってもしかして女の人？」

凄くいい笑顔で質問をしてくるイリヤ

だが、その後ろには黒いオーラが見え隠れしている

・・・なんでさ？

「ああ、セイバーは女性だが・・・」

「へえ、そうなんだ」

黒いオーラが見え隠れするだけではなく、凄まじいほどに溢れだしてきた

しかもイリヤの表情は変わらずに

凄くいい笑顔をしているのだが声に全く感情がこもっていない

「それで？シロウから見ても可愛い子なの？」

「ああ、普通に可愛いとは思うぞ・・・ってイリヤさん!？」

なんか腕がミシミシ言ってるんだけどおおお!？」

「え、なに？セイバーさん可愛いんですよ？」

今から会いに行くんですよ？私じゃなくてセイバーさんのがいんですよ？」

黒いオーラを噴出しながら笑顔で私の腕を締め付けているイリヤその手に込められた力は全く緩められる気配がない

・・・ヤダ、ナニコレコワイ

私はすぐに視線をバーサーカーたちに向け、助けを求める

「私は何も見ていないし何も聞こえない」

バーサーカーさん！？絶対に聞こえてるよね！？

それに視線を合わせた時点で確実に見てるだろうが！！

ええい、次だ！！子供2人組！！！！

「あ、あのEm・・・」

「やめろ、ネギ。死にたくなかったら

あの状態の姉さんに近づかない方がいい・・・」

ネギ君がこちらに話しかけようとしたが衛宮士郎がそれを引き止める
それを聞いたネギ君も視線をすぐに逸らしてしまった

・・・最後の希望が・・・終わった・・・

↓ SIDE ネギ ↓

エミヤさん・・・ごめんなさい
僕は心の中でエミヤさんに謝り続けた

「そういやさ、ネギ」

隣を歩いている士郎君に声をかけられる

「どうしたの？士郎君」

「今から行くところにさっき話してた小太郎って奴もいるのか？」

小太郎君か・・・どうだろう？

ランサーさんと組み手をする時は結構いることが多いから今日もいるのかな？

修行をしていて思ったのだがランサーさんと小太郎君は結構仲がいい
2人とも性格が似ているので仲のいい兄弟といった感じだ

そんな訳で小太郎君もランサーさんとよく組み手をしている

「うん。今日はランサーさんもいるし、多分いると思うよ」

その言葉に士郎君は小さくガッツポーズをする
理由を聞いてみたところ、やっぱり同年代の友達ができるのが嬉しいらしい

そういえば僕も同年代の友達少ないな・・・
魔法学校ではアーニャだけだし、こっちにきてからは小太郎君と士郎君の2人

合計3人しか同年代の友達がない事に気がつくとき少しへこんでしまった

そんなこんなでしばらく士郎君と話していて
ようやくマスターの家に辿り着き、ドアを開けるとそこにはランサーさんがいた

「よう、坊主。遅かったn・・・!?!」

ランサーさんはこっちを向くと目を見開いたまま固まってしまっ

「どうかしたんですか？ランサーさん」

「セイバーのマスター!?!」

それにバーサーカーのマスターの嬢ちゃんじゃねえか!!

なんでこんなところにいんだ!?!

まさかお前らも気づいたらこっちにいたって言うんじゃないだろうな!!」

ランサーさんは慌てた様子でこちらに詰め寄ってくる

士郎君はその声に驚き、イリヤさんも正気に戻ってランサーさんの方を見ている

・・・ようやく解放されたのでエミヤさんがすごく嬉しそうだ

必死に詰め寄るランサーさんをバーサーカーさんが止める

「いや、この少年達はセイバーや私のマスターとは別人だ

出張先で知り合った者たちでな。こんどから麻帆良に住む事になった

故にセイバーや他のサーヴァントたちにも説明をするためここに連れてきたのだ」

ランサーさんに状況を説明するバーサーカーさん

マスターってどういうことなんだろう？

・・・それにしてもバーサーカーさんが喋っているところ見たの初めてだな

「ああ・・・すまねえ、ちょっと混乱しちゃってたみてえだ

止めてくれてありがとな。バーサーk・・・・・・・・・・

・?????」

「む?どうしたのだランサー

そんなありえない物を見たような顔をして」

ランサーさんは近くの壁に向かって歩くと、無言のままその壁に両手をつく

するといきなり頭をおもいつき壁に連続でぶつけ始めた

『ええええええええええええ！？』

「なんでだ！？なんで俺はまだ夢をみてんだ！？

まだ寝てんのか俺！！だとしたら早く覚めろおおおおお

！！！！！！」

ランサーさんは叫びながら頭を壁にぶつけ続ける

「待て！！落ち着けランサー！！これは夢ではない！！」

「そうだ！！ランサーよ、落ち着くのだ！！！！」

エミヤさんとバーサーカーさんが必死にランサーさんを止めようとする

「嘘だ！！夢じゃないならなんでバーサーカーが喋る！！」

なんでセイバーんこの坊主とバーサーカーのマスターの嬢ちゃんがいる!!

あれか!?!俺らのマスターたちもこっちに来てんじやないだろうな!?!

だとしたらカレンに言峰が・・・激辛麻婆がああああ!!いやだああああ!!」

「だから落ちつけえええええええ!?!」

その後、錯乱するランサーさんを止めるのに10分ほどかかってしまった

だいぶ時間が過ぎちゃったけど・・・マスター怒ってないかな・・・

ー オマケ ネギと士郎が話している頃のアーチャーとイリヤ ー

「イリヤさん!?!頼むから腕を放してください!!」

マジで痛いから!!!なんかものごくミシミシいっててもう限界っぽいから!!」

「腕を放す?なんで?なんでそんなこと言うの?」

やっぱりとじゃイヤなの?さっきイヤじゃないって言ったの

に
・
・
・

シロウの嘘つき……嘘つき、嘘つき嘘つき、嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき

嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき嘘つき」

[illegible]

だが赤い弓兵の叫びは他の三人には届かない

※というか三人は完全に見て見ぬふりをしています

そして弓兵はエヴァの家に着くまでイリヤに嘘つきと言われ続けるのだった・・・

麻帆良への帰還 新たな出会い（後書き）

龍真「イリヤさん完全にヤンデレだな・・・」

セイバー「怖いですね・・・」

ところで私の出番はいつなのですか？」

龍真「セイバーとは次の話で出会う予定です

個人的にやっぱり士郎とネギ、それに小太郎は絡ませたいな
セイバーに会った時にイリヤがどういうことになるかも面白
そうだけど

・・・刺されないように気をつけてね。セイバー」

セイバー「大丈夫です。私は英霊ですよ？そう簡単に刺されたりし
ません

それにいざとなったらアーチャーを盾にしますから大丈
夫です」

アーチャー「ちょっと待て！！」

龍真「まあ、ぶっちゃけアーチャーのが刺される可能性高そうだも
んね。」

アーチャー「・・・おい、なんか私の扱いがひどくないか」

龍真「では次回 「セイバーと士郎の出会い そして・・・」
お楽しみに」

アーチャー「無視!？」

セイバーと士郎の出会い　そして・・・

ランサーの錯乱から約10分後・・・
エヴァンジェリン邸のリビングでアーチャーとランサーは息を切らしていた

「やっと落ちついたかね？ランサー」

「・・・もう大丈夫だ

みっともねえとこ見せちまったな・・・」

壁に思い切り頭をぶつけていたせいかなランサーの額からは少し血が出ていた

ネギ君やイリヤたちは状況把握が出来ず、混乱しきっているようだ

その後、私はランサーにバーサーカーの狂化が解けていることやここにいるイリヤたちは平行世界のイリヤたちで

私達の世界にいたイリヤとは別人で令呪も持っていないという事を説明した

「なるほどな・・・そんな事があったのか

それにしても俺達とは別のサーヴァントか。キャスターってことは

英霊が最悪あと6人・・・あるいはそれ以上いやがる可能性がある
あるな」

キャスターはすぐに消滅したから確認できなかったが
もしかしたら聖杯戦争がこの世界でも行われている可能性がある

だがあのキャスターは切嗣の事をマスターと言っていた
・・・ということは第4次の時に現界していたキャスターか？

それならばセイバーかギルガメッシュに聞けばわかるのだが・・・
まずはセイバーにイリヤたちの事を説明するのが先決か

ネギ君に案内され、入った部屋には
ミニチュアの家が入っているガラス玉の様な物があつた

ネギ君が言うにはこれが別荘らしく、この中に入って修行をしているらしい

最初はネギ君の言うことが信じられなかったが
魔方阵が発動し目を開けるとそこには先程のミニチュアの中と同じ
風景が広がっていた

「・・・すごいな。これは・・・」

たとえ落ちこぼれといえど魔術を扱う者としてはこの光景に驚かざるをえない

隣を見るとバーサーカーも少し戸惑いながらあたりを見回し
衛宮士郎とイリヤは目の前に広がる光景にはしゃいでいた

「ではマスターたちのところに案内します

あ、橋から落ちないように気をつけてくださいね」

ネギ君の後について、私達は塔の中へと入っていく

そこにはエヴァンジェリンとその従者やアスナ、木の香、桜咲、小太郎、古

あとはカメラを持っている子と図書館島探検部の2人組、それにセイバーがいた

「遅い！！今まで一体何をしていたのだ坊や！！」

「あわわわ、すいませんマスターッ！！」

そしてネギ君はさっそくエヴァンジェリンに怒られていた

・・・すまんネギ君。ここに来るのが遅れたのは私達が原因なのに

さて、セイバーは・・・

「・・・・・・・・・・。」

完全にフリーズしてるな・・・

これは復活するまで時間がかかるか？

そしてエヴァンジェリンがイリヤたちの存在にようやく気がついた

「む？今日はランサーのほかにそいつらも来ているのか？

・・・あと後ろにいる小僧と小娘は誰だ？はじめて見る顔だが」

「あ、この人たちは今度から麻帆良に来ることになった

しr「士郎！？それにイリヤまで！？なぜここにいるのです！

！」
「・・・」

・・・復活したか、さてどうやって説明したものか

まず何からセイバーに説明するべきか考えていると隣にいるイリヤから声がかけられる

「・・・ねえ、シロウ。あの人がセイバーって人？」

なんかまた黒いオーラが・・・

「あ、ああ。あの金髪を纏めてる子がセイバーだが」

「そう。あの子がセイバーなんだ」

おい。全然声に感情がこもってませんよ？イリヤさん
というかそのオーラをしまってください。マジで怖いから

イリヤは黒いオーラを纏いながら前に出て
こちらに近づいてくるセイバーと私達・・・というか私との間に立つ

「イリヤ？」

セイバーもイリヤの纏っているオーラに気がついたのか
冷や汗を流しながらその場で立ち止まる

「ねえ、あなたシロウのなんなの？」

イリヤはセイバーに笑いながら問いかけるが
セイバーを見るその赤い瞳は全く笑っていない。むしろ殺意すら感
じる

「な、なあアーチャー・・・」

この嬢ちゃんさつきと雰囲気は全く違うんだが」

「私に問いかけるなランサー」

・・・むしろ私がその理由を知りたいのだ」

この数日間で学習したこと・・・それはあの目をしているイリヤは怖いということだ

1回目は空港で、2回目はキャスターとの戦いが終わったすぐ後3回目が今日、この家に来るまでの間・・・

そしてあの目をする時は決まって私に被害がでる。・・・なんでさ殺意をこめて問いかけるイリヤ。当然セイバーもそれに対抗するわけ

「何といわれても・・・私と士郎は契りを結んだ仲だ!!」

ドン!!とそんな効果音が後ろにでてそうな感じでセイバーは叫んだセイバーのその言葉にイリヤから出ている黒いオーラの量が凄まじいほどに増える

「へえ、そうなんだ。セイバーともなんだ

・・・あとでゆっくりと、二人つきりでOHANASHIしようね? シロウ」

ハイライトが無い瞳で口元だけ笑いながらこちらを見てくるイリヤ・・・なんか悪寒が!!絶対には話すだけじゃないですよね!?

さらにイリヤが発した言葉にセイバーが反応する

「聞き捨てなりませんね。イリヤ・・・その言い方ではまるで貴方と士郎が契りを結んでるみたいではないですか」

セイバーも少し殺気をだしながらイリヤに尋ねる
イリヤとセイバーが言っている事の主語が違うような気がするのだ
が・・・

確かに両方ともシロウなのだがセイバーが言っているのは衛宮士郎の事だろう

「あら。私はそう言ったつもりなのだけれど？」

聞こえなかったのかしら？セイバー、だとしたらごめんなさい」

勝ち誇ったような顔をしながら告げるイリヤを見て

セイバーからもイリヤと同じ黒いオーラが放出される

二人ともが黒いオーラを排出しているので、実際ものすごく怖い

ネギ君たちは大丈夫かと思い、後ろを振り向くとそこには誰もいなかった

・・・なんでさ？さっきまで後ろにいたよね？

周りを見渡すとネギ君とランサー

それにバーサーカーと衛宮士郎はいつの間にかアスナたちの方にいた

私もこれ以上ここにしていると危険な気がするので移動しようとするが・・・

「動いたら・・・後でどうなっても知らないよ？」

イリヤが呟いたその言葉でいきなり動きを封じられた

「イリヤ、士郎と契りを結んだなどと

・・・戯言はいいかげんやめておいた方が身のためですよ？」

怒りをこめた震える声でセイバーが呟く

その事を聞いたイリヤからもさらに殺気が放出される

ネギ君やアスナたちは二人から溢れ出す殺気にガクガクと震えていた。そして・・・

「嘘じゃないわ！！シロウは誓ってくれたもん！！」

私の胸元（の前あたり）に顔がある状態で私の手を握り締めて

・・・ずっと私と一緒にいて、私を守るって言ってくれたもん
！！！！！！」

セイバーに向かって頬を染めながら自慢げに叫ぶイリヤ

・・・待て！！今の説明は何か大切な部分が欠けている気がする！！！！

そして前を向くと完全にぶちギレ状態のセイバーがいた
魔力が溢れ出していつエクスカリバーをぶっ放してもおかしくない
状態だ

そしてその後ろにはなにか汚物を見るような目でこちらを見ている
アスナたちがいた

「胸元に顔があって手を握った状態って・・・」

「しかもセイバーさんとも契りを結んだって言ってたよね？」

「あわわわわわわ」

「完全にロリコンですね・・・最低です」

「最低アル」

「ほんまに最低やな・・・」

「本当に最低ですね・・・
お嬢様見ない方がよろしいですよ。目が穢れてしまいます」

「・・・ロリコンは死ね」

「殲滅しますか？マスター」

「イイナソレ。イモウトヨ、オレニヤラセロ」

「いや、いくらなんでもそりゃ無いだろ。アーチャー」

「・・・・・・・・。」（なんとなく事情を察してはいるがとりあえず
無言でいる）

「エミヤさん・・・」

「最低やな。同じ男として見損なうわホンマ」

「気に入らない奴だとは思ってたけどほんとに最低だな」

なんかまたロリコンと勘違いされてる！？

いかん！！このままではまた誤解をされたままになってしまう！！

「違う！！私は断じてロリコンじゃない！！信じてくれ！！」

私は必死に誤解を解こうとするがアスナたちからの視線は変わらず
冷たい

やめろ！！そんな目で俺を見るなああああああ！！！！！！

「本当だ！！本当に私はロリコンじゃないんだ！！」

だからイリヤとセイバーみたいな幼児体型にも全く興味は無い
！！！！！！」

その言葉を発した瞬間、時が止まったような気がした

・・・あれ？私は今なにを言ったのだ？

自分の言った事を思い出したその瞬間、私の両肩に手がおかれる
恐る恐る下を向くとそこにはセイバーとイリヤがいつの間にか私の
前にいた

「あ、あの・・・セイバー・・・さん？イリヤさん？」

「アーチャー、今の言葉について向こうで少し話し合いましょう」

「全く興味が無いって言った？幼児体型って言った？」

・・・ねえ、向こうで少しお話ししよう？大丈夫だよ。多分死な
ないから」

2人とも凄く笑顔なのに目が全く笑ってらっしゃいません
というかイリヤさん！？多分死なないってそれ、やっぱり絶対お話
じゃないよね！？

そして私はセイバーとイリヤに塔の中へと引きずられていく

・・・ヤバイ、マジでヤバイ

「エヴァンジェリン、少し床を汚すかもしれませんが宜しいです
か？」

なんでお話するのに床が汚れるんですか！？セイバーさん！！

「ああ、構う事はない。思いっきり殺れ」

なんか字が違う！！そしてなんでそんないい笑顔なんだエヴァンジ
エリン！！

「女性の体型を馬鹿にする輩など、この世から消えうせればいい」

「心を読まれた！？」

「シロウ・・・ゆっくり・・・じっくりお話しようね・・・」

「イヤだあああああああああああああ！！！！！！」

そしてその後、ネギたちが修行している間も

塔の中から赤い弓兵の悲鳴が別荘内に響き渡っていたという

セイバーと士郎の出会い そして・・・（後書き）

龍真「今回は結構ネタになってしまいました

・・・イリヤさんが怖いです。あとセイバーも

そして作者にはテストが迫り、次の更新は少し遅れるかもしれません

読者の皆様には迷惑をお掛けしますがご了承ください

では次回 「修行！！ランサーと子供3人組」 お楽しみに」

修行！！ ランサーと子供三人組

今ネギたちはエヴァンジェリンの別荘の中にいる

アーチャーがイリヤたちに連れて行かれた後

ネギたちは修行のために塔を降りて海岸へと向かっていた

「そういえば、士郎君も魔法使いなの？」

その道中、木乃香が疑問に思った事を口に出していた

それはアスナたちも同じだったのかその言葉に頷いている

ここにいる以上、士郎やイリヤも魔法の存在を知っているはずなのである

そんなアスナたちを見ながら士郎は木乃香の質問に苦笑いをしながら答えた

「いえ、魔法使いは俺の家族だけですよ。俺は落ちこぼれですから」

「落ちこぼれ？」

士郎の口からでたその言葉にネギたちは頭を傾げる

「俺は呪文を唱えても魔法が使えないんですよ。
魔力はあるらしいんだけど何故か失敗して発動しないんです」

士郎の言葉にアスナたちはどう言葉をかけていいのかわからず
小太郎は「勝負できたら面白そうだったのに」とがっかりしていた
ランサーは何かを考えるようなそぶりを見せている

「難儀やな」。

そや、士郎は気も使えへんのか？

気が使えるんやったらそっちで鍛えりゃええやろ」

「気か・・・そっちは試したこと無いからまだわからないけど・・・」

そう答えた瞬間、小太郎は何故かすごく笑顔になり士郎に言う

「そか！それなら士郎も今日から修行に参加しいや
ここで修行すればそのうち気も使えるようになるやろ」

「おい、誰に許可を取ってここの使用許可を出しているんだこの
犬」

小太郎の言葉にいち早く反応したエヴァが反論する

「いいやん、別に。」

そんな減るもんでもないんやし」

その言葉にエヴァも少し頭に來たのか、小太郎と言い争いを始めた

そんなエヴァたちを見て、ネギたちは笑いながら歩いていく

ようやく海岸へと辿り着くと、ランサーが跳躍しネギたちと距離をとった

そしてランサーは肩にかついでいた棒をネギたちに向かって構える

「うっし、そろそろ始めるか」

待ちくたびれたといわんばかりにランサーはネギたちに早く始めろと急かす

それをみたネギと小太郎も準備万端のようで、ランサーに対して構えを取った

「っしやあ!! やったるで、ネギ!!」

「うん。今日こそはランサーさんに一撃ぐらい入れてみせる!!」

ここ数日の修行でネギと小太郎の目的はランサーに一撃を当てることとなっていた

ネギたちにいくら才能があつたとしても、

相手は神話の戦場を駆け抜けた英雄・・・クー・フリーンなのだ

生半可な攻撃は通じず、少しでも油断しようものなら一撃で意識を刈り取られる

故にネギたちは2人がかりでもランサーへ未だに一撃をあたえては
いない

（（だから・・・最初から全力で行く!!））

そして2人の考えていることは全く一緒だった

「いくよ、小太郎君・・・戦いの歌!!!!!!」

「わかつとるわ・・・狗神!!」

ネギから魔力が、小太郎から気が放出される

「は・・・面白れえ!!」

準備はいいな?じゃあ、行くぜえっ!!」

それを見たランサーはネギたちの修行に込める気合を感じたのか
凜猛な笑みを浮かべながらネギたちに突撃する

その突撃から繰り出される刺突、それを小太郎とネギは左右に飛ぶ
ことで回避する

そしてネギと小太郎はランサーに向かって放出系の攻撃を放つ

「魔法の射手・・・連弾・光の11矢!!」

「狗神流・空牙!!」

ランサーには矢避けの加護があり飛び道具の類はあたらない
・・・だが、放たれた狙いがランサーではなく別のものだったら?

二人から放たれたそれは、ランサーの足元に着弾し砂を巻き上げそ
の視界を遮る

「目眩まし・・・なにをする気だ?」

砂が巻き上がり、2人の姿が視界から消える
その隙に2つの影がランサーの背後から襲い掛かった

「後ろか!! だが・・・甘え!!!!!!」

背後から放たれた蹴りを避け、その影の腹に棒で刺突をいれる
そしてもう一つの影はその棒を回転させ、なぎ払った

「ん？」

その瞬間、ランサーは奇妙なものを感じた
砂煙がはれると、そこには倒れている小太郎のみでネギの姿が見当
たらない

「あああああああっ!!!!!!!!!!」

頭上から声が聞こえ、上を向くとネギの拳が目前にまで迫ってきて
いた

「なっ!?!」

そのことにランサーは驚愕した
自分は確かに先程攻撃を当てたはず、なのにネギにはダメージを受
けた様子が無い

「影分身か・・・」

ふと気づいたようにランサーが呟く

確かに先程の攻防でランサーの攻撃は当たっていた。

だが、それはネギではなく小太郎の作った分身だったのだ
ランサーが先程感じた違和感も分身を攻撃したことにより生まれた
ものである

間近に迫るネギの拳を見ながら、ランサーは体を捻りその攻撃を紙
一重で避ける

そしてそのまま体を回転させ、後ろ回し蹴りをネギに叩き込み吹き
飛ばした

「があっ！……！！」

海の中へと吹き飛ばされるネギ、これによりネギたちとランサーの
模擬戦は終了した

修行!! ランサーと子供三人組(後書き)

龍真「テストも終わって、ようやく更新することができた」

アーチャー「・・・やつとか。それでテストはどうだったのだ?」

龍真「・・・・・・・・。。。」

アーチャー「おい、まさか・・・」

龍真「では次回!!」「士郎の思い」「お楽しみに!!!!!!」

アーチャー「できなかったのか」

龍真「・・・解答欄1行ずつ間違えてた挙句、裏にも解答欄あるの知らなくてね」

アーチャー「・・・馬鹿だろ、お前」

龍真「・・・・・・・・。。orz」泣

士郎の思い

I SIDE 士郎 —

「・・・すごい」

ネギと小太郎の戦いを見て士郎はそう呟いていた

2人とも自分と同じ年のはずなのに

英雄であるランサーにもう少して一撃いれられそうだった

ネギは魔法、小太郎は気を駆使して戦っている

もう一般的な魔法使いならば大人にでも勝てそうだ

それに比べて自分はどうか？

北海道では自分が弱いせいで敵の人質になり

いくら生き返るとはいえバーサーカーの命を失ってしまった

自分のせいで人が死んだ

自分のせいで姉を・・・家族を泣かせた

頭を掴まれていてあまり見えなかったが

バーサーカーが殺されたあの時、

姉さんが涙を流しながらアーチャーに向かって叫んでいる姿が頭か

ら離れなかった

本来、あそこで責められるべきなのは
憎たらしい赤い弓兵ではなく人質に取られた自分のはずなのだ
そうだ・・・俺が弱いせいで・・・

↓ SIDE ネギ ↓

「悪いな、坊主

ちよいと加減を間違えて力が入っちまったが大丈夫だったか？」

ようやく海から上がってきた僕を心配してくれたのか
ランサーさんが近づいてきて、倒れている僕に手を差し伸べてくれた

「あ、はい。なんとか・・・」

その手を取って少しふらつきながらも立ち上がる

「ふむ・・・影分身と目眩ましを利用した着眼点は良かったが
最後の詰めが甘かったな。奇襲ならばもっと気づかれぬように
配慮しろ」

マスターが組み手について思った事を教えてくれた
それにしても・・・マスターに褒められたの久しぶりだな

「ネギ、大丈夫だった？」

結構すごいスピードで飛んでったけど・・・」

「まだ障壁がありましたし、大丈夫ですよ。アスナさん」

アスナさんが心配してくれるが、不安にさせないように大丈夫だと
答える

その後も木乃香さんたちが駆け寄ってきて怪我の事を心配してくれた
少しあった傷も木乃香さんの治癒魔法で治してもらったので痛みは
無い

「?どうしたんや、士郎？」

声のした方を向くと、士郎君が暗い顔をしていて小太郎君が心配し
ていた

「いや、2人とも強いなって思ってたさ

同じ歳なのになんか自分が弱いのが情けなくて・・・」

話を聞くと、士郎君は北海道で人質にとられ
自分のせいで他の人たちに迷惑をかけてしまったことが許せないら
しい

でもそれは・・・

「あのさ、しr「あゝ！！もう、イラつくわ！！」？」

「・・・要するにあれやろ

士郎は自分のせいで人に迷惑かったんが許せんわけやな？」

「あ、ああ・・・そうだけど」

「だったら強くなりやええねん

強くなって・・・足手まといにならへんように。

自分の守りたいもんを守るように強くなりやええやろ！！」

士郎君に対して小太郎君が叫ぶ

その言葉は僕が言いたかった事とは少し違うけどほとんど一緒だ

弱いから守れないのなら強くなればいい

それは僕にも言える事だ

六年前のあの雪の日、僕は無力だった

僕が無力だったせいでスタンさんや村の人たちが石になった

あの忘れられない光景を2度と見ないためにも僕は強くなる
強くなって・・・きつと父さんみたいな「立派な魔法使い」になる
んだ

そう決意を新たにして前を見ると、士郎君も何かが吹っ切れたような顔をしていた

・・・どうやら自分の中で何かが決まったようだ

その後、マスターに許可をもらい士郎君もここで修行をすることになった

修行をするにあたって、まずは士郎君がどんな魔法を使えるのか

アスナさんや刹那さんたちが修行している間に調べようと思い
最初は簡単に「魔法の射手」の発射できる本数を調べることになっ
ただけど・・・

「・・・・・・・・。」

「・・・・でないね」

「・・・・でえへんな」

何回か試したけど何故か1本も出なかった

魔力はあるし、マスターに調べてもらったところ

タカミチみたいな体質じゃないらしいから大丈夫なはずなんだけど・
・

「姉さんは撃てるんだけどな・・・魔法の射手・・・」

「イリヤさんが？」

「ああ、姉さんは俺と違って優秀だからさ

魔法の射手とか眠りの霧とかの初級魔法なら大抵全部使えるんだよ」

「そうなんだ。凄いんだね、イリヤさんって」

「ああ、自慢の姉だよ。過保護すぎるのと怖いのがたまに傷だけど・・・」

「おい、お前ら。しゃべつとらんでもう一回やるで

さっさとこの魔法できるようになった方が後々便利やろ」

士郎君と話していると小太郎君が修行を再開するように促す

こうして僕らは三人でアスナさんたちの修行が終わるまでこれを続けるのだった

士郎の思い（後書き）

龍真「今回は士郎が主役ですね。やはり平行世界といえど根本は同じで

自分のせいで人に迷惑をかけるのが嫌みたいです
作者的には士郎は後々、小太郎レベルぐらいまでにはさせたいです

イリヤさんの強さはどのぐらいにするか迷い中です
では次回 「士郎の修行 予想外の師匠!？」

士郎の修行 予想外の師匠!?

「「……………」」」

ここはエヴァンジェリン邸の別荘の中

その中でネギ、小太郎、士郎の三人は砂浜で士郎の修行を手伝っていたのだが……

「やっぱりでないね……」

「だ、大丈夫や士郎、頑張りやでるようになる!!!……たぶん」

「……慰めるのか追い詰めるかどっちかにしてくれ、小太郎」

あれからネギたちは数百回ほど魔法の射手に挑戦していたのだが
複数はおろか1本たりとも出ないことにネギたちは苦笑いを隠せて
いなかった

士郎はそんなネギたちを見てさらに追い詰められ
砂浜で膝と手を地面に突いて落ち込んでいる

そんな士郎をなんとか元気付けようと小太郎が話題を変えようとする

「そ、そや士郎!!」

別に戦闘用じゃなくていいから他になんか使える魔法ないんか？
」

戦闘用魔法でなくても、魔法の中には応用で戦闘に使えるものもある

小太郎は士郎がそういった魔法を使えないか、と士郎に聞いた
士郎はその問いに少し考えながら答える

「一応、戦闘用じゃないなら使える魔法はあるな
というか俺はその魔法1つだけしか使えるものがない」

「やっぱり無いんか・・・って、あるんかい!?!
それやそれ!! どんな魔法なんや? いっぺん俺に見してみい!
」

「そうだよ士郎君!!」

・・・ところで、一体なにが使えるの?」

「いや・・・その・・・」

目を泳がせながらしどろもどろに答える士郎
いつまでたっても答えようもしない士郎に小太郎が吠える

「ああああ、もう!!」

「いったい何やねん! さっさと答えんかい!!」

「ち、ちよつと小太郎君!？」

士郎の両肩を掴み前後に揺すりながら問いかける小太郎
やがて観念したのか士郎がゆっくりと口を開く

「・・・だよ」

「ん? なんや聞こえへんぞ」

「解析だよ、解析!!」

「俺が使える魔法はそれしかないんだよ!!」

「うっし、解析やな!! そうとわかれば・・・?」

何かに気づいたように小太郎の動きが止まる
そしてゆっくりとネギの方を向いて尋ねる

「・・・なあ、ネギ」

「どうしたの？」

「解析ってどんな魔法や？」

「いや、僕も聞いたこと無いんだけど・・・」

小太郎は魔法の事を良く知らないのでネギに解析がどんな魔法か尋ねたのだが

ネギも士郎の言った魔法がどんなものなのかよくわからないといった表情をしていた

士郎はそんなネギたちを見て解析という魔法についての説明を始めた

「解析っていうのはさ・・・えっと・・・」

ほら、例えばその塔。それがどんな材質で造られてるとか

あとはその物質の形とか性質とかがわかる魔法なんだけど・・・

「

「なるほど・・・」

「ん？解析って家とかも調べられるんか？」

「ああ、家とかを解析するとだな

その家がなんでできてるかとか・・・後は部屋の間取りとかがわかる」

士郎の説明にネギと小太郎は素直に驚いていた

屋内戦においては部屋の間取りなども戦いにおいて重要な情報となる
その情報を知ることができるのは味方にとって大きなアドバンテージとなるだろう

ネギがその事を士郎に伝えると

「まあ、それしかできないから・・・」

「隠密とかには役立ちそうなんやけどな・・・」

それから三人でどうやって解析を戦術に応用できるかなどと考えていると

どうやら修行が終わったらしくアスナたちがこちらに手を振りながら歩いてきていた

「あ、アスナさ・・・」

ネギはそこまで口を開くと完全に動きを止めた

こちらに向かってきているのはアスナたち生徒メンバーに
エヴァンジェリンとその従者たち、それにサーヴァント組みとイリ
ヤだ

みんなで笑いながらこちらに近づいてくるので
これといっておかしなところはない。・・・ただ1つを除いては

アスナやエヴァたち、それにランサーとバーサーカーはいい

だが問題はセイバーとイリヤだ

セイバーとイリヤは拳が赤く染まっており、服にも赤い汚れが付着
していた

そして一番気になるのがイリヤが引きずってきている赤い物体だ

白かったはずの髪は赤く染まり、その顔は腫れあがっている

ネギがその物体をアーチャーだと認識するのにはそれほど時間はか
からなかった

アーチャーに向かって叫ぼうとするネギだがその叫びは士郎に遮ら
れる

「何するの士郎君!! あのままじゃエミヤさんが・・・」

「気持ちにはわかるけど落ち着け!!」

それを言って、もし俺達が姉さんの標的になったらどうする!
」

「ツ……でも……」

真剣な表情をして迫る士郎に思わず口ごもる

「いいか!!ここでお前や俺が犠牲になっても何も変わらない!!
ネギ……お前はあいつの……アーチャーの死を無駄にする
のか!!」

※アーチャーは死んでません

「エミヤさんの……死を……」

※しつこいですが死んでません。大事なことなので2回言いました

「そうや、ネギ。士郎の言う通りや

ここで俺らが死んでも何も変わらへん

だから生きるんや……俺らはアーチャーの分まで生きなあか

んのや!!」

※だから死んでないって

「わかったよ・・・士郎君、小太郎君。僕は精一杯生きるよ。

先に死んだエミヤさんの分まで「勝手に殺すなああああああ
っ!!!!!!!!!!」!?!」

ネギが精一杯生きる事を決意したその瞬間、赤い弓兵が叫びながら
立ち上がった

「エミヤさん!!生きてたんですか!?!」

「当たり前だ!!確かに死ぬかとは思ったが・・・
こんなところで死んでたまるものか!!」

アーチャーが復活したことでネギは嬉しそうにアーチャーに駆け寄る

「ちっ、生きてたか」

その光景を見て舌打ちするエヴァ

「ちょっと、殴り方がたらなかったのかな・・・」

自分の手を見つめながら手を握ったり開いたりして物騒な事を呟く
イリヤ

・・・本当に殺す気だったのか、この人は

「ところで坊主。そっちはどうだった？」

エヴァとイリヤの言葉をスルーしながらランサーがネギに修行の成果を尋ねる

それを聞いてネギはランサーたちに士郎との修行の事を伝えた

結局、士郎が魔法を使えなかったという事を伝えられた時

そこにいる全員がそれとなく士郎を励ましていた

・・・約一名、心の中でガッツポーズをとっている者もいたが

「それで、士郎君が使える魔法は解析って魔法だけみたいで・・・

」

次にネギが発したその言葉でサーヴァント陣の動きが止まった

いち早く復活したセイバーが士郎に尋ねる

「解析というと・・・物を解析する魔法ですか？」

セイバーの言葉に士郎は「そうです。」と頷く

その間、ランサーとバーサーカーはアーチャーの事を横目で見ていた
そのアーチャーは額を押さえながら「なんでさ・・・」と呟いている

「それで、士郎君が他にどんな魔法を使えるのか調べたいんですけど」

僕も解析って魔法はあまり聞いたことがないもので

ランサーさんたちに聞きたいんですが

解析が派生した魔法にどんなものがあるかわかりませんか？」

ネギのその言葉にサーヴァント陣は全員苦笑いを浮かべる

「いや、知ってるには知ってるんだが・・・」

「知ってるんですか!？」

ネギがランサーの言葉に反応する

「お願いします!!それを俺に教えてください!!」

士郎もそれに続き、頭を下げてランサーに頼み込む
ランサーは失敗したと思ったがもう遅い

しまいにはアスナたちにも士郎に教えてあげてと頼まれる始末である

「あ、あのそれはだな・・・ほら！あれだよな？セイバー！！」

ランサーはネギたちの矛先を自分から変えようとセイバーに話題を
振る

「そ、そうですね。あれですよ、バーサーカー！！」

「む、そうだなセイバー。あれだな、アーチャーよ」

ランサーから始まり次々と話題が別の人に振られていく

「そうだな、あれだ。なあ・・・。。。。。」

最後に話を振られたアーチャーは自分に向けられた矛先を変えるこ
とができず

そのためネギたちに詰め寄られ解析の派生について質問攻めにあう

それからしばらくはアーチャーも頑張って誤魔化そうとしていたのだが

やがて誤魔化すこともできなくなり、最終的にはイリヤに脅されて教えることとなった

「・・・解析の派生ではないのだが

似たような魔・j・・・いや、魔法に強化というものがある」

「強化？」

「その名のとおり、自分の体を魔力で強化する魔法だ

まあ、ネギ君が使う「戦いの歌」のようなものと思えばいい」

「おおお!! やったやないか士郎!!」

戦いの歌ゆうたら戦闘用の魔法やんか!!」

小太郎はアーチャーの説明を聞くと喜び、笑いながら士郎の背中をたたく

士郎もやはり嬉しいのか、それを痛がりながらも笑顔になっている

「良かったね、士郎君

これで後はランサーさん達にその魔法の使い方を教われれば・・・

」

「いや、俺は教えられねえぞ。その魔法の使い方よく知らねえし」

『・・・・・・・・へ？』

その場にいたサーヴァント陣以外の声がハモる

「え？じ、じゃあセイバーさん達は・・・」

「私も詳しくは・・・」

「・・・私もだな」

「そ、そんな・・・」

士郎はセイバーたちからの返答にショックを隠せないようだ

「なんやそれ！！じゃあ士郎に教えられる人誰もおらへんのか！
？」

「いや、いるにはいるのですが・・・ものすごく適任な人が1人」

セイバーは落ち込む士郎たちを見て気の毒に思ったのかつい口が滑ってしまふ

「そんな人がいるの！？じゃあその人でいいじゃない」

アスナがその言葉に反応し、ならその人に頼もうと提案する

他のメンバーも同じ考えのようでサーヴァント陣以外は頷いていた

「それはそうなのですが・・・なんというか、その・・・」

「その人だとなにかあるんですか？」

「・・・なんです」

「はい？」

「ですから・・・その人物はアーチャーなんです」

目を泳がせながら伝えるセイバー

その事を聞いた瞬間、イリヤが逃げ出そうとしているアーチャーを捕まえる

「放せ、イリヤ！！私はこれから用事があるのだ！！」

「はいはい、どうせ用事なんて無いでしょ
もう観念して逃げ出さずにここにいなさい」

そのままアーチャーを士郎の方に引きずっていくイリヤ

「よかったね、士郎
教えてくれる人がこんな近くにいて♪」

「ね、姉さん・・・でも
俺はそいつになんか教わりたくn「何か言った？」・・・ナン
デモアリマセン」

「士郎もOKって言ってるし、シロウもそれでいいよね？」

「だが断r「は？」もちろんOKです！！！！」

「よしっ、これで2人とも納得したね」

「・・・ハイ」

（一緒に修行したら士郎も強くなれるし

2人の仲もよくなるかもしれないし・・・一石二鳥だよね）

仲良くなった2人を想像しながら笑顔になるイリヤ
その2人はものすごく落ち込んでいるのだが・・・

こうしてこの世界に新たな師弟が誕生した

士郎の修行 予想外の師匠！？（後書き）

アーチャー「なぜ私があんな小僧の師匠をせねばならんだ！！」

龍真「しょうがないじゃん。アーチャーしか投影とか使えないし最終的に小太郎レベルまで持ってきたんだから投影無いと駄目でしょ」

アーチャー「だとしてもだ！！」

私は納得がいかない！！この話の撤回を要求する！！
「！！」

龍真「そんなこと言ってる同时又リヤさんにやられるよ？

・・・・・・あ、アーチャーの後ろにイリヤが！！！！！！」

アーチャー「すみません！ごめんなさい！

許してください！！I'm sorry！！」

龍真「おもしろいなあ・・・・（反応が）」

アーチャー「貴様！！私をからかったのか！？」

龍真「いや、ビビり過ぎでしょ。アーチャー」

アーチャー「・・・・何を言う。私はビビッてなどいない」

龍真「一応言っておくけど全く説得力無いからね

では次回「新たな師弟 修行の始まり」 お楽しみに
・・・・・・アーチャーの後ろにイリヤがいるよ」

アーチャー「ふ、2度と同じ手にはかからん

あの悪魔がこんなところにいるわけが・・・」

イリヤ「ねえ、悪魔って誰のことかな？かな？」

アーチャー「ひぐらしっ!？」

龍真「今度は本当にいたんだけどなあ・・・」

イリヤ「少し・・・頭冷やそうか」

アーチャー「ノオオオオオオオオオオ!!!!」

新たな師弟 修行のはじまり

「ではこれより強化を貴様に教えてやる」

「……………オネガイシマス」

ムスツとした顔をしながら心底嫌そうに言うアーチャー
それに返事をする士郎もやはりとても嫌そうな顔をしている

「いいか、強化とはその名の意味するとおり、物質を強化する魔法だ

この魔法の用途は主に自分の身体能力及び使用する道具に対して使う

足にえば脚力が強化され、もし武器に使うのならば武器の強度が上がる」

士郎に対して強化の説明をしていくアーチャー

自分が強くなるために必要なこととわかっているため
士郎も黙ってアーチャーの説明を受けている

ネギたちは再びランサーたちと組み手をするため裏の海岸へと向かった

そのため今ここにいるのはアーチャーと士郎のみである

「ではまず、この石を強化してみろ」

そういいながら士郎に小石を渡すアーチャー

「・・・おい、まだやり方を教わってないんだが」

「まずは石を解析し、基本骨子などの情報を見る
その上でその石にたいして魔力を流しこみ石の強度を上げるの
だ」

アーチャーの言葉を聞き、石に向かって魔力を流し込もうとする士郎

・・・まったく、何故私がコイツを鍛えなければいかんだ

アーチャーは士郎が石を強化しようとしているのを見ながら思った

目の前にいる衛宮士郎は正義の味方を目指すエミヤシロウとは別人だ

だが、自分に魔術を教えるというのもひどく違和感があるものである

エミヤシロウが衛宮士郎の未来の姿であるため

これほど士郎の師匠にふさわしい人物は他にいないだろう

「できた!!」

ふいに目の前にいる士郎が嬉しそうに声を出す
どうやら無事に石へ魔力を流し込めたようだ

アーチャーは士郎の強化した石を解析すると呆れたようにため息を
はく

「な、なんだよ・・・」

「少し貸してみろ」

言われたとおりに士郎はアーチャーに石を渡す
アーチャーはその石を受け取ると近くにあった岩にその石を投げつ
けた

手から放たれた石は真っ直ぐに飛び、岩と衝突すると粉々に砕け散る
それを見て、アーチャーは士郎に向かって言う

「まだ強化の仕方が荒いな。こんなものでは戦闘には使用できん」

淡々と言うアーチャー

馬鹿にされたと思ったのか士郎はアーチャーを睨む

それを見るとアーチャーは近くにあった小石を拾い
同じように岩に向かって全力で投げつける

すると士郎が強化した石を投げた時と違い

アーチャーの投げた石は岩を砕き、その後ろの地面にめり込んだ

その光景を士郎は哑然とした表情で見ている

「・・・これが本当の強化だ

貴様のは単に少し強度を増しただけの子供騙しに過ぎん」

「・・・・・・・・」

子供騙しと言われ士郎は悔しそうにしている

「いいか、イメージするのは常に最強の自分だ

貴様にとって戦うべき相手とは自身のイメージに他ならない」

真剣な顔をしているアーチャー

士郎はそんなアーチャーを驚愕の表情で見る

今まで自分と喧嘩ばかりして一緒に姉の標的にされているこの男が
はじめて自分に対してアドバイスをくれたのだ

そしてアーチャーから再び石を渡される

「もう一度やってみろ」

言われたのはただその一言のみ

だが士郎は何かを理解したように頷くともう一度石に魔力を流し込む

石に魔力が流し込まれ、強度が上がっていく

・・・まだだ、まだ足りない

目の前の弓兵が強化した石はこんなものじゃなかった

この男には負けたくない

士郎はそう思った。何故そんな事を思うのかはわからない

自分と喧嘩ばかりする嫌な奴だから？常に自分より上にいて悔しいから？

・・・なにか違う気がする。だが理由が何であれ、目の前の弓兵に負けたくない

ただそれだけの思考が士郎の頭の中を渦巻いていた

石に魔力を込めるのを止め、深呼吸をする

そして石に再び魔力を込めようとすると、自然にある言葉がでてきた

「……トレース・オン同調開始」

それはアーチャーが北海道での戦いのときに呟いていた言葉
何故それを呟いたのかはわからない

だがその言葉が一番、自分に合う気がしたのだ

目の前の弓兵は俺を驚いたような顔で見ている
だがそれも一瞬ですぐに額を押さえながらため息を吐いた

……なんかムカつくな

そんな事を思うが今は強化に集中する

しばらくして魔力を流し込むのが完了すると
その強化した石をアーチャーに向かって手渡す

アーチャーは石を受け取ると先程と同じように別の岩に向かって投げつける

岩と石が衝突したが、石はさっきと一緒に粉々に砕け散ってしまった

「……また失敗か」

やはり一朝一夕では上手いかないのかと思ひ落胆してしまう
それを見て目の前のアーチャーが再び口を開く

馬鹿にされると思っていた俺にアーチャーは予想外の言葉を言ってきた

「いや、先程よりは幾分かマシになった

貴様が強化した石をぶつけた岩をよく見てみる」

その言葉に岩のほうを見ると確かに石は粉々に砕け散っている
岩のほうは砕け散るとまではいかないまでも亀裂が入り、一部が欠けていた

「や・・・ったあああああああ！！！！！！」

始めて解析以外の魔法がまともに使えたことに対して喜びを隠せない
思い切り大声で叫んでいると、アーチャーに拳骨を食らった

「やかましいわ。馬鹿者が
これくらいで調子に乗るな。」

くっッ！！この野郎、思いつきり殴りやがって・・・

だが、今は何より嬉しさの方が勝っている

その後も全員の修行が終わり別荘を出る時間まで
アーチャーと口論しながら繰り返し強化についての修行をした

ー オマケ ー

「あれ、そういえばイリヤさんは？」

イリヤの姿が見えないことに疑問を抱いて呟くネギ

「ホンマや、いつの間にかおらへんな」

「ああ、イリヤならアーチャーたちの修行を見に行くと行ってま
したが・・・」

セイバーはイリヤを探しているネギたちに向かって言う

そしてそのころイリヤはというと・・・

「何あれ？シロウがものすごくカッコいいんですけど

ツンデレ？ツンデレなの？ああもうカッコいいなあああ／／

／／／

アーチャーが士郎にアドバイスをしたのを見て木の後ろで悶えていた

「やっぱあれだね。シロウは未来で士郎の義兄さんになる訳だし・・・」

そう言いつつ、妄想を膨らませるイリヤ

どうやら彼女の中ではアーチャーとの結婚は決定事項らしい

※ここからはイリヤの妄想です

「キャアアアッ!？」

海辺の倉庫で男に襲われそうなイリヤ

「へへへ、観念しな嬢ちゃん。助けなんてこnn・・・グファッ!？」

男はそこまで言うと2つの影によって吹き飛ばされる

「無事か、イリヤ!!」

「大丈夫か姉さん」

そこに現れたのは最愛の旦那と愛すべき弟だった

「シロウ!! それに士郎も・・・来てくれたんだ」

「当たり前だ。私にとって一番大事な君が
傷つけられるのを黙って見ていられるわけが無いだろう？」

「そうだよ、姉さんは俺にとっても一番大切な人なんだ
義兄さんにはかなわないけど・・・俺だって姉さんの事を守り
たいんだよ」

「2人とも・・・」

「さあ、いくぞ士郎!! 俺の背中はお前にまかせる!!」

「ああ、まかせてくれ義兄さん!! 必ず守ってみせるさ」

「「イリヤ／姉さんは俺達を守る！……！」」

――妄想終了

「なーんて、なーんて、なーんてっ！……！／／／／／／／／／／
ああああああ、もう……それ、最ッッッ高！……！」

頬を染めながらその場で七転八倒するイリヤ

その姿が正直言っただけの変態にしか見えないのは仕方ない

そしてこちらは修行をしている2人組

「……なんかものすごく不快な事を思われている気がするんだ
けど」

「奇遇だな、私もだ」

強化の修行をしながら話す2人

「・・・たぶん、姉さんだよな」

「・・・十中八九そうだろうな」

「どうにかならないのかな」

「・・・どうにもならん」

2人はため息をつきながら修行を続ける

・・・果たしてイリヤの妄想した未来が現実となることはあるのだろうか

新たな師弟 修行のはじまり（後書き）

イリヤ「もちろん、現実させる……!!」

士郎／アーチャー「絶対に嫌だああああああつ……!!」

龍真「まあ、それがどうなるかは置いて……

では次回 「始動!! 喫茶店・冬城」 お楽しみに」

閑話 図書館島の者たち

Ⅰ SIDE キャスター

「・・・ふう」

読み終えた本を横に置き、自販機で買ってあったコーヒーを飲んで休憩する

この世界に飛ばされて一週間、図書館島の蔵書を調べ原因への手がかりが無いか探しているのだが手がかりはまったく無かった

「あ、いたいた。キャスターさくん」

不意に声をかけられ、上を見ると
手すりを掴みながらこちらに手を振る図書館島探検部のメンバーがいた

「あら、ハルナ。もう授業は終わったのかしら？」

「いやゝ授業は終わっただけですけど
夕映の奴が補修受けなきゃならないからそれまでの暇つぶしで」

「ああ、それで夕映がないのね
まあ、座りなさい。コーヒーぐらいはおごってあげるわよ」

ハルナたちに席に座るように促すキャスター

「いいんですか！？じゃあお言葉に甘えて」

奢りと聞いて嬉しそうに座るハルナ

「ど……どうもすいません。キャスターさん」

俯きながらキャスターにお礼を言うのどか

キャスターはそれを見ると微笑みながら
のどかの頭の上に手を置きその頭をやさしく撫でる

「私が好きで奢るんだからそんな顔しないの
せっかく可愛い顔してるのに俯いてちゃ見えないでしょ」

キャスターの言った可愛いという言葉に反応し、のどかは顔を真っ赤にして慌てる

「い、いえそんなー。私なんか・・・」

「やっぱキャスターさんもそう思いますよね」
この娘ったら可愛いのに全然自身を持ってないんですよ」

ハルナはキャスターの言葉に同意し腕を組んで頷く

「そうよね、前髪上げてもっと積極的にいけば
ネギ君も案外コロッと簡単に落とせるんじゃない？」

「落とっ!?! おととととととおとととすっ!?!」

／
／
／

／
／
／
／
／
／
／
／
／
／

ボンと効果音が出そうな感じで頭から湯気を出し慌てだすのどか

「ちょ、ちよつとのどか!?!」

ひとまず落ち着きなさい!?! ほら深呼吸!?!」

ハルナに言われたとおり深呼吸をし、気持ちを落ち着ける

「そんなに慌てなくてもいいじゃない・・・」

か」

「作戦を立てるのはいいのですが・・・
ハルナ、まずはネギ先生の予定も聞かないと」

「大丈夫、ネギ君は学祭は特に予定無いって
でもクラスみんなから出し物とかに誘われそうなんだよね
特にいいinchよとまきちゃんあたりは確実に誘いそうだし・・・」

」

「それなら、先手必勝ね」

準備期間があるそうだからその間に誘った方がいいわ」

キャスターはコーヒーのカップを持ちながら
のどかに準備期間中にネギを誘う事を提案する

「で、でも・・・私なんかがネギ先生と・・・」

「いい加減にしてください。もう告白はしているんですよ
のどかは可愛いのですからもっと自分に自身を持つべきです」

夕映はため息をつきながらのどかにネギを誘う事を促す

これでネギを誘ってもし、のどかとネギが付き合うことになれば
その恋を応援する親友としてはこれ以上に嬉しいことは無いだろう

— ズキッ

「・・・・・・・・・・？」

何故か、少し胸が痛んだ

どうしてだろう？

のどかとネギが付き合うのは祝福すべきことなのに・・・

だが祝福しようと思う反面、そうなってほしくないと願う自分がいた

夕映は首を振り、その思考を頭の中から消し去ろうとする

こんな感情・・・持っていてはいけない

その後の作戦会議も何を話していたのかは頭に入らず、内容をまったく覚えていない

だが、その会議をしている中でキャスターは何か気づいたように
夕映を見る

その後も作戦会議が進む間
キャスターだけは何かを悲しむような目で夕映のことを見ていた

閑話 図書館島の者たち（後書き）

龍真「今回はネギまキャラ3人登場！！図書館島メンバーの人たちですね

そしてさりげなく学園祭偏のフラグ・・・早く他のキャラも書きたいなあ」

始動！！ 喫茶店・冬城

ここは麻帆良女子寮とエヴァンジェリンの家のちょうど真ん中にある大通り

そしてその大通りに面接して立つ2階立ての建物

そこでは今、サーヴァント陣とネギたちが荷物を運び喫茶店を開く準備をしていた

「すまないな。ネギ君たち

休みだというのに手伝ってもらって・・・」

アーチャーはテーブルを運びながらネギに言う

「いえ、みなさんにはいつも修行を手伝ってもらってますしこのぐらいは・・・」

その言葉にネギは笑いながら返事をする

何故ネギたちも喫茶店の準備をしているかというと

今朝、荷物を運んでいるサーヴァント陣を見かけたネギが

いつも修行に付き合ってもらっているお礼をしたいと言ったからだ

アーチャーは最初、修行は自分達が好きで手伝っているのだからそ

んなお礼はいらない

と言ったのだがなかなか引き下がらないネギに困り、最終的に準備が終わったらアーチャーが夕食を作ってご馳走するという条件で話がついた

それでネギがこちらの手伝いをしているので

一緒にいた小太郎や士郎も掃除や食器類の運搬などで手伝いをしている

続いてアスナたち3-Aのメンバーにイリヤたち衛宮家も一緒だ

だが、セイバーたちが切嗣を初めて会った時が大変だった

アスナは切嗣を見て、何故か渋くてかつこいいなどと騒いでいるし・

それだけではない。その後、セイバーが切嗣に近寄っていきなり謝ったのだ

聖杯の真実を知り、切嗣が聖杯を破壊した意味を理解したセイバーは切嗣が自分を裏切り聖杯を破壊したと思っていた事を謝ろうと思ったのだろう

だが、謝られた切嗣はそんな事を知るわけも無く・・・

「え？ いやどこかでお会いしましたか？

貴方のような美人ならもし会っているなら覚えているはずなんですが・・・」

セイバーに向かってそう言い放った切嗣
その後ろを見てしまったセイバーは冷や汗を流しながら少しずつ後退する

「?」

セイバーの行動に切嗣は不思議そうにしながら後ろを振り向く

そこには黒いオーラを振りまくアイリスフィールがいた

「い、いやアイリこれは違うんだ。

僕は単に彼女が一般的視点から見て美人であると言っただけで・
・・」

381

「・・・いいから少し向こうに行きましょうか」

そのまま切嗣はアイリスフィールに裏路地へと引きずられていった
そんな切嗣を見て、アーチャーが士郎に言う

「おい、あれはもしかして遺産なのか?」

「たぶん・・・」

連れて行かれた切嗣は無視することにして
店の中に入り準備をはじめ、今に至るというわけだ

「ああ、ネギ君。皿とかの食器はそこに運んである棚に入れてお
いてくれ

小太郎、グラスはこちらの棚だ。スプーンなどはその下にある
引き出しに入れる」

全員の動きを見て、アーチャーは的確に指示を出していく

「ねえ、アーチャー。これはどこに運ぶ？」

アスナと刹那がテーブルを運んできてアーチャーに質問する

ちなみに何故、アスナがアーチャーの事を呼び捨てにしているのか
と言うと

クラスメイトであるセイバーが呼び捨てなので
自分も呼び捨てで構わんと言うアーチャーの言葉によるものだ

それによりアスナと木乃香、それに朝倉とハルナは
アーチャーの事を呼び捨てで呼んでいる。

(のどかや夕映、それにネギはさん付けだが)

「ああ、そのテーブルはそちらの奥だ」

「ん、了解」

アーチャーに言われたとおり、テーブルを奥に運ぶアスナ

こうして次々と準備は終わり、4時を回る頃には

全ての作業が終わり、手伝っていたメンバーは店の中で椅子に座りくつろいでいた

「つ、疲れた・・・」

「こんなぐらいでバテるなや士郎」

「まあまあ、小太郎君・・・」

「大丈夫ですか、士郎」

こちらは固まって座っている子供三人組＋ギル

ちなみにギルは士郎のことを名前で呼んでいる

理由は今の姿なら同年代なので、呼び捨てでもいいだろうということだ

「大丈夫ですか？お嬢様」

「大丈夫や。心配してくれてありがとな、せっちゃん」

「い、いえ。私はそんな・・・」

「刹那さん顔真っ赤」

木乃香に例を言われ、慌てふためく刹那をからかうアスナ

「んゝ、におうね。甘酸っぱいラブ臭が」

「またそれですか。ハルナ・・・」

「へえ、のどか。あの二人ってそういう関係なの？」

「い、いえそのそれは・・・／／／／／／／」

仲良く談笑しているアスナたち3－A組とイリヤ

その間にアイリスフィールはキャスターやライダーと世間話に花を咲かせ
切嗣はランサーたちとアーチャーの買ってきた缶ビールを飲みながら話していた

そんな中、アーチャーが厨房から料理を運んでくる

その運ばれてくる料理を見たアスナたちはその量にも驚いたのだが何より驚いたのは運ばれてくる料理が全てアーチャーの作ったものだということだ

「時間がなかったので、簡単な料理ですまんが・・・

今日一日手伝ってくれたお礼だ。まあ、遠慮せずに食べてくれ」

料理を運んできたアーチャーはそう言うが・・・

目に見えるだけでサンドイッチなどの洋食、それに和食や中華の料理もある

しかも盛り付けなども綺麗でこれをどこかの料理店で出されても全く違和感はない

そしてアーチャーが咳払いして一言

「ああ、この店の名前だが・・・名前は「喫茶店・冬城」と言うことにした

明日から営業を開始したいと思うので暇があったら是非、立ち寄ってみてくれ」

そういいながら自分の飲み物がついであるグラスを手につくアーチャー

「では・・・乾杯!!」

その言葉を合図に宴会は始まり、全員で夜遅くまで騒いでいたというアーチャーの料理を食べて数名、自信を失っている者もいたがそれは余談である

始動!! 喫茶店・冬城（後書き）

龍真「とうとうアーチャーの喫茶店が完成いたしました

ですが、次から学祭偏なのでたぶんあまり出番がないと思います」

アーチャー「おいこら、いいのかそれで」

龍真「学祭のどこかで登場するとは思っただけど・・・

まずは準備期間から書いていきたいんだよね」

アーチャー「まあ、いいだろう・・・

では次回 「麻帆良祭まであと15日」 お楽し

みに」

麻帆良祭まであと15日

「おい、ネギー!!」

いつもどおりアスナたちと登校していたネギは誰かに呼び止められた声のした方をむくと小太郎と士郎がこちらに向かつて走ってきている

「どうしたの？小太郎君、それに士郎君も？」

「いや、俺と士郎で一緒に学校行くことにしとってな
それで登校中にお前の姿が見えたから声をかけて追ってきたっ
ちゅー訳や」

「学校に？」

「ああ、俺も小太郎もこっちの学校に転校してな
それでせっかく同じ学校だから一緒に通学しないかって俺が誘
ったんだよ」

小太郎の言った学校という言葉の意味がわからず、首を傾げるネギに説明する士郎

「それで今1人暮らし出来る所探しとるんやけどな
仕事すれば食い扶持ぐらいは稼げるし・・・」

「え、1人暮らし？すごいね小太郎君」

「そうや r 「駄目よ、小太郎君はウチに住むの」・・・ってち
づ姉え!？」

いきなり背後に出現した千鶴に驚く小太郎

「ネギ先生、ウチの小太郎と知り合いだったんですね」

「は、はぁ・・・ウチの・・・？」

ウチの小太郎という言葉に少し疑問を抱くネギ

「聞いてます。この子両親がいないそうで・・・」

「ちよっ!？ちづ姉!ネギや士郎が見とるし止めっ」

千鶴は目じりに涙を浮かべながら嫌がる小太郎を抱きしめる

「そんな訳でこの子は私がちゃんと育てます!!」

「即行飼われてるのね、さすが那波さん・・・」

1人天を仰いでいる千鶴をみて苦笑いを浮かべているアスナ
すぐ隣にいる木乃香も同じような顔をしていた

そんな千鶴を止めようと近寄る小太郎だが近寄る途中で何かとぶつかってしまった

ぶつかった小太郎は目の前を確認し、驚愕する

そこには異形・・・亀に角や棘を生やしたような奴がいた

「なっ!?!」

「妖怪!?!」

「また敵か!?!」

その異形を警戒し、構えを取る子供三人組だが、その心配は杞憂に終わった

「はいはい、坊や達ごめんよー」

「」「へ?」「」

異形はそういうと校舎の方へ向かって走り出す

周りをよく見るとそいつの他にもロボットや武者

それとターミネーターに熊の着ぐるみなどに扮した人間がごろごろいた

「アレレレ? 何だかよく見ると変なのがゴロゴロ登校風景の中に・・・」

「おい、ネギ。いったい何やコレは?」

「いや、僕もわからないんだけど・・・」

困惑しているネギたちの横でその風景を見たアスナがポツリと呟く

「流石、大学生の人たちは気合入ってるわね」

「ホント、いったい何の出し物かしら？」

「？」

「出し物、いったい何のことやちづ姉」

「学園祭だよ。あ、そうだ

ウチの部も公演あったんだ。ハイこれ先生チケット」

そういいながらチケットをネギに手渡す夏美

「「「学園祭？」」」

その言葉にまったく同じ反応をする子供三人組

「そうそう、ほらアレ」

夏美がそういいながら指をさした方向を見ると

「麻帆良祭まであと15日」と書かれた大きい門が聳え立っていた

子供三人組はその大きさに驚き、その中でも小太郎は

「門でこれとかどんな学園やねん、ここは・・・」

と言いながら呆けていた

その後も千鶴やアスナからいろいろ説明を受けて
最終的には3人とも学園祭についてはすこし理解したようだ

・・・途中、「1万人鬼ごっこ」と言う千鶴の嘘に全員が騙されて
いたが

そして士郎たちと別れたネギは職員会議に出た後、3－Aの教室の
前に来ていた

「おかしいな、イリヤさんにここで待っていてくださいって言
ったのに・・・」

ネギが教室の前に来て数分たっても中に入らないのはイリヤが原因だ
転校生なのでまずは皆の前で紹介するといったのにその本人が見当
たらない

しばらくウロウロしていると教室の中からイリヤの声が聞こえてきた

「あれ？もう中にいたのか

イリヤさん、中にいるならそうと早く言ってくださ……」

そう言いながら教室のドアを開けたネギは硬直した

自分のクラスの生徒達が普段の制服ではなく

黒い生地、白のレースなどがつけられた服……

いわゆるメイド服を着ていたのだ

『ようこそー、3－Aメイドカフェ・アルビオーニスへ！！』

いいんちよと朝倉、それにチア部三人組が出迎える

声をかけられたネギはそこでようやく正気に戻った

「な、なんですかこれは……？」

「学園祭の準備ですわ。ネギ先生

私メイドカフェがどういうものかわかりませんが

皆さんのたつての願いによって衣装をご用意させていただきました
ました！！」

困惑するネギに自信満々に自分が衣装を用意したと告げるいいんちよ

そんな中、ネギの近くにイリヤが近づいてくる
ちなみにイリヤも制服ではなくゴスロリ系のメイド服を着用していた

「あ、おはようネギ先生」

「おはようございます。イリヤさん」

互いに挨拶を交わす二人

それにしてもイリヤは転校初日だというのにすっかりクラスに馴染んでるようだ

ネギがその事をイリヤに話すと

「凄いのは私じゃなくて3－Aのみんなだよ

こんな楽しそうなクラス私、始めてみたもん」

微笑みながらネギの問いに返すイリヤ

ネギも笑いながら「そうですね」と返す

その後、いつもの暴走で大騒ぎになった3－Aは

新田先生に怒られ、メイドカフェは禁止になったそうだ

麻帆良祭まであと15日（後書き）

龍真「…………あの私はなぜ縛られてるのでしょうか？」

セイバー「自分の胸に聞いてみたらどうですか？」

ライダー「この小説はサーヴァント I N 麻帆良ですよ

ではなぜ今回の話、1人もサーヴァントが出てないので
すか」

龍真「いや、こんかいはネギま十衛宮家子供組でいこうかと……」

キャスター「^{アトラス}圧迫」

龍真「ジェロニモッ!？」

アーチャー「龍真はやられているので今回は私が予告だ

次回 「学祭伝説 茶々丸の恋?」 お楽しみに」

学祭伝説 茶々丸の恋

「やっぱり超包子の肉まんは美味しいわね」

麻帆良での早朝、アスナは幸せそうな顔で肉まんを食べていた
今、ここにはアスナのほかにネギや木乃香、刹那とイリヤがいる

「アスナ、レディなんだからもうちょっとゆっくり食べたら？」

そんなアスナを見てイリヤは笑いながら言う

「むう・・・わかったわよ」

指摘されたのが恥ずかしかったのか

アスナは少し顔を赤らめながら拗ねたような声で返事をする

ネギたちはそんなアスナを見て笑っていた

「おはようございます。ネギ先生」

不意に後ろから声かけられる。その声の主は茶々丸だった
そんな茶々丸を見て、ネギは少し違和感を覚える

「あれ？茶々丸さん。

今日は何かいつもと感じが違いますね」

「え・・・？」

「あ わかった

髪を上げてたんですね。似合ってますよ」

そう、今日の茶々丸はいつもと違ってセイバーのように髪を後ろで
纏めている

「あーっ！！駄目だよ茶々丸」

そんな事を話していると突然叫び声が聞こえた

「あ・・・ハカセ・・・」

「駄目だよ髪あげたりなんかしちゃー。それは放熱用なんだから
なんでこんなことしたの？ちゃんと髪の毛の面積とらないと熱

が・・・」

「それは・・・」

淡々と説明するハカセにうろたえる茶々丸
そんな光景を見て木乃香がアスナに言う

「何でって、ハカセちゃん。なー？」

「茶々丸さんだっておしゃれとかしたいよね」

それにアスナも答え、その言葉にハカセは首を傾げる

「おしゃれ？」

「は、はぁ・・・」

「おしゃれですか、可愛いですよ茶々丸さん」

「そ、そうですか

どどどうもありがとうございます。ではこれで・・・」

そういいながら振り返った瞬間

茶々丸はその場でつまずいて転び、肉まんが空中に舞う

それをキャッチするネギやアスナそれに刹那。流石と言えば流石である

茶々丸に肉まんを返すネギたちを見て、ハカセは首を傾げる

その理由は茶々丸が転んだことにあった

どんぶりを高さ2 mまで積んで、ハイヒールを履いた状態で足を引っ掛けられようともし転ばないオートバランスシステムをつんだ茶々丸が

何もない平地で普通に転んだのである

もし、システムの不備で転んだのだとしたら

早急にメンテナンスをして、その不備を取り除かねばならない

「ねえ、茶々丸。久々にあなたをバラして点検したいから放課後に研究室によってみてくれない？」

「は……了解しました」

ハカセの言葉に頷く茶々丸

一方、ネギたちはハカセのバラすと言った言葉に顔を青くしている
イリヤは肉まんを食べている途中だったのか盛大に咽ていた

― そして放課後 研究室 ―

「はい、じゃ茶々丸メンテナンスするから上脱いでね」

「は、はい」

そういいながらハカセは茶々丸の状態を調べていく

「あれ、どこも異常は無いのにモーター数が上がってる
茶々丸・・・なんかおかしいところはない？」

「あ、いえ・・・その・・・なんといいますか
・・・おそらくハズカシイというのが妥当かと
それになにやら・・・胸がドキドキするというか・・・」

「え、ええ〜っ!？」
ハズカシイ!? 人工知能がハズカシイってそんなおかしいこと
が・・・」

茶々丸の言葉に混乱し、大声で叫びだすハカセ

「何もおかしいところあらへんよ。なあ、イリヤちゃん」

「そうよ、別におかしいところはないわね」

それを見てにこやかに話す木乃香とイリヤ
そんな2人を見てネギやハカセはもちろん、アスナや刹那も首を傾
げている

「胸がドキドキ・・・それはすなわち恋の証!!」

・・・つまり茶々丸は誰かに恋をしてるのよ!!!!!!」

なにやら効果音が出そうな感じで自信満々に叫ぶイリヤ

『ええ~~~~っ!?恋!?!?』

その言葉にいつせいに叫びだす一同

凄まじい音量で放たれたそれは他の人間に何か異常があったと思わ
せるほどだった

そしてそれを「何かあったのか!？」と勘違いした男が凄まじい速度でドアを開ける

「なんだ今の声は!?! どうしたんだ!?!」

そこに現れたのは整備員の作業着を着て、手にスパナを持っている白髪の人物

第五次聖杯戦争では弓兵のクラスで参加した正義の味方だった

そして、そこでドアを開けたまま正義の味方は固まる

茶々丸はロボとはいえ、女子中学生。そして今は上半身が裸である故にそこに男が乱入すれば覗き以外の何者でもない

「滅殺! ! ! ! !」

「ごうっ! ?」

魔力を纏った拳がアーチャーの腹に突き刺さり、アーチャーはその場に崩れ落ちる

「いったい、ここで何をしてるの? シ・ロ・ウ♪」

にっこりと笑いながらアーチャーに近づくイリヤ

だが、アーチャーにはその姿が鬼神のように見えた

「この空調が壊れたって聞いて

整備の人が足りないらしいから手伝いに来たんだが

そしたらこの部屋から大声がして何が起きたのだと思ってきました

スイマセン。ゴメンナサイ。他意はないんです。許してください……」

土下座しながら一気に理由を説明し、謝罪するアーチャー

もはやプライドもなくそも無い状態である

そしてイリヤは静かにアーチャーに近づき……

「それならいいわ

もし、覗きなんてしてたって言ったら■しちやうところだった♪」

アーチャーの耳元で静かにそう告げると

振り返って、木乃香たちのもとに戻っていった

アーチャーはその場で何かに怯えるように震えている

イリヤの呟いた言葉を知らないネギたちはアーチャーの変化に首を傾げている

そんなアーチャーを置き去りにし、ネギたちは街で

茶々丸が本当に恋をしているかどうかのテストをするため研究室を後にした

街で茶々丸はいろいろな服を着せられ、困惑していた

その度に視線はネギのほうを向いて気にしていたのだが

ハカセの研究心と他の女子メンバーの好奇心はそれだけで止まらない

ついに茶々丸の記憶ドライブを検索し、パソコンにその画像が映し出される瞬間

放たれたロケットパンチがハカセ以外の女子・・・アスナたち4人を吹き飛ばした

そして、茶々丸はその場から凄まじい速度で逃走し、工学部を爆進する

「ちょっと、流石に記憶見たのはマズったんじゃない!？」

「あはは。やりすぎたのかな」

「やりすぎだと思います・・・お嬢様」

周りを破壊しながら進む茶々丸を見て苦笑いをするアスナたち

「とにかく茶々丸を止めないとね・・・

ハカセ、どうやったら茶々丸は止まるの?」

「て、点検中だったから右胸を押せば・・・」

「右胸ですね？わかりました！！！！！」

それを聞くと杖に乗って茶々丸の後を追うネギだが、茶々丸のスピードも速いのでなかなか距離をつめられないでいた

そんな時、ネギは茶々丸の前方に1人の人物を発見する

「エミヤさん！！！！！」

「ネギ君か！？いったいどうしたんだこの騒ぎは！！！」

「それが茶々丸さんが暴走しちゃって・・・」

ハカセさんが言うには右胸を押せば止まるそうです！！！！！！」

「右胸か、わかた魔法の射手 闇の29矢アアアア！！！！！！」
「たわらばっ！？」

ネギの言葉を聞いたアーチャーが茶々丸に近づこうとした瞬間

茶々丸とネギを29本の漆黒の矢が追い抜き、寸分違わずアーチャ―に着弾した

「ネギ先生がやりなさい!!!!!!」

殺気を放ちながらネギに向かって怒鳴るイリヤ
もし逆らったら命が無くなりそうである

幸い、今の爆発で茶々丸の動きが少し止まったので追いつくことが
できた

そして茶々丸の暴走は止まり、工学部に平和が戻った

ただ1人の犠牲を出して・・・

― オマケ ―

「はあ、結局茶々丸さんの好きな人って誰だったんだろ？」

「そうやなく、せっちゃんも気にならん？」

「ま、まあ・・・気にならないと言えば嘘になりますけど・・・」

茶々丸の暴走を止めた帰り、アスナたちはそんな話を話していた

そんな光景を見て、イリヤは微笑み

・・・ネギ先生も結構もてるよね

そんな事を思いながら歩いていた

学祭伝説 茶々丸の恋（後書き）

龍真「年末は少し忙しいので更新が少し遅れるかもしれませんが申し訳ありません

それにしてもネギまの出番を多くするとサーヴァント陣の出番が・・・」

ランサー「まあ、そりゃお前の実力不足だな。もちっと勉強しろや」

ギル「今回の予告は僕がやります

では次回 「波乱のデート予行演習」 お楽しみに」

波乱のデート予行演習

「ああああ〜っ!! どうやって誘えばいいのよ〜!!」

ここはアーチャーが営業している喫茶店「喫茶店・冬城」

その店の奥にあるテーブルでアスナは机に突っ伏しながら叫んでいた

理由はタカミチを学祭最終日にデートに誘おうとして失敗している
ことにある

何度かチャレンジはしたのだが、緊張してしまい結局誘えていない
のだ

「あんなに勇敢なアスナさんが・・・意外です」

「アスナは毎年こうやで、せっちゃん」

「意外に純情よね、アスナって」

「姐さんも乙女だよな〜」

同じテーブルに座っているイリヤ、木乃香それに刹那+カモは
アーチャー特製のケーキを頬張りながらその光景を眺めていた

「いきなり叫んで・・・いったいどうしたんだ？」

アーチャーが不思議そうな顔をしてテーブルに近づいてきた
その手にはクッキーの乗った皿を持っている

「お、アーチャーの旦那

実はアスナの姐さんの恋について話してまして・・・」

「ち、ちよつと!!」

アーチャーさんになにいつてるのよ!? このエロガモ!!」

そこまで言ったところでカモはアスナに捕獲された

「あ、姐さん!? そんな強く握ったら

中身が・・・なんか内臓的なものがでちまうっつ!!」

そう叫びながらアスナの手の中で

もがいているカモを見て、アーチャーが助け舟を出す

「アスナ・・・もうその辺で許してやれ

それにカモもいくら周りに人がいないからって

あまり声を出してるんじゃないぞ。万が一ということもあるし」

「う……すみません」

「すまねえ、旦那」

アスナは注意され、少し俯きながらカモを放す

「わかればいいんだ。」

それよりこれ。明後日ぐらいから店で出そうと思ってる

新作クッキーなんだけど……よかったら試食してみてくださいな
いか？」

アーチャーは持っていた皿をテーブルの真ん中に置きながら言う

「できれば後で感想をきかせてほしい」とそれだけを言って

アーチャーは調理場へと戻っていった

「……で、結局さっきの話なんだけだよ

姐さんはもっと恋愛に慣れとくべきだと思うんだよ」

カモはタバコを吸いながらいきなりそんな事を言い出した

「そうね。私もそう思うわ」

そしてイリヤもカモの言葉に同意する

「え、でも慣れるって一体どうやって・・・」

カモとイリヤの言葉に戸惑うアスナ

「デートだよ。デート!!」

予行演習っつーことで場数をこなしてけば

その分、本番でその経験が役に立つてもんだぜ」

「つまりカモくん。

アスナが練習ゆーことで誰かとデートをすればいいんやな」

「ご名答だぜ。このか姉さん」

その言葉を聞いたアスナは顔を真っ赤にしながら首を大きく横に振る

「む、無理無理無理!! なんで私がそんな事しなくちゃならないのよ!?!」

「戦も色恋もようは慣れよ慣れ

第一、姐さんデート一回もしたことないだろ？」

「う・・・」

カモが言ったその言葉にアスナは反論できなくなった

「ですが、相手は？」

身近な男性ですとネギ先生ですが

それでは高畑先生とは歳が違いすぎます」

「それなんだが・・・」

最初は兄貴にこの魔法薬で変装してもらおうと思ったんだけど」

そういいながらカモが取り出したビンにイリヤが反応する

「それ、年齢詐称薬じゃない？」

よく手に入ったわね。結構高いのに」

カモはそのイリヤの言葉に冷や汗を流している

「は、ははは。まあそれは置いて・・・
でも今はランサーの旦那とかもいるしな
結構、相手には困らないと思うぜ」

「そうですね。他にも小次郎さんとかアーチャーさ「刹那・・・」
んも・・・」

イリヤは刹那の両肩を掴んで虚ろな瞳で言う

「シロウは駄目だよ」

「っ!？」

それを真正面でまともに見て恐怖する刹那
そのあまりの恐怖にもはや半泣き状態である

「・・・アーチャーの旦那はとりあえず駄目として
姐さんのタイプってえと、バーサーカーの旦那とエミヤの旦那
ぐらいか」

「でもバーサーカーさんだと違和感があれへん?」

こうして、アスナは翌日、デートの予行演習することになった

ー オマケ ー

「なんだったんだ今の電話？」

ランサーは酒の入ったお猪口を片手に切嗣に問う

「いや、イリヤの友達が学園祭でのデートの
予行演習をするらしくて、それに付き合ってくれってさ」

右手のグラスを傾けながらそれに答える切嗣

「それはいいのだが・・・
お主には嫁がおるだろう。そちらはいいのか？」

アサシンは片目を瞑りながら切嗣に聞く

「いや、だってただの予行演習だし

波乱のデート予行演習（後書き）

龍真「このデート予行演習ですが次の話に続きます

切嗣は生き残れるのか！予行演習の結末は！？」

次回「波乱のデート予行演習？」お楽しみに」

ギル「そういえば今気がついたんですけど・・・」

龍真「ん？」

ギル「年齢詐称薬って僕か贋作者が食べたら拙くないですか？」

龍真「そこに関してはスルーで！！」

もしかしたら学園祭偏で食べるかもしれないけどね・・・」

ボソッ

ギル「ちよっ！？今何をボソッと言ったんですか！？」

龍真「それはおいといて」

ギル「置いとくんですか！！」

龍真「こんな作者と小説ですが読者及び他の作品の作者様

今年もどうぞよろしくお願いします。ではまた」

」

「本音がでてますよ。イリヤさん」

「そういえばネギ君、なんでそんな姿なん？」

そして刹那、木乃香、イリヤの女子三人組である

木乃香の問いにカモが答える

「ああ、それはですね

アイリの姐さんに万が一、旦那が殺された事を考慮して
その時は代役としてデートの相手をしようですね・・・」

「カ、カモ君・・・殺されるって

いくらアイリさんでもそこまでは・・・」

「甘いぜ、いいか兄貴・・・」

青ざめながらカモの言葉を否定しようとするネギ

それにカモは真剣な顔をしたかと思うとすぐにイリヤの方を向く

「なあなあ、イリヤの姉さん」

「何？どうかしたの、カモ」

「ちょーつと質問なんだが

もしアーチャーの旦那が他の女とデートしてたらどうする？」

アスナたちを見ながら声だけを返すイリヤにカモは笑いながら問いかける

「殺す」

その問いをイリヤはアスナたちの方を見ながら即答する

「・・・・・・・・。」

「まあ、シロウが他の女と浮気なんてするはず無いから
そんなありえない事は心配しなくていいんだけど・・・」

後にそう続けるイリヤ。その表情はネギたちの位置からは見えない
呆然とするネギの肩の上でカモは言う

「・・・わかったろ。兄貴」

「うん・・・」

それにネギは頷き、空を見上げ

（エミヤさん・・・強く生きてください）

赤い弓兵に対してそんな事を思っていた

Ⅰ 喫茶店・冬城

「へくしょいっ!!」

「どうしました？ 贗作者」

「いや・・・なんでもない」

「？」

そしてアスナと切嗣の動向を

見守っていたイリヤたちだがふいに刹那があることに気がついた

「あっ!？」

「ど、どうしたん? せっちゃん」

「アレを見てください!!」

そう言って指のさされた方を向くと

ランサーとバーサーカーがアスナたちの方に向かって歩いてきていた

「よう、切嗣。なんだ、デートの相手ってアスナなのかよ?」

ランサーは切嗣に笑いながら言う

バーサーカーはイリヤたちに気がついたのか

いったい何をしてるんだ? とでも言いたそうな目でこちらをみている

それにイリヤもアイコンタクトで返す

(見守ってるの! っていうか空気読みなさい!!)

その言葉にバーサーカーは少し考え、ランサーに早く仕事に戻ろう

と告げ

ランサーもイリヤたちに気がついたのか、納得したような表情をしてその場を去った

ランサーたちに会って恥ずかしがっているアスナに切嗣は言う

「神楽坂君、よかったらご飯食べにいかないかい？
せっかくのデートなんだし、僕が奢るよ」

「い、いくらなんでも

衛宮さんにそこまでしてもらうわけには・・・」

「いいのいいの。僕が好きで奢るんだから」

遠慮して誘いを断るアスナだが、
切嗣はそれを説得し、一緒に喫茶店・冬城へと向かった

喫茶店・冬城に着いた切嗣とアスナはギルの案内でカウンター席へと座る

その際、デートですか？とギルに聞かれアスナが顔を真っ赤にしていたのは余談である

「す、すいません。予行演習に付き合ってもらって
こんな・・・アーチャーさんの店でご馳走まで・・・」

料理を食べ終わり、お礼をいうアスナに切嗣は笑いながら返す

「いやいや、これは僕から君へのお礼だ
神楽坂君みたいな可愛い子とデートできたんだから、そのお礼
だよ」

「か、かわ・・・／＼／＼／＼／＼／＼／」

アスナは切嗣の言葉に思わず赤面してうろたえる
それを外で見ていた人たちは・・・

「アスナも可愛いなく、まるで女の子みたいや」

「お嬢様・・・アスナさんは女の子です」

「アスナさんのあんな顔、始めてみたなく」

「さっすが旦那！俺っちの目に狂いはネエ！！」

「父様も流石だね・・・もしこれ母様が見たら・・・」

イリヤがそう言った瞬間、ふいに後ろから声がする

「私が見たら・・・どうなの？イリヤ」

『!？』

後ろを振り向くと、そこには黒いオーラを放出しまくっているアイリがいた

「かっかかかっかかkkっか母様!？」

「切嗣もひどいわよねえ・・・」

私とのデートじゃあんなこと言ってくれなかったのに・・・」

「ご・・・ごめん、姉さん。俺じゃ止められなかった・・・」

アイリに襟首をつかまれ、引きずられている士郎が謝る

「か、母様・・・これは友達のデートの練習で・・・」

相当ビビりながらもアイリに説明をするイリヤ
その顔は青ざめ、冷や汗がダラダラと流れ落ちている

「そう・・・それならしょうがないわね
切嗣を殺すのはそれが終わった後にするわ」

「ちょっ!?! 母さん、殺すって・・・」

虚ろな瞳で告げるアイリに突っ込む士郎

「あ、それならいいよ」

「なんでさっ!?!」

それを普通に肯定して返すイリヤに士郎は戸惑う
そんなこんなをしている間に、切嗣たちが喫茶店から出てきた

その後を物陰に隠れながら追跡するイリヤたち

だが、しばらく歩いているとアスナが喫茶店の方を見て立ち止まる
その視線の先にはタカミチとしずなの2人が笑いながら話している
光景があった

「ちょっと・・・あれはまずいんじゃない？」

イリヤがそう言った瞬間、その光景を見たアスナは突然走り出そうとする

だが、切嗣はそれをアスナの手をもって引き止めた

ー
ブチィッ

「フ、フフフフ、ウフフフフフフフフフフ」

アイリは俯きながら笑い出し、体から放出されるオーラが数倍に増えた

「か、母さん・・・？」

士郎はおそるおそる声をかける

「ごめんね、練習が終わるまでは我慢しようと思ってたんだけど・・・もうゲ・ン・カ・イ♪」

そう言うとアイリは切嗣に向かって真っ直ぐに走り出した
アスナは切嗣の制止を振り切って、駆け出している

「やばい！！旦那はもう無理だ！！」

兄貴は旦那の変わりに姐さんを追ってくれ！！」

「わかった！！！！」

「認識阻害結界をかけて・・・と、これでよし！！」

「よくないだろ！？父さん殺られる前提じゃねえか！！」

カモの言葉にネギはアスナの後を追いかけて
イリヤは淡々と認識阻害結界を切嗣の周りにかけていた

そんな光景を見た木乃香は刹那に言う

「せっちゃん、恋愛って怖いな・・・」

「そうですね・・・」

Ⅰ オマケ 衛宮家

アイリから肅清を受けた後、家に帰るために切嗣はアイリに引きずられていた

「・・・父さん、生きてるか」

「・・・・・・・・。」

士郎の問いに切嗣からの答えはない

「返事が無い。ただの屍のようだ・・・」

「姉さん!! 洒落にならないからやめてくれ!!」

Ⅰ オマケ2 アスナとネギ

「大丈夫、ダメでもちゃんと告白はするわよ。ありがと、ネギ」

「アスナさん・・・」

「ところであんた、何でそんなブカブカの服着てんの？」

「い、いやこれは・・・追ってくる途中で魔法がとけて・・・」

「は？」

波乱のデート予行演習2（後書き）

龍真「さあ、デート偏も終了し、皆様の予想通り切嗣死亡です!!」

（笑）

もうすぐ学祭偏、敵は超一派ということですが・・・

このままだとサーヴァント陣がいるので戦力違いすぎね？

という問題点が発生してしまったわけです」

イリヤ「後先考えずに話をかくからそんなことになるのよ」

龍真「ウグッ!？」（グサツ!）

イリヤ「で、どうするの？」

龍真「こ、このままじゃまずいので・・・

サーヴァント陣を誰か超一派にでもつけようと」

イリヤ「それにしても誰をつけるかが問題よね」

龍真「とりあえず2人はどっちにつくか決定してるんだけど・・・

他のメンバーは読者の皆様の意見も取り入れて考えようかと思ってる」

イリヤ「と、言うことらしいので少しアンケートをとろうと思います

このサーヴァントはどっち側につきそうだなとかを

できればいいので感想にかいていただければ嬉しいです」

龍真「では次回「世界樹の真相と子供メンバーと年齢詐称薬」お楽しみに」

子供メンバーと年齢詐称葉

麻帆良祭も迫り、現在ネギたち3-Aはお化け屋敷の準備に追われていた

「もう無理。間に合わないようっ!!」

「あああ 間に合いませんわ!!
だからもっと早く決めるべきだと言ったのに・・・」

「まあまあ、締め切り前の修羅場は落ち着かなきゃ駄目だよ。いいんちよ」

「ハルナさんは落ち着きすぎです!!!!!!」

その光景をみながらイリヤや刹那、セイバーなどは淡々と作業を続けていた
やはり裏に精通している者は落ち着きが違う

「こんにちはー皆さんどうですか?」

そこにネギが教室の扉を開け入ってきた

「ちょうどいい所に！！ネギ君手伝って」

「まあ、ネギ先生に手伝わせるなんてとんでもない！！
先生はまだ一年目なのですからゆっくりしててくださいね」

目を光らせながら手を握ってくるいいんちよにネギは苦笑いで答える

「あ、そうだネギ君

私達、学祭でライブイベントにでるんだよ」

「よかったら来てね。はい、チケット」

その光景に他の者たちの目が光る

（そうかここでデートに誘っても妨害は必至・・・）

（ならば部活のイベントにさりげなく誘って・・・）

（そういえばシロウとのデート、どこをまわろうかな）

（学園祭とやらでは美味な食べ物もでののでしょうか？）

全員がネギとのデートのために、行動を進めようとしていた一部、まったく関係ない思考を持っている者もいるようだが・・・※ちなみにアーチャーはデートの約束など知りません

（そ、そうだ。高畑先生を誘うんだった・・・）

一方アスナもタカミチをどうやって誘うか悩んでいたその間、ネギは生徒たちにもみくちゃんにされてしまっている

その後、ネギたちは休憩時間に後者の外で休んでいた

「のんびりできるかと思ったら結構予定が多くなってきたなこりゃスケジュールたてねえとまずいかもしれないぜ。兄貴」

「エヘヘ」

スケジュール帳を開きながら言うカモ
ネギはそれに嬉しそうに答える

「でも、流石に3日間もあるから大丈夫じゃない？」

「もともとクラスの出し物は全部行くつもりだったし・・・
何ていっても僕はクラスみんなの担任だからね」

「お、えらい。ネギ君」

ネギのいった言葉を朝倉が褒めているとどこか達から声がかけられた

「あ、あのーネギ先生・・・」

「どうしたんですか？のどかさん」

「と・・・図書館島探検部でイベントがあるので是非きてくださ
いっっ！！！」

顔を真っ赤にしながら言うのどか

その言葉に後ろにいたハルナと夕映はずっこけてしまった

「そうじゃないでしょ！のどか！！！」

「早く言うです!!」

「え、えっと・・・その・・・
が・・・学園祭、一緒にまわりませんか？」

のどかは赤い顔をしながらネギに言った
それにネギも少しだが照れてしまっている

「きゃーっ!! すいません!!」

「のどかさーん!？」

恥ずかしさが限界に達してしまったのか
のどかはその場から逃げ去ってしまい、ハルナと夕映もその後を追
った

その後も茶々丸から野点に誘われたのだが
のどかと同じように茶々丸も同じように逃げ去ってしまった

「ど、どうしたんでしょう? 2人とも・・・」

「鈍いな。兄貴」

「何で!?!」

何故かカモに鈍いと言われ、困惑するネギ
アスナと朝倉はそんなネギを見て少し呆れたようだった

「オーイ!! ネギーっ!!」

「ん?」

ネギは誰かに呼ばれ、声のした方を向くと
小太郎と士郎、オマケにギルがこちらへ向かってきていた

「格闘大会の締め切りもうすぐやで
俺らも出るんやし、はよ申し込みに行こーや!!!!」

「ええっ!?! 出ないよ僕!!」

いつの間にか自分が大会に出場する事になっていて驚くネギ

「なんやて！？せっかく戦えるチャンスなのに！！
それに士郎もでるのにお前だけ出んつもりかい！！！！！」

「え？士郎くんもでるの？」

「ああ、まあ小太郎に誘われてな
それに自分がどれくらい戦えるのか興味あるし」

「そっか・・・ギル君は？」

「僕は出場しませんよ
その大会、武器は禁止だそうですしね」

話を聞くと、小太郎と士郎は出場するがギルは出ないらしい
理由は武器の使用が出来ないのとめんどくさいらしいから

ネギはどちらにするか悩んでいたが「腕試しできるんだし、でてみ
ようぜ。兄貴」
というカモの言葉に出場する事を決めた

その時、賞金10万円と聞いたカモの目が\$に変わっていたのは言
うまでも無い

「けどな。1つ問題があるんや」

「問題？」

小太郎の言葉にネギは頭の上に？を浮かべる

「12歳以下は子供の部になるみたいでな
俺らが子供相手にしても弱い者いじめみたいでつまらんやろ？」

ネギは小太郎の言葉に納得したような表情を浮かべる
自分や小太郎、それに士郎も一般人、それも子供と勝負しても勝負
にならないからだ

「ふふん、それならいい考えがあるぜ」

「おお、なんかいい方法あるんか！？」

「カモ君・・・いい方法ってまさか・・・」

カモは青と赤の飴玉が入ったビンを取り出して小太郎たちに説明する

「よっしゃ！これで俺らも大人の部で出れるな！！」

「魔法ってこんなもあるのか」

「幻術で戻るんだったら大丈夫なのかな・・・」

カモの説明を聞いた子供メンバーの感想

ちなみに上から小太郎、士郎、ギルの順である

ギルはもし、自分が年齢詐称薬を飲んだ時の事を考えていた
幻術だったら性格までが変わらないと思うのだが、やはり少し心配らしい

カモは子供メンバーを引き連れ、どこかへと走り去っていく
その光景をアスナと朝倉は笑いながら見送っていた

「アハハ、男の子にも女の子にもモテモテだね」

「・・・ホントね。」

じゃあ私達も部活の準備n「あ、いたいた。アスナー!!」?

「あれ?どうしたの2人して?」

誰かと思って振り向くと声の主はクラスメイトの和泉亜子と釘宮円だった

「あ、あんな・・・ちよつと聞きたいことが会って・・・」

「こないだネギ君に似た髪型の美形に会ってさ

アスナのこと探してたから知り合いなのかと思って」

（美形？それもネギに似た髪形の？

あ！！！予行練習の時にそういえばネギが魔法で変身してたって言うってたっけ・・・）

「もしかして・・・アスナの彼氏？」

「ち、違うわよ！！あれは・・・ネギの従兄弟っていうか・・・」

不安そうに聞く亜子に一生懸命に説明しようとするアスナだがそこにタイミング悪く、ネギたちが帰ってきた

オマケに全員が年齢詐称薬で大人バージョンである

「もう、2人とも強引なんだから・・・」

「ハハハ、でもこの薬すごいな」

「ところで何で泣いてるんだ？ギル」

「大人の姿になっても慢心しない・・・」

涙を流して感動しているギルに士郎たちは訳がわからず困惑している
するとネギがアスナたちの他に亜子たちがいることに気がついた

「あ、釘宮さんに亜子さん。お疲れ様です」

「え・・・なんでうちの事・・・」

「三人増えた・・・」

アスナは放心していたが、ネギの言葉を聞くとすぐさまネギの腹に
肘をいれる

（バレたらどうすんのよ！！馬鹿ネギ！！！！！！）

(はうあっ!! そうでした!!!!)

ネギはアスナの言いたいことがわかったのか咳払いを一つして

「ど、どうも始めまして。アスナさんから話は伺っています
え・・・えっと、ナギ・スプリングフィールドっています」

「あ・・・は、はい」

(うゝん。確かに美形・・・。だけど、後ろの黒髪の人のが好み
かも)

「こ、これつまらないものですが!!
ぜ、ぜぜぜひ来てやってくださーいっ!!!!」

「つまらないものって・・・」

顔を真っ赤にしながらチケットをさしだす亜子
それをネギが受け取ったのを見ると走ってどこかへといってしまった

「よろしく願いますね
そっちの彼らも是非来てみてください」

「は、はい・・・」

「俺らもか？」

「みたいだな・・・」

いきなり走り出す亜子を見て
ネギは何故みんな去る時に走りながら去っていくのか疑問に思っ
ていた

「まったく・・・毎年毎年準備なんかやってられるか」

「あら？ 私は始めてだし結構楽しいわよ。セイバーは？」

「そうですね、私も楽しいですが・・・」

準備もひと段落し、休憩のために外に出てきたセイバーとエヴァそ
れにイリヤ
彼女達は階段を下りてくる途中、ネギたちを発見すると驚きなが
らも駆け寄った

「ナ、ナギ!? お前どうしてここにいる!?!」

「士郎!?! いつの間にこちらの世界にきたのですか!?!」

「すごい!?! この人士郎にそっくり!?!?!」

三者三様の言葉を言いながらネギたちに詰め寄る
ネギと士郎はそれに驚きながらもエヴァたちに状況を説明した

「が・・・ぐ・・・なんだ幻術か」

「そうですよね、士郎がここにいる訳ないですし」

「すごい!?! 士郎かっこいい!?!?!」

説明を聞き、あからさまに落ち込むセイバーとエヴァ

それにたいしてイリヤは士郎の大人バージョンを見てはしゃいでいた

その後、セイバーとエヴァはネギたちが格闘大会に出る事を聞き

「それなら私もでしょう。弟子の成長に興味があるからな」

「それなら私も出場しましょう。どうせ暇だったのでちようどいいです」

ネギたちに大会に出る事を告げるエヴァとセイバー
それを聞き、ネギたちは真っ白になっていたという・・・

子供メンバーと年齢詐称葉（後書き）

龍真「まさかのセイバーも大会出場！！」

この分だとランサーたちも出そうだな・・・」

アーチャー「ランサーの性格だったら間違いなく出るだろうな」

龍真「大丈夫かな？アル・・・もといクウネル」

アーチャー「誰だそれは？まあいい・・・」

では次回「麻帆良祭 開催！！」お楽しみに」

閑話 弓兵 危機一髪

・・・どうしてこうなった

「アーチャーさん!! もう観念して出てきなさい!!」

どうしてこうなった

「シロウく恥ずかしがらずに出ておいで」

どうしてこうなったあああああっ!!!!!!

時刻は6時、もうすぐ夕食の時間であろう時に路地裏を駆け抜ける一つの影があった

背は170前後、白髪に褐色の肌をした高校生ぐらいの男性である服はTシャツとジーンズとごく普通の格好だがその顔には冷や汗があふれ出している

彼は思った。何故自分はこんな状況になっているのだろうかとその答えを得るには1時間ほど前に時を戻さなければならぬ

1 一時間前

「ねえねえ、シロウ」

「なんだね？イリヤ」

喫茶店・冬城にあるカウンター席

イリヤはそこに座り微笑みながらアーチャーに話しかける

「これあげる。」

友達からもらったんだけど・・・シロウにプレゼント♪」

アーチャーはそう言いながら差し出されたイリヤの手を見る
そこにはラッピングされた青い飴玉が一つ乗っていた

「飴玉？」

「私はダイエット中だからさ。よかったらシロウが食べて」

アーチャーは差し出されたそれを受け取り、イリヤを見る

「ダイエットって・・・」

君はそんな事する必要がないように見えるのだが

第一、飴玉一粒くらいではあまり変わらないと思うぞ？」

それにイリヤは少し驚きながらも頬を染めながら言う

「やだ・・・シロウったら／＼／＼／＼／

そのままの君が好きだからダイエツトする必要がないだなんて・
・・」

「いや、そこまでは言っていないのだが・・・」

無論その言葉はイリヤの耳には入らず

そんなイリヤの様子を見たアーチャーは呆れていた

「まあ、せつかくの貰い物だ

ありがたく受け取っておくでしょう」

その後、イリヤが帰宅してから30分ほどしたところ
何故か客が途絶え、暇になったアーチャーは椅子に座りくつろいで
いた

「急に暇になったな・・・」

アーチャーの眩きは当然だ

夕方にイリヤが帰ってから30分間、1人の客も来ないのだ

窓の外を見てもここの店以外は客も入って賑わっている

なにか自分の店に落ち度があったのではないかと急に心配になってきた

ふと、イリヤから飴玉をもらっていた事に気づき

アーチャーはポケットに手をいれ、飴玉を取り出した

「・・・ふう、考えていてもしかたないし

イリヤからもらった飴でもなめて気分転換でもするか」

そうしてアーチャーは飴玉のラッピングをとって口に含んだ

口に含んだ瞬間、煙につつまれアーチャーは何事かと警戒する
だが、周りに異常は見られない。いつもどおりの風景だ

・・・しかし、妙な違和感が一つ

自分の視点が低いのだ。それに手や足も服の中に入ってしまったている

疑問に思ったアーチャーはトイレの鏡に移った自分の姿を確認して
眩く

「・・・なんでさ」

アーチャーは頭を抱えた

鏡に映っているのは自分ではなかった

いや、確かに自分ではあるのだが・・・この世で最も嫌いな存在

髪や肌の色はそのままだが、その鏡の中には

セイバーと共に聖杯戦争を駆け抜けた

まだ未熟だった頃の・・・一番嫌いな自分の姿が映し出されていた

なんで！？なんでよりによって衛宮士郎の姿に！？

時が巻き戻ったのか！？いやでもなんでそんなことに・・・

しかし・・・いつ見てもこいつの顔はむかつかない！！！！

いいか、衛宮士郎！！貴様のような偽善者など理想を抱いて溺死しろ！！

・・・・・・って、鏡に向かって何を言っているんだ俺はあああああ！！！！

※アーチャー、絶賛混乱中

prrrrrrrrr (電話の着信音です)

「ハッ!？」

いきなりなった電話の音に驚くアーチャー

息を呑み、震える手で受話器を取ってその電話に答える

「・・・もしもし？」

そう答えたところでアーチャーはあることに気づく

今の自分の姿は衛宮士郎。当然、声も衛宮士郎の声である

しまったあああああ！！何やってるんだ俺は！？

「あれ、そこって冬城だよね？」

なんで士郎が電話に？シロウはどうしたの？」

電話の相手はイリヤだった。何故こんな姿になったのかはわからない
だが、自分の今の姿を・・・特に衛宮家にだけは知られるわけには
いかない

アーチャーは決意を決め、嘘をつくことに罪悪感を感じながらも電
話に答える

「あ、ああ姉さん。いや、少し友達と帰りに寄ってみてさ

・・・そんな事より、姉さんは？アーチャーに何か用なのか？」

大丈夫か？バレてないよな？大丈夫ですよ？

アーチャーは冷や汗をダラダラと流しながらイリヤの返答を待つ

「あ、そうだ。士郎

年齢詐称薬をシロウが食べたか確認してくれない？」

「年齢詐称薬……？」

アーチャーは始めて聞いたその言葉に疑問を抱く

「なに言ってるの？士郎もこないだ食べてたじゃない？」

あの外見の年齢を成長させたりする飴玉の形をした魔法薬」

……なんですと？

「やっぱりね、私と同じ歳ぐらいのシロウともデートしてみたい
！！

……って思っ。カモに一粒だけもらってシロウに渡してみ
たの」

お前のせいかああああ！！！！

……とアーチャーは思わず叫びそうになったがなんとか耐える

「一般人にばれないためにシロウには悪いけど

冬城に認識阻害結果はっておいたし、魔法の秘匿は大丈夫よ♪」

・・・客が来なかったのはそのせいかなあれ？なんだろう目から汗が・・・泣いてもいいよね？

「なんでそんな事したんだ！？
アーチャーだって迷惑してるだろ！！」

少し怒鳴りながら反論した
正直、このぐらいいは許されてもいいと思う

「だからデートするためって・・・
ちょっと待って！シロウが迷惑してるって、もう飲んだの！？」

「あ・・・」

しまった・・・とアーチャーは思ったがもう遅い

「今から冬城に行くから！！
そこからシロウ逃がさないで！！いいわね！！！！！！」

イリヤはそう言ったのと共に電話が切れた

・・・マズイ。あれは絶対ここにくる

さらに小僧も年齢詐称役を飲んだと言っていたし

私が衛宮士郎と同一人物であるという事が確実にバレるだろう

そう思った私は喫茶店の扉にCLOSEの板をかけ、冬城を脱出した

幸い、学園祭の準備期間中だったので貸衣装屋で服を借り、今に至るというわけだ

何故か追っ手にネギ君やアスナまで加わっているが・・・

ちなみに何故、アスナたちがアーチャーを追っているのかというと単純にアーチャーの同年代バージョンが見たいのと、イリヤに頼まれたからである

だが、追われているアーチャーはそれどころではない
路地裏を走って、走って、走り続ける

しばらく走り続けていると1人の女の子が不良に絡まれている場面に遭遇した

実際、そんなことに構っている余裕はまったく無いのだが
正義の味方を目指しているアーチャーとしては見逃すわけにはいかない

余裕が無い以上、すばやく解決しなければ・・・

アーチャーは不良に接近し、腕の関節を決めて耳元で呟く

「その子は嫌がっているだろう。その辺でやめておけ」

不良から見たら自分の気づかぬ間に、いきなり関節を極められている状態だ

それにアーチャーからの殺気もオマケでついてきている

その不良は恐怖に負け、一目散に逃げ出した

「あ、あの・・・」

ふいに不良に絡まれていた女の子から声かけられた

「助けていただいて、ありがとうございました

私は大河内アキラっています。あの・・・あなたは？」

「お礼なんていいよ。当然のことだし

えっと・・・俺の名前は衛宮士郎っていうんだ」

アーチャーはどう答えるか少し悩んだ。

だが相手が名乗った以上、こちらも名乗らないと失礼だし・・・別に知り合いじゃないから名乗っても大丈夫だろうと思い、そのまま本名を名乗った

だが・・・これが後々、大きな誤解を生む事をアーチャーは知らないその後、しばらくアキラと談笑していたが路地裏の外を見てアーチャーは焦った

「イ、イリヤ・・・」

「え・・・？」

アキラはアーチャーの言葉に視線を路地裏の外に移すとそこには自分のクラスメイトであるイリヤが誰かを探しているようだった

「知り合いなんですか？」

「え、ああ一応・・・」

ごっ、ごめん。大河内さん見つかるはずいから！！じゃっ！！！！」

そういうとアーチャーは凄まじいスピードで逃げ去った

それを見送りつつ、アーチャーの背中を見ながらアキラは呟く

「衛宮・・・士郎さんか・・・」

自分を不良から助けてくれて、親切にしてくれた人
士郎さんと話していたときもすごく楽しかった

（イリヤと知り合いみたいだし・・・

今度イリヤに士郎さんの事、聞いてみようかな）

また会えたらもっと話してみたいな・・・とそう思うアキラであった

これは余談だがアーチャーはその後、薬の効果が切れるまでなんとか逃げ切ったらしい

ー オマケ

「っ!!」

「どうしたの？イリヤちゃん」

「エミヤさん見つかったんですか？」

「いや、なんか今シロウを殺さなきゃいけない気がして・・・」

「「は？」」

閑話 弓兵 危機一髪（後書き）

龍真「今回はなんかいろいろフラグが立つ話でした
しかし、イリヤさん・・・どんどん黒くなっていくような気が」

アーチャー「・・・なんでさ・・・なんでさ・・・なんでさ・・・
なn（ry）」

龍真「どしたの？あれ」

セイバー「今回の話で士郎の真似をしたので自己嫌悪らしいです」

龍真「大丈夫かな？」

セイバー「そろそろ壊れるんじゃないですか？」

アーチャー「体は嫌悪で出来ている

血潮は止まり 心は鬱

彼の者は常に独り 自己嫌悪で鬱になる・・・」

セイバー「なんか詠唱始めましたよ」

龍真「すごい詠唱だな、オイ」

アーチャー「この体は無限の嫌悪で出来ていたああああ←←」

龍真「テンション低っ!？」

セイバー（・・・だめだこいつ。早くなんとかしないと）

閑話 聖杯（れんあい）戦争勃発!?

「はぁ・・・」

ここは麻帆良学園女子中等部3年A組の教室

学園祭の準備で騒がしいこの場所で大河内アキラはため息を吐いていた

「衛宮・・・士郎さんかぁ・・・」

ふいに出たその呟き

だが、周りにいる三人はその呟きを聞き逃さなかった

「ほほう、衛宮士郎さんとな」

「誰、それ？アキラの恋人!？」

「アキラ好きな人おるんか!？」

その三人、ユウナ、まきえ、それに亜子の三人は作業を止め、アキラに詰め寄る

「ん？アキラ。ちょっといい？」

「な、何？」

「衛宮って苗字、イリヤちゃんと一緒じゃない？」

ユウナがもつともな疑問を口にする
他の2人もその事は気になっていたのかウンウンと頷いていた

「たぶん知り合いだと思うよ。イリヤの名前呼んでたし」

「ってことは親戚かなにかか・・・。

よし、イリヤちゃんに衛宮士郎さんの事を聞きに行こう」

ユウナはそういつて席を立とうとする

流石は運動部、考え付いてからの行動が早い

無論、アキラはそれを防ごうとしたのだが・・・

「亜子、まきえ、・・・GO!!」

リヤちゃん？」

ユウナから発せられた衛宮士郎という言葉にイリヤとセイバーが反応する

イリヤは俯きながら肩を震わせ、セイバーは呆れている

「どっちの・・・」

「へ？」

「どっちの士郎？」

震える声でイリヤはユウナに聞く
その背中には黒いオーラが見え隠れしているがユウナはそれに気づかない

「どっちって言われても・・・」

アキラから聞いたのだと年上っぽくて白髪の人らしいよ？」

シロウの方に決定だ。まだ士郎のほうなら許せた
だが、弟である士郎ではなく自分の恋人(?)のシロウの方だった

イリヤは幽鬼のように立ち上がると不気味に笑う

「フフフフフフフ、ウフフフフフフ」

その笑い声にクラスの視線がイリヤに集まる

だが、その大半はイリヤの姿を見ると同時に腰を抜かしてしまった刹那にいたってはトラウマを思い出し、木乃香に半泣きで抱きついている

「そう・・・またなんだ・・・」

私がいるのにシロウったらまた浮気かぁ・・・

やっぱり一度■してみなきゃわからないのかなぁ」

そう呟くとイリヤは腰を抜かしているユウナの隣を通りアキラへと向かう

ゆっくりと近づいてくるイリヤに亜子とまきえは腰が抜けて立てないでいた

アキラも冷や汗を流して震え、その場から動けないでいた

「ねえ、アキラはシロウの事好きなの？」

そのイリヤからの問いにアキラは戸惑うが

今の状態のイリヤに嘘をついたら危険だと思ったのか頬を染めながら静かに頷いた

それを見た瞬間、イリヤの手の中にあった金槌の柄が粉々に砕け散る

『ひひひひひひひひひひ!?!』

イリヤの様子にクラスメイトは恐怖し、壁へと後ずさった
龍宮やエヴァでさえも冷や汗を流しながら教室の隅に移動する程である

「どどどどど、どうしたんですの？イリヤさんは!!」

「いや、ちょっと色々あって……」

「こ、これは少し危険ではござらんか？」

「大丈夫だ。……たぶん

ところで近衛、お前の腰に抱きついている刹那はどうしたんだ
？」

「なんや怖い事思い出したらしくって……」

「イヤ、イヤやゝ。ヤンデレ怖いゝ、えぐっ、このちゃんゝ」

イリヤに恐怖する3－Aの面々

「でもね・・・アキラ

シロウは私の彼氏なの？だからアキラとは付き合えないわよ？」

イリヤが勝ち誇ったようにアキラに宣言する

「そ・・・んな・・・」

アキラは自分の想い人がイリヤの彼氏という事にショックを隠せないようだ

落ち込んでいるアキラに追い討ちをかけるようにイリヤは傲慢を続ける

「それにシロウは私の事大好きなんだよ

だから絶対に私以外の女になんか興味ないもん」

これがいけなかった

いくら大人しいアキラでも、流石にこれだけ言われれば黙ってはいない

静かに怒りを燃やし、イリヤに反撃を開始する

「それってイリヤが勝手に言ってるだけじゃない？」

「何ですって？」

まさかあの状態のイリヤに

アキラが反論すると思わなかったので、クラスの面々は驚愕してアキラを見た

「だって士郎さん私と2人きりでいた時、イリヤから逃げてたんだ
もし、イリヤの事がほんとに好きなら・・・逃げるわけないじゃないか」

2人きりの部分を強調しながらイリヤに言うアキラ

「・・・・・・・・。。。」

それに対してイリヤは無言のまま、携帯をとりだして電話をかける

「ハイ、こちら喫茶店・冬城・・・」

「あとで■しに行くから」

「は！？ちょ、ま・・・イ r 「ブチイツ！！」」

電話を切るとアキラを睨みつけるイリヤ
それに対し、負けじとアキラも睨みかえす

教室の空気が剣呑とする中、教室の扉が開く音がした

「みなさん！！助っ人連れてきました！！！！」

「・・・助けになるかはわからないがよろしく頼む」

そこには板や材木などの大道具を運ぶのに
女子の力では大変だと思い、助っ人にバーサーカーを連れてきたネ
ギが立っていた

『ネギくん！！！！！！』

早くこの空気から抜け出したかったクラスのメンバーは我先にとネ
ギに飛びつく
アキラとイリヤも流石にこの空気では続けづらかったのか

「続きはシロウの前で話しましょうか・・・」

「そうだね・・・」

と、放課後に冬城で続きをする事にしてその場はお開きとなった

そして、喫茶店・冬城

「うわあああああ！？放せ、バーサーカー！！放してくれ！！！」
「！」

「すまん。私も逆らえんのだ」

アーチャーはバーサーカーに羽交い絞めにされている
必死に逃げようとするが、力でバーサーカーに対抗できるわけも無
かった

そこにイリヤがゆっくりと近づいてくる

「シロウ・・・覚悟はできてる・・・？」

「私が何をしたあああああ!？」

そんな様子をアスナたちは隅のテーブルに座りながら見つめている

「贗作者、今度はいったい何をしたんですか？」

「またいつものフラグ乱立です」

ギルの問いにセイバーが即答する

「またですか・・・」

「それより、ギルガメッシュ

私はこのケーキのおかわりを要求します」

「わかりました。アスナさん達にご注文ありますか？

贗作者があれなので簡単なものしか作れませんが・・・」

「じゃあ、私はこの季節のフルーツタルトで」

「ギル君、ウチもそれで」

「了解しました。しばらくお待ちください」

ギルはそういうとショーケースから注文の品を皿に乗せて運ぶ
ちなみに喫茶店・冬城ではケーキなどのデザートのお持ち帰りもや
っています

そんなほのぼのとした景色の横ではアーチャーが命の危機に瀕して
いた

「来たよ・・・イリヤ」

「そう、じゃあシロウも入れて三人で話しましょうか」

店の扉が開き、アキラが入ってくるとイリヤはアーチャーを席に座
らせる

「それで、士郎さんは？」

『へ？』

アキラが言ったその言葉にイリヤたちは目を丸くする

「何言ってるの？目の前にいるじゃない」

イリヤはそういいながらアーチャーを指でさす

アキラはそれに首を傾げ、意味がわからないといった様子だ

「私の言ってる衛宮さんはもっと若い人だよ

だいたい高校生ぐらいの歳だったと思うし・・・」

アーチャーはその言葉でようやくアキラの事を思い出した

（あ、思い出した！！年齢詐称薬の時に助けた女の子か

マズイ！！もしイリヤにあの時の姿のことがバレたら・・・）

そこからは静寂があたりを包んだ

妙な空気が流れる中、それに耐えられなくなったのか

「ひ、人違いみたいだし私は帰るね。今日はごめんね？イリヤ」

そう言ってアキラはそそくさと立ち去ってしまった

「人違い・・・か」

イリヤはそう呟くとアーチャーの隣に座る

「イ、イリヤ？」

アーチャーは恐る恐るイリヤの顔を覗き込む

「よかったあ・・・」

そこには安堵の微笑みを浮かべるイリヤがいた

「っ・・・！？／／／／／」

それを見て、思わず赤面するアーチャー

「どうしたの？シロウ」

「い、いや何でもない」

「?」

そのまま上目遣いでこちらを見てくるイリヤにアーチャーは思わず顔を逸らす

(言えない・・・一瞬かわいいと思ってしまったとは・・・)

そのアーチャーの態度にイリヤは首を傾げるが
アスナたちはそんなアーチャーの態度を見て微笑んでいた

こうして聖杯戦争は終わりを告げた

閑話 聖杯（れんあい）戦争勃発！？（後書き）

龍真「さあ、次から本編に入ります」

ランサー「やつとかよ」

キャスター「私達の出番もよこしなさい」

龍真「キャスターとライダーにはちゃんと見せ場があるから安心しなさい」

ランサー「おいおい、俺の方もしっかりしてくれよ？」

龍真「まかしとけ！」

麻帆良祭 開催!!

「すげえな・・・こりゃ」

ランサーは目の前に広がる風景に思わず眩いてしまった

彼の目に映るのは数え切れないほどの老若男女さまざまな人間達

ランサーとタカミチがいる大通りも

麻帆良の一大イベントである学園祭に集まった人々で溢れかえっていた

「ははは、こんなものはまだ序の口ですよ

最終日の世界樹が発光する時はもっと凄い人数になりますから」

タカミチが笑いながらランサーにそう言う

それをランサーは「もっと人数が増えるのかよ」と苦笑いで返していた

現在、ランサーたち広域指導員組はパトロールをしていた

告白阻止はバーサーカーと小次郎組、ランサーたちは警備の仕事だ

しばらくブラブラと歩いていたランサーとタカミチだが

ある店の前を通り過ぎようとした時、いきなりランサーが立ち止まった

「・・・・・・・・ッ!？」

ランサーは冷や汗を流しながらその店の看板を凝視する
目は見開き、体は震え、少しずつ後ずさるランサーにタカミチは困惑する

「どうしたんですか？ いったい何が・・・」

タカミチもランサーの視線を追うと

そこには赤い板に金色の文字で「中華料理・泰山」と描かれていた

タカミチは首を傾げた

どこから見てもただの看板だが、なぜこんなにランサーは怯えているのだろうか

ランサーは恐怖する

出来れば二度と見たくなかった店が今、目の前にあるのだ

思い出される記憶は綺礼やカレン、それにマーボーとかマーボーとかマー（ry

ランサーはその場で頭を抱えて絶叫した。そう、それはもう盛大に

「あああああああああああああああ!!!!!!」

「!？」

いきなり叫びだすランサーにタカミチは驚愕した
英雄クーフリーンが頭を抱えて、道路を転げまわっているのだ

その後、ランサーが正気を取り戻すまでは1時間ほどかかったという

「・・・ん？」

「どうしたんですか？ネギ先生」

「今、ランサーさんの叫び声が・・・」

ここは上空を飛んでいる飛行船、その中にネギと刹那は乗っている
ランサーの叫び声を聞こえたような気がして
周りを見回すネギだが、「気のせいか・・・」と椅子に座りなおす

「ごきげんようアル、ネギ坊主」

「うひゃいっ!？」

座りなおした瞬間に声をかけられ、ネギは驚きながら後ろを振り向く

「ちゃ・・・超さん？」

「アイアイ、それでネギ坊主

私があげたカシオペアは使ってくれたアルか？」

「カシオペアってこれの事ですよね

はい！！こんな凄いものを貸していただいてありがとうございます
ます」

ネギはカシオペアを取り出し、超に微笑みながらお礼を言う

「それと説明書を渡しておくから

後は好きなだけネギ坊主が使うといいね

あ・・・それと刹那さんには少し話があるのだけどイイか？」

超がそういった瞬間、刹那の目つきが変わる

「ああ・・・」

刹那はそう頷くと、超と一緒にネギとカモから離れる

ある程度、距離が離れると超が振り返り刹那の方を向いた
その瞬間、刹那は警戒して仮契約カードを取り出す

「ふふ・・・そんなに警戒しなくてもいいネ
ネギ坊主に危害を加えたりなんて事は考えてナイヨ」

「どうだかな・・・貴様は信用できん」

「本当ネ。火星人は嘘つかないネ」

「戯言を・・・貴様の目的はなんだ？」

刹那は殺気を出しながら超に聞く
超はその殺気を受けながらも、余裕といった表情だ

「それはいいないネ。でもネギ先生に危害は加えない
・・・血のつながった人に私がひどい事するはずないネ」

「貴様・・・それはどういう意味だ」

「これ以上は答える義務はないヨ」

静寂が場を包む。だが、刹那は警戒を緩める事はしない
もし、超が不審な動きをすればいつでも取り押さえられるようにしていた

それをわかっているのか、いないのか超も動こうとはしない
膠着状態が続き、しばらくして超が口を開いた

「もう、着陸の時間ネ。それでは私はいくヨ」

「・・・・・・・・・・。」

刹那は動かない。いや、動けなかった

本当ならばこの場で取り押さえ尋問してやりたいのだが
何故かはわからないが、動いてはならないと自分の直感が告げている

故に刹那は去っていく超の背中を見送ることしかできなかった

「超・・・・鈴音・・・・」

刹那は超が去っていた方を見てそう呟き、ネギの元へと向かった

「たすかったネ。危うく取り押さえられるかと思ったヨ」

超は立ち止まると隣の通路に向かってそう言った

「挑発も程々にしたまえ。

万が一、君が取り押さえられてしまつては

我々の計画の全てが水の泡となってしまうのだぞ」

その通路から人影が現れ、その人物は超に向かって注意を促す

「そのための用心棒ではないのか？

今みたいに取り押さえられそうになたら

私をまた守ってくれるネ？正義の味方サン」

「今の私にその名を使う権利はないな

ここに立っているのは

その理想を一度捨ててしまった愚かな弓兵だ」

「連絡はまた追つてするネ。また後でネ、アーチャー」

「ああ・・・」

超が去った後、アーチャーは壁に背を預けて息を吐き呟く

「セイバーやイリヤには・・・怒られそうだな

切嗣^{じいさん}、俺は正義の味方と呼ばれるには程遠いよ

これから俺はこの世界の人々の日常を奪う協力をするんだから・

・・・」

その独白の後、紡ぐのは自分の心にあるたった一つの詩

体は剣でできている

血潮は鉄で心は硝子

幾度の戦場を越えて不敗

ただ一度の勝利もなく、ただ一度の敗走もない

彼の者は常に独り、剣の丘で鉄を撃つ

故にその生涯に意味はなく

この体は・・・無限の剣でできていた

麻帆良祭 開催!! (後書き)

龍真「というわけでアーチャーは超側につきました

超側につくのはサーヴァント陣であと2人です」

セイバー「ちなみに残りは学園側につく予定ですな」

ランサー「どういった勢力になるのか楽しみだぜ」

龍真「では次回は・・・」「デートの果てに!？」「お楽しみに」

暇をもてあましていたアーチャーはとりあえずイリヤの申し出を受ける事にした

「ほんと！？じゃ、じゃあ・・・今からそこに行くから待ってて」

「ああ、ではまた後でな」

そう言って、アーチャーは携帯を閉じた

学園祭の始まる10日前、超に計画の協力を頼まれた時の事を思い出す

計画の目的を超に聞いた時、それは間違っていると言いたかった

自分の目的、そのために過去・・・歴史を変える

英霊エミヤならそれを肯定し、衛宮士郎ならばそれ否定しなければならぬ

自分は答えを得た・・・だから否定しなければいけなかった
だが、超の目的、その計画を否定する事ができなかった

だからといって、それを素直に肯定する事もできない
アーチャーは悩んだ。自分はいったいどうすればいいのかと

そして・・・

「シロウ？」

「はっ……？」

気づくと目の前には自分の顔を覗き込んでいるイリヤがいた
……どうやらずいぶんと時間がたっていたようだ

なんでもないと返事をするアーチャーだが

イリヤの格好を見て固まってしまった。いや、見惚れてしまったのだ

現在、イリヤは白いワンピースの上にジャケットを羽織り

頭には麦わら帽子といったいかにも可愛い格好をしていた

「ど、どうかな……／＼／＼／＼／」

顔を染めながらアーチャーに聞くイリヤ

そんなイリヤを見て、アーチャーは微笑みながら返す

「とても似合っている

恥ずかしながら少し見惚れてしまったよ」

微笑みと共に返されたその言葉にイリヤは茹蛸のように真っ赤になる

「では行こうか、イリヤ」

そう言いながらイリヤに手を差し伸べるアーチャー

「・・・うん／＼／＼／」

イリヤは少し戸惑いながらもその手をとる

その後は2人で色々なところをまわった

3Dシューティングやら、フリーフォールなどがあつて驚いたが一番驚いた事といえば、告白生徒を見かけて止めようとした時その生徒を私以外のサーヴァント陣がいきなり同時に強襲した事だろう

無論、その生徒は一瞬で気絶した

英雄7人に威圧感を出しながらいきなり囲まれたら無理もないか・

・
他には麻酔弾とかで撃たれてる人もいたし

そして夕方になり、私とイリヤは2人でベンチに座っている

「楽しかった。ここの学園祭ってすごいね、シロウ」

イリヤは微笑みながら、こちらを向いて言う

「そうだな、私も楽しかった
今日は誘ってくれてありがとな。イリヤ」

「……………」

私がそう返すと、イリヤは私の顔をジッと見つめる

「どうかしたのか？」

「シロウ……なにかあった？」

イリヤは不安そうな顔で私に聞く
本当に私の事を心配して聞いてくれているのだろう

だが、超の計画の事を喋るわけにはいかない

「いや、特になにもなかったが」

無表情でイリヤに返す
嘘をつく事に罪悪感を感じるが、仕方ない

「・・・嘘」

「なに？」

「だってシロウ、今日会った時に泣きそうな顔してた」

・・・ッ！！

これくらいで動揺するな。イリヤには計画の事を気づかれてはならない

もし知られたら、イリヤを捕らえなければならなくなってしまう

「私は泣きそうな顔などした覚えはないのだが・・・

君の勘違いではないのか？イリヤスフィール」

「え・・・」

私がそう言うと、イリヤは目を見開いて私の顔を見る

その顔がとても悲しそうに見えて、自分への苛立ちがつのっていく

「飲み物でも買ってこよう。君はそこで待っている」

「・・・・・・・・。」

イリヤからの返事はなかった。下を俯いていて表情は見えないが震える手で握り締めているスカートの上に、水滴が落ちるのが見えた私は黙ってその場から離れた

「・・・・・・・・くそっ!!」

自分への嫌悪とイリヤへの罪悪感を拳に乗せ、路地裏で壁にそれをぶつける

9を救うために1を切り捨てる
そんな事は数え切れないほどに繰り返してきた

超の計画で世界の人々という9を救うため、イリヤの笑顔という1を切り捨てた
ただそれだけのはずなのに・・・

「俺は・・・最低だ・・・」

とどまる事のない罪悪感が自分を襲う

イリヤは本気で俺の事を心配してくれていた

それなのに、イリヤを泣かせた。泣かせてしまった

もう後には戻れない。俺は・・・

空を見上げると、すっかり暗くなって星が見えていた

そんな時、視界の果てにネギ君と宮崎さんの姿が見えた

そちらに視線を移した瞬間、ネギ君の下から魔力光が溢れ出した

「ちいっ!!」

ネギ君も驚いている以上ネギ君の発した魔法ではないだろう

自分の足を強化して距離を詰め、ネギ君を魔方陣の外に弾き飛ばす
だが、安心している場合ではなかった

「ぐっ、なんだこれ・・・は・・・」

「エミヤさん!？」

ネギ君がこちらに向かって叫んだ瞬間、私の意識は闇へと沈んだ

「エミヤさん!!大丈夫ですか!?!エミヤさん!!」

ネギは魔方阵が消えた後、煙に包まれたアーチャーに向かって叫ぶが、アーチャーからの返事は無い

やがて、煙が晴れるとそこには虚ろな目をしたアーチャーが立っていた

そしてアーチャーはのどかの方を向き・・・

「宮崎さん・・・」

「えっ?」

「キスはフレンチキスとディープキスどちらがいいかな?」

『ええええええええええええ!?!』

アーチャーが言ったその言葉に驚愕するネギとのどか

「ちょ、ちょっと待ってください。エミヤさん!!」

ネギはのどかを庇うように前に立つ

「そこをどいてくれないか、ネギ君

それとも・・・君は私の邪魔をするのかね？」

「エミヤさん！！正気に戻ってください！！！！」

ネギは必死にアーチャーに向かって叫び続ける

しかし、その言葉は正気を失っているアーチャーには届かなかった

「・・・どけ」

「がっ!？」

アーチャーの蹴りがネギの腹部に直撃し、ネギはその場にうずくまる

「先生っ!？」

「では・・・」

アーチャーはのどかの手をとり、力づくで抱き寄せキスしようとする

「いや、いや、いやあああああああ！！！！！」

力でかなうはずもなく、なすすべも無いのどかは泣きながら叫んだ
そして唇がもう少しで触れそうになった瞬間、大量の魔力弾がアー
チャーを襲った
アーチャーはそれをのどかを突き飛ばし、後ろへと跳ぶことで回避
する

「のどかになにしてるのよ……この腐れサーヴァントがあ……
」

キャスターは青筋を立ててのどかの前に立ち、アーチャーを睨む
刹那とアスナもキャスターと同じく、アーチャーを睨んでいた

「やっと本性を現したわね……この変態ロリコン」

「変態め……死ぬ覚悟はできてるんだろうな」

武器を構え、アーチャーに向かって言い放つアスナと刹那
キャスターも手に魔力を溜め、いつでも攻撃できるようにしている
3人の中では完璧にアーチャーの変態の図式が成り立っていた

事実を知っているネギはそれを否定しようとしたが
先程の腹を蹴られたダメージでしゃべる事ができないでいた

そして、そこにパトロール中だったセイバーと士郎も駆けつける

「アスナに刹那？それにキャスターも！？」

そしてアーチャー・・・いったいこれはどうしたのですか！？」

ビルの上から魔力光を確認し
駆けつけたはいいものの、全く状況がつかめないセイバー

「実はカクカクシカジカで・・・」

「何っ！？アーチャーが嫌がるのどこを無理矢理襲っているだど
!!!!!!!!!!」

アスナの説明に驚愕するセイバー

その間に士郎はまだダウンしていたネギに駆け寄る

「お、おい！！大丈夫か、ネギ！！」

「な、なんとか・・・」

士郎に手を貸してもらい、ネギはなんとか立ち上がり
セイバーやアスナに今の状況を（主にアーチャーの面子のために）
説明する

「なるほど・・・そういうわけね」

「ですが、正気を失っているのはアスナたちは危険なのは」

状況を聞いたセイバーたちはどうやってアーチャーを止めるか考える
正気を失っている以上、アスナなどでは危険があるかもしれないか
らだ

「大丈夫よ、セイバーさん。私にいい考えがあるから」

アスナは自信満々にそう告げると大きく息を吸い込み・・・

「あああああ、アーチャーさんが
女の子に無理矢理キスしようとしてるうううう！！！！！」

思い切り、大声で叫んだ
知人に聞かれたらアーチャーの面目丸つぶれである

そして次の瞬間、屋上のドアが蹴破られた

「よし来た!!!!!!」

そこにはアスナの予想通り、イリヤがいた。だが、いつもとは様子が違う
いつもならもっと黒いオーラを纏っているはずなのに今日はそれが無かった

「・・・シロウ」

イリヤは泣いていた。泣きながらアーチャーを見つめている
その姿にアスナたちは困惑し、士郎もどうしたのかとイリヤを心配していた

対して、アーチャーは正気を失っているためイリヤのほうを見向きもしない
それを見たイリヤはその場に座り込んでしまう

「ごめん・・・何か気に触ったのなら謝るから・・・
他の女の子とキスなんかしないでよ・・・そんなの・・・やだよ・・・」

泣きながらアーチャーに謝るイリヤに困惑するアスナたち

それを見て、セイバーと士郎がイリヤに駆け寄ろうとした時
イリヤから闇の矢が放たれ、それが寸分狂わずアーチャーを襲った
それをアーチャーは干将獏耶を投影してはじくが
イリヤから放たれる魔法の射手はどんどん数を増していく

「なんで、私じゃ駄目なの!？」

私だってシロウにキスしてほしいのにつ!!」

イリヤがそう叫んだ瞬間、アーチャーの矛先がイリヤへと変わる

アーチャーは魔法の射手を弾きながらイリヤとの距離をつめ、イリヤを押し倒す

そして、イリヤをその場にそのまま押さえつけた

アーチャーはゆっくりとイリヤに顔を近づけていき、イリヤも怯えながら瞼を閉じる
そして・・・

「させるかあああああああ!!!!!!」

アスナの叫びがそれを遮った

いかにイリヤがアーチャーの事を好きといっても

アスナにとって正気を失った状態のファーストキスなど許せなかった
アスナは近くのを適当に掴んでアーチャーとイリヤに向かって
投げる
投げられたそれはアーチャーとイリヤの顔の間に的確に飛んでいき
そして・・・唇が触れ合った

ここは・・・？そうだ私はネギ君を魔方陣から突き飛ばして・・・
ん？なんか唇にやわらかい感触が・・・

正気に戻ったアーチャーは唇にある感触に戸惑いつつも瞼を開く
最初に目に映ったのは、白い・・・・目だった

「うおおおおお！？」

アーチャーは驚いて、後ろに飛び退く
今まで自分がいた場所を見ると、仰向けになっているイリヤ

そして、その上に白目を向いて気絶している衛宮士郎がいた
え？衛宮士郎・・・じゃあ、あの唇にあった感触は・・・

アーチャーは震えながらセイバーたちの方を振り返る
すると、全員が苦笑いしながら自分から目を逸らした

「・・・・・・・・・・。」

アーチャー思考停止。再開まで5、4・・・3・・・2・・・1

「ウゲエエエエ！！！！エグッ、グエエエエエエ！！！！！！！！」

アーチャーはすぐに排水溝のもとへと移動し、盛大に吐いた

・・・そう、アスナが投げたものとは士郎だったのである！！！！！！

イリヤとアーチャーの間に溝が出来たその日

アーチャーと士郎の間には新たなトラウマができた

デートの果てに!?(後書き)

龍真「さあ、今回はアーチャーとイリヤの仲違い＋士郎とのトラウマです」

セイバー「これが後の話に関係していくんですよね」

龍真「そうそう、そしてアーチャーはどんどん黒くなっていきます
最終日には士郎殺そうとしてたときぐらい歪んでます(笑)」

セイバー「(笑) じゃないでしょう!？」

・・・まあ、いいです。では次回「予選・格闘大会」お
楽しみに」

予選・格闘大会

『え．．．？』

格闘大会の予選に出場するため、龍宮神社にやってきた小太郎とネギだが、そこには大勢の人が集まっていて、2人とも呆然としてしまっていた

事前に夕映にシヨボーイ大会と聞いていたから尚更である

「オイオイオイ、ホンマにここか!？」

「う、うん。確かにここのはずだけど．．．」

「シヨボーイ大会には見えねえけどな」

「ええ．．．しかもここは龍宮神社では？」

大会の出場者と思われる人たちのあまりの多さに驚く3人と1匹

人が集まっている場所を見ると、大きな貼り紙が貼り出されていてそこには「優勝賞金 1000万円」と大きく書かれていた

「ええええ！？1000万円！？」

「ど、どーゆー事や！？」

いきなり、賞金が大幅UPしたことに混乱するネギと小太郎

夕映が近くにいた出場者に理由を聞くと

何者かが大会を買収して、賞金の額を上げたらしい

そこにアスナたちがパトロールを終えてやって来た

「おーい、ネギ」

「あ、みなさん。お疲れ様です

パトロールの方はどうでしたか？」

「大変だったわよ

ていうか、どうしたの？この騒ぎは」

周りが騒がしい事に疑問を抱くアスナ

ネギはアスナに格闘大会の予選と賞金の事を説明する

賞金の事をネギから聞いたアスナはその額に驚愕するも

学費や生活費を返済するため、格闘大会へ出場するかどうか悩む

そんな中、出場者は神社の中に入るようにとの放送がはいった

ネギと小太郎は大会に出場するので神社の中へと入り

夕映やカモなどの見学者組もその後へと続き、神社の中へと入っていく

神社の中には8つの舞台が用意されており、中央の舞台では朝倉が司会をしている

「あれ、朝倉さん？どうしてあんなところに・・・」

「ようこそ、麻帆良生徒及び学生及び部外者の皆様！！」

復活した麻帆良武道会へ！！優勝賞金1000万円のこの大会・

・

賞金と歴史ある大会の優勝、その誉れを手に入れるのはいったい

どこの強者なのか？これより始まる戦いを心ゆくまでお楽しみ

ください！！」

朝倉が素晴らしい終わると同時に、朝倉の後ろに人影が現れる

「では、これより大会主催者からの挨拶です！！！！」

朝倉がそう言うと、人影が前に出てきてその姿がライトに照らされる

ネギたちは驚いた顔でその人影・・・3－Aのクラスメイトである
超 鈴音を見ていた

『超（さん）！？』

超は朝倉からマイクを受け取ると開会の挨拶、及びルール説明を開始する

「・・・だが、私はここに最盛期の麻帆良武道会を復活させるネ
ルールは飛び道具及び刃物の使用禁止、そして呪文詠唱の禁止
！！

以上、今言った3つの事柄さえ守れば他はどんな事をしても大丈夫ネ。」

超が言ったルール説明、その中にあった呪文という言葉にネギたちは驚愕する

「一般人の前でなんて事を・・・」

「確かにそうね。あのチャイナ娘
神秘の秘匿というものを理解してないのかしら」

突然、後ろからした声に驚いて振り向くと不機嫌そうな顔をしたキ

ヤスターがいた

「キャスターさん!？」

ひょっとしてキャスターさんも大会にでるんですか？」

何故、ここにキャスターがいるのか

疑問に思ったネギはまさかと思いつつ、キャスターに質問する

「バカなこと言わないでくれる？」

ウチの馬鹿共も何人か出るって言うから監視よカ・ン・シ」

その言葉にネギはセイバーが出場すると言っていた事を思い出す
……ん？何人かってまさか、セイバーさん以外にも出場する人が
!？

「ちよいと待ってくださいえ!!キャスターの姉御!!!!!!

何人かって事はセイバーの姐さん以外……

ランサーの旦那とかも出場するってことですかい!？」

カモが慌ててキャスターに尋ねる

もし、ランサーたちも出場するとなれば1000万は絶望的だ

ネギと小太郎も息を呑みながらキャスターの返答を待つ

そして、返ってきた答えは絶望的なものだった

「ランサーだけじゃなく、アーチャーとアサシンも出るわよ
ああ、そういえばバーサーカーも飛び入り出場するらしいわ
昨日のイリヤの事でアーチャーに話をつけてやるとか言ってた
わね」

ショックのあまり、カモは夕映の頭の上から地面へと落下した
ネギと小太郎も衝撃の事実に呆然としている

「だ、だめだ・・・楓さんや龍宮さんも出るって言ってたし・・・
本選に出場できる16人のうち、もう8人が決定したような気が
する」

膝をついて、その場に崩れ落ちるネギ
小太郎はそんなネギを見て必死に励ます

「だ、大丈夫や。お前の拳法の師匠以外、みんな武器使いやろ！！
獲物が無しの素手での勝負なら十分俺らにも勝ち目はあるわ！
！！！！」

「ほう、たいした自信だなその犬
私が出場するという事も忘れてはいないか？」

いきなりネギの後ろに現れると、エヴァンジェリンは口元を歪めて不気味に笑う

「マ、^{マスター}師匠！？」

「げ・・・真祖の・・・」

「あ、ネギ君。ちなみに僕もエントリーしてきたからよろしくね？」

そのエヴァの後ろではタカミチが笑いながら爆弾発言をしている
アスナがそれを聞いて、大会に出るために受付へとダッシュしていったのが見えた

出場するメンバーの異質さに戦意を失っていたネギだが
自らの父親であるナギがこの大会で優勝していたという事を聞くと
目の色が変わった

そして、予選が始まる・・・

Aグループ

「ふむ、優先して仕留めるような輩はいないかならば・・・思う存分暴れさせてもらおうでしょう」

両手に竹刀を持ったアーチャーは
リングを縦横無尽に駆け巡り、次々と周りの出場者たちを脱落させていく

やがて、そのリングに残るのはアーチャー
そしてローブをかぶった少女・・・佐倉愛衣のみとなった
Aグループ勝者・・・アーチャー、佐倉愛衣

Bグループ

こちらではネギが豪徳寺の気弾を魔法の射手で防ぎ
豪徳寺の腹に掌打を叩き込んだ事で勝負ありとなった
Bグループ勝者・・・ネギ・スプリングフィールド、クウネル・サ
ンダース

Cグループ

刹那とアスナが出場者を次々と撃破し、決着
Cグループ勝者・・・神楽坂アスナ、桜咲刹那

Dグループ

古が無双し、出場者全員撃破
Dグループ勝者・・・クローフェイ、龍宮真名

Eグループ

小太郎と楓による分身の術の勝負となっていたが
そのついでに参加者を全員撃破

Eグループ勝者・・・村上小太郎、長瀬楓

Fグループ

タカミチの居合い拳により、ほぼ全滅

残りはエヴァに場外に投げ飛ばされて決着

Fグループ勝者・・・タカミチ・T・高畑、エヴァンジェリン・A・
K・マクダヴェル

Gグループ

「せい、はっ!!」

このグループでは士郎が自分の体に強化をかけ、にわか仕込みの体術で戦っている

その隣では黒い影のようなものが参加者を吹き飛ばしていたが・・・
士郎は「魔法使って大丈夫なのか?」と思いつつ見てみぬふりをしていた

Gグループ勝者・・・高音・D・グッドマン、衛宮士郎

Hグループ

そして最後の予選、Hグループとなったわけだが・・・

試合が終わり、観戦にまわっていたネギたちも呆然としていた

舞台に立っている者たちに至っては、ほぼ全員が震えている

「おい・・・これはいったいどういう事だ？」

棒を肩に担ぎながらランサーが尋ねる

「さあな、もしこれが意図的だとすれば

怪しいのは1人だけ逃れているあの弓兵であろうが」

アサシンはランサーの問いに笑いつつ

木刀を構えなおしながらアーチャーを睨んだ

「まさか、予選でこんな事になるとは思っていませんでした」

「同感だ」

竹刀を持ったセイバーの言葉にバーサーカーが頷く

Hグループにはアーチャー以外のサーヴァントが全員組み込まれていた

確率的にも無いとは言えないが、意図的に組まれたような気がしてならなかった

「まあ、とりあえずやる事は・・・わかってるな？」

ランサーのその言葉に他の三人が頷く

そして試合開始の合図と同時に、4人以外の参加者が全て場外へと吹き飛んだ

『ええええええええええ！？』

観戦していた面々はその光景に驚きを隠せない

アーチャーやエヴァなどは参加者を吹き飛ばした目的を理解しているようだ

狭い闘技場の上でサーヴァント同士の争いに巻き込まれでもしたら下手したら死人が出かねない。故にランサーたちは他の参加者を吹き飛ばしたのだ

しばらく沈黙が続くが、それを破ったのは以外にもバーサーカーだった

「悪いが・・・私は主を悲しませたアーチャーに話をつけねばいかん

貴様らがそのための障害となるならば、私はそれを全力でなぎ払うだけだ」

バーサーカーのその言葉に

他の3人は目を見開くも、すぐに自分の武器を構えなおす

「はっ!! 言いやがったな、できるものならして見やがれ」

「私も・・・騎士王の名に誓い、貴殿らを打ち倒しましょう」

「もはや言葉はいらぬな・・・いざ、尋常に・・・」

「」「」「勝負!!!!!!」

その言葉と同時に4人は駆け出した

次の瞬間にはリングから棒や竹刀がぶつかり合う音が響き渡っている

英霊4人、その全てが自らの持てる技や力を駆使してのぶつかり合い
まるで神話の決闘のようなその光景に、観戦している者たちは目を
奪われた

だが、いつまでもその光景が続くわけは無い
しばらくして、舞台から2つの影が弾き飛ばされた

「私の負けですか・・・」

「場外か・・・いた仕方ない」

弾き飛ばされ、場外に着地したのはセイバーと小次郎だった
2人ともまだ、戦える状態だったのだが場外に出てしまったので敗
退となる

Hグループ勝者・・・ランサー、バーサーカー

そして、全ての予選が終了した

予選・格闘大会（後書き）

龍真「さあ、アーチャー死亡フラグ！！

バーサーカーをどうかわすのかな？（笑）」

アーチャー「なぜ私がバーサーカーに狙われねばいかんだ！？」

龍真「アーチャーがイリヤ泣かしたからだろ？」

アーチャー「うっ！！」

龍真「部屋で閉じこもって泣いてたらしいし」

アーチャー「ぐうっ！？」

龍真「守るって誓った女の子泣かせるのは正義の味方としてどうなのさ？」

アーチャー「ぐはああああっ！！！！」

龍真「ふう・・・では次回「武道会・本戦！！」お楽しみに」

アーチャー「例えイリヤを泣かせてでも・・・

それでも・・・私は・・・私は・・・」

武道会・本選!!

現在、龍宮神社の前には本選に進んだネギ、士郎、小太郎
それにアスナと刹那、木乃香とイリヤが集合していた

昨日発表されたトーナメントの組み合わせは以下の通りだ

Aブロック

佐倉愛衣VS村上小太郎

衛宮士郎VSクウネル・サンダース

クーフエイVS長瀬楓

バーサーカーVS龍宮真名

Bブロック

高音・D・グッドマンVSアーチャー

ネギ・スプリングフィールドVSタカミチ・T・高畑

神楽坂アスナVSランサー

桜咲刹那VSエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

ネギはタカミチと試合をするため、気合が入り

逆にアスナは相手がランサーなので少し自信を喪失したりしている

「ううう・・・なんで最初からランサーさんなのよ」

涙目で落ち込むアスナ

「まあまあ、アスナさん

それをいったら私も相手がエヴァンジェリンさんですし・・・」

それを見た刹那はアスナを慰める

「俺と士郎はあたるの2回戦、ネギとは決勝か」

「む？小太郎。そう簡単に勝たせると思うなよ」

「2人ともやる気十分やな」

「うちはイリヤと客席で応援しとるから」

木乃香はそんなネギと小太郎を見て笑いながら呟く

「あ・・・うん」

それに対し、イリヤは暗い顔をしながら頷く

アスナはそれを見ると士郎を引き寄せてどうしたのかと聞く

思えば、昨日からイリヤの様子がおかしい

アーチャーが浮気(?) してればいつもならボコボコにするはずなのに

昨日のキス騒動では殴るところかその場に座って泣き出してしまったのだ

士郎が言うには、どうやらアーチャーと何かあったらしく

昨日帰った後も自分の部屋に閉じこもって、食事を取っていないらしい

今日は士郎がなんとか連れ出したのだが

見ての通り、いつもと違って全く元気がない

「アーチャーさんとなにかあったって・・・いったいどうしたん？」

木乃香が士郎に小さな声で聞く

その木乃香の質問に、士郎は首を横に振るのみだ

「父さんや母さんが何があったか聞いても教えてくれなくて・・・
バーサーカーと父さんがアーチャーの奴を叩きのめすとか言ってたけど」

実は昨日、バーサーカーと切嗣によって

アーチャー抹殺計画というものが立てられていた事を士郎は知らないもつとも、すぐにアイリにばれて中止となってしまったが

そしてしばらく歩いていると、闘技場のある広間に出た

そこで観客席と控え室に進む方向が別れるため

ネギたちは出場選手のための控え室に向かい、木乃香とイリヤは観客席へと向かった

控え室の扉の前に来たネギたちだが何やら中が騒がしい

恐る恐る扉を開くと、バーサーカーが殺気を出しながらアーチャーの胸倉を掴んでいた

「手を放してくれないか、バーサーカー

これから試合を控えているのだ。無駄な争いは避けたい」

「ならば・・・なぜ主を泣かせたのか説明してもらおうか」

バーサーカーは真剣な目でアーチャーに問いかける

やはり、平行世界でもイリヤはバーサーカーにとって特別な存在
それが理由もわからず、傷つけられてしまうのは我慢がならなかった
ネギたちは状況がわからず、近くの壁にもたれかかっていたランサ
ーに事情を聞く

「いったい2人ともどうしたんですか？ランサーさん」

「なんでも、昨日アーチャーの奴がイリヤの嬢ちゃん泣かせたら
しくてな

それにバーサーカーが怒って、アーチャーに尋問中ってわけだ。
わかったか？」

ランサーはそういうと、再びアーチャーたちの方を見る

ネギたちも何故イリヤがあんなに悲しんでいるのか

その理由を知りたいのでバーサーカーを止めず、その場で傍観する

説明を催促するバーサーカーにアーチャーは呆れたように言う

「私はイリヤスフィールが泣いた事など知らん

ならば、もし泣いていたとしても私には全く関係ないな」

「アーチャー、貴様……」

イリヤが泣いていようがまったく関係ないと言い放ったアーチャー
バーサーカーはそれを聞き、憤怒の表情で先程より凄まじい殺気を
放つ

扉の前ではアーチャーに飛び掛ろうとするアスナをランサーが止め

ていた

「放して！！アイツだけはぶん殴らないと気がすまないのよ！！」

「ひとまず落ち着け、アスナ

まあ、確かに今の一言は気にいらねえが・・・」

冷静にアスナを止めるランサーだが

その言葉とは裏腹にランサーの瞳はアーチャーを睨んでいた

「2人とも、その辺にしておいたらどうだい？」

タカミチがバーサーカーの手を掴み、殺気を消すように促す

胸倉を掴んでいた手が離れるとアーチャーは「やれやれ」と服を直していた

「・・・エミヤ、なぜあんな事をいったんだ？」

タカミチがアーチャーを睨みながら先程の言動について質問する

「私はバーサーカーの質問に答えただけだがな」

アーチャーは自嘲気味に笑うと、タカミチに背を向けて歩き出すが・

「君はそんな事をいう奴じゃなかったはずだ」

その言葉にアーチャーの動きが止まる

「何故イリヤ君を泣かせたんだ。なにか理由g「黙れ」……っ
!？」

アーチャーはタカミチの言葉を遮ると殺気をだし、振り向きながら言う

「私はそんな奴じゃなかった？なんでイリヤを泣かせた？

笑わせるな。貴様らに私の何がわかるというのだ

自分が必ずしも正義だと思っているのか？ならばそれは偽善だ」

冷たく響くその声に控え室にいた者全てがアーチャーに注目する

「イリヤが泣いた？だからどうしたというのだ

可哀そうだから慰めるとでも言うつもりか？

ハッ、そんなくだらない感情はそこいらの犬にでも食わせてしまえ」

「エミヤ・・・それは本気で言っているのか？」

「無論だ。さて、そのの槍兵

殺気を収めてはくれないかね？正直言って迷惑だ」

淡々と答えるアーチャー

アスナはランサーの制止が無くなったので

アーチャーに飛び掛ろうとしたが、隣から発せられている殺気によって動きが止まる

「アーチャー・・・

その言葉は俺にとってどういう意味か知ってるはずだよな」

憤怒の表情でランサーはアーチャーを睨みつけ、ゲイ・ボルグを構える

「……………」

それに呼応するようにアーチャーも魔術回路に魔力を流す

緊迫した一触即発の空気の中

控え室の扉が開かれ、超と朝倉が控え室の中に入ってきた
そして、超は武器を持っているランサーを見て

「ランサー選手、刃物の使用は禁止と昨日言わなかつたか？」

もしここで戦闘を始めるつもりなら大会の出場権はなくなるが
いいの力？」

「ちつ……命拾いしたな、アーチャー」

ランサーを睨みながら言う超

それを聞いたランサーは渋々といった感じで引き下がった

そして超の案内のもと、選手たちは闘技場に移動する

闘技場につくと観客が大勢いて、その中にはイリヤや木乃香たちの
姿もあった

「ほら、イリヤ。ネギ君たち来たえ？」

木乃香が指差した方を見たイリヤはそこにいる赤い騎士に目を奪わ
れた

なぜならばその姿がとても儂く、脆いものに見える

昨日会った時より、さらにひどくなっている。それがイリヤの思った事だった

イリヤは今のアーチャーを見ていられなかった
その暗く染まった瞳が、苦しんで助けを求めているような気がして
ならない

「シロウ・・・」

無意識のうちに口から出たその呟きは想い人に届く事は無かった

独りになった赤き騎士はどこに向かうのか

雪の少女の思いは愛しき騎士に届くのだろうか

アーチャーへの疑心が渦巻く中、武道会の幕が上がる

武道会・本選!! (後書き)

龍真「アーチャー・・・黒っ!!」

キャスター「どんどんひどくなってない？」

あ、そう言えば・・・ライダーがあなた探してたわよ」

龍真「何で？」

キャスター「出番をよこさないから石化させるって」

龍真「キャスターとライダーはもう少しで見せ場あるから待ってください!!」

キャスター「まあ、それは当然として・・・

ライダーにも早く状況説明しておいたら？ 足が石化してるわよ」

龍真「うおおおっ!!? いつの間に!?!」

キャスター「転移」

龍真「逃げやがった!?!」

ライダー「騎英の手綱!?!?!」

龍真「ノオオオオオオ!?!」

キャスター「ふう、ここなら大丈夫ね
では次回　「思わぬ敵　クウネル・サンダース」
お楽しみに」

思わぬ敵 クウネル・サンダース

ここ龍宮神社では格闘大会の予選を見るため、大勢の人間が押し寄せていた

現在イリヤたちはその人ごみの中を移動している

「うう・・・どんだけ多いねん」

「流石にこれは多いわね・・・」

普通に歩くのも困難になっているこの状況で、なんとか観客席の最前線に辿り着いた

「大変だったね、大丈夫かい？」

隣から聞こえた聞き覚えのある声に木乃香とイリヤは同時にそちらを向く

「やあ、お先に。イリヤと・・・木乃香ちゃんだっけ？」

そこにはイリヤの両親である切嗣とアイリがいた

「父様？それに母様も・・・どうしてここに？」

「そんなの、息子の勇姿を見るために決まってるじゃない」

イリヤの質問にアイリが微笑みながら答え
その手にはキツチリと士郎を撮影するためのカメラが納まっていた

「ご来場の皆様、長らくお待たせしました!!
これより……麻帆良武道会を開会いたします!!!!!!」

舞台上で朝倉がそう言うと、観客席から歓声があがる
切嗣やイリヤたちも舞台に注目し、朝倉が選手紹介を始める

「さあ、それでは第一試合の選手を発表します!!
かたや謎の少年忍者、村上小太郎選手!!
対するは中2の少女……佐倉愛衣選手です!!!!!!
なお、実況は茶々丸さん。解説はゲストとして
麻帆良のラスト・サムライこと佐々木小次郎さん
ならびに麻帆良女子中の騎士、セイバーさんに来ていただいて
います」

「よろしくお願いします」

「ふむ……できるだけ努力はしよう」

「お弁当はまだですか？」

解説席で三者三様の返事を返す3名
一部、全く関係ないものがあつた気もしたが

「お……いきなり小太郎君か」

切嗣はそう呟くと、舞台に上ってくる小太郎を見る
そして小太郎はというと……困ったように対戦相手を見ていた

「小太郎君、大丈夫やろか？」

「そうね・・・女の子が苦手って言ってたし、どう思う？父様」

「そうだね・・・」

切嗣は少し考えるようなそぶりを見せながら、舞台上の2人を見てこう答えた

「この勝負・・・小太郎君が勝つよ」

そう即答した切嗣にイリヤと木乃香は目を丸くする
どうして？と聞こうとしたのだが・・・

切嗣に質問しようとしたちようどその時、試合開始の合図がなり
その瞬間に小太郎は距離をつめて愛衣を吹き飛ばした

吹き飛ばされた愛衣はそのまま場外に着水、10カウントで失格と
なった

「ほらね？僕の言ったとおりだろ」

それを見て、微笑みながらイリヤたちの方を向く切嗣

「ほんまや・・・でもどうしてわかったんですか？」

「簡単さ。あの女の子はたぶん近接戦闘の経験がほとんど無い

それに比べて小太郎君はランサーたちに鍛えてもらってるからね
瞬動で自分の懐に入り込まれた場合、あの女の子が勝つ確率は
0に近いからね」

淡々と説明する切嗣に木乃香は少し驚いた

切嗣は正直言って、木乃香から見てもあまり戦闘をしないように見えたのもあったのだろう

そして、試合は第2試合に移行する

「さあ、続いて第2試合にまいりましょう!!」

大会出場、子供メンバー3人組の1人衛宮士郎選手!!

そしてふざけた名前が謎を呼ぶ・・・クウネル・サンダース選手です!!」

「おおっ、ようやく士郎の番か!」

「士郎、頑張って!!」お母さん達が応援してるわよ!!」

士郎の名前を聞いた瞬間に、客席から身を乗り出し大声で叫ぶ切嗣とアイリ

「おおっと、これは微笑ましい

ご両親からの応援が観客席から届いております」

朝倉の司会に観客席から士郎に向かって拍手が送られる

だが、応援されている士郎は舞台上で顔を真っ赤にしながら俯いていた

「は、恥ずかしすぎる・・・／／／／／／／／／／」

「いいではないですか、親の好意は受け取って損は無いですよ?」

微笑みながら士郎に喋りかけるクウネル

それを士郎は苦笑いで返す

しばらくすると朝倉がマイクを掴み、高らかに試合開始を宣言した
それと同時に士郎は短く切った木刀を両手に持って構える

「ほう、2刀流ですか・・・」

「・・・・・・・・」

それに士郎は答えない
足に魔力を流し、強化すると同時に地面を蹴った

「シッ!!」

右の木刀がクウネルの顔面に向かう

クウネルはそれを右手で防ぎ、そのまま士郎に向かって拳を突き出す

士郎は左の木刀でそれを防御すると、その勢いを利用して後ろに跳
躍した

そして着地すると同時に再び距離を詰めて右と左の木刀でクウネル
に連撃を叩き込む

「士郎君、頑張れー!!」

「気張れや士郎!!ここが正念場やぞ!!!!!!!!!!」

選手席からネギと小太郎が士郎を応援する

クウネルは2つの木刀の連撃に防戦一方で、試合は士郎が優勢であ
るように見えた

だが実際はそうではない

士郎の攻撃はクウネルに少しのダメージも与えていないのだ

「ちい・・・っ!!」

なんだこの人・・・攻撃が全く当たらない!!

自分の攻撃がクウネルに全く通用していない事に焦る士郎

そして、その僅かな隙をクウネルは見逃さなかった

士郎の連撃の最中に放たれたその掌底が士郎の腹部へと突き刺さった

「があっ!?!」

その掌底をまともにくらってしまった士郎は場外、観客席へと吹き飛んだ

「やれやれ・・・ネギ君のお仲間には才能ある子供が多いですね」

そう呟くクウネルだが、その呟きはあまりに小さく誰の耳にもとどかない

『士郎!?!』

ネギと小太郎は士郎の名を呼ぶが、士郎からの返事は無かった

場外へと吹き飛んだ士郎はそのまま気絶して救護室へと運ばれていく

まさか、士郎が負けると思わなかったネギたちは驚愕を隠せない

クウネルを見た小太郎は、次に自分とあたる猛者に闘志を燃やした

様々な思いが渦巻く中、戦いは次の試合へと向かっていく

思わぬ敵 クウネル・サンダース（後書き）

龍真「時間が・・・無いっ！！！！」

ライダー「またどうしたのですか？ あれは」

セイバー「学年末テストが一週間後に控えているらしいですよ」

ランサー「おい、2学期ひどかったから勉強しねえとヤバいだろ」

龍真「ううう・・・」

セイバー「というわけでしばらく部屋に

缶詰で勉強すると思うので更新が次回遅れるかもしれませんが
せん」

ライダー「ご迷惑をお掛けして申し訳ないですが何卒ご了承ください
い」

ランサー「じゃあ、次回予告だ

次回 「忍と拳士 狂戦士と狙撃手」楽しみにして
てくれ！！」

忍と拳士 狙撃手と狂戦士

クウネルとの試合により、士郎がタンカで運ばれたのを見たネギたち
彼らの顔には士郎が負けたという事実により、驚愕の色が浮かんで
いた

はつきり言って今の士郎はエヴァンジェリン邸での修行により
相手が魔法使いでも1対1ならばそう簡単には負けない程の実力
になっていた

その士郎が負けてしまった事により驚愕しているネギたち

「そんな・・・士郎君が」

そんなことを呟いていると

勝利者であるクウネルが舞台からこちらへ歩いてきた

それを見た小太郎は殺気を出してクウネルを威嚇する

「そんなに殺気を当てないでください

私は病弱の身でして・・・倒れてしまうかもしれません」

「・・・ハッ！よく言うわ

士郎と闘った時も随分と余裕だったやんけ」

「いえいえ、ギリギリでした

本当に才能のある子が多いですね。実に喜ばしい事です」

にこやかに告げるクウネルに反論した小太郎

だが、クウネルはその言葉すらも微笑みながら返す

「ああ、そろそろ次の試合が始まるようですよ」

クウネルが言ったその言葉にネギたちは舞台を見る
そして、全員の視線がそれたその瞬間、クウネルはその場から消え
去った

「「「!?!?」」」」

ネギたちはクウネルが一瞬でいなくなった事に驚愕する

「消えた・・・?」

ネギたちは辺りを見回すがクウネルの姿はどこにもない
そして、クウネルへの疑問が積もる中・・・楓とクーフエイの試合
が始まった

「思えば・・・全力で古と手合わせするのは初めてでござるかな
?」

「そうアルね。私も楽しみで仕方が無いアル」

楓の言葉にクーフエイは満面の笑みで返す

そしてクーフエイが大きく息を吐き、構えを取ると空気が変わった

「遠慮はいらないネ。楓・・・全力でくるアル」

そのクーフエイの挑発に楓も口元を吊り上げる

「もとからそんな気はござらんよ。」

甲賀中忍・・・長瀬 楓・・・推して参る！！！！！」

「試合、開始iiiiiiiiiiii！！！！！」

朝倉の合図と共にクーフエイが楓の懷へと踏み込む

「シッ！！！」

クーフエイが肘を繰り出し、それが楓の腹へと向かう

楓はそれを右腕で捌くとクーフエイに向かって左後ろ回し蹴りを放つ

だが、その蹴りは命中することなく空をきった

「甘いアルね、馬蹄崩拳！！！」

言葉と共に拳が繰り出され、楓の鳩尾へと突き刺さる

その光景を見た観客達は誰もがクーフエイの勝利を確信した

一方、クーフエイは自分の拳から伝わる感触に疑問を抱いていた

これは人を殴った時の感覚ではない

もっと別・・・そう、例えば稽古の時に打った木人のような・・・

その事に気が付いた瞬間、煙と共に目の前の楓が丸太へと変貌する

「なっ・・・！！？」

驚愕したその瞬間、クーフエイは悪寒を感じて頭を下げた

「・・・・・・・・ッ」

「おや？」

今まで頭のあった場所を楓の蹴りが通り過ぎ

そのまま追撃に放たれた拳を前方に転がる事で回避する

距離をとった両者はその場で立ち止まり対戦相手に視線を向けた

「これは驚いた・・・アレをまさか避けるとは

空蟬の術で隙だらけだったはずなのでござるがな」

残念とでもいいいたげな表情で楓は首を傾げる

「驚いたのはこちらアル

あの丸太、どこで調達してきたアルか？」

「それは秘密でござる」

冷や汗を流しながら皮肉を言うクーフエイに楓はいつもの調子で返した

だが、その姿に微塵の隙も油断も無い

今までに出会った事のない好敵手に思わず口元が吊上がる

「嬉しそうでござるな、古」

不意に楓からそう言われた

当然だ、自分が望むのは強者との闘いのみ

ならば・・・好敵手と巡りあえたこの戦場で嬉しくないわけがない

「今度はこちらから行くアルよ。楓」

「応!!!!!!」

その言葉と共に二人は駆け出し、舞台中央で攻防が開始される

観客やネギたちが声を出して両者を応援する中

アーチャーだけは2人の戦法や攻撃をする時の癖などを冷静に分析していた

中国拳法・・・それに言動と術の方式から言って忍術

2人ともが女子中学生にしてはかけ離れた実力を持っている

しかし、特に超の計画に支障は無いだろう。放置しておいても大丈夫だな

どうやら思考に沈んでるうちに、試合は終了したみたいだ

舞台の方を見ると、楓が気絶しているクーフエイを抱えて降りてきていた

どうやら試合は楓が勝利したらしい

観客席からは2人に対して惜しめない拍手が送られている

そして次の試合・・・龍宮とバーサーカーの試合が始まった

龍宮とは超の計画に関わっているので面識がある

裏の仕事にも関わっていて、経験と実力もあるから

そう簡単に負けはしないだろうが・・・問題はバーサーカーの十二の試練だ

バーサーカーにはAランク以上の攻撃しか通用しない

ようにするに、大会ルールでの攻撃は全く効果が無いといっても過言ではないのだ

故にバーサーカーを大会ルールの中で倒す事など不可能だった

龍宮には昨日のうちにバーサーカーの情報を伝えている

この勝ち目の無い大会にどう挑むのか・・・協力者の実力を拝見させてもらおうか

私が舞台に視線を移すと同時に試合開始の合図になった

その合図と同時に龍宮はバーサーカーから距離をとって

手に持ったコインをマシンガンのようにバーサーカーへと連射する

放たれたそれは眼球、眉間、鳩尾などの急所に容赦なく突き刺さった

もし、相手が普通の人間ならば即死しているであろう攻撃だ

だが、十二の試練によりバーサーカーにはその攻撃は通用しない咆哮と共にコインの弾幕の中を直進していく

龍宮は軽く舌打ちをして舞台の上を移動して距離をとった

時には場外すらも利用しながらバーサーカーへと弾を打ち続ける

その姿に私は龍宮という協力者の評価を上げた

大会ルール上、絶対に倒す事のできない相手に対する攻略法

それは唯一つ・・・時間切れによる投票結果の勝敗で勝つ事だ

相手の攻撃を避け続け、自分の攻撃を出来るだけ多く命中させる例え相手にダメージが無いにしても、判定ならばこちらの勝利という訳だ

まあ、それはバーサーカーの攻撃を

受けない事が条件であって、事実上は不可能に近いだろう

龍宮は場外の屋根の上に着地するとこちらに視線を向ける

（私の実力は合格ラインかな？弓兵）

その視線がそんな事を言っている気がした

唯一の勝利条件に気づき、バーサーカー相手に2分も持ちこたえたのだ

戦力としては十分に合格ライン。文句は無いだろう

私が皮肉げに笑いながら頷くと龍宮は動きを止め、そのまま両手を上げた

「降参だ。朝倉

はつきり言っつてその人に勝てる自信がない」

その言葉を聞いた司会が高らかにバーサーカーの勝利を宣言して試合は終了した

次は私の番か・・・と考えていると、龍宮が舞台を降りて私の方に近づいてくる

「いや、あれは反則だろう。死ぬかと思ったよ」

少し冷や汗を流しながら言う龍宮に私は小さく笑う

「君の実力は見せてもらった。正直なところ感嘆したよ

これならば計画の上でチームを組む事になんら問題は無い」

私の言葉に龍宮は「当然だ」と言わんばかりに口元を吊り上げる
そして、私の方を向くと笑いながら手を顔ぐらいの高さで固定した

「ならば次は貴方の实力を見せてもらおうでしょう」

「ああ」

私はその言葉に口元を吊り上げ

龍宮の手を叩く、いわゆるハイタッチをして舞台へと向かった

もう戻れないと心に言い聞かせながら・・・

オマケ

ここは医療室。現在は試合に負けた士郎とクーフエイが休んでいた

現在、士郎のベッドの傍らではイリヤが泣いていて、それを士郎が
慰めている

何故こんな事になっているのか。それはテレビから流れてきた映像
が原因だ

そこにはアーチャーと龍宮が笑いながらハイタッチをする光景が映
し出されていた

当然、テレビを見ていた者は例外なくその光景を見る事となる

士郎の看病をしていたイリヤもアーチャーと龍宮の映像を見てしまったのだ

その光景を見たイリヤは自嘲気味に笑いながら、涙を流している

「・・・笑顔・・・？ そんな表情・・・私には向けてくれないのに・・・」

士郎とクーフエイは何とかイリヤを励まそうとするが、どう励ましていいのかわからない

ただ、イリヤを泣かせたアーチャーに対する怒りだけが心の中で増幅していった

忍と拳士 狙撃手と狂戦士（後書き）

龍真「さて、テストが終わったという事で久々の更新です!!!!!!」

セイバー「そう言えば気になるのですが・・・

アーチャーはどんどん嫌われていってませんか？」

龍真「まあ、そこは最終日の伏線ということで」

ランサー「で？超側にはあと誰がつくんだ？」

龍真「たぶん次の次ぐらいでもう1人はわかると思うけど・・・」

セイバー「それで？イリヤをいつ救済する気ですか貴方は

いいかげんにしないとバーサーカーと切嗣に殺されま
すよ」

龍真「大丈夫・・・たぶん・・・大丈夫」

ランサー「冷や汗ダラダラじゃねえか

なんだ、その生まれたての子鹿のような膝は」

セイバー「はぁ・・・しょうがないですね

では次回「錬鉄の騎士」 お楽しみに」

錬鉄の騎士

龍宮との会話を終えて、試合に出場する番となったアーチャーは舞台上へと上がっていく

正直、周りからの視線が痛い。バーサーカーと切嗣など殺気を込めて睨んできている

その殺気の原因はおそらくイリヤの事だろう

自らの大切な者が傷つけられたのだ。それも仕方が無い事だが、そんなことに構っている暇は無い

今は目の前の試合を終わらせる事に集中しよう

相手は・・・昨日の予選で衛宮士郎と同じグループだった魔法使いの少女か

超からの情報ではこの娘は影を操る系統の魔法を使うらしいなんでも計画に役立つから、挑発してどんどん魔法を使わせてと言っていたな

頭を戦闘用に切り替え、相手の少女を見据える

そして、試合開始の合図がなった

その合図と共に高音の腕に影が巻きつき、そのままアーチャーへと突撃する

距離が詰まると影で強化した腕がアーチャーの腹部へ迫る

それを右手で裁くとそのまま左手で拳を繰り出す

だが、アーチャーの拳が高音へと届く事は無かったなぜなら高音から出現した影がその反撃を防いでいる

それを見て、おそらく使用者の意思ではなく

自動で防御する類の魔法だと判断したアーチャーは高音から距離をとる

距離をとると、腰に挿していた中華刀型の木刀を取り出して両手に構えた

「ほう、なかなかの魔法だ。しかし君の実力ではその影を扱う事はできんだろうな

宝の持ち腐れだ。これなら敗北を気にしなくてもよかったか

もし君にもっと強力な魔法があれば私は手も足もでないだろうがね」

アーチャーは自嘲気味に笑いながら高音を挑発する

果たして、その挑発の意味を正確に理解できた者はこの会場に何人いるだろうか

高音はその言葉で頭に血が上って気が付いてないようだが

観客席の切嗣と選手席にいるタカミチやネギなどの関係者は

アーチャーが挑発の中でとんでもない事を言っている事を理解していた

それはすなわち「魔法」という単語

一般人に秘匿すべき事柄をこんな人目に付く場所

・・・しかも小さい声では無く、遮音結界なども張っていない状態だ

アーチャーの発した言葉は観客の何人かには確実に聞こえているだろう

その事実にはネギたちは驚愕し、アーチャーが何を考えているか理解できなかった

[illegible]

高音はアーチャーの言葉がよほど頭にきたのか

それを見て、アーチャーも口元を吊り上げると数歩前に入る

この分だと学園に存在している魔法使いの中でもかなり上位に入るのではないか？」

あまりの事態に切嗣やタカミチも顔が青ざめてしまっていた
だが、青ざめる者たちを尻目にアーチャーの言葉はまだまだ続く

魔法で呼び出した影の精霊もただ君の後ろにいただけではただの木偶人形だな」

その言葉を皮切りに激昂した高音は影槍を縦横無尽に放つだが、放たれた影槍は全てアーチャーにはあたらない

弾いていた

その闘いに観客は目を奪われていたと同時にある疑問を抱く事になる
アーチャーが言った魔法という単語、本来それは現実ファンタジーにありえる事
のない非現実

しかし目の前で行われている試合の中でありえないはずの非現実ファンタジーが
現実となっている

これでは魔法というものがあるかもしれないと思ってしまふのは必然

そしてそれこそがアーチャーの狙いでもあった

超の計画が「魔法を全世界に公表する」というものである以上、布
石は多い方がいい

これまでの試合を見て、魔法があるかと思った観客も少なくは無
いはずだ

そう確信したアーチャーはこれ以上続けても意味は無いと判断し
高音との距離を高速で詰め、両手に持っている木刀で連撃を叩き込む

影槍による自動防御でも限界はある

故にアーチャーの神速ともいえる凄まじい連撃に防御が甘くなって
わずかな隙が出来た

そして、それを見逃すアーチャーではない

渾身の力を込めて右手の木刀を振り下ろす

影槍による自動防御の隙間に放たれたその一撃は高音の腕に直撃する

「――――ツ!? ああああああああああ!!!!」

ゴキンという鈍い音がした直後、高音は悲鳴をあげた
おそらくは腕を骨折したのだろうか、腕を押さえながら蹲っている

そしてアーチャーは高音の後ろに回り、手刀を首に当ててその意識を刈り取った

これにより、高音が気絶した事で試合は終了した

観客席も選手控え席にいる者たちもあまりの事に言葉を失っている
アーチャーが舞台を降りると、そこは敵意の視線ばかりだった
元から向けていられたものが今の試合でさらにひどくなってしまっ
たらしい

アーチャーはそのまま神社の外へと出て、超と会うために地下通路
へと向かう
そして、しばらく歩いてきたところで急にその足を止めて後ろへ振
り向いた

「そろそろ出てきたらどうだ？衛宮切嗣」

「・・・いつから気づいていた」

通路の影から出てきたのは衛宮切嗣だった。その手には愛用の銃が
握られている

「気配の消し方は上手いようだが・・・

サーヴァント相手にもそれが通用すると思わない方がいいぞ」

アーチャーは切嗣の質問に対して、皮肉げに笑いながら答える
だが、切嗣もそう簡単に動揺したりはしない。銃口を向けながらア
ーチャーを睨む

「お前はいったい何が目的なんだ、アーチャー

一般人の目の前であんな事を言うなんて正気な魔法使いのやる事じゃない

もし、それで一般人が裏の事を知って危険な目にあったらどうする気なんだ」

アーチャーはその言葉を聞くと大声で笑いだした

「何がおかしい!!!!!!」

そんなアーチャーの態度を見て切嗣は激昂する

「一般人、一般人と・・・つくづくお前は他人が大事なようだな”正義の味方”」

「!?!」

アーチャーの言った「正義の味方」という言葉に切嗣が凍りつく

「何を動揺しているんだ？」正義の味方”

かつて、魔法使い殺しと呼ばれた男が情けない・・・」

やれやれといった表情でため息をつきながらアーチャーは肩をすくめる

それに対して切嗣は何故アーチャーがそれを知っているのか動揺していた

「ああ、そうだ。後ろには気をつけた方がいいぞ？」

その言葉に反応して切嗣は慌てて後ろを確認する
だが、そこには何も無かった。切嗣は先程のアーチャーの言動で動

揺しているせいで

後ろに振り向いてしまう。罨だと気づいた切嗣は慌てて視線を前に戻すがもう遅い

もうすでにアーチャーは目の前にいて拳が突き出される

その拳は切嗣の鳩尾に突き刺さり、切嗣の意識は闇へと落ちた

鍊鉄の騎士（後書き）

龍真「切嗣いきなり捕まったな」

キャスター「それより私達の活躍はいつからかしら？」

龍真「武道大会終わって図書館島偏の時だよ。出番作るからもう少し待って」

キャスター「しょうがないわね・・・」

では次回「超の計画」お楽しみに」

超の計画

現在、切嗣とタカミチ（十チビ刹那）は薄暗い地下室の中で機械式の拘束具に捕まっている

切嗣が捕まった後、ネギとの試合を終えたタカミチも

超の動向を探ろうとし、アーチャーと龍宮によって捕らえられたのだった

「ふふふ・・・計画通りネ」

これまでの試合が映し出されているモニターを見ながら超は口元を歪める

現在、大会はネギとタカミチの試合によって壊された舞台を修理する間

これまでの試合のダイジェスト映像が穴埋めにとスクリーンに映し出されていた

「計画通りとはどういうことだ・・・超君

返答によってはいくら元教え子と言えども見過ごす事はできないぞ」

「ふふふ・・・こわいこわい

気にしないでほしいネ。私の目的なんて些細な事ヨ」

超の発した言葉にいち早く反応するタカミチ

タカミチから向けられる殺気を受け流しながら超は微笑みながら返答した

「心配しなくても一般人に迷惑をかけることはしないヨ

私の目的は全国にいる魔法使い6700万人
その存在を全世界の人に公表す。・・・コレだけネ」

超の口から言われた目的。それが意味する事にタカミチと切嗣は驚愕した

魔法使い・・・つまり魔法の事がもし、全世界にバレたらその混乱は計り知れない

「バカな！！そんな事をすれば世界がどうなるかわかっていないのか！！！！」

「わかってるネ。魔法の存在が世界中に公表されれば・・・
人前で魔法が使える。秘匿のために救う事のできなかった命が救えるようになる」

切嗣は目を見開き、超に向かって怒鳴るように叫んだ
超は真っ直ぐに切嗣の目を見ながら返答する。

「そんな事は理想論だ！もし魔法の存在を公表すれば世界は混乱する！！」

君のやろうとしている事は世界を混乱させて無意味な争いを起こすだけだ！！」

「理想論」「無意味な争い」切嗣の発したその言葉に超の表情が陰しくなる

「では切嗣サンに質問するが・・・

一般人の前で魔法を使えば助かる命があったとしてその命を見殺しにするの力？

その命に・・・魔法を秘匿するために死んでくれと、貴方はそう言えるのだナ!!!」

超は切嗣を睨みながら怒鳴りつけるように言い放つ

言い放たれたその言葉に切嗣の頭の中にかつての記憶が蘇る

最初は目に映る全ての人を救おうとしていた・・・だが、そんな事は無理だった

1人でも多くの人を救うために1を切り捨てて9を救う

それがいつしか当たり前になっていた。全ての人を救う事を諦めてしまっていた

切嗣は超の言葉に押し黙り、隣にいるタカミチも俯いて何も答えない頭では否定しなければと思っているのに、超の言葉を否定する事ができなかった

超はそんな切嗣たちを見ると扉に向かい、部屋から出て行こうとする

「・・・少々感情的になってしまったようネ

食事はウチの美味しいのを届けるね。不自由させてスマナイ」

そう言葉を残すと超は切嗣たちを拘束している部屋から出て行く

超がいなくなった事を確認したタカミチは口を動かし何かの準備を始めた

「少しいいかね？ランサー」

「ん？・・・なんだお前かよ」

次にアスナとの試合のためにストレッチをしていたランサーにアーチャーが話しかける

「ずいぶんと熱心だな。

君ほどの実力者なら次の試合、ストレッチなどしなくとも十分だろうに」

「ハッ！確かにアスナはまだまだ弱いけどな、ありゃ伸びるぜ
どこぞの何を考えてるかもわからない男よりはよっぽど素直だしな」

ランサーはアーチャーを睨みつけながら返答する

たぶん自分の事を言っているのだろうとアーチャーは皮肉げに笑った

「まあ、それはいいとして・・・俺に何の用だ？アーチャー」

「ふむ・・・話が早くて助かるな。実は君に1つの提案がある」

「提案だと？」

「君はより強い者と戦いたいのではないのかと思ってね

ならば、私がその敵と戦う場を用意してやろうと思っただけの事だ」

アーチャーからの提案にランサーは困惑する

確かに自分の望みは強敵と戦う事だ。だが、話がうますぎる

ランサーはため息をつくど、アーチャーに向かって問いかけた

「で？俺がそいつらを倒すとお前にはどんな利益があるんだ？」

魔術師の基本は等価交換

ならばこの提案は当然アーチャーに対して利益のあるものであるはずなのだ

アーチャーはランサーの質問の意図を察すると提案の詳細を説明する

「私たちの計画を成功させるためには戦力が必要なのだ

私ともう1人だけでは他のサーヴァント全員の相手は厳しいからな

もし私たちに協力してくれたら全力でセイバーたちと戦えるかもしれないぞ？」

アーチャーから放たれた言葉を疑問に思うもランサーはそのままストレッチを続けた

「ああ、そう言えばこないだ大通りにできた中華料理屋・・・泰山だったか？」

激辛麻婆で有名な店らしいが、たしか君への報酬にはその店の移転も入っていたな」

その言葉にストレッチをしていたランサーの動きが止まる

ランサーの動きが止まった事を確認したアーチャーは説明を続ける

「計画の内容に対しては私が協力している者から説明される

そのため、君にはこの武道大会を棄権してもらう事になるが・・・」

「おい、アーチャー。少しいいか？」

「何だね？」

ランサーはストレッチをやめて立ち上がるとアーチャーに問いかける

「セイバーたちと全力で戦いあえるってのはわかった

それにあの忌々しい店がどっかに移転するってのも理解した

この大会を棄権すりゃその2つが手に入るってんなら喜んで協力してやる」

「ならば、契約成立・・・という訳だな」

ランサーの言葉を聞いたアーチャーは握手をしようと右手を差し出すそれに対してランサーも手を差し出して・・・握手する直前にその手を止めた

「ああ、そういえば・・・1つだけ聞きたいんだけどよ

この頃お前の嬢ちゃんたちに対する態度が変わったのもそれが原因か？」

ランサーが言ったその言葉にアーチャーは答えない

そんなアーチャーの姿を見てランサーは

右拳を握り締めるとアーチャーの頬を思い切り殴りつけた

「!？」

「なんで嬢ちゃんたちに冷てえのかは知らねえが・・・

今ので俺からのお前を殴る分は終わりって事にしといてやる」

周りが騒然とする中、ランサーはアーチャーに向かって言い放つ
そしてランサーは舞台近くにいる朝倉の方を向く

「おい、確か試合以外で手を出したら失格だったよな」

「え？あ・・・」

「すまないが私もここで棄権させてもらおう。用事ができたので
な」

「へ！？ち、ちょっと・・・」

ランサーとアーチャーはそう言い放つと試合会場から出て行く

その後、ネギたちが戻ってきた頃にはランサーとアーチャーの姿は
無く

2人の名前が消えた対戦表が舞台中央にあるモニターに映し出され
ていた

超の計画（後書き）

龍真「久々の投稿です。もう本当に遅くなってスイマセン!!」

セイバー「今回でようやく相手側の2人目が判明しましたね

ランサーですか・・・相手にとって不足は無いです」

龍真「あともう1人は今回の話を読めば大体予想できると思います
があの person です」

セイバー「で？これからはどうするのですか」

龍真「うーん。大会は残りほぼ原作どおりだから簡単に進めて

早く図書館島偏とかに入りたいんだよね・・・一応ラストは
できてるし」

セイバー「まあ、そこまでどうもっていくかが問題ですしね

では次回「「化け物の定義」 お楽しみに!!」

閑話 最凶最悪の紅い敵

武道大会も終わり、現在ネギたちは夕食をとるために学園祭を巡っていた

メンバーは他に小太郎、アスナ、刹那、木乃香、カモ、イリヤ、士郎の7人＋1匹だ

しばらく歩いていたネギたちだが、大通りを歩いているとチラシが配られていた

そのチラシには「挑戦者求む・激辛への栄光」とでかでかと書かれている

「なにになに・・・あなたの挑戦を待っています

哀れな子羊たちに希望の手を差し伸べん事を・・・何だコレ？」

ネギが持っているチラシを覗き見た士郎が疑問の声をあげる

「なんや、面白そうやな・・・

よっしゃ、ネギ。晩飯はここにせえへんか？特に予定も無いんやし」

挑戦という言葉に小太郎が反応し、夕食はここで食べようと提案したその言葉を聞いたネギはアスナたちの方を確認するが・・・

「まあ、いいんじゃない。面白そうだし」

「ウチはどこでもええよ」

「私も・・・」

「俺もいいぞ」

「私も別にいいわよ」

どうやら全員OKのようだ。だが、ここでネギの頭にある疑問がよぎる

それはチラシに書いてある店の名前にあった
確か誰かからこの店の名前を聞いたような気が・・・

「おい、ネギ。はよ来んとおいてくで」

顔をあげると小太郎たちは数メートル前に歩き出していた

「・・・まあ、気のせいかな」

ネギはそう呟くと、気を取り直して小太郎たちの後を追う
だが、彼は気づかない。今この時が惨劇を回避する最後のチャンス
だった事を

しばらく歩いていると、前方に見慣れた人影を見つけた
青い髪を後ろで纏めているアロハシャツを着た男性・・・ランサーだ
その隣にはギルの姿も見える

大会を棄権したランサーが何故こんなところにいるのか
疑問に思ったネギたちだがとりあえず声をかけてみることにした

「ランサーさーん」

「む、坊主と嬢ちゃんたちじゃねえか」

「いったい何してんだ？こんなところで」

「何だじゃないですよ。ランサーさん
なんで大会を途中で棄権したんですか」

「あゝ、予定があったんだよ。しかも急用でな
第一俺の場合はアーチャー殴っての失格扱いだったろ」

ネギの問いにランサーは視線を逸らし、頭をかきながら説明した
その言葉を聞いたネギは「まあ・・・そうですけど」と残念そうに
呟き

アスナに至ってはアーチャーに鬱憤がたまっていたのでそれを晴ら
してくれて嬉しそうだ

「ところでネギたちはこれからどこに行くんですか？」

ここまでのやり取りで空気になりかけていたギルがネギに問いかける

「あ、これから皆で晩御飯食べに行くんだけど
もしよかったらギル君たちも一緒に食べに行かない？」

「だそうですよ。ランサー
僕は行くけど貴方はどうしますか？」

ギルはそう言うランサーの方を向いてわざとらしく言い放った
それにランサーは苦笑いしながら答える

「お前・・・俺が誓約^{ゲッシュ}で飯の誘いを断れねえのがわかって言っ
てるだろ」

様子が一変したギルたちにアスナたちは苦笑いしながらも店内へと入っていく

テーブルに着いたネギたちはメニューを見て自分の注文を決めていく
その中でランサーとギルは何かに取り付かれたように焦燥していた

「だ、大丈夫・・・大丈夫だ

麻婆を・・・あれだけを頼まなければ、まだ俺の命は尽きない」

「逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ駄目だ。逃げちゃ
(ry)」

明らかに壊れている2人を無視し、アスナたちは仲居さんに注文を
していく

女子全員の注文が終わり、次は男どもの番・・・なのだがここで事
件が起こった

「あ、すんまへん

残り全員の注文はこの（激辛挑戦！！麻婆定食）で！！！！」

「小太郎！！貴様ああああああああああ！！！！」

」

勝手に注文した小太郎にギルとランサーが激昂する

だが、当の本人は笑いながら「別に言いやん。ちよっと辛いのがら
い」と余裕である

隣に座っているネギと士郎もどうしてそんなに騒ぐのかという顔を
していた

もう、なにかを諦めて真っ白になったランサーは口元を吊り上げた

「お前ら・・・後で今までの行動を悔やむんだな
そして後悔と自責の念を抱いてもがいて苦しみ・・・」

ランサーはネギたちにそう告げると机に突っ伏した

ギルに至っては口から魂が出ているという表現がぴったりの状態だ

そして、数分後・・・地獄^{マーボー}がテーブルに運び込まれた

ネギたちは自分達の前に置かれた皿を見ると冷や汗をたらしながら
息を呑んだ

（ちょっと小太郎君！！何コレ！？）

明らかに麻婆豆腐の色じゃないんだけど！！ものすごく赤いん
だけど！？）

（おおお俺が知るかいな！！つか唐辛子の匂い半端なっ！？）

ネギと小太郎は互いを見るとアイコンタクトで会話する

そしてこの間、士郎は凍結^{フリーズ}し、ランサーたちは壊れたように笑って
いた

隣のテーブルに座っているアスナたちもこちらを見たまま固まって
いる

「こちらが泰山名物の麻婆豆腐です

ちなみに辛さの程は見たまんまなので注意して食べてください
ね」

仲居さんはそう告げると、厨房の方へと去っていった

周りからは「正気か？あいつら・・・」とか「この魂に憐れみを」

など言われている

前者はわかるが後者には「もう死ぬ事確定じゃね？」というツツコミをいれたい

「ハッ!! 何が注意や!!!!!! 所詮、麻婆豆腐やろ?

ならこの俺が一番に食いきったるわああああああ!!!!!!」

小太郎はそう叫ぶと蓮華で麻婆豆腐を口へと運ぶ

そして赤く染まった豆腐が小太郎の口の中へと・・・到着した

「へおうえあおじよふあおあjふおあjあfはおえうふあおふお
おおおお!!!!!!」

『小太郎(君)!!?』

その瞬間、小太郎は奇声を上げながら床に倒れその場で七転八倒する
小太郎の奇行を見た士郎はおそろおそろ自分の麻婆を少量口に運ぶ

「辛^{から}っっ!!? つうか辛い!! むしろ痛い!!!!!!」

慌てて水を飲む士郎。口に入れたのが極少量だったからよかったもの・・・

いきなりコレの数倍の量を口に入れた小太郎の苦しみは計り知れない
未だに床を転げまわっているし・・・あ、止まった。なんかピクピクしてるけど

「ちょ、これは食べられないって!!!!!!」

お店の人には悪いけどこれは残して・・・」

「甘いですね、士郎・・・メニューの裏表紙を見てください」

あまりの辛さに残そうとすると、ギルから制止の声がかかる
いったいなんなんだ・・・とメニューの裏を確認すると驚くべき事
がかかっていた

泰山名物・麻婆豆腐を食べる際の注意

- 1・注文する前にもう一度自分の体調が万全か確認しよう
- 2・辛いのが苦手な人は頼まないでね。たぶん死ぬから（笑）
- 3・もし頼んでも一氣に口には運ばないように。おそらく床を七転八倒します
- 4・最後・・・注文する前にこの注意書きをもう1度読み返そう

PS・ちなみにもし残したりしたら、さあ大変

罰金5万円＋罰ゲームが待っているので絶対残さないでね

罰ゲーム詳細・・麻婆2人前を水無しで一氣食い

その際、逃げられないように椅子に縛り付け
た上で

無理矢理あなたの口の中に流し込むのでご安
心（心）はあと

「ふざけんなあああああ！！！！！！」

思わずメニューをテーブルに叩きつけてしまった
ともかく、これで残すという選択肢は無くなってしまった
ということは目の前に置かれているコレを食べるしかないわけで・・・

ネギの方を見ると、やはり麻婆を見つめたまま固まっていた

「僕からでいいかな、その次は士郎君の。最後に小太郎君のを処理しよう」

「わかった」

そういうとネギは自分の麻婆豆腐の皿と蓮華を手にとって立ち上がる俺はその間に倒れている小太郎を後ろから羽交い絞めにし、口を開けさせる

「準備はできたぞ・・・ネギ」

ネギは俺の言葉に頷くと麻婆豆腐を蓮華で救い、小太郎の口の中に押し込んだ

「j f yへおふあおふあじよあjふおあjふおあじよfじゃ!？」

「士郎君、気が付いたよ!! 暴れないように押さえ込んで!!!」

「よっしゃあ!! まかせろおおおお!!!!」

再び奇声を上げながら暴れだす小太郎。だが、俺は自分を強化してなんとか押さえ込む

その間にネギが小太郎の口の中にどんどん麻婆豆腐を押し込んでいく・・・許せ小太郎。もとはと言えば言い出したお前が悪い

そのまま、ネギの分、俺の分、最後に小太郎の分を全て押し込んだ最後のほうは小太郎が無反応になり、たまにビクンと震えるだけだった・・・

その際、姉さんたちがこちらを見て引きつった笑いを浮かべていた
そうそう、これは後日談なのだが、どうも小太郎にはこの時の記憶
が無いらしい
どうやら残ったのは麻婆にたいするトラウマだけのようだ

そして俺とネギはもう2度とこの店で麻婆豆腐を頼まないと硬く誓
ったのだった

閑話 最凶最悪の紅い敵（後書き）

龍真「本編の方が全く進めてないのでとりあえず閑話をはさんでみました」

イリヤ「全く・・・本編の方はどうするのよ」

龍真「うーん。頑張って進めてはいるんだけど・・・」

それより久々のギャグ話だから面白いか心配だな」

イリヤ「まあ、いいわ。この頃更新遅いから読者様にも呆れられてるでしょうに」

龍真「・・・・・・・・。」（泣）

イリヤ「しょうがないわね・・・」

こんな小説ですが、どうぞこれからもよろしくお願いします」

化け物の定義？

ＩＳＩＤＥ 刹那 Ⅰ

私は現在、武道大会の舞台に歩を進めていた

本来、試合はもう少し後の予定だったのだが予定が早まってしまったのだ

何故かというランサーさんが変て・・・アーチャーさんを殴った事に原因がある

それによりランサーさんは失格、アーチャーさんも大会を棄権したランサーさんが失格になった事によって、アスナさんが不戦勝となりその次に組まれていた私とエヴァンジェリンさんとの試合をやることになったからだ

「さあ、この麻帆良武道大会も１回戦は残り１組となりました！！

ではその最後を飾る選手達を紹介しましょう！！

まずはモップが武器のお掃除メイド剣士、桜咲刹那選手です！

！！！！」

『ワアアアアアアアアアアアアアアア』

朝倉さんの選手紹介とともに観客席から歓声が巻き起こる

紹介がなにやらおかしい気もするが・・・今は試合に集中せねばそう思いながら隣を歩いているエヴァンジェリンさんに視線を移す

この人は最強種と呼ばれる龍種と同等の存在、真祖の吸血鬼だ

・・・だが、ネギ先生の父君でありお嬢様のお父上であられる長の盟友

ナギ・スプリングフィールドにその力を封じられて魔帆良に閉じ込められている

「そして金色の髪を持つ人形のような少女・・・

ゴスロリを身に纏いし幼女^{ロリ}!! エヴァンジェリン選手――

――!!!!!!」

『ウオオオオオオオオオ!!!!!!』

・・・あ、転んだ。それも顔から

「ふふふ・・・あのパイナップル頭め・・・いつか殺してやる・・・」

「あの・・・大丈夫ですか」

地面に倒れ伏せながら物騒な事を呟くエヴァンジェリンさんに声をかける

だが「心配は無用だ!!」といいながら拒絶されてしまった
そんな事はいつものエヴァンジェリンさんなら当然の行動だろう
しかし、その後が続いた言葉が不可解だった

「本気でこい、刹那・・・私は貴様をいじめたくなってきた」

「あの、それはいい・・・?」

「いいか、トルストイのアンナ・カレーニナの冒頭にこんな文がある

『幸福な家庭は皆、同じように似ているが

不幸な家庭はそれぞれにその不幸の様を異にしているものだ』

・・・と」

「は、はぁ・・・」

「ま、幸せな奴はみんな似てるが、不幸な奴はそれぞれ違うということだな

ようするに・・・『幸せな奴はつまらん』ということだ

幸福な輩に物語を語る資格は無い。不幸と苦悩こそが人に魂を宿す」

「い、いえ・・・だから何を」

（刹那さん、刹那さん！！）

エヴァンジェリンさんの言葉が理解できないでいるとネギ先生から念話が届いた

「どうしたんですか？ネギ先生」

（実はネットで魔法がバレそうなんです！！だからあまり派手な技は・・・）

なるほど。それでは派手な技を使うわけにもいかない

神鳴流の技では斬空閃や雷鳴剣などを使わなければいいし、それに・

（それはエヴァンジェリンさんも魔法が使えないので大丈夫だと思いますが）

なにより、最弱状態のエヴァンジェリンさんにそんな高威力の技を

出すの無理だ

もし直撃したら大怪我・・・もしくは死んでしまう可能性すらあるのだから

（あ、そっか。そういえばそうですね。じゃ、試合頑張ってください）

それを説明するとネギ先生は安堵したようで念話がきれた

気を取り直し、先程の言葉の意味をエヴァンジェリンさんに聞こうとしたが

エヴァンジェリンさんはいつの間にか舞台中央で腕を組みながらこちらを見ていた

慌てて私も舞台中央に移動すると、朝倉さんが試合開始の合図をする

「さあ！！遠慮はいらん。全力でかかって来るがいい、桜咲刹那！！！！！！」

その合図を聞くとエヴァンジェリンさんがこちらに向かって叫ぶ

「ま、待ってください。私には貴方と戦う理由が・・・」

「理由？そんなのはいくらでもあるだろう

例えば・・・兵法者同士の力比べとかではいかんのか？」

「ち、力比べといっても・・・私が本気を出せば貴方が怪我を・・・」

「怪我？そうか私が怪我をするか・・・ハッハッハッハッハッ」

エヴァンジェリンさんは私の言葉を聞くと、顔を抑えながらその場で笑い出した

そしてようやく笑いが収まったと思った瞬間・・・

「・・・凶に乗るなよ、小娘が」

「・・・ッ!？」

エヴァンジェリンさんの全身から凄まじい殺気が放たれる

身動きができない、息が苦しい、冷や汗が止まらない

頭の中に警鐘が鳴り響く。このままでは・・・『コロサレル』

そう思った瞬間、私の体は自然と後ろに飛んでいた

意識して動いたわけではない。本能的に目の前の脅威から離れただけだ

「ほう、その場で立ち尽くすほど腑抜けてはいなかったか

恐ろしいのか？貴様と同じ『化け物』であるこの私が・・・」

エヴァンジェリンさんがそう言い放った瞬間、私の手足は何かに拘束された

「これは・・・糸・・・？」

「そう、人形遣いの技能^{スキル}さ」

目を凝らして見てみると、それは細い糸だった

なんとか脱出を試みたがそれはかなわず、その糸によって地面に組み伏せられた

Ⅰ 解説席

「桜咲選手が地面に押さえ込まれています！！
これはなんでしょうか？解説の皆さんこれは」

「わ、わかりません！空気投げ！？」

「いえ・・・あれは『糸』ですね」

エヴァンジェリンが何をしたかわからず、混乱する豪徳寺
だが、セイバーは冷静にエヴァンジェリンの技を見切っていた

「それであんな技が可能なのですか？」

「あまり、糸をなめてはいかん

古来より様々な武芸者・・・もしくは忍が使用していたのだ」

小次郎が糸についての情報を言うと、隣にいるセイバーがそれを補
足する

「ええ、糸には様々な種類があり強度もそれによって異なります
それに相手の首を絞めたり斬糸などで手足などを切断したりと
用途も数多くあります

ですので糸を暗器などの武具として使用する武芸者も少なくは
ありません」

「その他には相手を拘束することや野営などにおいても様々な用
途があるしな」

「そうですか・・・わかりやすい解説をありがとうございました」

セイバーと小次郎による説明が終わり、解説席の者たちが舞台上に
目移す

そこには糸によって身動きがとれない刹那とその前にたたずむエヴ
アンジェリンがいた

化け物の定義？（後書き）

龍真「さて・・・今回は2部に分けての投稿です

しかしセイバーと小次郎が解説席にいる事は
はたして、読者様の何人が覚えていたのか・・・」

セイバー「全く・・・おかげでこちらは空気扱いもいいところです」

龍真「ごめんっ!!」（笑）」

セイバー「殺されたいのですか？」

龍真「・・・マジスイマセンでした、自分が調子こいてました」

セイバー「はぁ・・・それでは次回もお楽しみに」

化け物の定義？

Ⅰ SIDE セイバー

現在、武道大会の1回戦最後である刹那とエヴァンジェリンの試合が行われている

はつきり言って今の両者の実力にはさほど差が無い

経験や元の力はエヴァンジェリンが上だが、封印によって今は刹那の力のほうが上だ

だが、目の前で行われている試合ではエヴァンジェリンが刹那を圧倒している

理由は刹那が本気を出せていないからだ。最初の油断もあったのだろうが・・・

何より最大の原因はエヴァンジェリンの発した化け物という言葉だろう

「そのザマでお嬢様を守れるのか？」

エヴァンジェリンがそう言うとな刹那の気の質が変わった

自らの手足を拘束していた糸を引きちぎり、エヴァンジェリンに向かって剣戟を繰り出す

・・・剣戟とは言っても手に持っているのはモップだが

だが、エヴァンジェリンはそれを手に持っていた鉄扇で防ぎそのまま刹那の力を利用して顔面から地面にたたきつけた

「鉄扇！！逆腕がらみ！？」

刹那は驚いて距離をとるが、エヴァンジェリンの攻撃は止まらない
エヴァンジェリンはそのまま刹那に迫ると、掌底を繰り出して刹那
を倒す

「あれは合気術!! 合気鉄扇術です!!」

「合気というとあの敵の力を利用して投げ飛ばす・・・」

「それと鉄扇、あとは糸を複合していますね」

隣にいた男性の説明を補足する

合気の術だけではなくエヴァンジェリンはその動きに糸を複合して
いる

そして刹那はそのまま空中に固定され、エヴァンジェリンが呆れた
ように呟いた

「刹那・・・貴様、幸せになれるとも思っているのか？」

私と同じ、人外のお前が・・・いや、お前は半分だったか」

「・・・ッ!!」

その言葉に刹那は目を見開く

次の言葉を恐れているのか、冷や汗を流し体は小刻みに震えていた

「お前の背中の翼・・・白かったな

その髪はどうした？ 染めたのか、瞳は？ カラーコンタクトか？」

次々とエヴァンジェリンが発する言葉に刹那は目じりに涙を浮かべる
白い翼・・・？ 私達がこの世界に來た日にアサシンとの闘いで見せ
た翼の事か？

そう思っていると客席からアスナの怒鳴り声が聞こえた
どうやら今のエヴァンジェリンの言葉に対して怒っているようだ

だが、エヴァンジェリンは呆れたようにため息を吐くと
身動きが取れない刹那に向かって何らかの術を発動させた

そこで2人の動きは完全に停止した

恐らくはどちらかの意識にもぐりこんで別の空間で戦っているのだ
ろう

そのまま動かない2人を見て、客席は混乱している。まあ、無理も
ないが・・・

「アサシン、これはどう説明したらいいのでしょうかね」

「言葉に困るな・・・下手な事を言うわけにもいくまい」

私は隣にいるアサシンに問いかけ、ハアとため息を吐く

そして、数分後・・・停止していた2人が急に動き出した

刹那が一瞬で距離をつめ、エヴァンジェリンの胴を一閃したのだ

エヴァンジェリンはそのまま倒れ、試合は刹那の勝利で幕を閉じた
そして、2回戦に入る前に休憩が30分間あるので私は刹那たちに

会いに向かった

恐らく、士郎やイリヤたちもいるであろう救護室に向かって歩を進
める

救護室に入るとちょうど刹那が部屋から出て行くところだった

「あ・・・セイバーさん」

「刹那、少しいですか？」

私は刹那に話しかけると、そのまま人のいない通路に連れて行く

「貴方の白い翼・・・あれには何か因縁があるのですか？」

「・・・ッ！聞いてたのですか・・・」

「ええ、申し訳ありませんが聞こえてしまいました」

本来、こんな事を聞くのは間違っているのだろう

だが翼の事を言われた時の刹那の表情・・・あれはただ事ではない
何とかしてやりたいと思う反面、士郎の性格が伝染ったかと呆れる
気持ちもある

その後、刹那は翼の事を話してくれた

白い翼のせいで忌み子として里を追われた事、実の親にも捨てられた事

それから木乃香の父親に拾われて、今に至る事・・・

それらを話す時も刹那の表情は暗かった

自分は化け物だからしょうがないと・・・そう言っていた

「刹那・・・貴方は化け物なんかじゃない」

「え・・・？」

「貴方は化け物の定義を間違えている

化け物とは優れた理性をもって人に害をなす悪の事

たとえ、人外だとしても誰かが人と信じてくれる限り、それは

人なんです」

まあ、ほとんど士郎からの受け売りですが・・・

自分の言った言葉に恥ずかしくなりながら目線を逸らす

士郎は何故コレを普通に言えるのでしょうか？

「ふふっ・・・」

目の前の刹那はそんな私を見て笑っているし・・・恨みますよ士郎
さて・・・次の試合の解説もあるしそろそろ帰りますか

とりあえずその場から立ち上がり、私は刹那とともに会場へと戻っ
ていった

化け物の定義？（後書き）

龍真「えゝ、とりあえず武道大会は

残りが原作と一緒になのでこれで一区切りしたいと思います」

アーチャー「ここからは学園祭での図書館島とかを書きつつ

私達の計画を中心に進んでいくな。

では次回「デートとライブ」 お楽しみに」

デートとライブ

I SIDE 士郎 ー

麻帆良武道会が終わり、マスコミ陣に追われる事となった俺やネギたち

現在、俺達はマスコミを振り切るため年齢詐称薬を飲み、貸衣装屋で衣装を借りていた

「何で俺がこんなチンピラみたいな格好・・・」

「似合ってるけど？小太郎君」

「俺はいつもどおりの服だけだな」

自分がしている格好に納得がいかないのか不満をもらす小太郎

ネギとあわせてみるとマフィアの御曹司とボディーガードの三下のようだ（千雨さん談）

ちなみに俺はいつもどおりのTシャツとジーンズで服のサイズが大きい物を着ている

「ところでこれからどうするんだ？」

年齢詐称薬を飲んで元の俺らと同じぐらいの歳になった千雨さんが問いかける

「そうですね、亜子さんとの約束があるのでとりあえずそこに・・・」

「ああ、そういえばそんな事もあったな」

ネギの言葉で学園祭が始まる前、俺はライブに誘われていた事を思い出した

最も、小太郎はいまだに思い出せないでいるようだが・・・

今日は他の予定も特に無かったので、俺たちはライブハウスへと向かう事にした

「とりあえずライブの場所に着いた方がいいが・・・」

「肝心の和泉たちの場所がわかりませんね」

「と、とりあえず関係者の人に・・・ってあれはまき絵さんたち？」

亜子さんたちの居場所がわからず俺達はその場で四苦八苦してしまう関係者の人に亜子たちの場所を聞こうとすると

前からまき絵さん、ユウナさん、アキラさんの運動部三人組が歩いてくるのが見えた

「よかった、ちょっと亜子さん達がどこにいるのか聞いてきます」

「あ、先生。今の先生の姿は・・・」

「大丈夫です。わかってますよ」

そう言うとネギは三人の下へと走っていき、俺達もその後を追いかける

「・・・ッ!？」

ネギに追いつくとアキラさんが驚いたような顔で俺を見てきた
しかもそのまま俺から視線を逸らして俯いちゃうし・・・なんでさ
?俺なんかしたっけ?

「あの・・・アキラさん？」

「ひゃいっ!!／／／／／」

俺はおそろおそろアキラさんに話しかけてみる
するとアキラさんは変な声を出しながら俺から数歩離れてしまった
・・・うん、やっぱり何かおかしい

「士郎君、（アキラさんと）何かあったの？」

ネギが俺にどうしたのかと聞いてくる・・・いや、全く覚えがない
んだけど
しかもアキラさん以外の2人は俺の名前を聞くと目を輝かせて俺を
見てくるし

「ははぁ・・・さてはこの人か、アキラの好kるぽっ!？」

「何をいつてるのかなユウナは!」「何も殴る事・・・」ホント何を
言ってるのかな!？」

ユウナさんが何かを言おうとした瞬間にアキラさんが後ろから拳骨
を放つ
うっわぁ・・・すげえ痛そう・・・隣にいるまき絵さんは何故か笑
っていた

「あの士郎さん!! この後、暇ですか？」

復活したユウナさんが俺に向かって言う
この後か・・・ライブまでまだ時間があるし、俺は特に予定も無い
しな

「ええ、一応暇ですけど・・・」

「それならアキラと一緒に学園祭まわりませんか？」

「「へ？」」

俺とアキラさんの声が重なる

いや、別に俺は構わないんだけど何故それをユウナさんが言うんだ？
聞き間違いが無ければ一緒にまわるのはアキラさんのはずなんだが・
・

「ゆ、ゆゆゆユウナ!？」

何かを言おうとするアキラさんだが、後ろからまき絵さんが動きを
封じる

「で、どうなんですか？士郎さん!!」

「いや俺は構わないですけど・・・」

「え・・・／／／／／／／／／／」

む？アキラさんの顔が何故か赤くなったぞ

そして千雨さん、なぜ貴方はそんな目で俺を見てくるんですか

その後、ユウナさんたちから少し準備があるから10分ぐらい待ってくれと言われた

ネギたちはライブの方に向かい、俺はその場で待つ事にしたのだが・

「・・・遅いな」

10分といいつつ既に20分が経過していた

だが、約束なのでここを離れるわけにはいかないし・・・
いったいどうするかと考えていると向こうからアキラさんが走ってくるのが見えた

「お、お待たせしました・・・遅くなってごめんなさい・・・」

よほど急いで走ってきたのかアキラさんの顔は真っ赤になっていた

「いや、そんなに待ってないですし・・・とりあえず行きましようか」

俺がそう言うときアキラさんは俺の横に並び、一緒に歩き出す
そして歩く事数分・・・

最初に来たのはジェットコースターなどもある遊園地のような場所
学園祭の出し物にしてはでかすぎるだろ・・・と思いつつ入場する
事にした

「うわぁ・・・すごいですね」

「あ、あの・・・士郎さん」

「ん？どうかしたんですか」

「敬語やめてもらえませんか？私のが年下ですし・・・」

・・・そういえば俺の今の外見アキラさん達より年上だっけ
元の年齢が年下なので普通に敬語を使っていたんだが違和感があったらしい

「わかりました・・・じゃない、わかった

じゃあ、アキラさん「さんはいいです」・・・アキラも普通に話してくれればいい

それと俺を呼ぶときもさんはつけないで士郎と呼んでくれ」

「え・・・ええっ！？／／／／／」

だって俺もさん付けは違和感があるんだもん
本来は年下なんだし、向こうだけさん付けというのも気が引ける

「じゃ、じゃあ・・・士郎・・・／／／／／」

「なんだ？アキラ」ニコッ

「・・・・・・」クラッ・・・

「お、おいアキラ！？どうしたんだいったい！！」

返事をするときアキラはその場でふらつき倒れそうになってしまう

俺はとっさに倒れそうになるアキラを支えたが・・・立ちくらみでもしたのか？

とりあえず、アキラをそのままベンチへと運び様子を見る事にした途中、ネギと亜子さんがいたような気がしたが気のせいだろうあの二人はライブをやる場所にいるはずだし、こんな場所にいるはずがない

アキラが起きた後、俺達はアトラクションを回り遊園地の外に出たのだが・・・

「なんでさ・・・」

現在、俺は筋肉達磨にアキラと一緒に担がれて運搬されているなんでもイベントに出場させるためらしいが・・・これはほとんど拉致に近いだろうそして、会場らしき場所に運ばれたのだが何故かそこにはネギと亜子さんがいた

「おい・・・なんでいるんだ？」

「士郎君もなんでここに・・・？」

とりあえずネギに事情を聞いてみたのだが・・・タイムマシンってなにさ？

※士郎は初日もアーチャーとのキスで気絶していたのでカシオペアの存在を知りません

しかもカップル選手権で・・・俺とアキラはそんな関係じゃないし俺はそのまま会場の外に出ようとするが筋肉達磨に止められて出場

する事になった

「悪いなアキラ・・・こんなもんに出場する事になって」

「い、いえ！！私は別に・・・士郎となら・・・」

む？最後の方がよく聞こえなかったが・・・

とりあえず最初はコスプレ審査らしい。俺はため息をつきつつ着替えを始めた

・・・そして全ての審査が終わったのだが

結果としては何故か出場していた俺のクラスメイトのはる樹が優勝
俺たちとネギたちのペアは同率で準優勝という結果になった

それでネギたちと別れてライブが始まるまで学園祭をまわっている
のだが・・・

「・・・♪」

アキラは景品のブレスレットを眺め、ご機嫌な様子だ
そんなに気に入ってくれたのならあの大会にも出る価値はあったの
かな？

「おいおい、いいご身分じゃねえか坊主」

不意にそんな声が聞こえ、振り向くとランサーが笑いながらこちら
を見ている

その隣にはギルと・・・ついでにアーチャーの野郎もいやがった

「士郎も隅におけませんね。いつのまにか彼女がいるなんて」

「・・・・・・・・」

そうやって俺達を冷やかすように言うギル
アーチャーは無言でこちらを睨んできている

「・・・なんだよてめえ」

目の前で睨んでくる弓兵を睨み返しながら言い放つ
こいつには姉さんの事もあるし、正直ものすごくむかついている
修行をつけてもらってはいるがそれとこれとは話が別だ

「ハッ、横に女をはべらすと急に強気だな

どうやらよほど女の前では格好をつけたいと見える」

目の前の弓兵は口元を歪めながらそんな事を言いやがった
・・・ふざけやがって!!

「どこぞの馬鹿みたいに女の子を泣かせるよりましだと思うけど
な」

我慢ができなくなった俺はアーチャーを睨みながら言い返す
だが俺がそう言い放った瞬間、奴の拳が俺の腹に突き刺さった

「・・・・グッ!？」

「士郎!？」

「あまり調子に乗るなよ小僧が・・・」

アーチャーはそのまま俺を殴ろうとするが、後ろにいたランサーたちがそれを止めた

「悪いな坊主、俺達はこれで消えるからよ

デートを邪魔した咎びはまた今度させてもらうわ」

「本当にスイマセンでした。ほら、フェイカー贋作者も・・・」

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・はあ、では僕達はこれで」

ランサーたちはそう言うときアーチャーを連れてこの場を去っていった隣を見るとアキラが心配そうな顔をして俺の顔を覗き込んでいる

「心配すんな、俺は大丈夫だから」

そう言うときアキラは渋々だが納得してくれた

その後はライブの時間まで適当に時間を潰していたのだが俺はその時、あることに気が付いた

「・・・・・・・・そういえばランサーたちは三人でいったい何をしてたんだ？」

ランサーたちが3人で行動していた意味・・・

それは未来の俺達にとって、とても重要なことだったのだが俺はそれに気が付かなかった

デートとライブ（後書き）

イリヤ「今回は士郎がメインの話だったね」

龍真「次回は図書館島・・・出番の無かったあの人の見せ場となります」

イリヤ「いいなあ・・・私もシロウと・・・しようがないか

気を取り直して次回予告「図書館島と裏切りと」お楽しみ」

図書館島と裏切りと

ここは図書館島の地下1回にある閲覧室

現在、ネギは図書館島探検部のメンバーと共に図書館島探検ツアーを巡っていた

「ええーっ！？ば、ばれちゃったんですか！？魔法が！！ハルナさんに！？」

「も、申し訳ないです・・・」

「まあ、安心しなよネギ君。人にばらすような事はしないから」

夕映が言ったハルナに魔法がバレたという事にネギは驚愕した

これは一般人に魔法がばれればオコジョとなるので当然の事だろう

その光景を見ていたキャスターは顔に手を当てながらため息をついている

本人いわく、神秘の秘匿が甘すぎて怒りを通り越して呆れたとの事だ

「ハ、ハルナさんこの事は内密に・・・でないと僕がオコジョに・・・」

「わかってるって、お姉さんを少しは信用しなさい」

笑いながらそう言うハルナにネギは安堵の表情を浮かべる

「何でオコジョ・・・神秘を漏らすんだから殺・・・」

「おい、キャスターの姉さん？物騒な思考がもれてるぜ」

こめかみ辺りをピクピクさせながら呟くキャスターにカモがツツこむ
夕映たちはそれを苦笑いしながら見ていた

「ま、それはそうと夕映っちとハルナの姉さんも兄貴とどうだい？
仮契約しとけば便利だし俺もウハウハ・・・」アイトラス「圧迫」ってホグ
オオオオオオオ！？」

「カモくううううん！？」

話を切り替え、夕映とハルナに仮契約を進めるカモにキャスターの
魔術が襲い掛かった

ネギの肩から落下したカモは蛙が泳ぐような体制で地面に押し付け
られている

「カモ・・・貴方はそんなに神秘の秘匿の仕方を教えられたいの
？」

黒い笑顔を浮かべるキャスターにカモは完全に押し黙った

「でも夕映のアーティファクトか・・・ちょっと見てみたいかも」

「の、のどか！？駄目です！！それだけは駄目なのです！！！！」

「えー、夕映のアーティファクトが何なのか気になるのに・・・」

「駄目ったら駄目なのです！！！！」

のどかは夕映達が仮契約する事に賛成のようだが夕映が叫びながら

それを否定する

それに対しのはきは首を傾げるが、カモは夕映を見ながらニヤついていた

その後、しばらく歩いていると夕映が呟くようにハルナに話しかける

「ハルナ・・・少し話があるのですが」

「ん？どうしたの夕映」

暗い顔をしながら呟く夕映にハルナは少し微笑みながら返答する

「のどこには嫉妬というものが無いのでしょうか？」

先程も私とハルナにネギ先生との仮契約を進めるなど・・・」

「でもそれがあの子のいい所でしょ？」

「それでは・・・困るです」

下を向いたまま震える声で呟く夕映を見て、ハルナはキャスターに視線を移した

視線を向けられたキャスターだが、何も言わずに静かにこちらを見つめている

夕映は視線を上げ、前を進んでいるネギとのかを見たと再び視線を下に戻す

あの二人を見ると少し胸が痛む。何故なのだろうか？

自分は親友の恋を応援する立場だ、ならばこんな感情は邪魔だろうそれならこんな感情はいらない。綺麗さっぱりと忘れてしまえばいい

この感情を本当に忘れていいのだろうか？・・・嫌だ
でも・・・

「夕映っ!!」

話しかけられた事により思考が途切れる

「お姉さんたちと少し向こうで話そうか、作戦会議」

「え・・・」

ハルナはキャスターにも声をかけて夕映を人気の無い場所へと連れて行く

木乃香は三人についてきたがネギとのどかは距離が離れているのでこちらに気づかなかった

「ハルナ・・・こんなところに連れてきてどういうつもりですか？」

「言ったでしょ、ちよっと話があってね。ですよねキャスターさん？」

「そうね、ここらへんでハッキリさせた方がいいのかしらね・・・」

キャスターはそう呟くと夕映の方に視線を移す

夕映はその悲しそうな目が何を意味するのか気づかなかった

「単刀直入に言うわね。夕映、貴方の好きな人・・・バレてるわよ」

その言葉に夕映は目を見開き震えながらハルナに視線を移した

「知ってるよ・・・あたしは気づいたのついさっきだけど・・・」

ハルナは震え続ける夕映に近づき、そのまま優しく抱きしめる

「親友の思い人を好きになる・・・か。馬鹿だね・・・あんたも」

「・・・ッ!!!!!!」

その言葉を聞いた瞬間、夕映はハルナの手を振りほどいて走り去った

「ちょ、ちよつと夕映!?!」

「待ちなさい!!」

ハルナとキャスターは走り去る夕映を追いかけ、この場にはカモと木乃香だけが残された

「な・・・なあ、カモ君? 夕映には好きな人がおるのはええやん
でもそれが親友の思い人ってどゆ事? ええつと・・・まさかネギ君なん?」

ネギ君が想い人で親友がのどかで? 夕映はネギ君に恋してる?

I l o v e y o u ?」

「わかった、とりあえず混乱してるのはわかったから落ち着け木乃香姉さん」

目を回しながら混乱する木乃香にカモは1から事情を説明した

・・・ちなみに夕映はその間にネギとぶつかり本に埋れているところを捕獲された

そして時は進み十数分後・・・ネギたちは自動販売機前で休憩をすることにした

夕映はネギの隣に座っていたのだが、何故かのどかがその隣に座る

「のどか・・・何故そっちに座るのですか？」

せつかくネギ先生との距離を縮めるチャンスなのに」

「いいの、今まで私だけネギ先生と仲良くしてたし・・・」

視線を逸らしながら言うのどかに夕映は疑問を持ちつつ、手にしていたジュースを飲む

「あのね・・・私聞いちゃった。夕映が・・・先生の事、好きだった」

「え・・・」

手からジュースが滑り落ちる。思考が停止した

・・・今のどかは何て言った？好き？誰が？私が、誰を？ネギ先生を何でのどかが知って・・・どうして・・・

「夕映・・・なんで・・・言ってくれなかったの・・・？嫌だよ・・・そんなの・・・」

「ちっ、違・・・」

「夕映・・・」

声が震える。バレた・・・のどかに・・・
のどかにだけは・・・絶対に知られちゃいけなかったのに!!!!!!

『夕映!?!』

気が付いたら感情のままに走り出していた。涙が止まらない、この
場所から消えたい
駄目だ、絶対に嫌われた、のどかに嫌われた

後ろからキャスターさんやハルナたちの声が聞こえる
どうやら追いかけてきているようだ。・・・やめろ、来るな、来な
いで

防火用シャッターのスイッチを押し、追っ手を止めようとする
・・・後ろからする足音が減った。けどまだ足音は聞こえる

必死に走り、逃げようとしたが誰かに手を掴まれた
後ろを振り向くとキャスターさんが私の腕を掴んでいる

「・・・離して・・・離して下さいっ!!!!!!」

「ちょ、ちよつと夕映、落ち着きなって!!」

隣にいるハルナが何かを言っているが今の私はその言葉が理解でき
ない
感情のままに腕を振り回し、キャスターさんの腕を振りほどこうと
する

・・・が、振りほどけない

「夕映、落ち着きなさい。人を好きになるのは仕方ない事よ

貴方は何も悪くない、のどこも貴方を責めてなんかいない!!」

その言葉で熱くなっていた頭が急激に冷やされる

「責めてない？何を根拠に？私はのどこかを・・・親友を裏切ったんですよ!!」

「夕映・・・違う。貴方のした事は裏切りじゃ・・・」

「裏切りじゃない？ああ、そうか・・・貴方も私と同じですからね」

悲しそうな目で夕映を見るキャスターに夕映は自嘲気味に笑いながら言い放つ

「ゆ、夕映・・・キャスターさんが同じって一体どういう・・・」

「・・・どういう意味？」

ハルナは恐る恐る問いかけようとするが、キャスターの殺気のこもった声がそれを遮断する

・
「そうでしょう？息子を裏切り、夫を裏切り、恋人を裏切って・・・

だから貴方は裏切りの魔女と呼ばれた。だから私を庇うんでしよう!？」

のどこかを・・・親友を裏切った私が貴方と同類だから「バシィッ!!」・・・ッ!？」

乾いた音が通路に響く

キャスターは狂ったように叫ぶ夕映の頬を叩いていた

「貴方に何がわかるのよ・・・私の、私の何がっ！！」

キャスターはもう一回夕映の頬を叩こうとするがハルナがそれを止める

夕映はハルナがキャスターを抑えている隙に手を振りほどいて再び走りだした

ハルナもそれを追いかけて、一人残されたキャスターは壁に背を預けてその場に座り込んだ

「裏切りの魔女・・・か」

キャスターはそう呟くと思いを巡らせる

「裏切りの魔女」・・・それは自分の異名

人生の中で幾度も裏切りを繰り返した自分につけられた名前

何も好きで裏切りを重ねたわけじゃない

生きるためには仕方がなかった。そうしなければ生き残れなかった生前の人生で誇れる事など、魔術以外に何があるのだろうか。・・・いや、何も無い

こういう時、隣にあの方がいてくれたら何と言うのだろうか

いつもの様に寡黙なままか、それとも情けない自分を見て慰めてくれるのだろうか

頬に冷たい感触がした。目から涙が流れ落ちる

「お会い・・・したいです。宗一郎様・・・」

その呟きは誰に向けてのものなのかはわからない。ただ震える声で呟いた

Ⅰ 1時間後

のどかと和解し、仮契約を終えた夕映はキャスターの元へと走っていた

・・・私は何故あんな事を、混乱していたとはいえ何故あんなひどい事を!!

心に渦巻くのは後悔と言葉を発した自分への怒り
視線の先にキャスターの姿が見える。あれだけ考えた謝罪の言葉がでてこない

「キャスター・・・さん・・・」

「夕映・・・?」

顔をあげたキャスターの目元は赤くなっていた
先程まで泣いていたのだろうか。自分への罪悪感が心からあふれ出

した

「ご・・・めん・なさっ、わた・・・し・・・」

夕映は涙を流しながらキャスターに謝罪する

言葉は途切れ途切れ、何を言っているのかは聞こえない

キャスターはゆっくり立ち上がると夕映に近づいていく

そして夕映の頭を両手で抱きしめると自分の胸元へと引き寄せる

「もう・・・泣いてもいいから・・・気持ちには・・・ちゃんと伝わったから」

キャスターはそう言い、夕映を抱きしめる両手に力を込める

夕映はキャスターの服を掴み、顔を押し付けながら声をあげて泣いた

こうして図書館島での騒動は終わりを告げた

図書館島と裏切りと（後書き）

龍真「久々の更新、というわけで今回は学園祭偏の見所の予告を少し誰がどのセリフを言っているかはご想像にお任せします
・・・たぶん、この後に書いてあるセリフは全部使う予定です
それではセリフのみですが、予告をどうぞ」

「私の財に勝てる訳が無いだろう？ 雑種共・・・」

「そうかも知ね・・・でも、」

「そんな事はやってみなければわからない！！！！！」

「そんな理想^{ユメ}では・・・結局誰も・・・救えはしない」

「僕は・・・あなたとは違う」

「いいかいネギ君、落ち着いて聞いてくれ」

「う・・・うん」

「その二人は・・・死んだんだ」

「共に飛びましょうか、刹那」

「・・・はいっ！！！」

「・・・死ネ、アーチャー」

「シロウーーーーッ!!!!!!」

「ごめん・・・そして、ありがとう・・・姉さん」

弓兵と英雄の息子

「ふう・・・なにか私に用カナ？アーチャー」

超は誰もいない空間に視線を移すと、呟くような声で言い放つ

「ふむ、茶々丸と博士が探していたが・・・

君はクラスメイトとのお別れは済ませたのかな？

後で後悔する事になってもその時には手遅れかも知れんぞ」

「アーチャー、私がそんな女に見える力？

科学に魂を売り渡した私にはそんな物は不要ネ」

笑いながら返答する超にアーチャーは「違うない」と皮肉げに笑う

「ここまでの計画は順調・・・

危険分子はタカミチと学園長、それにネギ君たちと他のサーヴ
アントぐらいか」

アーチャーはそう言いながら黒鍵を投影し、超の後ろ側に向かって
全力で統合する

放たれた黒鍵は超の顔面すれすれを通り後ろにあった壁を砕いた

「いいかげん姿を現したらどうだね？」

「やれやれ、まさか貴様が超についているとはな・・・

あの騎士王に手を出すなど言おうとしたが無駄な配慮だった訳
だ」

砕かれた壁の後ろから金色の髪の少女が現れ、自嘲気味に笑いながら言った

「超、いつの間にコイツと仲良くなったんだ？」

忠告しておくが・・・銀髪の姫に見つかれば殺されるかもしれないぞ？」

「大丈夫ネ、殺されるのはアーチャーの役目。私は関係ないネ」

現れた少女・・・エヴァンジェリンは心底おかしそうに笑う

超もその言葉に悪乗りし傍にいたアーチャーは額を押さえている

「それで？ 闇の福音ともあろう者が私達に何の用だ？」

まさかネギ君と敵対する事に関しての宣戦布告という訳ではあるまいに」

「そんなつもりは毛頭無いさ

あの坊やは存分に困らせてやってくれて構わないよ

私が伝えたいのは茶々丸は貸してやるから壊すなという忠告だな」

「それなら別にいいけどネ・・・」「ヴヴヴ・・・」・・・む？」

携帯のバイブが鳴り、アーチャーとエヴァンジェリンの視線が超に集まる

超は携帯を開くと画面に映し出された文字を見て笑みを浮かべた

「誰からだね？」

「フフフ・・・最終日を前に相對する事になりそうヨ」

「超さん・・・来てくれるかな」

ネギは先程メールを送った携帯をポケットにしまい、近くにあった手すりに腰掛ける

・・・アスナさんの力にはなれなかったけど、せめて先生として

「ネギ坊主!!」

超をどうやって説得しようかと考えていたネギだがその思考は超の声によって遮られた

「1対1での相談とは何かナ？」

進路相談か？それとも別の相談かナ？」

「超さん・・・僕は学園祭前日に

魔法先生に追われていた超さんを庇いました。それは超さんが僕の生徒だからです

それに僕が困っている時にこれを貸してくれて・・・とても感謝をしています」

ネギはカシオペアを取り出しながら言葉を紡ぐ

「何故こんな突然に退学届けを？」

何で・・・悪い事をするんですか？」

ネギの言葉に超の目つきが変わる

「悪い事ネ・・・魔法先生にでも話を聞いたか？」

私が全世界に魔法という存在をバラそうとしてる事を」

「・・・・・・・・！！」

ネギは超の言葉に息を呑み、拳を握り締める

「お、教えてください！！何故そんな事を！？」

「教える理由はない・・・と言ったら？」

「止めます。先生として・・・悪い事をしている生徒を見過ごす事はできません！！」

その言葉に呼応するように世界樹が発光を始める

夜空を照らす程に光を放つその姿にネギは動きを止めて視線を世界樹に移した

「世界樹が！？」

「おー、コレは素晴らしいネ

もうすぐ最終日だしネ。22年に一度の大発光ヨ」

超はそう言うのと口元を歪めながら視線をネギに移す

「そして、これで私を止める事はかなり難しくなたネ」

「!？超さん、貴方は魔法を使えないし
気を扱う技術は古老師より下と聞いてます。あまり無茶は・・・」

「フ・・・ネギ坊主。」

現実が1つの物語として自分を正義の味方と思た事はあるか？
自分の事を・・・悪者で無いと思た事は無いか？
世に正義も悪も無く、ただ百の正義があるのみ・・・とまでは
言わないが」

超はそう言いながら拳を構え、気を拳へと流す
それを見てネギも構えを取っていつでも反撃ができる状態へと体制
を変えた

「思いを通すのは・・・いつも力のある者のみだ」

後ろからどこかで聞いた事のある声が響く
慌てて振り向いたネギの目に映ったのは目前に迫る蹴り足と赤い外套
ネギは咄嗟に手で防御すると、そのまま数m程吹き飛んだ場所に着
地した

「私の出番だたのだが・・・何で今出てくるネ、アーチャー」

「・・・少し暇だったものでね。」

それにわざわざ敵に手のうちを明かす必要は無いだろう？」

「それはそうなのダg「・・・なんで」・・・む？」

「何で貴方がここにいますか・・・」

ネギは震える声でアーチャーに問いかける
対するアーチャーは超に視線を移した後、再び視線をネギに戻し口
元を歪めた

「何でと言われれば超と手を組んでるからだな」

淡々と答えるアーチャーにネギは齒を食いしばりながら言葉を続ける

「イリヤさんを泣かせて・・・悪い事に協力して、貴方は一体何がしたいんですか!!！」

ネギの口調が段々と強まり、その視線はアーチャーを射殺さんばかりに睨みつけている

「君には関係が無いだろう？教える必要性が無いのが理解できないのかね？」

「・・・ふざけるなっ!!!!！」

わざとらしくため息をつき、馬鹿にしたように言うアーチャー
その姿を見たネギは激昂してアーチャーへ向かって拳を突き出した

正面からの突き、右足を軸にしての足払い、そしてそこから掌底・

・
次々とネギは攻撃が繰り出すがそのことごとくが必ず防がれ、ダメ
ージが通らない

・・・隙ができて、そこに打ち込んでるのに・・・何で当たらない
んだ!!！」

攻撃が当たらない。その事実にはネギは焦っていた
渾身の力を込めて放った蹴りが防がれ、攻守が入れ替わる

アーチャーの手にあるのは白黒一対の双剣、干将莫夜
それから繰り出される縦横無尽の斬撃が自分へと迫ってくる
からうじて一撃目は避けるものの、2撃目、3撃目と攻撃は続くと思われたのだが・・・

「苦無・・・新手か」

アーチャーは自分に向かって飛来してきた苦無を干将で弾くとネギから距離をとる

「ネギ先生に手を出せば・・・私が黙っていないと言ったはずだぞ？ 超 鈴音」

「まさか相手にアーチャー殿がいるとは・・・
少々誤算でござるが助けに来たでござるよ。ネギ坊主」

「楓さん、刹那さん!!」

楓と刹那はネギの前に立つと、自分の武器を構えた
2人の援軍を得たネギはアーチャーと戦うために構えをとる

麻帆良祭最終日の前夜・・・この世界の未来をかけた戦いが幕をあげた

超とクラスと送別会

「やあ、刹那サンに楓サン」

「どういことだ？超鈴音

貴様はネギ先生に手出しをしないのではなかったのか？」

「これは双方合意の上での試合ネ

それに手をだしたのは私じゃなくてアーチャーヨ？」

超はそう言いながらおどけるように笑う

事実、ネギに攻撃をしたのは超ではなくアーチャーなのだが・・・
そんな事を言って刹那たちが納得するわけも無かった

睨むような視線が超の隣で腕を組んで立っているアーチャーに集中する

「依頼主を守るのも契約のうちなのでね

申し訳ないが攻撃させてもらったよ。当然だろう？」

アーチャーは刹那たちをあざ笑うかのように肩をすくめながら言い放つ

刹那はその言葉を聞いて拳を握り、今にもアーチャーに襲い掛かり
そんな勢いだ

「刹那」

「・・・わかっている」

楓がそれを見て刹那を諫める

今にでもあのムカつく弓兵をぶん殴りたいところだが、自分との実力差は歴然

その事を理解している刹那は素直に楓の言葉に従って後ろに下がる

「何故下がるのカナ？刹那サン」

その瞬間、刹那のすぐ後ろから声が響いた

三人は驚愕して後ろに視線を移すと、そこには先程まで正面にいたはずの超がいた

「「・・・なっ!？」」

「驚いたカ？まあ、正面にいた人間が真後ろにいたら無理も無い」

超はくすくすと笑いながらネギたちの横を通り過ぎ、アーチャーの近くへと移動する

ネギたちは超がどうやって移動したのか全く見えなかった

いや、性格には見えなかったのではない感知できなかったのだ

ランサーやセイバーと修行の中で彼らと模擬戦をやっている時に動きを感知できない事はよくあることだ。だが、今のは何かが違う
そもそもサーヴァントのようなスピードを何故、超が出せるのかが不明だ

アーチャーが相手にいる上にこれではあまりにも状況が悪すぎる
そう判断した三人は遠距離の攻撃で牽制しつつこの場から退却した
そして、その後をアーチャーと超が追いかける

その逃亡劇は長くは続かず、ネギたちは第三廃校舎でその足を止めた
それにあわせて、アーチャーと超もその屋上に着地して辺りを見回

した

「多数の気配を感じる・・・

おそらくは魔法先生の待ち伏せか、どうする？」

「なに、焦る事は無いネ

それならこちらにも援軍を呼べばいいだけね」

超はそういうと右手を掲げる

それを合図に超とアーチャーの前に4つの影が躍り出た

その姿を見たネギは驚愕で動きが止まる。そこにいたのは見知った4人だったのだから

「茶々丸さんに龍宮隊長・・・？それにランサーさんにギル君まで！？」

「これは・・・」

楓はそう呟くと手に持っていた紐を握り締め、思い切り引っ張ったその瞬間、周りにあった板が倒れ、明かりが準備してあったライトについたその瞬間

『ようこそ！！超りんお別れ会へ！！！！！！』

「・・・は？」

その光景に超は呆然と口を開く
アーチャーや茶々丸たちはその超の姿を見て笑いを堪えるようにしていた

「楓さん・・・やってくれたネ？」

「あのままだと拙者たちの方がまずいでござるからな
それにクラスとのお別れ会はやはり必要でござるよ？ 超殿」

超の不機嫌そうな視線に楓は笑いながら返答する

そしてそのまま3-Aメンバーに超は連れて行かれ、お別れ会が始まった

しばらくその光景を少し離れた場所で眺めていたアーチャー
だが、時間がたつにつれ目の前に広がる光景がどんどんおかしくな
っていく

具体的にいうと、超がネギの子孫と暴露したその数分後ぐらいから
テンションがおかしい

3-Aのメンバーは殆んど倒れていて、その他のものはテンション
が妙に高い

ランサーなんかは手にビンを持って、ギルと杯を酌み交わしていた。
・・・杯？

目を凝らしてよく見るとランサーが持っているビンには「鬼ころし」
と書かれている

「・・・ちよつと待て」

もう一度目を凝らしてよく見る

よく確認したその名前は間違えようもなく、酒の名前だ
さらにそれと同じ物が数本、床に無造作に転がっているとすれば導
き出される答えは一つ

「・・・ネギ君」

とりあえず、一番距離の近かったネギ君に話しかけてみた

「僕は駄目教師で・・・駄目魔法使いで・・・駄目・・・」

ネギ君は私の声にも反応せず、壊れたラジオのように言葉を繰り返すのみ

・・・駄目だ。なんかもう、いろいろと駄目だ

まともなのはこっちの陣営とセイバーに忍者の子だけか

状況を見ると飲ませたのはランサーだろうが・・・未成年に酒を飲ませるな

「ランサー、君はいったい何をしている・・・」

「いや、テンションあげようと思ったたらあまりにも酔う奴が多くてな?」

悪びれもせず謝るランサーに何故か無性に腹が立ったのはしょうがないと思う

私がどうやってこの事態を収拾しようかと考えているとセイバーが近づいてきた

「アーチャー、話があります。少しいいですか?」

「いいだろうセイバー。ちょうど私も君と話をしたいと思っていてqこっ!」

私がそう答えると同時に顔面に魔法の射手が直撃し、腹のあたりに衝撃があった

「駄目っ!! シロウは私のだもん!! セイバーになんか渡さないもん!!」

下に視線を移すと目に入るのは銀の髪をなびかせる1人の少女
どこから聞きつけたのか、イリヤがいつの間にか私の腰に抱きついて
いた

「・・・あー、イリヤスフィール？」

「イリヤって呼んでくれなきゃー!!」

「・・・イリヤ」

「何? シロウ」

「酔ってないかね？」

「酔ってないよ。えへへ、シロウの匂いだ」

・・・完璧に酔ってるだろ。言動も何かおかしいし
もう一度セイバーの方を向くと苦笑いをしながらこちらを見ていた

「話は後でいいかね? セイバー・・・」

「そうですね。私としてもその方が好ましい」

セイバーはそういうと、ランサーやギルの方へと歩を進めた
話の内容とはおそらく私達がどうして超に味方しているのかという
ことだろう

・・・まあ、それはいいとして

「イリヤを持って行ってほしかった・・・」

私はため息を吐きながらその場に腰を下ろす

イリヤは未だに私の腰に抱きつきながら離れる気配は無い
結局、この状況はイリヤが寝るまで続いたという・・・

超とクラスと送別会（後書き）

龍真「落ちも全く無いなこの話・・・」

セイバー「しかも更新は久々ですしね」

龍真「次からやっと舞台が動かせるから速めに更新したいな・・・」

セイバー・龍真「では次回もお楽しみに」

龍真「感想への返信が遅れたことについては今日纏めて返信をしておきます」

絶望の未来

「・・・・・・・・・・」

超のお別れ会から数時間後、セイバーは現在エヴァンジェリンの別荘で空を見上げている

セイバーの頭の中では昨日のアーチャーとの会話がずっと繰り返されていた

「イリヤ・・・寝たのか？」

「・・・・・・・・」

アーチャーは自分の膝の上で寝ているイリヤに喋りかけるがイリヤからの返事は無い

どうやら寝てしまっているようだ。アーチャーはそんなイリヤを見て微笑みながら髪をなでる

「そういうことはイリヤが起きている時にやればいいのでは？」

それに、そちらの方がイリヤも喜んでくれますよ？アーチャー」

セイバーはその光景を見つめながらアーチャーに声をかける

話しかけられたアーチャーは少し恥ずかしそうにイリヤの髪から手を放した

「セイバー・・・か、そういえば話があると言っていたが何かね？」

「ええ、私は貴方に聞きたい事がある

今の貴方の行動と普段のイリヤに対する行動……どちらが本心なのですか？」

「さあな、そんなこと君には関係が無いだろう」

「そうですか。それでは本題に入りましょう

貴方が超に協力する目的を聞かせてもらいましょうか？」

セイバーはそういうと、アーチャーを視線で射殺さんとはかりに睨みつける

その視線にもアーチャーは平気な顔をし、イリヤをそつと膝からおろして毛布をかぶせた

「ランサーとギルガメッシュには理由を聞きましたが……

貴方の協力する理由だけはランサーたちも知らないそうですね」

その言葉にもアーチャーは無言。何も答えようとはしない
無言を貫こうとするアーチャーにセイバーは苛立ちを覚えた

「アーチャー、貴方は何を考えている

超の願いは昔の私と同じだ。その願いを……

死んで逝った者達への裏切りだと、士郎はそう言った

それを……何故、貴方が否定するのですか！！答えろ！！エ
ミヤシロウ！！！！」

セイバーは激昂し、アーチャーにむかって叫ぶ

その拳は強く握り締められ、視線はアーチャーを睨み続けている

「セイバー・・・悪いがそれには答えられない」

「何故だ！！貴方はそれでいいのですか！？」

イリヤや切嗣・・・それにネギたちとも決別して・・・

そこまでして超に協力する理由がどこにある！！！！！！」

「理由ならあるさ。ひどく傲慢で自分よがりな最低の理由がな・・・」

それは周りがうるさければ聞こえないであろう程の小さな呟きだった
その声は自分を責めるように、その表情は泣き出してしまいうるに
アーチャーはそれだけを呟くとセイバーに背を向けて立ち去ろうとする

だが、それをセイバーは止めなかった。いや、止められなかったのだ
今にも消えてしまいうるなその存在が、その表情が自分の想い人と
重なって見えたから

セイバーは静かに目を開くと、上を向き空を見上げる

これから自分はネギたちと共に超の計画を防ぐために剣を持つ
そしてそれは同時にアーチャーと戦う事も示していた

サーヴァント同士の争い、それは忌まわしき戦争の再現

その戦争の犠牲になった彼が、誰よりもその戦争を止めようとした
彼が

何故その戦争を繰り返そうとするのか、いくら考えても答えは出て
こない

「・・・そろそろですか」

セイバーはそう呟くとネギたちの集まっている別荘の入り口へと向

かった

I SIDE ネギ

いよいよ超さんの戦いの時が来た

師匠の別荘から出た僕達は、午後にくる戦いに備えてそれぞれの行動をとる事にした

アスナさん達は士郎君と共に街の方へ、セイバーさんは夕映さん達の護衛についている

そして現在、僕は夏美さんの劇を見るために野外に設置された特設舞台へと向かっていた

「・・・あれ？確かここに舞台があったはずじゃ」

僕は辺りを見回すが、それらしい建物は一つも無い

それに周りの景色もおかしい。学園祭ムードが全く無いのだ
これではまるで・・・

「いつもの・・・学園祭じゃない・・・いつもの景色・・・？」

頬を冷や汗が伝う。・・・何で？学園祭は？超さんの計画は？

疑問がいくつも頭に浮かび、思考が混乱する

「ネギ先生！！」

「ガンドルフィーニ先生！？」

「捜したよ・・・今までどこで油を売ってたんだ君は・・・」

ガンドルフィーニは眼鏡を押さえ、震えながらネギを睨む

「君に全ての責任があるとは言わない・・・だが

超鈴音の計画が成功し、あまつさえあんな事件があつて

君のクラスが大変だと言うのに・・・今までいったいどこで何をしていたんだ!!」

そう叫ぶとガンドルフィーニはネギを睨む

だが、ネギには今の言葉の中に聞き逃せない者があつた

「ま、待ってください!! 超さんの計画が成功したって・・・
それにあんな事件って何なんですか!?! クラスの皆は!!」

「そうか・・・まだ知らないのか

それについては後で詳しく説明する。さあ、私と一緒に来ても
らおうか」

不安と焦燥が渦巻く中、僕は混乱した頭でガンドルフィーニ先生の
後を着いていく

・・・だが、僕はこの時まだ気づいていなかったのだ
超さんの計画以外にこの後に説明された事件。その事件が僕の心に
大きな傷を残す事

学園祭最終日・・・2人が死んだという事実を僕はまだ知らない

絶望の未来（後書き）

龍真「どうも久しぶりです!!」

専門学校の宿題が忙しすぎてあまりにも更新が遅くなってしまいました

前回のご感想についてのコメントは今日中にさせていただきます」

アーチャー「全くふがない・・・」

ところで最期の文、誰かが死んだように見えるんだが」

龍真「・・・・・・・・・・。」

アーチャー「オイ、まさかとは思うが・・・」

龍真「さて、宿題と次の話を書かないと・・・」

アーチャー「ナチュラルに無視するな!! 俺か!?! 俺なのか!?!」

龍真「さてではまた次回にお会いしましょう!! ではノシ」

アーチャー「答えろおおおお!!!!!!」

知らされた絶望 弓と銀の死

Ⅰ SIDE ネギ ー

「・・・以上が超くんの計画の全貌、全世界に魔法をばらす理由か」

タカミチはそう呟くとタバコに火をつけて口にくわえる

僕は超さんの計画の全てをガンドルフィーニ先生に全て話した

・・・正直、信じてはもらえてはいないだろう

証拠のカシオペアもカモ君が持っていたのでここにはない

たとえば見せたとしても、力を失ったカシオペアを見せたところで効果は薄いだろう

「これで僕の知ってることは全て話しました

次はそちらの番です、僕のクラスが大変ってどういうことですか！

それにあの事件っていったい何のことなんですか！？それを教えてください！！！！！」

声が荒げる、呼吸と心臓の鼓動が早くなるのがわかる

何故こんなにも焦っているのか自分でもわからない

クラスの皆が大変と聞いて気が動転しているのだろうか？

・・・それは違う。もちろんクラスの皆の事も気になるが、嫌な予感がしてならないのだ

それを聞いてしまったらもう戻れない気がする。だが、聞かずに

いられない

その矛盾した感情に自分はイラついているのだろう

タカミチとガンドルフィーニ先生は視線を合わせて頷くと真っ直ぐに僕の目を見つめる

「ネギ君、ひとつ忠告しておこう

今からする話は君には重すぎる。聞いてしまったら確実に後悔するだろう

・・・いや、それどころか君の心は壊れてしまうかもしれない」

タカミチの言葉に息を呑む

普段は穏やかなその視線が、鋭く光っている。まるで僕の覚悟を試しているように

そんな覚悟が僕にあるのか？ いや、僕には先生としてその話を聞く義務がある

「もう一度だけ聞くよ、ネギ君

君は・・・ここまで言われてまだ事件について聞きたいのかい？」

僕はそのタカミチの言葉に首を縦に振る

それを見るとため息を吐きながらタカミチは口のタバコを灰皿に置いた

「ガンドルフィーニ先生、ここからは2人で話をさせてください」

「・・・わかりました」

ガンドルフィーニ先生はそういうと部屋の外へと出て行く

その姿が見えなくなると、タカミチが静かに口を開いた

「僕達が言っていた事件・・・それは麻帆良祭最終日に起きた」

タカミチはそう言うと言を閉じて、事件の全貌を話し続ける

「超くんの開発した時間跳躍弾により僕や他の魔法先生は3時間後の未来へと送られた

その時にはすでに世界樹広場は制圧され、超くんの計画は防ぎようが無かった

こうして僕達は超くんの前に敗北した・・・ここまでは説明したね」

「・・・」

「だが問題はその後に起きたんだ。超くんに加担したサーヴァント勢・・・

エミヤ、ギルガメッシュ、ランサーの3人は計画の成功と共に姿を消した

まあ、当然だろう。これだけの事をしたらもう麻帆良には住めないだろうからね

現在、残りのサーヴァントの人たちはランサーとギルガメッシュの搜索をしている」

タカミチがそこまで話した時点で僕はある違和感に気が付いた姿を消したのは3人、だけど探しているのは2人

・・・と言う事は残る1人、エミヤさんはもう見つけたのだろうか

「当初はその3人と超くんたちを血眼になって探してね

・・・でも結局見つかったのはそのうち1人だけだった」

「エミヤさん……ですか」

僕の問いにタカミチは静かに頷く

「その通りだ。エミヤは見つかったよ……麻帆良郊外の森でイリヤ君と一緒にね」

イリヤさんと一緒……。どうやら2人は仲直りできたようだ
安堵の息を吐く僕にタカミチは苦い表情で悲しみを押し殺したような声で呟く

「そう……。見つかったんだ。2人とも、死体で」

息が止まる。頭の中が真っ白になる
今タカミチは何て言った……。フタリハミツカッタ……。シタイデ……。?

「た……。か……。みち?なにを言って……」

「いいかい、ネギ君……。もう一度だけ言う。落ち着いて聞いてくれ」

「……………」

「その2人は……。死んだんだ」

シンダ?……。ダレガ?エミヤサン、イリヤサンガ……。シンダ?

「ううううううっああっあああああううううあああああああ

あつ」

何かが自分の中で切れる音がした

タカミチが必死に何かを叫んでいるが聞こえない

僕の頭の中は2人が死んだと言う事実がぐるぐると渦巻いていた

僕は大声で叫んだ。この現実から逃げるように叫んで・・・泣き続けた

しばらくして精神が落ち着いてきても、涙は止まらない。目の前の景色がぼやける

タカミチは2人が見つかったときの状況を説明する。僕はそれを必死に聞いた

もしかしたら2人を殺した犯人につながる手がかりがあるかもしれない

エミヤさんの背中に何かが刺さったような傷が多数あった事

そして、その傍に折れた短剣が落ちていた事

2人の心臓は何者かによって握りつぶされていた事

エミヤさんはイリヤさんを庇うように死んでいたこと・・・

状況からしておそらくエミヤさんはイリヤさんを誰かから守ろうとしたのだろうか

でも誰が・・・いったい何のために2人を殺したのかわからない憎しみと後悔・・・そして絶望が渦巻く中、僕の意識は闇へと落ちていった

知らされた絶望 弓と銀の死（後書き）

龍真「アーチャーとイリヤ死亡回」

サーヴァント勢（一 弓&狂）「イエエエエエエエエエエイ！！！！！！」

アーチャー「ちょっと待てコラアアアア！！！！！！」

セイバー「何ですか、うるさいですね

貴方はアレですか？構ってほしい子供ですか？」

アーチャー「うるさいのは貴様らだ！！」

何が「イエエエエエイ」だ！？人が死んでるんだぞ」

ライダー「いや、でもアーチャーですし」

キャスター「それに貴方が死ねば出番も増えるかもしれないでしょう？」

アーチャー「うるさいわ！！ええい作者！！龍真の馬鹿はどこだあつ！！！！」

イリヤ「なに勝手に人を殺してるのかなこの駄作者は」

龍真「いやなんかコレだけはやりたくて・・・てかゴメンナサイ！

L

イリヤ「じゃあこれより死刑判決をおこないまーす」

龍真「ちよつ!!そこは普通判決だけでしょ!?!死刑いらないうね!?!」

イリヤ「とりあえず判決……とつとと死刑♪」

バーサーカー

「■ ■ ■ ■」
「！！！」

龍真「ギヤアアアアアアアアアアアア!!!!」

アーチャー「………置きはまた今度にしといてやるか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2910o/>

サーヴァントin麻帆良

2011年6月11日00時53分発行